

日本応用心理学会第45回大会

発表論文集

1978

東京都立大学

●最近の育児は、もうここまで進歩している！（第一人者60人による関係者垂涎の最新情報60項目）

最新育児の理論と実際

総合乳幼児研究 ★臨時増刊号 B5判 256頁★ 3000円 〒200

〈目次〉 最近の育児はここまで進歩した！

- | | | |
|----------------------|--------------------|------------------------|
| ●育児の理念と科学 | ●子どもの整形外科学 | ●乳幼児期の生活習慣のしつけ |
| ●現代育児考 | ●子どもの形成外科学 | ●育児における父親の参加 |
| ●出生前の育児 | ●子どもの視力 | ●子どもの能力の開発 |
| ●乳児期の母子関係 | ●子どもの聴力 | ●乳幼児期の精神病理 |
| ●母性意識と子どもの養育 | ●子どもの歯科学 | ●親子の言語関係 |
| ●母子分離がもたらすもの | ●救急処置 | ●現代の子どもの遊び |
| ●乳幼児の身体発育とその評価法 | ●子どもと薬（発達薬理学） | ●子どもと文化財 |
| ●乳幼児の精神的発達と評価法 | ●母体と胎児の栄養学の相関 | ●育児用品 |
| ●発達的視点よりもみた小児の睡眠の生理 | ●母乳のすすめ | ●育児のなかのおかしなこと |
| ●消化・吸収機能の発達 | ●育児用粉乳の進歩 | ●赤ちゃん体操 |
| ●子どもと水分の役割 | ●新生児・未熟児の栄養法 | ●子どもの体力増進法 |
| ●神経系の成熟と子どもの発達 | ●現代の離乳食と幼児食 | ●安全育児 |
| ●免疫のしくみと働き | ●乳幼児栄養所要に関する最近の知見 | ●共かせぎと育児 |
| ●感染予防と予防医学 | ●乳幼児の栄養性疾患と食事療法 | ●育児と家計 |
| ●子どもの微症状と親の訴え | ●乳幼児期の食生活の指導 | ●障害児の家庭養育 |
| ●子どもの体質と育児 | ●子どもをめぐる物理・化学的環境条件 | ●育児における福祉需要とソーシャル・サービス |
| ●心臓疾患をもつ子どもの育児 | ●子どもと住まいの環境 | ●育児に関する母子保健サービス |
| ●腎臓疾患をもつ子どもの育児 | ●乳幼児期の発達課題としつけ | ●乳幼児健診のこれから進め方 |
| ●けいれん（てんかん）をもつ子どもの育児 | ●親の養育態度と子どもの性格 | ●母子の社会保障 |
| ●子どもの皮膚科学 | | |
| ●子どもの外科学 | | |

保育と人間形成

東京都立大学教授 森 重敏編 1400円
〈保育内容総論〉第一線の著者が実践の上にたって論述する、わが国はじめての画期的出版として大好評！

実践教育心理学

文教大学教授 山根 薫編 1800円
実践的側面に焦点を合わせ、教育活動の理想を追求し、真に基本的な問題を掘り下げ解明した、関係者必読の書！

乳幼児心理学

愛育研究所乳幼児心理研究会編 1300円
單なる事実の記述におわることなく、深い研究と豊富な新資料を駆使して理論と実際をダイナミックにとらえる。

ピアジェ幼児心理学入門

大伴 茂著 2000円
世界心理学会の天才ピアジェ博士の全業績を、第一人者が平易に解説。卓越せる方法論の入門書として大好評！

★ユネスコ調査★

広く関係者に読まれています！

就学前教育 の 世界的動向

ガストン・ミアラレ著／山口真訳
●850円 〒150

出生から6歳 までの 子どもとその発達

ユネスコ編／加藤 翠訳
●850円 〒150

〒160 東京/新宿/若葉 I

同文書院

振東 0-1316 ㈹ 359-9671

日本応用心理学会第45回大会

発表論文集

大会期日 昭和53年9月23・24日
大会会場 東京都立大学

1978

東京都立大学
学生相談室

目 次

シンポジウム I

家 族 関 係 の 今 日 的 課 題

オーガナイザー・司 会

東 京 都 立 大 学 三 浦 武

1. 日本の家族は病んでいるか	お茶の水女子大学	湯 泽 雍 彦	1
2. 来談事例からみた家族関係	東京都立教育研究所	小 泉 英 二	2
3. しつけ観・しつけ方略	東 京 女 子 大 学	柏 木 恵 子	3

シンポジウム II

今 日 の 学 生 像 と 大 学 教 育 の あ り 方

オーガナイザー・司 会

東 北 大 学 黒 田 正 典

1. 教育課程諸段階の問題として	新潟大学医療技術部 短 期 大 学	石郷岡 泰	4
2. 学生相談及び日米比較の立場から	上 智 大 学	小 林 純 一	5
3. 精神医学の立場から	南 大 塚 診 療 所 元山梨大学保健管理 センター	穂 積 登	6
4. 現代学生と大学のあり方	東 北 大 学	黒 田 正 典	7

研究発表

交通・防災

流れ作業に関する研究〔I〕	成蹊大学 労働科学研究所 芝浦工業大学	○大倉元宏 西岡昭 藤井亀	8
盲目用信号機の分析的研究(3) —全盲者の音源定位と聴取歩行について—	中京大学文学部 "	○福井嗣孝 鶴田正一	9
無事故運転者の特性分析 —運転態度と方略—	新潟大学	長塚康弘	10
暴走族の研究(IV) —車志向者の心的特性について—	大阪大学 国際交通安全学会 広島大学	○長山泰久 鈴木辰雄 長町三生	11
暴走族の研究(V) —車志向者予測の意義について—	大阪大学 国際交通安全学会 広島大学	長山泰久 ○鈴木辰雄 長町三生	12
二輪車安全対策への提言	大阪大学人間科学部 " " 川崎重工	長山泰久 ○森田敬信 三浦利章 渡辺準一	13
航空事故事例による緊急場面の行動特性 について(1)	航空医学実験隊	垣本由紀子	14

産業・人間工学

環境音楽の心理的影響について —その1—	国際商科大学 国際商科大学 博報堂 東海大学	豊原恒夫 増田直衛 志津野知文 ○泉山中三	15
環境音楽の心理的影響について —その2—"わづらわしさ"の緩解について	博報堂 国際商科大学 東海大学 国際商科大学	○志津野知文 豊原恒男 泉山中三 増田直衛	16

産業組織における監督行動についての「自己評定」と「部下評定」に関する研究—PM式リーダシップ理論とTA（交流分析）理論の各機能ごとの比較考察—	日本鋼管病院 精神衛生室	佐藤 隆	17
自動車販売成績における因果帰属のずれが対人感情に及ぼす効果	(財)日本生産性本部 早稲田大学	○今井保次 内藤哲雄	18
「共感性テスト」作成の試み	立教大学	角山 剛	19
生活意識についての調査研究	近畿大学	坂田 一	20
サイコグラフィックによるライフスタイルと購買行動の関係について	日本大学 日本大学 麻布獣医学院	○高久信一 嘉部和夫 田之内厚三	21
大型店出現に伴う消費者の購売行動変容	東京都立大学	本間道子	22
検査 (創造性・達成動機)			
TCT創造性検査におけるインストラクションの抑制効果について1,A型	早稲田大学 早稲田大学 立正大学保専	○星野美智子 高野隆一 矢沢圭介	23
TCT創造性検査におけるインストラクションの抑制効果について2,B型	早稲田大学 早稲田大学 文化女子大学	○高野隆一 星野美智子 伊賀憲子	24
TCT創造性テストの発達的検討	山口女子大学 上戸女子短大 早稲田大学	○三島正英 小関賢穏 久米	25
創造的構え(MSC)と性差について —その1 TCT-A型の検討—	相模工業大学 早稲田大学 早稲田大学	○青柳肇 吉光清 神戸文朗	26
創造的構え(MSC)と性差 —その2 TCT-B型の検討—	早稲田大学 相模工業大学 早稲田大学	○吉光清 青柳肇 高野隆一	27
社会的動機(達成と親和)とその場面認知に関する研究(その2)	東邦大学	黒岩誠	28

達成動機の実用的測定法	立教大学	小林一史	29
労働と余暇に関する動機づけ研究(1)	大阪産業大学経営学部	香川眞	30
労働と余暇に関する動機づけ研究(2)	立教大学	永松純	31

人 格・行 動

オペラントライフの視点	慶應義塾大学	○佐藤方哉	32
"	"	樋口義治	
"	"	望月昭	
"	"	山口耕一	
ヒトにおける強化スケジュールの研究[Ⅰ] —ヒトの強化スケジュールの予備的研究—	慶應義塾大学	○樋口義治	33
"	"	望月昭	
"	"	山口耕一	
"	"	佐藤方哉	
ヒトにおける強化スケジュールの研究[Ⅱ] —ヒトのF Iスケジュール—	慶應義塾大学	○望月昭	34
"	"	山口耕一	
"	"	佐藤方哉	
"	"	樋口義治	
ヒトにおける強化スケジュールの研究[Ⅲ] —ヒトのF Rスケジュール—	慶應義塾大学	○山口耕一	35
"	"	佐藤方哉	
"	"	樋口義治	
"	"	望月昭	
自閉症児の行動科学的研究(1)	都立梅ヶ丘病院	藤原豪	36
"	"	天川烈	
"	"	中静研二	
"	"	星一郎	
都立心身障害者福祉 センター	○高畠隆		
日本大学	瓜生多嘉子		
自閉症児の行動科学的研究(2)	都立梅ヶ丘病院	藤原豪	37
"	"	天川烈	
"	"	○中静研二	
"	"	星一郎	
都立心身障害者福祉 センター	高畠隆		
日本大学	瓜生多嘉子		
精神テンポに関する基礎的研究第51報告	早稲田大学 職業研究所 大森六中	三島二郎 長崎拓士 ○望月稔	38

発達・保育 I

幼児の絵単語の反応時間に関する一研究	帝国女子短期大学 帝国女子大学	○杉本佳隆 長野文典	39
乳幼児集団活動に関する一研究 —集団状況における自己構造との過程—	東京家政学院大学 " " " "	○吉川晴美 鈴木百合子 お茶の水女子大学 土屋明美	40
幼児の言語発達に関する追跡研究（第8報） —乳児の言語行動に対する育児者の態度の分析 (その4)—	大分大学教育学部	中塚綾子	41
WAISによる年令的知能構造の変化(1) 各下位検査項目	情動発達研究所 " " " "	児玉省 ○龜田紀子 中西郁子 内藤恭子 吳礼子	42
WAISによる年令的知能構造の変化(2) 言語性知能・動作性知能の年令的变化傾向	情動発達研究所 " " " "	児玉省 ○龜田紀子 中西郁子 内藤恭子 ○吳礼子	43
小学校児童の製図における投影一構成行為の発達	九州大学	城仁士	44
選択的記憶について	リハビリテーションセンター鹿教温病院	大下文輔	45
教育・心身障害			
非行者の教育	法務総合研究所	奥澤良雄	46
幼児教育者の適性に関する研究（第4報） —教育実習を通しての自己評価を中心にして—	東京家政大学	後藤嘉余子	47
教育実習による学生の教職意識の変化Ⅲ —教職意識・態度と教師イメージとの関係について—	茨城大学 " "	○山田喜美子 中原弘之	48
中学生の悩み（Ⅲ） —聴覚・言語障害群の因子分析—	早稲田大学 浦和市立教育研究所	○内藤哲雄 遠藤徹	49

中学生の悩み（N） —聴覚・言語障害群と対照群の質問項目ごとの 差の検討—	浦和市立教育研究所 早稲田大学	○遠藤徹 内藤哲雄	50
手まねの心理学的意義		金田富美	51
教育評価の研究 一その18—	目黒区立鷹番小学校	岸本英男	52
学業成績の評価における因果帰属のちがいが対 人感情におよぼす効果(2)	早稲田大学 国際基督教大学 駿河中海	内藤哲雄 ○小嶋正敏 内藤忠昭	53
文章の理解と記憶 —教科(英)の教育心理学的研究—	東京家政学院大学	永沢幸七	54
集団・人間関係			
かかわり方の発展に関する研究(4) —3起動点の同時的成立による状況構造化の過 程—	お茶の水女子大学 文教大学	松村康平 ○佐藤啓子	55
関係発展の理論と技法に関する研究 —対人関係のかかわり構造について—	お茶の水女子大学 "	松村康平 ○土屋明美	56
幼児臨床活動の一研究 —集団状況の展開過程について—	お茶の水女子大学	安島智子	57
集団活動への参加過程に関する考察	お茶の水女子大学	細川直子	58
コミュニケーション状況の発展を志向するもの	筑波大学	浅野恭子	59
児童臨床活動における役割の研究	お茶の水女子大学	谷中孝子	60
Tグループによる変容の様態	奈良大学文学部 人間開発研究所	片野卓 ○小山一郎	61
職場管理者層のチームビルディングプログラム 設計過程に関する研究	鉄道労働科学研究所	渡辺忠	62
管理者による職場管理目標の設定とリーダーシ ップ行動	鉄道労働科学研究所	古川久敬	63
臨床・相談			
家族関係と調停技術への一考察	東京家庭裁判所	北原歌子	64

神経質症体験のある母親とその子との関係の変化 —母親の子供観の変化を中心に—	東京大学	我妻則明	65
少年とのイメージ交流(1) —父親を失った少年の場合—	山形少年鑑別所 "	○佐々木 初夫 坂内 功	66
少年とのイメージ交流(2) —学校嫌いの少女の場合—	山形県庁開発課 山形少年鑑別所	○長橋 千佳子 長谷川 孫一郎	67
問題行動に関する一調査	福岡教育大学 原西小学校 岩戸北小学校	鶴光代 ○大道安廣 高山靖子	68
登校拒否児の合宿指導における自我の成長について	千葉県銚子児童相談所 " " ○坂口洋	高橋宣昭 高安成誌 ○坂口洋	69
登校拒否児の治療過程について	福岡教育大学 福岡県教育センター	秋山俊夫 ○前田豊	70
自己変革過程について	児童臨床研究会	宮本直美	71
精神病者における知能検査、性格検査成績の集計と検討	中京大学 三河病院	竹原一雄 ○池田直博	72

知覚・情報

天候と心理の関係(1)	都立大学	今井省吾	73
心的現象場の一検討	電電公社	栗林仁	74
ラムダ反応による視覚作業の評価	製品科学研究所	八木昭宏	75
ポリグラフ検査における質問内容と反応表出 —innocent subjects を対象として—	科学警察研究所	山下素邦	76
情動刺激の知覚	早稲田大学	鎌田勇	77
文字で構成された隠絵の諸相Ⅰ —古事記が描く女体像と倭人傳が描く倭國の所在地図および帶方・狗邪韓國間行路地図—	茨城大学	木村俊夫	78

二色配色における色彩の誘目性	中京大学	神作 博	79
主観確率による情報量の測定(1)	東京都立大学 東京都立大学 電気通信総合研究所	○市原 茂 増山 英太郎 常木 暎生	80
主観確率による情報量の測定(2)	電気通信総合研究所 東京都立大学 東京都立大学	○常木 暈生 増山 英太郎 市原 茂	81

産業・職業

ヒューマン・アセスメントの管理者研修への応用・展開——その5	マネジメント・サービス・センター	○桑原 鶴	82
	松下電器	伊藤格夫	
ヒューマン・アセスメントの管理者研修への応用・展開——その6	松下電器 マネジメント・サービス・センター	○伊藤格夫 桑原 鶴	83
中高年令雇用者の企業人事行政に対する意識と態度	高千穂商科大学	藤井 耐	84
人事管理の人間化について	高千穂商科大学	宮本 昇	85
組織におけるコンフリクトについて（仮題）	亞細亞大学	小野公一	86
対組合態度の測定の試み	立教大学	丹治和典	87
企業内肩書の持つイメージに対する一考察		林 誠治	88
職業興味と職業志望との関連性	職業訓練大学校職業訓練研究センター	戸田勝也	89
自己実現による人間性の回復		石津 元	90

検査・適性

精神薄弱者のCPT所見	信州大学人文学部	中川大倫	91
精神薄弱者の職業に関する一考察（そのI）	東京都心身障害者福祉センター	○田嶋善郎 白井俊子	92

精神薄弱者の職業に関する一考察（そのⅡ）	東京都心身障害者 福祉センター	○白井俊子 田嶋善郎	93
年令推移による心理機能の変化(3)	鉄道労働科学研究所	藪原晃	94
Baum Test に関する研究	千葉明徳短期大学	山田麻有美	95
教示の相違による四点描画テストの検討	上戸女子短大 東邦大医学部 文化女子大	○小関賢 黒岩誠 伊賀憲子	96
新しい描画テストの反応の検討	文化女子大学 上戸学園女子短期大学 東邦大学医学部	○伊賀憲子 小関賢 黒岩誠	97
Blacky Test に関する研究 (IV)	慈恵中央病院 岐阜大学 美濃加茂病院 富岡小学校 大垣病院	○北瀬扶美代 丸井澄子 渡辺朝美 丹羽稔 林忠弘	98
音韻の特性（語頭と語尾の場合）について（作業性格検査56）	適性研究所	板倉善高	99

人 格

情緒障害児の精神強化に関する心理学的研究 (禅心理学的研究233) —呼吸訓練を中心として—	駒沢大学文学部 日立梅ヶ丘病院精神科	○今橋寿代 座間味宗和	100
真言の意味論：意味論的テストよりみた参禅者の人格構造 —禅心理学的研究 (234)—	駒沢大学	及川卓	101
生き方に関する心理学的研究 —禅心理学的研究 (235)—	駒沢大学	松浦光和	102
自我に関する東洋心理学的研究 —禅心理学的研究 (236)—	駒沢大学	簡仁育	103
ユング心理学と禅—見性体験者に於ける死と再生—　—禅心理学的研究 (237)—	駒沢大学	金城充	104

自我に関する東洋心理学的研究 —禅心理学的研究 (238) —	駒 沢 大 学	黄 銀 鈴	105
レンマの機能・構造に関する心理学的研究 —禅心理学的研究 (239) —	駒沢大学・文学部	鈴木順一	106
保息に関する心理学的研究 —禅心理学的研究 (240) —	駒 沢 大 学	根 本 伊左夫	107
レンマ・セラピー (レンマ・カウンセリング) の原理 —禅心理学的研究 (241) —	駒沢大学・文学部	秋 重 義 治	108

発達・保育 II

(IX)遅滞児の言語指導の試み	情 動 発 達 研 究 所	○田 村 京 子	109
"		児 玉 省	
"		関 根 静 江	
"		飯 島 澄 子	
"		神 原 くみ子	
"		亀 田 紀 子	
(X)保育中における行動の変容について	情 動 発 達 研 究 所	○関 根 静 江	110
"		児 玉 省	
"		飯 島 澄 子	
"		田 村 京 子	
"		神 原 くみ子	
"		亀 田 紀 子	
(XI)幼児の社会性の発達の研究(1)	情 動 発 達 研 究 所	○飯 島 澄 子	111
"		児 玉 省	
"		関 根 静 江	
"		田 村 京 子	
"		神 原 くみ子	
"		亀 田 紀 子	
(XII)幼児の社会性の発達の研究(2)	情 動 発 達 研 究 所	○神 原 くみ子	112
"		児 玉 省	
"		関 根 静 江	
"		飯 島 澄 子	
"		田 村 京 子	
"		亀 田 紀 子	

保育者養成に関する研究(1) —保育者の理想像に関する実態調査を中心として(1)—	大宮保育専門学校 日本大学 大宮保育専門学校 大宮保育専門学校 日本経営協会	○森 茂樹 大村政男 大野誠 手島茂樹 鎌形みや子	113
保育者養成に関する研究(2) —保育者の理想像に関する実態調査を中心として(2)—	日本経営協会 日本大学 大宮保育専門学校 " " " "	○鎌形みや子 大村政男 大野誠 森山茂樹 手島茂樹	114
保育者養成に関する研究(3) —養成校の環境ならびに入学動機の実態調査を中心として—	大宮保育専門学校 日本大学 大宮保育専門学校 大宮保育専門学校 日本経営協会	○手島茂樹 大村政男 大野誠 森山茂樹 鎌形みや子	115
統合保育に関する研究 —集団間関係・選定領域形成の諸技法—	お茶の水女子大学	中山和子	116
発達への道		原善平	117
教 育・発 達			
児童英語教育の最近の実態について	大阪女学院	山崎矛津子	118
児童の心身機能 一日内・週内推移—	帝國女子大学	長野文典	119
肢体不自由児の研究(14) —障害児家族における同胞—その2—	大阪市立身体 障害者福祉センター 帝國女子大学	○森津誠 長野文典	120
自閉傾向児とステュデントアパシー —道具性の問題に関連して—	新潟大学	石郷岡泰	121
2年次留年者の予測と単位の取得状況	東京都立大学 東京都立大学	○代喜一 鳴沢実	122
青年期の自己形成に関する研究(その5) 20答法による中学生の自己概念の発達的研究	日本大学文理学部	高橋秀和	123
青年期女子の自己像と母親像との関係	越谷保専	高橋泰子	124

東京成徳短期大学
小田原女子短期大学
星美短期大学
東京家政大学

○中田カヨ子 125
児玉省
加古明子
阿部明子

臨 床 I

精神分裂病者に反覆実施したロールシャッハ・テストにおける反応内容の固執について(2)

茨城大学人文学部
新田目病院
"

○菊地哲彦 126
長内嘉文
倉持泰三

特定項目におけるTP I の臨床的研究

大宮厚生病院
都立心身障害者福祉センター

帝京大学附属病院
日大農獣医学部

○岩田彰隆 127
高畑

長沢美智子
高久信一

アルコール中毒者のロールシャッハ・テスト(I)
アルコール中毒指標(数量的サイン)の再検討

茨城大病院

○小須川俊樹 128
藤智子

アルコール中毒者のロールシャッハ・テスト(II)
アルコール中毒指標(分析的)再検討

茨城大病院

○須川俊樹 129
藤智子

子どもの人物画について
—描画順序を中心として—

岡山県津山児童相談所

花房香 130

肥満児の身体像に関する研究

福岡教育大学
久留米大学
赤間小学校

秋山俊夫 131
○板井修一
渡瀬安子

body image に関する研究…VI

岐阜大学
"
岐阜精神病院
不破ノ関病院
岐阜赤十字病院

丸井澄子 132
○宮地幸雄
森川士朗
橋田勝美
安立富昭

誘発反応に関する生理心理学的研究(1)
—終夜睡眠における視覚誘発反応と心理学的特徴との関係について—

国立福岡東病院
城南小学校
福岡教育大学

○小串武 133
鳥飼雪子
秋山俊夫

臨 床 II

カウンセリングにおける沈黙の特質(III)

東京農業大学
"
"

○清水幹夫 134
飯塚銀次
岸田博

東京農業大学
〃
〃
〃
港区教育センター
関東中学校

飯塚銀次
○岸田博
清水幹夫
佐藤淑子
広井法子
常間地ひとみ

カウンセリングの過程(III)

府中市立府中校
第二小学校

高橋哲也 136

T S T (20答法) の内側からのアプローチによる臨床的人間理解の試み

大阪教育大

上野誠 137

アルコール中毒者の集団精神療法

住吉病院
山梨日下部病院
山梨県立北病院
県精神衛生センター

○佐藤哲男
中里弘
遠藤定雄
長沼勝利

対人恐怖の対人関係の距離のもちかた
—『no』という対人関係のことわり方の教育—

山梨県立精神衛生センター
山梨日下部病院
山梨県立北病院
住吉病院

○長沼勝利 139
中里弘
遠藤定雄
佐藤哲男

一境界例の示した山あらしジレンマを巡って

山梨県立北病院
山梨日下部病院
住吉病院
県精神衛生センター

○遠藤定雄
中里弘
佐藤哲男
長沼勝利

うつ、離人感を主症状とした境界例の精神療法
—同一視の問題—

山梨日下部病院
山梨県精神衛生センター
県立北病院
住吉病院

○中里弘
長沼勝利
遠藤定雄
佐藤哲男

〈注〉 目次の題目は発表者から当初に申込まれたものです。

公開講座

今日の学習塾の問題

司会

東京都立大学 森重敏

演題及び講師

◎幼児・児童の塾通いと親の心理	秋草保育学院 元東京都公立小学校長	平塚トシ子
◎中・高受験と準備学習	筑波大学 元東京都教育庁	宇留田敬一
◎大学受験と準備学習	元東京都立戸山高校	佐藤正忠
◎わが国における今日の学習塾	東京都立大学	山住正己
◎学校教育と塾	文教大学	山根薰

(抄録は省略)

「今日の学習塾の問題」と題して、主に一般市民を対象にした公開講座が大会2日目の夕方に催された。約300人の会員・都民の参加を得、盛会のうちに終了した。

日本の家族は病んでいるか

湯沢 雅彦
(お茶の水女子大学家政学部)

〔目的〕

現代日本で、一般でも学界でもほぼ通説となっている「家族病理化論」すなわち「日本家族はとくに最近急速に病理化しつつある」との通念に疑問をはさみ、少なくとも各種統計だけその観念は否定されることを実証し、それにもかかわらず、家族病理化意識が浸透してきた原因を考察する。

〔条件〕

ただし、この立論は、次の前提的条件の中でのものである。

- ① 現代日本社会に病理化した家族（貧困・紛争・病人の介在等のために標準的な機能を円滑に遂行できず一般的な家族関係を維持できない家族）は、たしかに存在するが、少數の一部である。残り大部分の平均的家族は、病理化してはいない。
- ② 最近数年（具体的には10年以内）において、とくに病理化が進行しているとはいえない。むしろ、多くの社会統計は、反対の傾向を示している。
- ③ 共通する数値を先進工業諸国と比較すると、日本家族の病理の度合いは小さいことが判然とするから、相対的に良好であるといえる。

〔方法〕

警察庁・法務省の「犯罪統計」、厚生省の「人口動態統計」による自殺、離婚、婚姻統計、United Nations の Demographic Yearbook から非嫡出子割合・離婚率の統計、等から、1945年以降75年に至る戦後の全国的・縦横的な大規模統計を中心資料とした子捨て・子殺しについては朝日新聞東京版を使用した。

〔結果〕

（1）家族殺傷（実 数）

- ① 娘児殺……昭和35年以降毎年200件の横ばいを続けており、20年代に比べれば5~7割に減少。47年秋に急増したと世論をわかせたが、これはマスコミの報道量の増加にすぎなかつた。
- ② 専属殺……養父母・義父母を含めた親殺しは昭和30年代は平均100件以上あたが最近は半減。
- ③ 親子心中……東京都監察医療院による東京都区内分（か判明しないが、その限りでは、横ばいの中で僅かに減少。

（2）自殺（人口10万当の自殺率）

家族に関係しない原因によることが多いのだが、一般には関係ありとみられ、また遺族に与えるストレスが大きいので取上げる。

① 総数……最近僅かに増加しているが、昭和30年代前半の7割程度、昭和10年前後に比べても少ない。

② 老人自殺……昭和47~48年にやや上昇したが、全体としては昭和30年後半から下降の傾向。

（3）犯罪（発生件数指標）

1960年を100として75年の指数を国際比較すると

① 全刑法犯……米・英・仏は約3倍、西独は1.4倍になっているのに、日本は約1に減少。殺人、強姦、強盗、暴行のいずれについても同様。日本は窃盗のみ件数は同じだが、人口比では減少（諸外国は増加）。

② 少年犯罪……英・仏は約2倍、米は3.5倍に増加。日本は109と横ばいだが、業務上過失を除けば85と減少。

（4）非嫡出子（全出生子中の百分比）

1975年前後において、スウェーデン32.4%、デンマーク21.7%、アメリカ14.8%、イギリス8.6%、西独6.3%に対し、日本は僅かに0.8%。

しかも各国は、最近10年間に急増しているのに對し、日本は戦後、減少の一途である。

（5）婚姻届出期間

（4）のように、各國では婚姻登録放置の傾向にあるのに対し、日本では同居から婚姻届出までの期間がむしろ早まっている。1ヶ月未満に届出る夫婦は、昭和25年17.9%、50年59.7%、1年未満同75.5%→75.8%。これは、内縁婚と同棲の減少を意味する。

（6）離婚

普通離婚率は、昭和40年以降ずっと上昇、しかしこれは全人口に対比した数値で人口構造が急変した日本では妥当でない。夫婦総数に対比した訂正離婚率では漸増はあるものの昭和30年以前よりも低く、戦後最高ではない。先進諸外国の中では、なお低率である。

〔結論〕

日本の家族病理は、事件的現象としては乏しい。しかし、意識の上に強くあるのは、直系制から夫婦制への移行に伴なう家族制の混乱と、不安をかりたてるマスコミ報道のあり方が、大きな原因になっているものと思われる。

来談事例からみた家族関係

小泉英二
(東京都立教育研究所相談部)

1. 都研相談部における来談状況

昭和52年度にかけ都研相談部(日暮本所ふゆひ三鷹分室)の相談件数は、電話相談1637件、来所相談598件(延7267件)であった。

電話相談とは、電話で申込みがあった場合、先ず、電話で相談内容を伝いかめ、比較的簡単なものは、電話で助言し(全体の約51%)、次に最寄りの相談機関を紹介し、(約25%)残ったものは、来所予約として受け付ける(約24%)システムになつてゐる。

来所相談(新規ケース351件、既往ケース247件、計598件)の内訳と、主訴別に分類すると、表1のようになり、登校拒否のケースが圧倒的に多い。

主訴	件数	%
登校拒否	281件	47
自由偏向	33	5.5
集団不適応	32	5.4
神経症及び同様	23	3.8
非行偏向	21	3.5
精神発達遲滞	20	3.3
学業不振	19	3.1
乱暴(含家庭内暴力)	18	3.0
言葉の問題	14	2.3

表1 来所相談の主訴別分類(以下略)

また、年令分布は、就学前8%, 小学生21·6%, 中学生22·9%, 高校生38·8%, その他8·7%となり、中、高校生で約60%を占めている。

したがつて、都研相談部に来所するケースは、親の教育的関心が高く、配慮が及んですむ家庭で、主として中、高校生の非社会的問題行動が多くなりとらえられる。そこで、来談事例からみた家族関係の分析も前述のようなケースを中心として考察することになる。

2. 登校拒否ケースにみる親子関係の特徴

中、高校生の登校拒否ケースの家族関係は、ケースを通じて臨床的に分析してみると、次のような点が特徴的である。

(1) 父親不在

これは①客観的不在(死亡、離婚、單身赴任、出

張の多い取巻などの場合)と、②しつけと母親に守かせ、きりの場合(社会的に活動していり父、妻を周囲の文を離れて)と、③干渉しない父、叱らずに父親の場合とがある。いずれも、家庭内における男性と1つのモード像を欠くことが多い、内向が多い。

(2) 母子関係の密着化

母子関係は、登校拒否のタイプによつて異なることがわかつた。

① Aタイプ(急性、慢性的の挫折型)の場合

これは、中学校または高校にさつてある月突然に起つた場合が多く、それまでの申し分のないよい子として所縁も上位を占めるケースである。このタイプの母親は、過保護といつてもよいも、期待が高く、過干涉、支配型で、子どもを完全にコントロールし、失敗経験をさせない完全教育を目指していよい。子どもは、幼少期より、親の期待をとり入れ、欲求を抑圧して、几帳面、完全主義のペースナリティとして成長し、ある段階で挫折し、家庭内にじいじもとと解散である。

② Bタイプ(慢性的、甘やかされたタイプ)

これは、幼児、小学生の頃から登園、登校拒否を繰り返し、次第にひどくなるタイプで、母親は、過保護で子どもに負けてしまう。干渉しない母の場合が多い。子どもは反応するほどより、一人遊びを好み、欲求をコントロールする経験が少いため、社会的、情緒的未成熟および自立づ。家庭外で困難に遭遇するとすぐ家庭内に逃避し、母に甘え、依存する。母は子をかかるのみ、欲求をかなえてやるが、家庭から外に出ることのが好きでない。恩眷期はなし。依存と攻撃が交錯し、家庭内暴力は発生するケースも少くない。

A、B両タイプは、母子関係はAタイプが母親優位、Bタイプが子よりも優位と逆の関係であるが、両タイプとも母子関係が極めて濃厚で、密着した関係にあること、父親不在であることは共通している。

(3) 祖父母の存在と影響

現在は核家族が多くなつてはいるが、祖父母が同居し、しかも健在で経済的実力とにぎつてはいる場合、そして父親が昼夜不断で父親ロールをとるなり場合、登校拒否も、また家庭内暴力も激化する。

3. 内題

以上のよう立派な家庭では、他向としては健常な家庭にありても見らるが、内題化するケースとの相違は量的な差か、それとも質的な差によるものか明確かになり難い。また、日本独特の現象のかも、外国の家族関係と比較して考察してみる必要がある。

しつけ観・しつけ方略

柏木 淳子
(東京女子大学文理学部)

「家族内待の今日的課題」の主題の下で 終論的提言を行なうよりも、むしろ どのような実践なのか その特徴は何か をキズテークを提出し問題の所在を考えさせつけさせていたい。特に母親の果していかる役割に注目である。

提出する資料は 主として、1972年から1976年までの4年内 スタンフォード大学 R.D.Hess 教授、東洋放送正代表として組織された 通説「日本幼児教育研究の中から」、日本の母親のしつけ論しつけ方略とその影響と 同研究の比較文化的アプローチの結果と なった米国の母親のデータと比較において報告する。
*

子どもの登達環境の主要部分として母親の作り出す原因が、しつけ觀、しつけ方略、母子関係＝ケーションペーパン、Touching style等が、直接、間接、実験、美観、テスト、能率評定等の諸方法によって測定・検査されて、この中から主題に近く、かつ 日本の母親の特質をよく示しているものと紹介する。

1 “子どもの achievement に貢献していく家庭”に つける母親の意見

表1	日本	米国	(**.2001)
a 母親の援助と激励	21.63	37.56	**
b 教師の援助と激励	29.13	28.76	
c 子ども教育的機能	40.71	31.13	**
d 逞の良い妻	8.54	2.37	**

母親の登達觀、達成環境についての見解は、これまでに述べたところと同様、日本の母親は教育重視、親密団結、放課後団結重視の傾向、逆に米国の母親は親密団結重視の傾向が それを特徴的である。このように日本の母親は 子どもに対してどうよう具体的に行動すべきかが問われる。子の適応行動の統制法(しつけ方略)において 親密団結の母親は、子に権威地位に訴える方略と云ふのがあり、この方略は日本では子の登達を促進するとのことが注目される。

2 子どもの登達への期待

就学前の幼稚園にとって 日米共通して 登達得點と考えられていく41行動項目について いつ迄までにでき るようになってほしいかという登達期待が 3年令段階への分類方式で測定された。その結果 全般的に登達期待水準は 日米ほぼ等しい。しかし 諸般の域成

する日本版が思案された。(表2) 部から 日本の

表2	日本	米国	母親が持つ
学校内待スキル	1.32	1.33	的成績や從
従順	2.16	1.96	従順を、他
礼儀	2.39	2.30	方 米国
情緒的成熟	2.41	2.08	母親が富境
自立	1.98	1.85	にすり自己
社会的スキル	1.82	2.18	主張や社会
言語における自己主張	1.73	2.18	的スキルと

それより早期に期待している。このちがいは それが他の国よりよい子供を反映しているものとして興味深い。

3. 登達期待が 子どもの行動登達にどう関わって いるか

全般的登達期待水準と言語主張、学校内待スキルへの期待の高さが 子どもが認知登達段と育むための関係を持つ。また活動性、忍耐性、持続性、自立性など行動特性とも 登達期待の高さには何らかの相関をもつて いる。これらは 母親の期待の高さは子どもの登達の値段として重要なといえよう。では親の期待はどのような形で子どもに作用していくかを、母親の経済行動や変更との関係で検討してみると、登達期待の高い母親は その実現度を保証するためや高い母慈幼愛責任感と関連しており、また 直接教授よりも 主要的影響や激励を主とする Touching style とその傾向が 日米英語に現れる。また日本の母親では、期待の高い者ほど 子どもの教育に介入し、教える行動が教養に現れる。これは教育までの姿を反映しているとも させよう。

一方、これら登達期待の高いと見通している特徴的 Touching style は、子どもの知的登達(+)(+)の相関性を持つ。しかし日本の高い登達期待を持つ母親に特徴的な直接介入や教えることは子どもの測定と相関せず、それから格別の効果もつこないことを示唆している。このことは母子自由場面での母親の働きかけの中で、強い統制、圧力、誤認押しつけ(-)(-)、配慮の多い直接的統制やストップタクの堂々たる(+)(+)の割合で子の登達に対することもとても誤められている。

* 本研究については 講じ下記入論文・著書がある。詳細はそれを参照されたい。

東洋、カロル Hess 教育心理学 16巻

柏木淳子・東洋 教育研究 1977.25. 242-253

浜田惠子・柏木淳子 教育研究 1978.24. 45-56

口説筆表として 国心. 38. 39. 40回

教心 19. 20回

教育課程諸段階の問題といふ

石郷 因 泰

新潟大学医療技術短期大学部

今日学生像を考えるには、いくつか難点が存在する。それは「学生数」と「大学数」が多すぎること、一般的な学生論の前提となる全体的な姿の把握がきわめて困難なことである。次に、オーバーフローと関連することであるが、それならば、学生の局部を把えて、それが、何らかの意味で学生全体を代表するよりどうよるかというのである。第三は、今日までの学生論の過半が男子学生対象であって、女子学生にソリューションは論がほとんどあてられない点である。これら三点だけだと大きな問題なりではあるが、ここではひとまずオーバーフローを視度として述べることにしたい。

すなはち、一部の学生たちの種のさわざちは、学年3それが特異現象のみではなく、一般の学生も多かれ少なかれ、さうきわだち的な特質を具えどもとのこと。その理由は、学生たちの生活と接する社会構造が同じまたは類似しているからである。だから、さわざちは適切にとみ詮みられていまならば、それは全体の傾向に代表しておらずおかしくともわかる。次に性差の問題は、特質と変形されて働きはじても、全く異質の特質。さわざちは発生させた作用は必ずしもそぞろいと既定する。

学生像それ自体については他の発表者によると云々、臨床的問題を中心にしてみると、青年期の発達諸段階を演じていくつかの共通性をかいたすことが出来る。たとえば、臨床的さわざり現象は、青年期の前期と中期においてはさわざりと登校能不發症の両面が並んで現れることが出来て、青年期の後期である大学生ではステートメント・アパートシートと同様現象がおこる。これら、意状と共通の問題現象は、発達各期に即ちに形じ、身のまわりの状況特質と自分の「生」の展開を利用して、「生」の展開を進展させていく力不足である。いいかえると社会的絆創と自己統合失敗によるものという問題である。その時々の状況内において自己を位置づけて生活していくことの失敗といつてよい。これら失敗は、人によっては中学校時代において、また高校時代、そして人によっては大学生（青年期後期において）になって現象化する。その人格にとってその時の社会的・教育制度的条件と統合化に失敗するわけであり、しかも同時に現象が実は幼少年期からはじまっているから老いぬならば、背景

となることは早い時期から形成されはじめて、他のいくつか個体的条件との支差、上で時期を経て現象化するといふられる。

このような現象陷入していく生徒や学生たる、たとえば「大学生ならびにアパートに陷入してくる生徒たちは、いつもよりも一般に、いつもかられて状況の中にいた身を引き、いつもかられて洋子の中で生活してきましたらず、生活状況を自己流にいつもしてゆく傾向を示す。大半の生徒にとって自分が状況をいつもしてくるといふ今までの生活とは全く違う方向性をもつ行動に迫られ、いつもかられて洋子、自分が大きく変動し、それに付随して自からり援助をよびにくされるとなる状況と支差したとき適応失調をひきおこすのである。しかし、それは単純な合併症の適応をするというマーリング・アジャストメントではない。正に適応失調か、解決的行動を放棄してしまつてである。登校拒否とアパートと「隠り子」現象である。いつも何故となるのか。それには状況心理学（知識をしないで覚えることと含めて）の定着プロセスとされる必要があろう。身体発達につれて子供が大きめて動く。動きが咸る所をこえたときコントロールされる。次々とそれを展開させることにめぐれ、やがていよいよ、わざりなどの「標準」ととともに、「やり方」と「手順」がつく。それにもうまく自己統合、70%を入る。しかし、親の側、生活がかかるより安定的に限界がつけられ、さわざり内に子の側の生活が準備されて、新たな展開の機会がなくなることになると、なら、子求め方、それへ方法はいつどこで獲得されることになるのか。困難な状況で動けるだけのことで、それが現状を下に向かってゆくと、中学生、高生、大学生とも、「経験がないからわからない」「どうすべきか努力がなかった」と同じような答えが帰ってくる。発達期の差が生きていくのである。さらにそれでは「その経験とはどんなもつか」というと、中、高生とも「自分でやること」とか「生活すること」などと答えることが多い。

角度をかえるならば「起らされた生活」とそれへ現象が、生活技術をせずと固定化をもたらし、新しい場面における自己確認的処理でいく力を失わせ、どう面では発達時期の差をあまりさわざりをすることが少なくなり、大学生らしくない大学生群を生み出してしまくるのではないか。大学に入ってしまうことで行動的行動的になりはじめる。その結果大学といふ種の意味が実質的に変動をもたらすことにつながる。

今日の学生像と大学教育のあり方 —学生相談及び日米比較の立場—

小林純一
(上智大学)

1. 目的

1976年から、大学生の創造性と性格に関する日米間の比較研究を継続的に実施したので、その結果の一部から、題目に関する問題点を述べてみたい。また、日本の大学生のカウンセリングを長年実践してきたので、この体験から得られた感想の一部を、上記の研究との関連において述べてみたい。

特に、取り扱ってみたいと思う側面は、大学生の創造的思考能力と性格との関係、ならびに、大学教育における大学生の人間的成長の援助活動であるが、これらに関する筆者の試みを紹介したい。

2. 方法と手続き

創造性を測定するためにTorrance Tests of Creative Thinking のverbal & non-verbal formsを使用した。性格は、Neurotic Scale Questionnaireを実施して測定し、その他に人間関係に関する質問紙に記入させると共に個人的面接とグループ面接を行なった。被験者数は、日本人460、米国人420で、同一人物を2年間にわたって調査した。

3. 結果

創造性は、Fluency, Flexibility, Originality, Elaboration、および、これらの中合計得点で表現し、日米間の比較を行なったところ、2年間にわたって、Elaborationを除く他のすべての項目において、米国の大学生が1%水準で有意に高い値を示した。つまり、抜群的思考力は、日本人よりも米国人の方が、はるかにすぐれていることが明らかとなつた。Original ideaに種々のideasを附加する能力としてのElaborationのみ、日本人の方がすぐれていた。男女間の相異に関しては有意の差が見られず、性別に関しても日米間の相異は上記の全被験者の場合と同様であつた。

創造性の高い学生たちは、友人関係においては積極性を示さず、創造性の低い学生たちに比して孤独感が強かった。この背景を調べたところ、創造性の高い学生たちは、意識して自己を取り組み、孤独と対峙していることがわかつた。これに対して、創造性の低い学生は、自己から逃避する傾向があり、親しさを求めて暖い人間関係を友人や親兄弟に求めれる傾向が見られた。興味深いことは、米国人の創造性の高い学生は家族、

特に両親との信頼関係を保ち、相互理解に満足を覚えていたのに対し、日本人の場合は、家族関係が否定もしくは消極的で孤独感に悩む傾向があつた。

これらの結果から、創造性の高い学生たちは自己の孤独を意識して、自己自身を取り組む強さのあること、創造性の低い学生たちは自己自身から逃避して、他人に依存する傾向、または、あまりの強い人々であることが推測される。

4. その他の実験結果と考察

日本の大学生は、自由討論において発言を認め、発言内容には他人に対する批判が多い上に、親しい友人同士間では何でも自由に話すが、公の討論では沈黙が目立つ。米国人の場合は、自由に自己を表現し、どんな意見でも発表する傾向が強い。日本人は譲りを恐れると共に、友人にどう思われるかを気うからず傾向が強い。日本人の学生には、進路の選択に関する考え方非常に未熟であり、真に学びたいものではなく、自分を打ち込んで自分をかけようとする価値がない者が非常に多い。自分が何者であり、何をしたいかが不明確な学生が目立つ。このような日本人学生の傾向は、その社会的文化的背景の中で生まれてきたと思われるが、特に、両親や学校教師からの差の影響が見られる。

あらためてを与えてリポートを書かせると、大部分の学生は何とか書きあげて提出するが、テーマを自分で自由に選択し、これについて自由に研究してリポートを作成せると、約30%の学生は未提出となる。つまり、problem-solvingの能力は発達しているが、problem-findingの能力は未発達のまま残されている。自由感を得たいと望むが、いざ自由が与えられるとき、困惑する学生が大部分である。

テーマなしの討論をさせると、何をしたらよいかに迷い、何をしたいかの自己決定ができない。独創性や自主性が発達されないままに不自由な自分と付き合っている学生が大部分である。

5. 大学教育での試み

クラスに参加する学生同士の人間関係、信頼関係、相互の交りを作り出すことによって、自己を知る訓練を徹底的に行なってきた。人間関係の合宿集中訓練や体験学習、グループ・プロセスの研究などを小グループ(約20名)で行なってきた。これらによって、学生が自己を発見するプロセスを重視した結果、彼らの生き方や意味の発見が躍進看見られた。これからの大學生における授業では、psychological education の方法と種々試していく必要がある。学生は、これを求めているように思われる。創造的人間となりるために。

「今日の学生像と大学教育のあり方」

「精神医学の立場から」

南大塚診療所

(穂積 登)

この見解は、昭和45年から50年の山梨大学での臨床経験により構成されている。まず、大学生のグループ経験で生じた病的反応を、次に 学生無力症と著者が名付けた「卒論ウツ病」を検討し、大学生の体質と大学教育について論じたい。

Ⅰ. グループ経験での病的反応

Rさんの例(ヒステリー反応)、Dさんの例(ウツ反応)、K君の例(分裂病的次元の実存不安)、解氷段階での異常反応の例(離人反応) 一詳細は山梨大学保健管理センター紀要1号、1974年—

本グループの在り方に問題はあるにせよ、正常な大学生の自我さえ以上のような病的反応を誘発しそる流動的で弱い構造を持っているとすれば、マスプロ化する大学教育の中で 問題は深刻である。

Ⅱ. 学生無力症

学生に特異な病像だが、精神病理学の概念で簡単に解決し得ない学校教育との深いつながりを感じさせる。山梨大学保健管理センターでも数症例経験したが、一例は全スタッフの愛容的努力により一応の好転を示した。Aは最初の一年間は無口で、ほとんど口をきかず、セントーに来ていたが、二年目からは時折授業にも出るようになった。やがて、特殊児童に關心を示し、卒業時には教職に合格した。その後社会に出るのを恐れ、センターに足レギく通うという経過があつたものの、現在は特殊児童教員として働いている。Aは、社会に出て行く事に無関心であった状態から自分の生きる道を見つけ心を開いていった訳だが、この無関心な状態は分裂病の自閉にも似た深い次元のものである。長い学生生活が社会で生きる道標とならずに、むしろ社会との關係を断絶する壁となっていたと思われる。

Ⅲ. 卒論ウツ病

卒論をめぐっての反応性ウツ病を言う。発生時期から分類すると以下のようになる。

a. テーマ期ウツ病---卒論をまとめる努力をしていろいろ段階で見通しが立たず落ち込む状態を言う。アンビバレンスなneurotic Depressionであり、9月頃生じ易い。

b. 完成期ウツ病---卒論が九分通り仕上がった時に起きるウツ状態を言う。現象としては何もかも放り出して急に下宿にとじ込もって、自殺念慮を抱いてい

る場合と、論文を放り出して、落着がない状態で文献をあさっているagitiertな場合がある。ともに強迫的状態が目立ち、自殺念慮も強い。12月頃に多い。

c. 完成後ウツ病---卒論が完成し、単位もほとんどとり終わっているにもかかわらず、下宿に閉じこもっている状態を言う。自殺念慮も強い。この病像は、卒論が仕上がったという解放感と、これから社会に出るという強度の不安の両方の精神活動を合せ持っているようだ、いわゆるEntlastungs D. とBelastungs D. の両方をかけていると言えよう。

テーマ期ウツ病から反動形成的に錯乱して精神病院に入院させられた一学生例を例にとってみると、Bは学業はトップに近かったが卒論の段階でテーマがしばれず、やっと実験に入つても大学院生の手伝いだけで自分では何の見通しももてず9月になってしまった。その後ウツ状態、錯乱、入院を経て1月から3月にかけて卒論をまとめさせる努力をしたが、本人の希望があり留年した。翌年はセンター教官と担当教官と協議し、段階的な細い指導を与える反面、教室員と一体となって研究する意義を体験させるようにつとめた。Bは前年より高度のテーマを立派にまとめて一流会社に就職することができた。

以上学生の発症例から次の問題を考える。

グループ体験でみる限り、学生の自我の弱さは新たに再認識されるべき問題である。もとより、発達的に過渡期である自我を認識した教育は考えられてきたが、自我の弱さをふまえるならば、自我に関するより支持的、かつ援助的、実践的関与が重要であろう。教育のマスプロ的傾向の中で、自我への実践的関与が欠如している現状では体験学習レベルでの教育的配慮がその系図になりうる。体験学習を単に実験グループ場面だけではなく、大学教育の在り方の中に組み入れられるべきものとして見直すべきであろう。学生無力症についても、発達の適切な時期に適切な支持的、受容的関与が学校教育環境に準備されていなかったために、社会に無関心で、自閉的な世界に閉じこもってしまったとも考えられる。卒論ウツ病は自我発達の問題をオの原因として考るべきだが、同時に、社会に差立った為の準備がなされていないことも大きな原因と考えられる。この準備とは、学校と社会の価値観にとまどうことなく対処しうる自我の確立であり、自信である。この自信は、一貫した体験学習的配慮のある教育経験を背景として育つものであり、もう一方では、社会人となれるだけの対社会への現実検討を与える配慮により育つものであろう。

現代学生と大学のあり方

黒田 正典
(東北大学教養部)

1. 問題と立場

問題はまさに本シンポジウムの標題のとおりであるが、また同時にこの問題の解明に接近するその立場の問題をも含んでいることをも考慮に入れねばなるまい。われわれは上掲3パネラーの立場を設定したが、それらの見方を前提としつつ、標題の問題解明に必要な観点の枠組を模索することにしたい。

2. 現代学生の基本的状況 一位置づけの喪失一

現代学生の基本的特徴を表わすのにいろいろの言葉が使われている。Dissent(非同調者), Apathy(情念低下), Alienation(疎外), Disengagement(無仕事), Dropping out(脱落), あるいはモラトリアムなど。しかしこれらはなんとなく否定的側面の觀がある。Kavanaugh, R.E.は凶行的夢想家, 見守られた世代(Kept generation), 慈悲夢想家の三つの型をあげるが、わりに包括的である。しかしながら現代学生の評価すべき積極的側面は何であるかだろうか。これは重要な課題と思われるが、私にはまだわからない。現代学生における基本的な特徴、あるいは状況は、位置づけの喪失であると考えられる。ここに位置づけの喪失とは、自分が所属する場所が自己の所属したい場所でないこと、または自己の所属する場所と自己の生活・生涯の間の意味連関が明瞭でないことをいう。活動家にせよ無気力学生にせよ、残念ながら共通の状況は位置づけの喪失である。これを端的に示す事実が留年にはかならない。

表 1

学部	A.T.S.
×留年率	1,2,3
a 本意入学	10,8,7
b 転籍希望	1,2,4
c 進路不安	1,3,4
d 合格第一主義	2,6,9
e 適性志向	9,3,1
f 成就志向	7,5,2
g 職業的動機	7,5,9
h 就職意思	8,10,9
i 大学院志望	8,7,2

表1は丁大学教養部の留年(1974年度)を分析する。学部ごとに留年率の相違があることに注目し、全10学部に留年率の高さによる順位を与え(ただし表1は4位以下省略)、これと同じ学生たちの2年前入学当初の入学手続書類とともに回収した学生相談所アンケート回答結果と対照させたものである。a～iの各項目に対する数値は10学部中の高いほうからの反応率順位である。なおこの3学部は近年留年率最高群を保っている。表を見ると留年の原因が推測される。A学

部は本意入学最低、転籍(学科・学部・大学)希望・進路不安第1位などと読んでゆく。入学当初から転籍希望といふのでは結婚式をあげながら離婚を思うに等しく、高い留年率ももっともと思われる。A学部の留年の原因は無気力入学・無目的入学にあると推定される。これに対して注目されるのはS学部の型である。e, f, iの項目を見ると、ここの学生は学問志向なるかを思われる。d, g, hの低位も学部の性質(science)を考えればもしろ了解でき、学問志向とも解し易い。しかし真の学問志向であるか否。ほんとうに学問志向であるならば、なぜいつまでも入門的講義の多い教養部に留まっているのか。項目a, b, cもおかしい。考えられる理由は、S学部の入学者はS学部入学といふ一般的目的は確りとしているながらも、特定専門学科に対する確信をもてないまま、高校時代における文科系・理科系というあらっぽい方向づけによって進路探索といふ一種の意欲をもってS学部に入学してくるものと考えられる。そこでS学部の留年は目的留年とよぶこともできよう。久世敏雄の計画留年の語もこれに近いとも思われる。しかし目的留年とはいうものの、大学における自己の位置づけの喪失状態といふことでは無気力留年と全く共通である。現代学生の内面生活においては彼らは大学の中には、そしておそらくは社会の中に自己の位置づけをもっていない。そこに中学・高校における空洞化した「進路指導」の問題が横たわるが、他方、大学のあり方が問題となる。

3. 大学のあり方の問題

現代学生の問題点を大学自体の問題点として受留める大学は晚天の星である。現在、数百にのぼるわが国諸大学の大学改革案もほとんどこの觀点をもっていない。しかしほんの少ない数の大学ではこの見地から種々の試みをしている。その一つの形はAcademic guidance(修学指導)である。その例は東海大学(「留年－その生態と挑戦」, 1976)に見られるほか、近年、日本教育心理学会大会論文集に毎年、何例かは関係ある発表を見いだすことができる。しかし修学指導を学生の無気力と脱落に対する対処と考えいか、学生の本来的位置づけに対する対処と理解するかによって意味が違つてこよう。そこに大学の制度改革の問題がからんでくる。しかし現行の制度改革はStudent apathy, ないしActivistの発生原因としての大学といふ場所の構造転換に眼を向けていないので、講座数の変化ぐらいの結果に終りよろ思われる。この間にあってR.P.Doreの、社会の場にまで視野を広げた調査と提案が注目される。(訳書、学歴社会 新しい文明病'78)

流れ作業に関する研究〔I〕

大倉元宏（成蹊大学 工学部）
 西岡 昭（労働科学研究所）
 藤井 審（芝浦工業大学 工学部）

1. 目的

流れ作業における作業負担の評価に関して、二重課題法による作業者のスペア・キャパシティの測定手法が適用できるかどうかを検討するために予備的な実験を実施した。この手法の適用は自動車運転作業では数多くみられるが、流れ作業については少ないと思われる。

2. 方法

従来、この種の作業実験に用いられてきた作業は被験者にとって具体性の乏しいものが多いように思われる。そこで、本実験では、その模索的な意味も含めて、組立玩具“LEGO”的ベルト・コンベヤによる組立作業を採用した。コンベヤ編成にあたっては、既定時間法(MTM)で組立の統所要時間(228秒)を求め、それを4つの工程にはば均等に割り付けて、ピッチ・タイム(1分のアセンブリ・ライン)を設計した。

作業者は全員20才の学生で、第2工程担当者(S₂)と第4工程担当者(S₄)を測定対象者とした。作業に対するトレーニングは実験の約2ヶ月前から開始され、ピッチ・タイム1分でうまく作業が進行できるようになるまで訓練された。作業のサイクル・タイムを求めるために、各対象者に観察者が1名ずつ付き、手動スイッチのオン-オフによる電圧レベルの差で作業時と待機時を区別し、記録された。

二次課題はスピーカより長短2種の音刺激を継続的に与え、これに対する反応を求めた。音刺激は750 Hzの純音で、長音は0.3秒、短音は0.1秒持続する。呈示間隔は1.5秒で、2種の音の出現順序はランダムに組み合わせてある。被験者はこの音が短・長・短の順序であらわれたとき、足元のフット・スイッチにより応答する。二次課題については、「組立作業を主として、余裕があるときに二次課題を行ない、応答はできるだけ速くするように」という教示を与えた。応答すべき刺激の組み合わせの出現頻度は平均9ヶ/分である。この音刺激系列はあらかじめ磁気テープに録音されたものを再生し、その応答とともに記録された。このほかに、表面電極により心電図を導出し、実験開始から終了まで連続的に記録された。以上の測定記録はすべて電圧信号としてデータ・レコーダにて磁気テープ上に記録され、オン・ライン処理された。また実験終

了後、簡単な内省を聴取した。

実験条件としてコンベヤ速度を変数とした。被験者のパフォーマンスの変化を明確にうながるために、1分より短いピッチ・タイム 0.95・0.90・0.85 分の3条件を設定した。各作業者は3条件ともトレーニング段階で短時間ではあるが経験している。実験期間は2日で、各条件に半日が費やされた。その順序は、0.85 → 0.95 → 0.90 で各条件とも1回限りである。実験手順は、まず安静時(閉眼座位)の心電図を15分間測定し、二次課題のみ(条件0.95では省略)を10分間行ない、その後組立作業が始まる。作業は90分間続けられるが、二次課題は作業開始5分後から付加される。作業終了後、再び安静状態での心電図を10分間測定して、1シリーズが終わる。

3. 結果と考察

サイクル・タイムと心搏数に二次課題の有無に起因する差は認められず、内省報告からも二次課題に対する苦情は聞かれなかったことからして、二次課題の組立作業に及ぼす影響は小さいと考えられる。

初期効果と終末効果を考慮して、第21番目から80番目の作業サイクルを取り出し、サイクル・タイム及びスペア・キャパシティの測度として、二次課題に対する反応潜時と情報伝達率を求めた。平均サイクル・タイムでは、S₄は3条件ともほぼ同じ作業時間で組立を完了しているが、S₂は実験順に従った低減がみられ、条件0.85と他の2つの条件の間に有意な差が認められる。反応潜時については両被験者ともコンベヤ速度が速いほど短くなる傾向がみられる。情報伝達率では、S₄はコンベヤ速度の上昇に伴って低下しているが、S₂は実験順に率がよくなっている。

サイクル・タイムからみて、S₂には組立作業に習熟の効果がみられ、その効果が情報伝達率に反映していると考えられる。情報伝達率からみる限り、S₂及びS₄の二次課題の成績は一次課題(組立作業)の変化に対応している。反応潜時と情報伝達率の関係は一般的な解釈からすると矛盾しているように思われる。スペア・キャパシティの概念からすると二次課題に対する反応潜時はどう解釈されるのか、吟味してみる必要がありそうである。

4. 結論

各条件1回限り、被験者2人という極めて荒い実験であったが、二重課題法が適用できそうであるという感触は得られたと考えている。また、今回用いた作業もそれほど不具合な点はなかった。なお、本研究は芝浦工大・安藤公一氏との共同作業によるものである。

盲人用信号機の分析的研究(3)

全盲者の音源定位と聴取歩行について

中京大学 文学部

鶴田正一 福井嗣泰

はじめに 盲人用信号機の分析には多大な実験条件が考えられ、常時盲の人達の協力を得ることは難しい。そこで、これまで晴眼者に眼隠して条件等の吟味を進めてきた。今回は、こうした結果を基に全盲の人達に協力をお願いしたものである。

目的 1) 一般道路で現在使用されている盲人横断用信号音を全盲者に提示し、可聴閾、音源定位、聴取歩行について検討を加える。2) 晴眼者のこれまでの結果と比較検討する。

装置 発音体(鳥籠型スピーカー)、信号音制御装置は名古屋電機KK製のもので切替スイッチにより鳥の鳴き声2種、メロディー2種、計4種の信号音が選択できる(内蔵されている信号音は市街地で使用されているもの)。信号音の音圧は、発音体に入力する電圧をシンクロスコープで眺め調整ツマミにより当該の条件に設定。背景騒音はHONDA発電機による(EM、2サイクル、ハイピッチ音)。地面上には歩行軌跡を読みとるためのメッシュ(1区切50×50cm)が切られている。歩行動かたは、聴取者の後方(地上3m)および側面(地上1.5m)のVTRと16mmで撮影される。

条件 信号音は、ピヨピヨ、カッコー、通りやんせ、故郷の空の4種。「ピヨ」の周波数は2800/sで、変移幅が800/sあり周波数変移方式による。「カッコー」は1100/sで変差240/sあり周波数変移方式による。通りやんせは最初の4小節を提示。その音符の周波数は最小:410/sから最大:730/sまで。故郷の空は最初の5小節を提示。その音符の周波数は最小:650/sから最大:1090/sまで。

信号音の提示時間「ピヨ」0.2秒 信号音間隔1.5秒。「カッ 0.1秒、無音 0.3秒、コ-0.2秒」信号音間隔0.9秒。信号発信位置は聴取者前方10mで、発信面(聴取者の耳の高さ)を聴取者と正対させた。背景音の音圧は聴取者位置で65dB、75dBの2種。

手続き 実験者が所定の位置に聴取者を案内し、そこから直ぐ歩行するように指示した後、10m間を白杖を使かず歩いてもらつた。次に、発音体が真正面に位置する10m離れた所に聴取者を停立させ、教示・反応の練習を行なつた。その後、信号音が全く

聞こえない水準より信号音圧を徐々に上昇させて行き、最初に信号音が聞きとられた所(可聴閾)で聴取者に合図させた。そして、その信号音が聞えてくると判断した方向を白杖で指示させた。その指示方向を測定後、実験者の合図に従つて信号音が聞えてくると判断する方向に、信号音を聴取しながら自由歩行させた。実験は、12名の全盲者を適宜6名ずつに分け、その一方に65dB、他方に75dBの背景音圧で4種の信号音を各々3回くり返し提示した。4種の信号音の提示順序はカウンターバランスされている。

聴取者 名古屋市内でハリ・マッサージの職をもつ全盲の者。年今は27~59才。先天盲6名を含む男子8名、女子4名。

実験場所 中京大学構内の八事山興正寺境内で錆疾されていない平坦な所。

結果と考察 各条件について測定した結果を表1に示す。1) 可聴閾の音圧は、全聴取とも背景騒音の音圧より5dBから8dB低い値となつた。この傾向は4種の信号音とも共通した。また、この結果は晴眼者の同種の結果と一致している。2) 音源定位:

ほとんどの聴取者とも正面左側にすれば定位を行なう。定位の良さは、「通りやんせ」、「故郷の空」、「カッコー」、「ピヨ」の順で、複合音から単音になるほど悪い。また、各信号音の周波数を見ると低い周波数のものはほど定位されやすく、周波数との関係も考えられる。3) 聽取歩行: 歩行軌跡は個人差があり、10m歩行中最大で3m(発音体と出発点を結ぶ線からの左石のずれ)ずれる聴取者もある。信号音種に顕著な差は見られなかつた。歩行形態:

最初の出発点で方向を定め5mから7m進んで方向を修正する者と、そのまま修正がなされず直進してしまう者とに分かれた。歩行時間: 晴眼者の歩行時間が平均18秒であるのに對し、全盲者は9秒前後で大変早い。これまでの結果は晴眼者と全盲者の間に顕著な差がなかつたが、歩行時間には大差が見られ今後考察を進めらうえで充分考慮しなければならない。

表1 全盲者の可聴閾・音源定位・歩行時間

信号音	背景音圧(dB)	可聴閾(s)					音源定位(s)				
		正	反	又	SD	X	SD	X	SD	X	SD
ピヨ	65	57.8	1.6	L	9.7	8.1	9.4	1.6			
	75	65.9	1.1	L	10.4	7.2	9.7	3.7			
カッ	65	60.1	0.9	L	7.3	4.0	9.3	2.1			
	75	68.1	1.3	L	9.3	9.2	9.1	3.6			
の空	65	59.2	0.6	L	6.8	5.1	8.8	1.6			
	75	67.6	0.8	L	6.6	5.6	8.6	3.5			
通	65	60.2	0.4	L	5.3	3.3	8.7	1.5			
	75	65.8	2.6	L	4.0	6.0	8.1	3.4			

本実験は、
名古屋市盲人
福祉会所公
連歩行会の
協力によって
おこなつ。

無事故運転者の特性分析

—運転態度と方略をめぐる調査—

長 塚 康 弘
(新潟大学法文学部)

目的一事故多発の今日、運転者が長期間無事故で運転に従事するのにはなぜか。彼らが知覚一動作性スキルや性格に望ましい適性をもなしているためとも考えらるるが、さらに、事故を回避するための望ましい運転への態度や才略を有しているためとも想定される。無事故・優良運転者像は、これまで事故者の分析による問題運転者像をもとに、間接的に示唆されてきた。

本報告はこらの研究成果を補完する目的から、対象を無事故運転者に求め、その安全への態度・方略を探るものである。なほこの結果は、運転者教育における無事故運転のための有効な情報をもたらすものである。

方法一安全運行管理に盡力し、成果をあげている運輸会社に無事故・優良運転者の推せんを依頼し、面接

表 1 被験運転者の性別、現在の状況および生活意見

調査を行った。「最近(48年8月以降)5年間無事故で、技能態度の優れた運転手3~5名」との依頼に応じ、調査当日は、バス9名、トラック12名、タクシー4名が出席した。しかし、表1記載者以外には事故記録があり、集計から除いた。各社内に沿って全員出席の上、順に「無事故運転のための努力点、欠陥は何か」という内容の生活意見を述べてもらった。所要時間は1.5~2時間であった。

結果一表1の生活意見をもとに要約すれば、1. 家族、最愛の事態を予想して運転、2. ポロ意識、3. 自分のペースで大事にする、4. 十分な整備、体調調整、生活環境調整などは運転への集中、5. 無理を回避、急がぬ、余裕をもつ、6. 地図(とくに事故地図)の活用と反復、7. 道路、他車などの確認、8. 自己理解などになる。

暴走族の研究(IV)

—車志向者の心的特性について

大阪大学人間科学部 ○長山 泰久
国際交通安全学会 鈴木 雄雄
広島大学工学部 長町 三生

目的 暴走族を含めて、高校生、中学生における車志向者の特性を51項目の質問紙でとらえ、プロフィールで示そうとする。

方法 (1)調査対象者：全国各地の高校11校、中学校6校の生徒2828名、高校男子1916名、女子100名、中学男子416名、女子396名。K県暴走行為者50名。(2)調査期日：昭和53年1月。(3)調査紙：前回発表の調査紙とともに、車志向と関連して項目以外に、家庭のしつけ、学校に関する項目を挿入し、2～3選択肢からなる51項目の質問紙を作成した。予測の可能性を検討するので記名式で行った。(4)解析法：分析の主軸を車志向度にみる、A群-免許所有者、B群-免許無・将来希望有、C群-免許無・将来希望無に分類した。前回同様直接ベリマックス法にて10因子を抽出し、負荷量をウエイトとして各人の10因子得点を算出し、それをもとに各群毎の平均値を求める。男子高校生全員の平均値と標準偏差を基準として、各群毎の因子得点相対値とともに各群の相対的位置づけを行った。

結果・考察 (1)前回と全く同様な結果が認められ、A,B,C三群に最も意味をもつ因子得点は、車、享楽的遊び、友人関係、スポーツ、そして小説などの得点である。一例として友人関係のグループ毎の相対値を示すと図1の如くなる。ここでは男女別に、車志向、学年、東西日本の各群ごとの平均得点の位置づけを行っておりが、性差、発達差、地域差にくらべて車志向差が極端に大きな違いを示している。車志向の心理的特性がくるまの問題と大きくかかわりをもつことを暗示した結果である。(2)因子得点相対値を10因子に關してプロフィールとして示したのが図2～4である。理解を容易にするために小説、数学・理科の因子を上方に、車、遊び、友人、スポーツ、自転車の因子を下方に配置した。図2にみられるように車志向者A群は上方左、下方左傾向になり、車非志向C群は上方右、下方左傾向を示す。暴走群有職者はA群に近似したプロフィールを示すが、学生は若干異った形であった。これは今後の検討を要する。図4は普通高校と工業高校自動車科のプロフィールを示すが、車志向にともなう心的特性を暗示するものである。

結論 グループとして車志向者の心的特性をプロフ

ィールにて記述できた。今後各因子間構造をもとに、車志向者の特性を検討することが可能である。

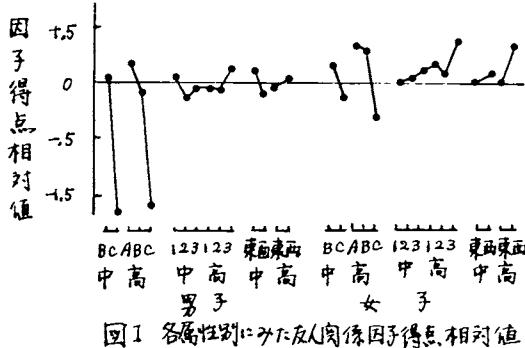


図1 各属性別にみた友人関係因子得点相対値

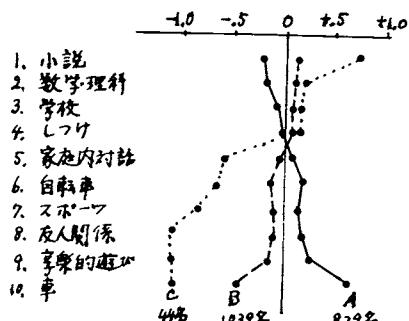


図2. 男子高校生車志向別プロファイル

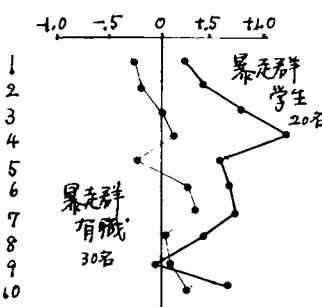


図3. 暴走群プロファイル

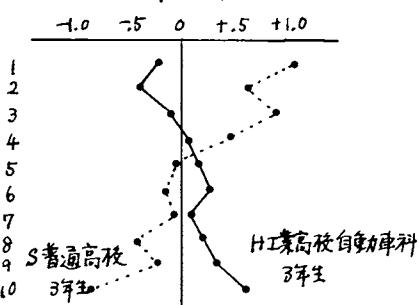


図4. 高校別にみたプロファイル

暴走族の研究(IV)

—車志向者予測の意義について

国際交通安全学会 ○鈴木 隆雄
大阪大学人間科学部 長山 泰久
広島大学工学部 長町 三生

暴走族問題の現状と問題点 暴走族問題は今日の大いな社会問題のひとつである。公道上での集団による無法な行為が一般市民に与える影響は大きい。①一般のロードユーチャーに対する大きな脅威 ②運転の騒音による安眠妨害 ③集団抗争、窃盗、強盗、強姦などの暴力行為 ④集合地の住民に与える不安全感などがあげられる。

今日暴走族対策は警察力による取締り、規制が主力である。道路条件の改良、道路上での強力な取締り以外に、グループ解散を組むた働きかけ、レター作戦、家訪問、両親、職場の責任者に求める誓約書など、本来の警察活動をえた働きかけを行っている。また、道交法一部改正の中に暴走族対策として共同危険行為等の禁止の規定が新設され新しい対応の可能性を求めており。だがこれも具体的な危険犯、具体的な迷惑犯が対象となるので、暴走族関連行為の終焉につながるかどうか疑問が残る。

元々一人の人間が暴走族として活動するのは長くて1~2年といわれている。それでいて暴走族が継続し、盛んになるのは、メンバーが常に新陳代謝し、次々と暴走族予備軍が成長するところに原因がある。われわれからみるとグループで暴走行為をくり返す者がいることだけが問題なのではなく、一般市民全員で構成している交通社会の中で暴走行為、危険行為をとつてくる者が問題なのである。今後の交通社会を考える意味で暴走族を問題としたい。

暴走行為者予測可能性 これまでの研究で強車志向者、暴走族の心的特性を明らかにすることができた。心的アプロフィールを通して彼らを予測することが可能である。また、前回の発表では数量化II類を用いた予測方程式のウェイトを確定したが、それによつても予測可能である。図1は今回のデーターにそれを当てはめたものである。A₁は暴走行為を行ふ可能性を強く示す者、A₂は免許を持つ車を運転しようとする者、Bは運転への志向性をもつが免許を持つことを遠慮させてコントロールできる者、Cは車にそれほど志向性をもたない者を示している。

図1にみられるように暴走族の分布と高校生の分布は序質的に異つたものである。A₁は高校生では7.6%に

過ぎないが、暴走族では40%である。高校生ではB,Cが48.7%であるのに対し暴走族では10%である。両群ともA₂に多数の者が含まれ両群の判別の点でやや問題があり、A₂判別の基準値を今後若干修正する必要がある。だが本質的には本方法において暴走行為可能者が中学高学年、高校低学年すでに予測可能であるといえる。各学校担当者は本予測結果の妥当性の高いことを評価している。

予測の意義と今後の課題 (1)学校・学級の特色を知る。文部省の指導要領の改正に伴つて高校における交通安全教育にも改革が加えられる可能性が出てきた。各学校は自校の特色を知り、ホームルーム、学級行事、生徒会活動などを通じて積極的にとりくむことが可能となる。学級運営上、生徒指導上からも構成メンバーの特性にあつた指導が求められる。学校全体、学級単位の因子得点プロフィールおよびA₁、A₂構成数は各学校、各学級の特色を明確に示し、交通安全教育に対しての必要な指針を示す。(2)個人の特色を知る。個人別プロフィールを通じて各人の特徴と傾向を知ることができる。今日の交通安全は集団教育的方法で行われていて、それに並用して個人の内面的な車志向度を知ることによってきめ細かく行われることが望まれる。(3)良き交通社会人育成の条件作り。個人の特色を知り個別的に働きかけ、ればそれで十分というわけにはいかない。家庭、学校、学級の行動・価値規範、学校内友人、学校外友人とのグアイナミックス、地域社会との関連に目がひけられこれら条件の整備が求められる。

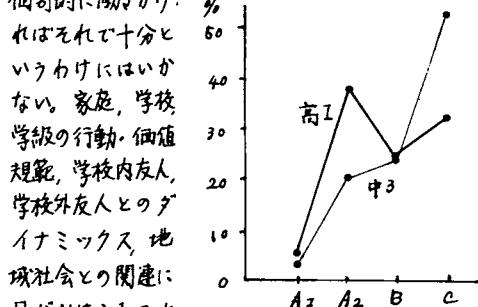


図2 中学3年と高1年の判別構成比

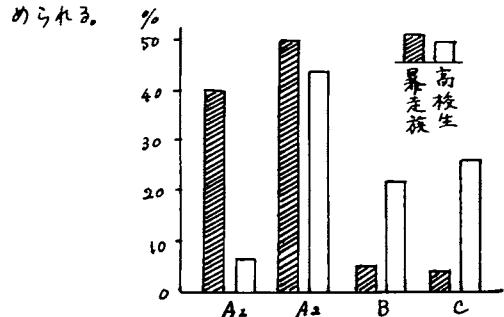


図1 暴走族と高校生の判別構成比

二輪車 安全対策への提言

長山泰久 田中敬信 三浦利章 渡辺準
(大阪大学 人間科学部) (川崎重工)

はじめに 二輪自動車は運動・通学をはじめ賃物など日常生活の足として気軽に利用される交通工具であり、若者だけではなく意外と中高年齢層にも活用され、最近では特に女性によく自転車に替わるものとして多く利用され始めている。我々は二輪車走行実験・事故統計・車両事例・視覚特性といった側面から研究を行ってきた。今回はこれらの結果に基づき二輪車の安全に関するいくつかの問題点を指摘し、二輪車安全対策について考察する。

1. 左側端走行 二輪車の大部分は道路外側端を走行しており、四輪車と並進する場合には転倒の危険が大きく左端部に押しやられる形態が多い。道路のこの部分は小石、道路の凹凸、水溜り、駐車車輛など障害物が多く、前方特に道路ヒーへの注視が必要となる。速度との関係で常に追越される二輪車にとって障害物回避のための進路変更は四輪車との接触の危険が多く後方への注意分配のはずが大きいなり、前方注視の必要性と結ぶした形態になる。

道路端での無用の駐車は自分の行為が他人に影響あることを配慮して自慢すべき車両であり、二輪車安全のためにも強く取締らなければならぬ。またゴミを出さないマナーの確立と共に、アスファルトの舗装や排水の悪さの改善、改修並みの頻度で消音し左側端を使用する二輪車・自転車などの安全と安心が確保されることが大切である。

2. 右折事故 四輪車特に普通乗用車と比較して二輪車は右折時側面衝突事故が最も多い。特に二輪車直進中で相手車両右折中下發生するケースが右折事故の

表1. 直進二輪車と右折普通乗用車の事故における運転者の原因

二輪車(直進中)		普通乗用車(右折中)	
原因	実数 %	原因	実数 %
危険でない	13 29.5	脇見	15 34.1
速度不適	11 25.0	危険でない	11 25.0
急いでいた	9 20.5	他車で視界不良	8 18.2
止まってくれる	9 20.5	いそいでいた	4 9.1
ゆずってくれる	7 15.9		

計上してあれば第3原因までを合計してあるので100%を越える
(事故件数 44件)
(昭和50年上半期 大阪府下)

70%と多く、車両的原因为として事故記録に計上されるものと、普通乗用車右折中、二輪車直進中に発生した事故について分析した結果を例として示すと表1のようになる。四輪車側の原因からも明らかのように、二輪車との関係で事故を起した車は、他車の視界不良であつたかもしれないが、その車を別に危険を感じてからだ。そのため脇見が多くなっていると考えることができ、二輪車の存在そのもの、二輪車の動きそのものに危険と感じているが、これが事故の最も大きな原因になってしまふ。普通乗用車を相手とした場合には、そのぶんは感じ方が少し程度はあるこしから考えると車の持つ、且つ、脅威感やこれの不足がある意味では事故の発生にかかわりを持ったことが理解できる。これに対して二輪車側は相手が止まってくれる、ゆづるだろう、危険ではないと判断しスピードを出している。スピードの原因は自動二輪に限らず、その裏には相手への期待が強く働いている。また二輪車が右折中に事故に巻きこむ人は小排気量の原付自転車に多く、直進の左側端走行が影響していると思われる。

二輪車の視認性を高めるこことで目的に外因では周囲にもヘッドライト点灯を義務づけているところがあるが、アメリカの州で法実施前後の事故比較、法未実施州との車両比較を行い、実質34%の二輪車事故率の減少をみてこしが報告されており、谷島(1978)らの研究でもヘッドライト点灯が視認性を高めることが明らかにされている。車体が小さいことによって見落とされやすい二輪車の安全のため、このような周囲ヘッドライト点灯法が我が国でも検討されてよいのではないか。さらに二輪車の誘導性を高めること、ヘルメット、着衣の色彩工夫することが大切である。同時に二輪運転者は自分が見落されやすい危険性を充分知り、よく必要がある。

3. スピード判断 事故事例研究から山崎運転者は二輪車の存在に気がいゝも、そのスピードと日目による傾向があることが指摘されたが、その背景には、対向車の速度判断の困難さと同時に無意識に二輪車に譲らせる傾向がある。スピード判断に充分な注視をしないことが考えられる。

4. 視覚特性 二輪車走行時には四輪車走行時に比べて(前景複雑の開け方)より近く、低く、狭い。遠方に目が届くよりも距離を増すことが多いので前方の必要情報が見落とされる危険性が高い。この点は自分で知り、情報を取捨選択する以外に方法がない。二輪車問題もシステムとして解決すべきで、法改正・行政基準・規制強化・道路使用者の知識の指導や行動の改善など、非常に重要な意味をもつている。

航空事故事例による緊急場面の行動特性について(1)

垣本 由紀子
(航空医学実験隊)

目的: 航空事故発生による緊急事態に遭遇した場合の行動を、同種事象の中で生存できた場合とできない場合とに分け両者と特徴づける特性について検討する。

方法: 全事例の中から、エンジン故障がきっかけとして発生した事例のみを拾い、そのうち、全事例の中でエンジン故障は約15%、その中で生存と死亡の比は8:2である。本事象をとりあげた理由は、自動車の場合と同様、推力が得られないれば飛行を中止しなくてはならない事、操縦士がもともと緊張する場面があり、予告なしに発生し、その結果は、異機故障によることがほとんどで、その処置の方針により生存と生存不能に分かれることなどから対象として選択した。

事例の分析に際しての情報源は、航空事故調査委員会によつて作成された航空事故報告書である。これは、総括、操縦、整備、医官報告と分かれ、事故者の供述書も含まれている。行動分析にあたつては、こゝらの記述書から情報を得るわけであるが、必要情報が少なければしくじりが、特に死亡の場合には指揮の域を出ない。次に、行動を分類するにあたつては、どのようなかたちでコード表を作成するか問題となる。分類にあたつての基本的考え方は、人間をひとつのグラフボックスとみなす情報伝達過程を想定し、との上階層で過程が介入する。上位階層では視点を置いた。しかし、情緒、経験、注意など量的の項目は、この流れから逸脱するので、心理的原因として項目化した。コードへの分類は、乗務者が、記述エント内容から分類した。(表1)

結果: 事例数が少ないことなどの理由で、本報では、定性的な分析に終つた。

生存可能となりた理由は、必要な操作の実施、早期発見、僚機のアドバイス、地理的好条件、脱出成功が挙げられる。一方生存不能となる場合は、必要な操作の実施されない。

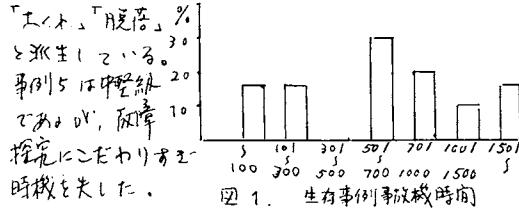
表2 生存不能事例(エンジン故障による)(最近10年から)

事例	総飛行時間	事故機時間	事故リポート	脱出動作の時間	発生時期	心理的原因	
						心	理
1	5188	264"	X	X	10'	飛行中	心地よいとらわれ(過信)、心要手順のおくわ、一部脱落
2	679	322	O	X	41"	離陸上昇中	無意識な動作、脱出のおくわ
3	4573	3792	X	X	2'21"	離陸上昇中	自信によるこだわり、無理な姿勢、外乱への注意の集中
4	152	34	O	O	1'	着陸中	心要手順の脱落(注意の集中),恐怖、過緊張、不履行
5	780	397	O	X	4'	離陸上昇中	心要手順のみくわ(故障深究によるこだわり),月光のおくわ
6	519	206	X	X	55"	離陸上昇中	心要情報受けとず(過緊張),脱出時期のみくわ

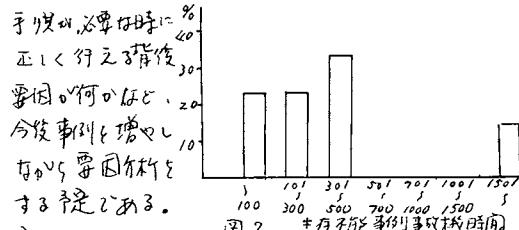
表1. 行動分類項目表

1. 発生日時・機種	8. 故障発見経路(入力段階)
2. 年齢・性別	9. 判斷段階
3. 総飛行時間	10. 操作・行動(出力段階)
4. 発生場所	11. トラブル発生から事故までの時間
5. 発生時期	12. 生存可能となった理由
6. 事故形態	13. 生存不能となった理由
7. 編隊・単機の別	14.(8,9,10)の心理的要因
	15. 気象

施のあくわ、手順の脱出、月光の時期のおくわの方面でみられた。また2つ目は、脱出1回り、おくわた要因と検討すると、図1、図2に見るように、事故飛行時間が500時間に集中して3つの顕著である。一方事故飛行時間がまわめて多くても事故となり、経験の少ない乗組員ばかりではない。図2にみると、経験が多い事例1、3では、経験からくる自信感、おこる心理的こだわりとなり、必要情報の入手を拒む。以後、



まとめ: 正しい



まとめ: 正しく行えず原因

要因の何れかなど、今後事例を増やし、それから要因分析をする予定である。

環境音楽の心理的影響について

その1 わざらわしさの緩解について

豊原恒男、増田直衛 志津野知夫

(国際商科大学教養学部) (情報室マーケティング室)

○ 泉山中三

(東海大学文学部)

[目的] 音楽にかかる媒体の発達普及によって、環境音楽(BGM)をうけいれる社会的状況もかかってきた。音楽の日常化という趨勢のなかで、環境音楽はより明確な効果の根柢と利用の統制的方法が求められている。

これまで音楽の効果研究は、ひとつの生理・心理的側面から行動的側面までひろく行なわれ、観察の方法も示標も多様であった。これらに対しては統合的影響の概念が確立することが望まれる。さらにそこに働く音楽要因や音楽条件が吟味されて、効果的な環境技術にたがめられることも必要である。

曾根ら(1963年、日本音響学会)は騒音条件下における音楽聴取について、心理的マスキングが効くことを実験的に明らかにした。適当な音響・音楽刺激が環境空間における「うるささ」や「わざらわしさ」の意識を低減する現象を心理的マスキングとするならば、これは聴覚以外の領域にも起りうると考えられる。

本研究では、視覚領域におけるノイズ刺激に対する「わざらわしさ」について、音響・音楽による環境構成がどのような影響を及ぼすかを検討する。さらにその要因を解析することを目的である。

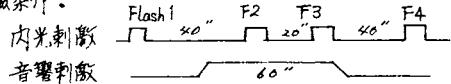
[研究方法] 開放的な内光刺激をうける被験者に、環境音として数種の帶域音や音楽を聴取させ、光の「わざらわしさ」の評定における効果を観察するとともに、影響の示標と日々の情動反応についても測定を通して吟味する。

実験は2期にわたって行われた。第1実験は主として「わざらわしさ」評定の有効性と反応示標の検討のために実施され、第2実験は前実験で効果とされた条件を中心構成され、その要因に関するMDTS及び因子分析が解析のために適用された。

[実験手続] 刺激の種類及び実験条件はつきのように設定された。内光刺激は音響提示の前後各1回、提示中2回、眼前1mの距離で10Hz、1~2秒照射された。

音響は7種の帶域音、音楽部分、地であり、60秒約65dBの大きさで再生された。

実験条件:



GSR(刺1・刺2)

EKG(刺1)

瞳孔反射(刺2)

言語反応(刺1・2)

評定(刺1)

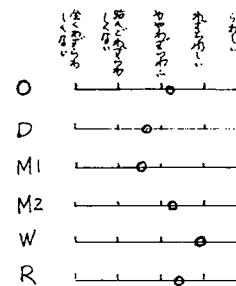
ランダム(刺2)

音響・音楽刺激: ○印は第1実験における示出、△印は第2実験。

- ① 音楽I ハーモニカ大編成の楽曲、刺激度低い(M1)
2. 音楽II 中間的楽曲 (M2)
- ③ 音楽III リズミックな小編成の楽曲、刺激度高い (M3)
- ④ デザイン・サウンドI 常成的、ハモリ性性格 (D1)
5. デザイン・サウンドII 旋律的、リズミック性格 (D2)
- ⑥ 带域ノイズ ○ホワイト・ノイズ(W) (N)
7. 効果音響 潮騒の録音構成 (E)

被験者: 大学生男子16名、女子16名

[第1実験の結果]



(1) 環境音によるわざらわしさの低減が、2種の音響・音楽について認められた。(D,W)

(2) 内光や音響刺激: 対応する情動反応としては、GSRの4つに特徴的な測定結果がえられた。

(3) わざらわしさについての言語反応と、GSR反応とは一致していない。

反応	O	D	M1	M2	W	R
言語	1.94	2.19	2.25	1.63	1.09	1.50
GSR	F2 F3	1.5 1.3	1.8 1.2	1.5 1.2	1.2 1.1	1.2 0.9

(4) 評定: あきらかに性差は殆んどあらわせなかつた。

(5) 実験施行した音楽調査(嗜好・経験)においては、男女差が大きかつた。

[考察] ある条件のもとでは環境音による心理的マスキングが認められる。この場合に音サンプルのちがいであつたので、さらに音響や音楽の構造や条件との対応を研究するにむづかしい。

情動反応との関係も吟味しなければならない。

環境音楽の心理的影響

—その2— “わざわらしさ”の緩解について
豊原恒男・増田直衛(国際専門大学、教養学部)
泉山中三(東海大文学部) ○志津野知文(博報堂、マーケティング)不明であるが、利害特性にそりまた嗜好が対応していると云う、ごく常識的な傾向を得た。しかし、性別年令別は処理すると高校生では、潮騒とDS₁がやや逆の傾向を示した。

1. 目的

その1で述べられていくように、閃光提示時における“煩わしさ”が、同時に聴取している音刺激によって、どのように左右されるかを見る。緩解という言葉を用いていくが、“煩わしさ”が、音によって軽減されるといつても、実験の結果から、用いていくのであって、さほど敵意は定義を与えてくるわけではない。この、者の影響を見るために、音刺激とのものに対する反応特性の把握、と、閃光による“煩わしさ”反応と音刺激との関係、と、音刺激とのものに対する反応値と、これが“煩わしさ”との関係検出の三段階の分析手順を経る。

2. 音刺激の反応特性

別紙1 音刺激に対する反応値 A測定値に見られるように、GSRでは MS₂ PN MS₁ が高く、 DS₁ DS₂ が低い値を示している。散瞳反射では、ほとんど差がないか、潮騒が最も低い値を示している。縮瞳反射では MS₁ MS₂ が高く、 DS₁ が低い。嗜好のランクは MS₁ MS₂ MS₃ が低く(嗜好度は高く) PN が高い(標準化されている)。これらを通して、云えることは、1. MS₁ が全体を通じて高い値を示していく(嗜好に関しては以下嗜好度で見る)。

2. MS₁~3 の伝統的楽曲については概して、自律系反射も大きく、嗜好度も高い。3. DS₁ DS₂ のサウンドについては、自律系反射も低く、嗜好度も低い。
4. 潮騒については意外であったが、GSRも DS₁ DS₂ よりも高く、また嗜好度もそれより上である。別紙には示されていないが、性差、年令差が見られた。
5. 男性で好まれるのは、スローな静かな曲 MS₁ であるが、女性では、リズミカルな MS₃ であった。この点は意外である。6. しかし、嗜好度に関しては 18 歳以下とそれ以上では、全く差がない。それが MS₁ を好み PN を嫌っている。7. GSRに関しては、男性で MS₂ が高く、女性では MS₃ が高かった。8. また高校生で MS₃ の GSR が高く、大学生では、 MS₂ が最も高い値を示している。

別紙1-B に嗜好データを多次元尺度分析した結果が示されている。なお、この際 PN は 11 つに分かれ

ても最低の値を示しているので、除外している。ストレス、0.44% で三次元構造を示しているが、 MS₁ へ 3 は一つのグループ、潮騒が一つ、 DS₁ DS₂ が一つのグループを示している。自由の意味するところは、不明であるが、利害特性にそりまた嗜好が対応していると云う、ごく常識的な傾向を得た。しかし、性別年令別は処理すると高校生では、潮騒と DS₁ がやや逆の傾向を示した。

3. “煩わしさ”と音刺激

別紙2 “煩わしさ”の分析は “煩わしさ” にほぼす。利害、性、年令要因の効果検出である。性、性×年令、に差が見られるが、煩わしさの評価のレベル差といつても介入要因であるため、ここでは検討しない。目的はむしろ利害差検出にあつたが、利害、および利害×性、利害×年令は、いずれも有意差を示している。1. MS₂、潮騒に “煩わしさ” がより低く、PN に高く出ている。2. 男性においては、 MS₂ MS₃ が低いが、女性では、潮騒が低い出ている。3. 高校生では、 MS₃ が低く、大学生では MS₂ が低い。4. 潮騒の 煩わしさ評価の低い点、特に女性にその傾向が強く出ているのは、注目される。

4. “煩わしさ” “イライラする” “うるさい” “イヤイヤする” “クラクラする” の分析

“煩わしさ”のみでなく、他の評価も同時に合わせ、相互の関係から “煩わしさ” の特性を見るために、因子分析を行った。別紙3 は、利害別の因子得点を男女別に示したものである。女性に対して男性の震動が大きい。

5. 反応特性上 “煩わしさ”

四種の反応特性値と “煩わしさ” との関係、性、年令別をまとめた。結果 GSR の相関との関係、嗜好度との関係が、有意を示している。別紙4 のように、好みいものの場合は “煩わしさ” が低いといつても傾向がうかがえむ。

(まとめ)

(1) 内的メカニズムは不明であるが、両実験を通じて、閃光によつてもたらされた “煩わしさ” は音刺激によって変動する。(2) それは適度のリズム感のある楽曲、 MS₂、潮騒によって値が低くなる。(3) またそれは、好みによって左右される。(4) これは好みい影響をもたらさない。(5) 潮騒は反応値、煩わしさ影響とも特有な傾向を示す。(6) 性、年令効果大。

産業組織における監督行動についての
「自己評定」と「部下評定」に関する研究
—PM式リーダーシップ理論とTA(支流
分析)理論の各機能ごとの比較考察—
佐藤 隆 (日本鋼管病院精神衛生室)

I) 研究目的: 産業組織におけるリーダーのPM理論とTA理論のP, M, FP, MP, A, FC, AC (注1) 機能についての「自己評定」と「部下評定」の比較考察を行いつつ、リーダーシップ機能についての認知的不一致度を考察する。

II) 調査計画: 1) N社MI場の同一職場で作業するオフィス監督者35名を対象にし、それらの部下である計173名から上司についての評定を測定した。1名の監督者あたりの直属の部下数は2~8名にあたり、その平均は約5名である。2) 部活実施日及び場所、昭和51年10月と52年10月の2回、N社MI場。3) 調査方法: 質問紙法による調査票(1) (b) (c)を作成し、無記名にて(1)セミアンケート方式(45分)により、その場にて回収(回収率100%)した。(2) PM式リーダーシップ調査票 附次三脚ニスニ氏のPMリーダーシップ調査(著、新レーリーリーダーシップP180~190頁)項目(20項目)をMI場に適合するように1)部活の修正し使用させていた。(3) および測定は5段階評定法を行った。(4) エゴグラム、Dusay, J. のエゴグラムは米国においても種々翻案されているが、ここでは元東大保健医学科の細木氏により東大分院心臓内科で使用しているエゴグラムを採用し、筆者が産業現場に適応できるように改変したものを使用した。(5) 測定は7段階評定法を行った。(6) 「自己評定」とは(1) (b) (c)の調査票にリーダー自身の自己に対する評定を記入させた。(7) 「部下評定」とは(1) (b) (c)の調査票にそれをねのリーダーの部下から見た、取引上のリーダーであるオフィス監督者行動についての評定を記入させた。(8) 認知的不一致度とは、リーダーによる「自己評定得点」よりとのゲループの平均得点である「部下評定得点」をひいた得点である。プラスの方向にこの得点が大きければ、監督者の「自己評定」が大であり、部下との間の認知的不一致度が高い。「ゼロ」得点に近づくほど両者の間の認知的不一致度は低いと考えられる。

III) 結果: 各機能ごとの比較考察結果は表1に示す如くである。各機能における認知的不一致度(表1)

P-M類型	效能	P	M	FP	MP	A	FC	AC
PM型リーダーシップ	1.6	1.8	3.6	2.4	2.8	1.6	1.6	
P型リーダーシップ	1.4	4.4	4.6	9.2	2.3	1.4	4.4	
M型リーダーシップ	4.2	3.8	5.5	4.6	1.6	4.0	3.8	
PM型リーダーシップ	2.6	1.6	5.2	5.6	5.6	2.6	1.7	

(注1) P=Performance效能 FP=Father parent效能
M=Maintenance效能 MP=Mother Parent效能
A=Adult效能 FC=Free child效能 AC=Adapted child效能

① P效能におけるP-M類型ごとの認知的不一致度の最も高いものはM型であり以下PM型、PM型と低くなり、その中で最も低いものはP型であった。

② M效能におけるP-M類型ごとの認知的不一致度の最も高いものはP型であり以下M型、PM型と低くなり、その中で最も低いものはPM型であった。

③ FP效能においてはM型が最も高く以下PM型、P型、PM型の順位低くなる傾向が見られた。

④ MP效能においてはP型が最も高く以下PM型、M型、PM型の順位低くなる傾向が見られた。

⑤ A效能においてはPM型が最も高く以下P型、M型となり、PM型はマイナス得点を示した。

⑥ FC效能においてはM型が最も高く以下PM型、P型であり、PM型がマイナス得点を示した。

⑦ AC效能においてはP型が最も高く以下M型、PM型、PM型の順位低くなる傾向が見られた。

⑧ P-A-Cまで全項目合計値の認知的不一致度のP-M類型ごとの比較考察ではPM型が最も高く、P型、M型、PM型の順位低くなる傾向が見られた。

⑨ モラール得点におけるP-M類型ごとの認知的不一致度は明らかに相違が見い出された。

IV) 考察 PとM效能についてでは従来からの研究報告と同一傾向が見られた。FP、MPはPとMと同様の傾向を示した。リーダーシップに重み付アラスの因子負荷量をもつA效能(オ44回心学会発表)は、すぐれたリーダーシップを発揮しているPM型リーダーのはほとんど認知的不一致度がマイナス得点であった。逆に、マイナスの因子負荷量をもつFC效能については、もともと非効果的リーダーシップであるPM型リーダーほどマイナスの認知的不一致度であった。同一対象者について1年後にも同一調査を実施したが、結果はほぼ同一傾向が見られた。V) 今後の課題: リーダー態度や行動に関する変数とより客観的指標(生産性、災害件数)等との相関関係を調査検討したい。

自動車販売成績における因果帰属のずれが対人感情に及ぼす効果

日本生産性本部

早稲田大学

○今井保次

内藤哲雄

目的

一般の人事考課では、通常の昇給、賞与の査定は歩合制でもないかぎり、因果帰属でいう努力の側面を評価しているものといってよいだろう。それに昇進の考課は能力の側面を、また配置は能力と難易度の側面によって決められていると考えてもよいだろう。

そこで本研究は、因果帰属理論を人事考課に応用するひとつの足掛りとして、因果帰属の違いが対人感情にどのような影響を持つかを探るものである。

方法

〈材料〉 業務実績として判りやすい自動車販売数を、ある営業所の A 氏、B 氏、C 氏の 1 月から 12 月までの各月ごとの成績をグラフに描いたものを用いた。

A 氏のグラフは、その営業所の平均から 1 台ぐらいいしか離れない平均的な成績を示している。

B 氏のグラフは、1・2・3 月は 1 台も売れず 4 月からじょじょに上昇して、10・11・12 月は平均を越える。

C 氏のグラフは、最初平均を上わまわり、中ばでは平均を下まわり、ふたたび平均を越えるというもの。

以上の自動車販売成績 A・B・C を因果帰属させる 6 段階の尺度（非常に関係ない、かなり、やや、やや、かなり、非常に関係ある）を 4 項目用意した。

○セールスの難易度によるもの（セールスが易しいあるいは難しい）。○運によるもの（運が良かった、あるいは悪かった）。○本人の能力によるもの（能力がある、あるいはない）。○本人の努力によるもの（努力した、あるいはしなかった）

次に自動車販売成績を因果帰属させた人の評価能力の判断ならびに好悪感情の評定を求める 7 段階の尺度を次のように用意した。

（評価能力の判断）①判断が適確である。②理解力がすぐれている。

③人を見る目がある。④偏見のない判断をしている。（好悪感情の評定）

①好きになれるですか。②共に仕事をしてみたいと思いませんか。

表 1 因果帰属のずれが他者の評価能力の判断に及ぼす効果の平均値

ずれ	(0)	(1)	(3)
平均	21.41	18.89	12.6

表 2 因果帰属のずれが他者への好悪感情生起に及ぼす効果の平均値

ずれ	(0)	(1)	(3)
平均	11.52	9.13	7.43

表 3 因果帰属のずれが他者の評価能力の判断に及ぼす効果の分散分析 *** P < 0.001

	SS	df	MS	F
Discrepancy	2216.309	2	1108.154	41.47***
Subjects	1650.846	53	31.148	1.17
Error	2832.358	106	26.720	

表 4 因果帰属のずれが他者への好悪感情生起に及ぼす効果の分散分析 *** P < 0.001

	SS	df	MS	F
Discrepancy	456.457	2	228.228	20.97***
Subjects	599.235	53	11.306	1.04
Error	1153.543	106	10.882	

＜被験者＞ 相互に面識のない産業人男性 54 名。

＜手 続＞ 実験は集団事態で実施された。まず、A B C 各氏の自動車販売成績のグラフを被験者に配布し、それぞれの成績に対して前記 4 項目の尺度上に評価を求めた。次いで、質問紙は回収され、各被験者の評価値をもとに各尺度上を反対方向に 0 または 1 または 3 つずらした偽の質問紙が用意された。翌日、質問紙の名前の部分を切り取って誰の記入したものであるか判別できないようにした偽の質問紙が渡され、他者の 4 項目上の因果帰属の評価をもとに、その人の評価能力の判断と好悪感情の生起を前記の尺度上に求めた。なお被験者は、この場にいる誰かの質問紙であると教示されて評定が求められた。

結果と考察

因果帰属のずれが他者の評価能力の判断に及ぼす効果の平均値は表 1 のごとく、ずれが大きくなればなるほど他の評価能力は劣ったものであると判断しており、この傾向は表 3 の分散分析の結果が有意なことから統計的にも支持される。

また好悪感情の生起についても、因果帰属のずれが大きくなればなるほど悪感情になることは表 2・4 から明らかである。

以上の結果は A B C 各氏が仮想人物であり、他の評価者が匿名であるにしても、自動車販売成績における因果帰属のずれが評価者間の能力評価や好悪感情の生起に著しい影響力をを持つことを示している。このことは人事考課に際して客観的基準の明確化と考課者訓練の重要性を物語るものである。

目的のところにも記したように人事考課は一種の因果帰属の過程とも考えられる。そこで考課の妥当性を高めて対人感情に悪影響を及ぼさないために因果帰属理論の応用が期待される。

共感性テスト作成の試み（1）

——既存テスト間の関係の吟味——

角山 剛

（立教大学社会学部）

はじめに

共感性（Empathy）に関しては、従来、研究者によって概念および研究方法にかなりの差異がみられるが（表1），最近は、リーダーシップの問題や、対人接觸の機会の多い職種での従業員の育成の問題などがクローズアップされてくるにつれて、その研究の重要性が再び認識され、測定のための質問紙開発への要請も高まっている。

今回の報告は、共感性測定のための質問紙を試作するにあたって、その基礎的作業のひとつとして、既存テスト間の関係を吟味したものである。

手続き

対象：大学生97名

日時：1978年6月

方法：集合調査法

測度：Hogan, Mehrabian, D P I, Block（表2）

結果と考察

各測度間の相関は総じて低い値を示しており、同じ empathy という語を用いながら、測定しているものの内容に共通性の乏しい傾向がうかがわれる。中でも、Mehrabianの測度と他の測度との相関が、他と比較し

表1 Empathy の定義

研究者	年代	定義
Warren, G.	1934	自分自身を他人または他のグループの精神状態へ同一化あるいは感じいれるような精神状態。
Dymond, R. F.	1949	他人の思考、感情、行動へ自分自身を想像的に置き換えることであり、そしてその相手と同じ世界を構成すること。
Cawdon, R. C.	1955	ある状態で他人が何をしようとしているかを予測するための、その相手との一時的な同一化。
English and English	1958	他人の心の状態を同情を用いて理解することであり、その態度は受容と理解の態度である。
Kerr, W.	1960	他人の位置に自分を置き、その人と心理的に結びつきをつくりその人の反応、感情、行動を予測する能力。
Berger, S. M.	1962	ある人の情動反応が他の人に同一の情動反応をひきおこすこと。
Buchheimer, A.	1963	複数の次元からなる過程。予測的な特質をもち、部分的には感情的であるが抽象と抽象化的過程。
Stotland, E.	1969	他の人がある情動状態を経験しているかまたは経験しようとしているという認知によって、観察者に生じる情動的な反応。

て相対的に低い値を示しているが、これは、他の測度が基本的には empathy を、他者の感情や心理状態を予測する能力としてとらえているのにに対して、Mehrabianの測度が、それに加えて情動的なレベルで他者の感情を共有できる傾向までを含めて empathy をとらえている点に起因するものと解釈することが可能である。

共感性研究は、これまでのところ、その概念のもつ多様なニュアンスのゆえに研究にも困難をきたしている傾向がみられるが、それにもかかわらず、いわゆる人間関係を重視するあらゆる職種や職場において、他人とのかかわりに関する能力としての共感性の重要性が認められてきている。こうした事実をふまえ、今後は、開発し育成しうる可能性をもった能力特性としてとらえた共感性研究が必須であり、その際に道具立てをあたえる質問紙の開発が現代的課題であることはいうまでもない。

表2 測度の概要と摘要

測度	摘要
Hogan, R. [1968]が、広汎な moral perspective をとりいれる能力としての観点から作成した、CPI, MMPI の項目より成る共感的傾向の測度	CPI 31項目より30項目、MMPI 25項目より24項目を使用
Mehrabian, A. [1972]が、パーソナリティ属性としての情動的共感傾向を測定するために開発した測度	筆者らが翻案した、全30項目より28項目使用
豊原・本明 [1975]らによって開発されたDPIのうち、対人の態度能力の観点から作成された共感性の測度	共感性測定用の12項目使用
Block, J. [1961]が列挙した、共感性の高い人に最も特徴的な、および最も特徴的でない記述 各5つ	Block が列挙した10の記述より筆者らが30項目を作成使用

表3 テスト間の相関

	MMPI	Mehrabian	DPI	Block
CPI	.32	.20	.45	.29
MMPI		.26	.39	.46
Mehrabian			.15	.33
DPI				.55
Block				

生活意識に関する調査研究

坂田一 (立教大学)

[目的]不況の経済情勢の下で、国民は意外にオアティミスティックであることを国民生活白書などから見ていく。このような状況の中で、国民が現在の暮らしと、将来の暮らしの見通しに対してもどのような受け止め方をしているかについて、それを性別、成人と学生、ライフステージ、職業などから概観しようというのが本調査の目的である。

[調査方法]対象は成人男女、学生計1,919名。時期は1977年1月と12月。アンケート法。段階的評定尺度によるM-SDの評定の分析、加重得点による比較によって解明を試みた。

〔まとめ〕1. 全体として、現在の暮らしは満足であるという(積極的評定)のが、生活がきついといふ(消極的評定)よりもかなり多いし、また将来の暮らしの見通しについても明るいとする方が暗いとするものよりも多い。しかし将来の見通しの方が、現在の暮らしにに対する受け止め方よりも積極的評定が相対的に少なくなっている。

2. 成人の男子と女子では、男子が女子にくらべて、現在の暮らしの満足度および将来の暮らしの見通しの明さにありて少し高くなっている。従ってこの調査に関する限り、女子が一般にオアティミスティックであるといふ前調査の結果は疑わしいことになる。

3. ライフステージでみると、成人男子における現在の暮らしの満足度は、10歳代が高く、20,30歳代が下って、60歳代が上って、強いていえば中下位の順と見上りのお椀型とでもいえよう。成人文女子も大体同様な傾向がみられる。

4. 成人男子を職業別にみると、特徴的な点では、公務員および教師をあわせて、それ以外の職業を一括したものと比較すると、前者は後者にくらべて、現在の暮らしの満足度がずぶる高く、また将来の暮らしの見通しでもはあるかに明るいものとみなしていい。

5. 成人文女子では、生協肉係の女子と、他の女子成人を比較すると、現在の暮らしについてでは前者が明らかに生活のきびしさを感じている。一方、将来の暮らしの見通しについてはあまり差がない。

6. 生協肉係の女子を有職者と無職者に分けて比較すると、現在の暮らしの満足度では後者が高い。しかし将来の暮らしの見通しについては両者の間にほとんど

差はない。

7. 男子学生について学年別にみると、現在の暮らしの満足度と将来の暮らしの明るさとともに、医、商経、理工の順となつていて、二年の学生はその苦しさを端的に表明し、展望も暗いものとしているが、動物学生からはことから當然うなづけることである。

8. 男女学生の比較では、現在の暮らしの満足度は男子学生がやや高く、将来の暮らしの見通しもかなり暗いものとしている(ノバーエントレベルで有意差あり)。しかし女子学生の数が非常に少ないので、中でも医学部の女子学生がかなり多いと、「特殊事情を勘案すると、結果を意味づけることにはありかかるように思う」。

9. 成人男子、成人女子、一部学生、二部学生の各々についての比較では、現在の暮らしの満足度、将来の暮らしの見通し共に、一部学生が最も高く明るく、次いで成人男子、そして成人女子の順で、二部の学生が最もきびしく受け止め、またかなり暗い展望をもつている。

10. 全般的にみて、加重得点の整理でも明らかになった、「どちらともいえない」が非常に多い。殊に暮らしについての将来の見通しでは断然多い。このことにつけては、現在の複雑な情勢の下では、専門家よりも将来の予測はさう簡単にできるものではないのだ、当然の結論ともいよう。

[考察]国民の90%以上が、生活水準に対する満足度に満足しているといふ、この国民経済の意識は素直に受けとめられるものであろうか。これを所得からみたり、国の経済的分析からすると、安定した生活が保障されているといふことなどどうか問題ではないのであるが、しかし諸種の報告や本調査の結果でみられるように満足度が高く現われたり、また将来の見通しから予想外に明るいという事実は、いかなる原因、誘因に基づくものか。意識を規定する要因は複数である。Vroom, V.H.はHebb, D.O.とMcClelland, D.C.によって、刺激の満足・不満足の特性は、刺激と適応レベルの間のくいちがいのサイズに依存するといふ。しかし快・不快の度合の説明は方法がないといふ。Lawler, E.E.はSimon, H.A.を引いて、最適化ではなく、満足化を指向し、最適化された認知に基づいて、合理性の限界と折衷をつくるものであるといふ。またMaslow, A.M.は彼の階層の立場からの相対的的角張り、慢性和過去における満足感、そして幼少からの生育にかかる基礎的な指摘を記述している。

左あこの種の満足・不満足、明暗の問題を取扱うにあたり、これら事象の内容に立ち入るべきであった。

サイコグラフィックアナリシスによる
ライフスタイルと購買行動の関係について
○高久信一 田之内厚三 喬部知夫
(日大農芸医学部) (麻布駒込大学) (日大商学部)

目的：AIOアイテムのうちのgeneral lifestyleに関する項目をQ法によって5つのグループにセグメントしたデーター (Needham, Harper & Steers 広告代理店, 1975) を用い、これら5つのライフスタイルをもつ人はどういった購買・消費行動を採用するかを検討する。

方法と手続：第43回応心大会で発表したように、一般的な購買・消費行動に関するステイトメントの反応を数量化Ⅲ類によってパターン分類すると、第I軸は購入・消費への積極性を区分する軸で、第II軸は情報や他者への関心度の高さを示す軸として解釈された。ここでは、便宜的に、第I軸を「購買への積極性」、第II軸を「情報・他者志向性」と名付けておく。

そこで、第I軸、第II軸の+、-の象限にそれぞれ $|0.015|$ 以上のカテゴリー・スコアをもつ項目をひろうと、計24の項目を抽出することができた。いかえれば、これらの項目は、購買に対して消極的か積極的かということを如実に示唆している項目といえる。また、たとえば、第II軸の+の象限に高いスコアをもって位置づけられている項目は、情報や他者への志向性が非常に強い項目であるといえる。

一般に、どういった人はどういった買いかをするかということを考える場合、多くはイメージとしてとらえられることが多い。したがって、本調査の目的には言語的項目よりも、イメージとしてあるものを渾然と漫画化したものの方がより有効であると思われる。そこで、上記24の項目を漫画化し、これを代表的な5つのライフスタイルに該当させてみた。

なお、この24枚の絵が何を表現しているのかということをフィードバックさせてみたところ、大部分の絵はほとんどの言語的項目とほぼ一致していた。たとえば図形No.23は、言語的項目「私はお金には案外と無頓着な方である」と対応しているが、フィードバックさせた結果は、好きな物をどんどん買っている等62.1%、私はお金持ち15.1%、その他となっている。

調査期間：553年7月3日～553年8月3日

調査対象：東京近郊にすむ主婦（中心は35～45才）

調査数：配布280部、有効回収数188部（68%）

結果：各図形がそれぞれ5つのライフスタイル（L.S.）のどれに分類されたかを整理し、その度数をZ検定し

た。この結果、各図形はそれぞれ5つのL.S.のいずれかに有意に位置づけられた。表1は各L.S.に分類された図形番号とそれらが前回調査結果でえられた第I・II軸のどれに高いカテゴリー・スコアをもつかという二項式を示したものである。

表1. 各ライフスタイルに分類された図形番号

L.S.	I	II	III
图形No.	8 10 18 19 20 3 9 12 17 22 6 21		
軸	I-I-I-II-II+II-II+II-II+II+II+		
L.S.	IV	V	
图形No.	2 4 11 15 1 5 7 13 14 16 23 24		
軸	I+I-I-I+II+II+I+I+I+II-II+II+		

考察：L.S.Iには、たとえば番号8（買い物の時、どれを買うかでよく迷います）、10（ウィンドショッピングはありません）、18（買う必要のない品物には関心がない）のような図形が分類され、もともとこれらはI軸の一象限かII軸の一象限に対し高い負荷量をもった項目である。このことから、L.S.Iは、その購買行動の面において、かなり慎重でまた、その際いろいろな情報や他人の言動にとらわれることのない側面をもっているといえよう。

L.S.IIにおける各図形は表1の結果から、II軸の+と-の象限に高い負荷量をもつ項目である。つまり、情報・他者志向性に対し両極の面を兼ね備えているがここにI軸が関与していないことから、これらが直接購買行動に影響を与えていとはいえないであろう。

L.S.IIIはII軸の+象限でもって解釈できる。つまり、このスタイルの人は、情報などに非常に強い関心をもっているといえるが、ただ分類された図形がわずかふたつなので、これだけでは断定することができない。

L.S.IVはI軸の+と-の象限に関係している。つまり、この人は先のL.S.IIと同様に、購買への積極性といったものに対し同じようなパターンを示しているものと思われる。

L.S.VはI軸の+象限とII軸の+象限に関係している。明らかにこのスタイルの人は情報や他者への関心度が高く、かつ積極的な購買行動を採用しているものと考えられる。

更にこれらの結果を各L.S.の記述と対応させてみても両者にはほぼ矛盾のないことがわかると思う。これらのことから一般的にあるL.S.をもった人はある一定の購買行動が採用されていると想定してよいであろう。問題点：今回の研究で使用した図形のいくつかはやはり修正が必要であろう。また我国でのライフスタイルの検討も今後の課題である。

大型店出現に伴う 消費者の 購売行動変容

本間 道子
(東京都立大学・人文学部)

目的：消費者行動は基本的に経済行動でありながら消費者の心理的要素の反映であることは周知の事実である。その中でもその心理的側面の大きさものは購賣行動機、行動の周辺で、これらの研究は数多くなされている。しかし実際の購賣行動はある一定の商品の選択で終るものではなく、その商品をどこで、どのように求めるかという買物行動まで含まれる必要がある。これはいわゆる「複合行動機」と呼ばれるものであるが、消費者の購賣の場の決定である。現在、とくに都市生活者にとって購賣の場の選択肢は多様である。消費者は買物をする場合経済的な「値段の安さ」だけで商店に引きつけられではない。「安さ」というイメージでのスーパー・ストアもあれば、それに比べ「高さ」、デパートもまたに小売店もそれそれぞれ個性をもって存在している。複合行動機として考えられる要因は①経済性、②信頼性、③便利性、④魅力性、⑤アライド性、⑥合目的性などであるが、これらが購賣の場によって要因の順位が異なり、いろいろと思われる。

さて今回の調査の目的は購賣の場によつて買物の構えがどのようなものであるかを調べる。現在各方面で商店街の再編成が行なわれているが、それは大きな流れと1つの流通機構の変革と、消費者の意識の変化、生活構造の変容、文化的社会的变化など種々の要因があつた。そして買物行動の動向の視察を当てる。最近の再編成の中でも著しい変化がみられるのはいわゆる大型店(店舗面積500m²以上)といわれるスーパー・ストアの進出による既成の小売店(商店街も含む)が圧迫されていることだろう。このようす状況の中で買物行動の意識、行動、生活構造、コミュニケーション、意識を検討しつつ新しい買物行動をさぐる。

方法：上記の目的に合わせて新しい大型店の進出店舗前(1ヶ月)-調査Ⅰ、および開店後(2ヶ月)-調査Ⅱ(=わたる追跡調査を同一被調査者に行なった。

調査Ⅰ-偶置法(直接手渡し、郵送にて返却)、調査日-1976年7月26日～28日、地図-足立区板橋駅周辺(人口密度11,231人)住宅地、商業地、工業地とが混在し、旧日光街道に面し市街地となるのは右U。被調査者-主婦と対象として20代～40代(平均43.7才 S.D. 11.4) サンプル数700人

回収345人

調査Ⅰ-郵送偶置法 調査日-10月15日～10月30日

被調査者 サンプル数 345人 回収 22人

調査内容 調査Ⅰ-買物行動の実態、小売店の利用、スーパー・ストアに対するイメージ、コミュニケーションシート、調査Ⅱ-新規スーパーに対する態度、小売店との比較

結果		要因	店舗	平均	S.D.	
価格	スーパー	0.72	0.66	x		
	小売店	1.31	0.85	t=5.403		
品数種類	スーパー	1.16	0.41	x		
	小売店	2.86	0.42	t=24.05		
サービス	スーパー	2.90	0.62	x		
	小売店	1.69	0.73	t=3.431		
買やすさ	スーパー	1.23	0.146	t=9.838		
	小売店	2.21	0.77	x		
商品の幅	スーパー	1.41	0.66	NS		
	小売店	1.50	0.67			
店員の態度	スーパー	2.19	0.62	t=4.611		
	小売店	1.60	0.73	x		

(表1) 新規スーパーと既存小売店の利用比較

項目	一般スーパー	既存小売店
1 買物かいじ門でお会い	22.6 %	17.6 %
2 価格が安い	11.9	10.7
3 自由に商品が選べる	28.4	11.2
4 わざわざわざしくない	3.9	12.2
5 交通が便利	2.0	10.2
6 営業施設があり子供連れ	0.3	/
7 駐車場がある	0.3	/
8 商品が豊富	12.8	20.0
9 ライフビニンガが楽に入る	2.7	3.9
10 不必要な物で買ひ歩かる	6.8	/
11 サービスがよい	0.6	0.5

$$\chi^2 = 1215.4 \text{ df} = 11 \quad \chi^2 = 213.4 \text{ df} = 7$$

$$P < .01 \quad P < .01$$

(表2) 一般スーパーに対するイメージと利用スーパーの比較)

考察： 小売店とスーパーと比較して顕著な差は「価格」「品数種類」「買やすさ」にあり? スーパーの方を積極的に評価している。一方小売店については「サービス」「店員の態度」など? 評価されていない。これは 小売店が小歩りのきく、きめ細かなサービスで店員とのハーネスナルな関係を期待しているものと思える。また、買物行動の実態調査からスーパーの利用を望んでいる者は約8割店舗2割り実際新規のスーパー利用は7割を越している。これは「自由に買ひ歩く」、「買物かいじ門でお会い」つまり One-stop shopping に志向した買物形態とスーパーは一致する。(この調査に当たっては 東京都商工振興局、調査部と協力を得ました。)

TC T創造性検査におけるインストラクション の抑制効果について 1. A型

○星野美智子 高野隆一 矢次圭介
(早稲田大学) (立正大保専)

TC T創造性検査の実施にあたっては、これまで「これから行なう検査は皆さんが正直のように答えることができるか否を調べるものです……どのように答えるもよいのです」という標準的インストラクションを用いてきた。しかしながら、インストラクションの相違が反応に何らかの差異をもたらすであろうという仮定から、従来の標準的インストラクションとそれに外縁の強調を加えた形で検査を実施し、反応にどのような変化が認められるかを検討した(計20回数心)。その結果、TC T-A型(言語性)においては、各インストラクションの各テスト、各尺度への一貫した効果は認められなかった。しかし、標題づけテストにおいては「できるだけ面白い答えを考え下さい」とか「できるだけ変わった答えを考え下さい」といった反応を予め規定するインストラクションを与えた場合に反応数(柔軟性:F)および柔軟性(X)が減少し、反応の量的側面に差異が認められた。この点については、反応を予め規定するインストラクションは自由な発想の抑止要因ヒレス働くと解釈され、インストラクションのもつ抑制効果が示唆された。ところが、このようなインストラクションが有する抑制効果は、量的側面のみならず質的側面に対しても微妙に反映されることは可能性として考えられる。

目的: 本研究では、TC T-A型におけるインストラクションの抑制効果を、個々の反応レベルご質的に検討するこことを目的とした。

方法: 1)検査課題 用途テスト、原因推定テスト、標題づけテスト、の3テスト、制限時間は各々、2分、2分、3分 2)被験者 東京近県F市の商業高等学校3年生3クラス(全員男子)150名 3)手続き

表1. 各群の平均得点、および各群平均得点間の検定結果。*内は標準偏差

群	用途テスト						原因推定テスト						標題づけテスト						$*P < .05$					
	F	X	O	C	M	Cm	Mm	F	X	O	C	M	Cm	Mm	F	X	O	C	M	Cm	Mm			
「標準」群	5.4 (2.29)	2.9 (0.95)	31.5 (2.73)	23.6 (9.13)	7.8 (4.75)	5.0 (0)	2.2 (1.03)	5.0 (1.75)	2.9 (0.85)	24.2 (7.74)	14.0 (3.92)	10.2 (3.82)	3.3 (0.51)	2.6 (0.73)	5.4 (2.76)	2.1 (2.74)	18.4 (3.74)	9.7 (3.15)	8.5 (1.12)	3.2 (1.12)	2.5 (1.12)			
「面白い」群	5.6 (2.77)	3.2 (1.92)	32.3 (19.32)	23.1 (10.15)	9.2 (6.02)	4.7 (0.95)	2.5 (1.42)	4.6 (0.98)	2.9 (0.93)	23.4 (8.13)	13.3 (3.51)	10.1 (0.95)	3.3 (0.75)	2.9 (0.73)	4.5 (2.36)	1.8 (1.02)	16.2 (9.28)	8.3 (4.77)	7.8 (4.47)	3.0 (1.55)	2.6 (1.33)			
「変わった」群	4.9 (1.93)	2.7 (1.01)	22.2 (10.62)	21.0 (8.15)	7.1 (3.37)	4.7 (0.27)	2.3 (1.25)	5.0 (1.95)	2.9 (0.85)	26.9 (9.55)	14.4 (4.42)	10.4 (4.29)	3.2 (0.63)	2.6 (0.79)	5.3 (2.84)	1.7 (0.70)	15.6 (9.86)	8.0 (5.33)	7.5 (4.62)	2.6 (1.57)	2.3 (1.35)			
「標準」— 「面白い」	/	1.235	/	/	1.276	2.143	1.195	1.105	/	/	1	1	1	1	1	1.75	2.677	1.577	1.423	1.658	1	/		
「標準」— 「変わった」	1.182	1.020	1.374	1.502	2.632	/	/	/	/	/	10.64	/	2.299	1.524	1.853	1.155	2.198	/	*	*	*	*	/	

TCT創造性検査におけるインストラクションの抑制効果について 2, B型

○高野隆一 星野美智子 伊賀寛子
(早稲田大学) (文化女子大学)

TCT創造性検査におけるインストラクション効果については、既に「標準的」インストラクションで実施した場合と、各種の強調をえた4つのインストラクションで実施した場合とを比較することによって検討を行った(第2回数発表)。その結果、TCTB型(非言語性)においては、従来の「標準的」インストラクションを与えた群(以下「標準群」とする)に対して、「面白い」答えを考えて下さい、及び「変った」答えを考えて下さいと反応の内容を予め規定したインストラクションを与えた群(各々以下「面白い」群及び「変った」群とする)は、反応量的側面で有意に劣るという傾向を示した。しかし「面白い」及び「変った」という反応の内容を規定するインストラクションの効果が、反応量の低下という側面に顕著に現わしたとしても、単にそれだけでなく個々の反応の内容について吟味すると、「標準群」と比較した場合に微妙な相違が検出される可能性が考えられる。そこで本研究ではこの点に関して更に詳細に検討を加えてみたいと思う。

目的： TCT創造性検査におけるインストラクション効果として先に示唆された抑制効果について、「標準」群と各群の個々の反応内容を相互に比較対照することにより検討することを目的とする。

方法： 1) 検査課題 TCTB型の3テストである4点描画テスト、想像カテスト、図案発見テストで開限時間は各々3分、2分、2分。 2) 被験者 東京近県F市の商業高校の3年生3クラス(全て男子)で合計150名。 3) 手續 上記3テストの全反応を「標準」群と「面白い」群及び「変った」群で比較検討して反応内容レベルでの相違が生じているかを吟味した。次にC尺度(巧妙性)及びM尺度(達解性)

表1. 各群のテスト別平均得点と標準偏差及びt検定の結果()内は標準偏差

群	4点描画テスト						想像カテスト						図案発見テスト						*P<0.05 **P<0.01 /t<2.0		
	F	X	O	C	M	C _H	F	X	O	C	M	C _M	F	X	O	C	M	C _M	M _M		
標準群	10.1 (4.97)	2.8 (1.93)	10.9 (11.63)	6.5 (9.10)	4.3 (4.73)	2.2 (2.06)	1.5 (1.94)	6.1 (2.48)	3.3 (2.06)	36.4 (15.52)	22.6 (9.02)	13.9 (6.81)	4.8 (0.91)	3.1 (0.78)	8.0 (2.96)	1.7 (0.57)	38.2 (13.39)	22.8 (8.57)	15.7 (5.70)	4.6 (0.58)	3.1 (0.61)
面白い群	6.0 (5.83)	2.0 (1.91)	8.3 (10.61)	4.9 (6.18)	3.4 (4.66)	1.9 (2.19)	1.3 (1.52)	4.5 (2.47)	2.7 (1.13)	25.7 (14.12)	15.6 (8.89)	10.1 (5.81)	4.4 (1.02)	3.1 (1.13)	5.5 (2.63)	7.5 (0.73)	26.9 (14.59)	16.3 (8.38)	10.2 (6.23)	4.2 (0.83)	2.8 (1.12)
変った群	9.0 (5.33)	2.2 (2.63)	8.9 (12.76)	5.2 (9.55)	3.6 (4.32)	1.8 (2.12)	1.3 (1.48)	4.8 (2.52)	2.9 (1.28)	29.0 (15.18)	17.5 (9.49)	11.0 (6.26)	4.4 (4.03)	3.0 (1.82)	6.5 (2.41)	1.5 (0.53)	21.6 (9.71)	18.9 (8.91)	12.6 (6.78)	4.3 (0.85)	3.0 (0.73)
標準面白い ±標準差	4.031 ±4.031	2.046 ±2.046	1.150 ±1.150	1.191 ±1.191	/	/	/	2.88 ±3.187	2.65 ±2.714	3.538 ±3.743	2.950 ±3.743	2.969 ±3.743	2.649 ±3.743	2.649 ±3.743	4.873 ±4.873	1.514 ±1.514	4.007 ±3.518	4.467 ±3.518	2.777 ±3.518	1.637 ±3.518	
標準変った ±標準差	1.056 ±1.056	1.671 ±1.671	/	/	/	/	/	2.579 ±2.579	1.709 ±1.709	2.408 ±2.408	2.642 ±2.642	2.218 ±2.218	2.564 ±2.564	2.564 ±2.564	2.870 ±2.870	1.941 ±1.941	2.357 ±2.357	2.219 ±2.219	2.566 ±2.566	2.088 ±2.088	

TCT創造性検査の発達的検討

○三島正英 小関賢 久米穂
(山口女子大) (上戸女子短大) (早稲田大学)

目的：本研究者達が考案した創造性検査(TCT)における、幼児から大学生までの反応を比較検討することを目的とした。この際、幼児・児童の独創性尺度と、中学生以上のものと同列で評価することには問題が周じらぬとのべ、本報告では、従来からの2尺度、流暢性(Fluency: F)と柔軟性(Flexibility: X)の比較検討にとどめた。

方法：①テスト課題、TCTより。用途、原因推定、4点描画、想像力の4つの下位テスト。

2) 被験者、大都市の文部省大學生52名、地方県立普通高生6名、地方中都市中学生97名、大都市小学生(3年生)42名、地方小都市の幼児22名。

3) 手つき、上記被験者群に下位課題を実施し(但し、幼児については個別に行なう)、F(反応数)、X(反応カタゴリ-数)尺度得点を求めた。

結果と考察：各下位テスト、各被験者群別に2尺度の得点と平均値を示したのが表1である。また、その平均値の差の検定を試みたのが表2である。用途テストではF・Xとともに、ほとんどの群間に有意差が認められていった。原因推定では幼児のみが有意にFが小さく、一方、Xでは小学生が中学生より有意に高い得点を示していることを除けば、より高い学年群がより低い学年群よりすぐれていた。また、

4点描画では、Fでは中学生が高校生よりも優れ、幼児、小学生群が低く、Xでは高校生が大学生より優れることが目立つ。

表1：下位検査別各群のF・X尺度得点と平均値

		幼 児 (n=22)	小 学 (n=42)	中 学 (n=97)	高 校 (n=80)	大 学 (n=52)
用 途	F	2.64 (SD) (2.06)	3.00 (1.81)	5.26 (1.95)	5.35 (2.16)	6.85
	X	1.51 (SD) (1.06)	1.85 (1.06)	2.90 (1.11)	3.51 (1.31)	4.37
原 因 推 定	F	2.28 (SD) (2.12)	4.78 (2.33)	5.16 (1.79)	4.99 (2.11)	5.10 (1.76)
	X	1.26 (SD) (0.82)	2.62 (1.11)	2.05 (0.63)	2.63 (0.97)	3.27 (1.06)
4 点 描 画	F	3.36 (SD) (2.23)	8.21 (4.35)	12.67 (5.59)	9.86 (5.32)	11.15 (4.62)
	X	2.28 (SD) (1.56)	2.60 (1.53)	2.44 (2.14)	3.28 (2.16)	2.88 (1.22)
想 像 力	F	3.18 (SD) (2.06)	5.12 (3.04)	6.12 (2.56)	6.50 (3.39)	6.67 (2.18)
	X	1.78 (SD) (0.92)	2.36 (1.02)	2.87 (0.88)	3.94 (1.26)	3.64 (1.16)

、2113。想像力では、Fでは幼児、小学生群が他の3群より多く、Xでは、各群間にほとんど有意差が認められない。尺度別に以上を要約すれば、X尺度では、4点描画を除いて各群間に有意差が認められず、一方、F尺度では、幼児、小学生、中学生以上の3群間に有意差が認められると言ふことができる。しかしながら、Xの得点を平均で割り、1反応あたりの評価点とすると上記の傾向は崩れ、用途、想像力では、ほとんど差は消失。4点描画では、幼児が、むしろ高い得点を示している。総合的にこれらのことを見ると、一定時間内の思考へ速さを求めた場合、幼児・児童は中学生以上の群より能力的に劣り、また、それに伴い、反応力テロリーの量にも差異が認められる一方で、一反応あたりの柔軟性がうめた傾向反応には、発達的に一定の特徴を見出すことは難かしく、その意味で測定的思考の特徴が認められたといふことができよう。今後、制限時間を含め、幼児、児童の反応を更に引き出す方法の検討が必要であり、そのうえで、創造的思考を質的に測定・評価することも検討せねばならない。その際、評価の軸をどこに求めかかる問題となるが、今回の結果からは、幼児、児童の場合、反応の出現頻度を参考にする相対的評価法には、疑問と限界が感じらるべきものであった。

表2：F・X尺度平均値の差の検定(大検定)結果

X尺度

	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	用途	原因推定	4点描画	想像力	幼児	
幼 兒	用途 原因推定 4点描画 想像力	1.659 2.311 1.059 3.085	0.218*** 2.053*** 0.539*** 7.739***	10.683 9.194*** 3.216*** 11.676***	10.000 9.013*** 0.772*** 9.899***	用途 原因推定 4点描画 想像力	5.118*** 5.747*** 7.76*** 6.012***	7.000*** 0.050*** 1.799*** 6.916***	9.765*** 2.846*** 0.419*** 5.585***	用途 原因推定 4点描画 想像力	
	用途 原因推定 4点描画 想像力	0.933 5.747*** 7.76*** 6.012***	0.437 3.810*** 0.437 2.965	1.799 0.419*** 2.576*** <td>0.125 6.500*** 4.556***</td> <td>5.118*** 2.846*** 0.419*** 5.585***</td> <td>5.118*** 5.747*** 7.76*** 6.012***</td> <td>7.000*** 0.050*** 1.799*** 6.916***</td> <td>9.765*** 2.846*** 0.419*** 5.585***</td> <td>用途 原因推定 4点描画 想像力</td>	0.125 6.500*** 4.556***	5.118*** 2.846*** 0.419*** 5.585***	5.118*** 5.747*** 7.76*** 6.012***	7.000*** 0.050*** 1.799*** 6.916***	9.765*** 2.846*** 0.419*** 5.585***	用途 原因推定 4点描画 想像力	
	用途 原因推定 4点描画 想像力	8.924*** 9.536*** 13.372*** 8.228***	6.957*** 1.081 4.586*** 2.115***	3.389*** 9.756*** 2.576*** <td>0.125 6.500*** 4.556***</td> <td>3.389*** 9.756*** 2.576***<td>3.389*** 9.756*** 2.576***<td>7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***</td><td>7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***</td><td>用途 原因推定 4点描画 想像力</td></td></td>	0.125 6.500*** 4.556***	3.389*** 9.756*** 2.576*** <td>3.389*** 9.756*** 2.576***<td>7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***</td><td>7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***</td><td>用途 原因推定 4点描画 想像力</td></td>	3.389*** 9.756*** 2.576*** <td>7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***</td> <td>7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***</td> <td>用途 原因推定 4点描画 想像力</td>	7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***	7.165*** 8.267*** 0.125 6.500*** 4.556***	用途 原因推定 4点描画 想像力	
小 学 生	用途 原因推定 4点描画 想像力	7.527*** 8.555*** 9.706*** 7.084***	5.765*** 0.998 1.102 2.173*	0.279 0.559 2.13*	3.505*** 3.536*** 2.424*** <td>1.351</td> <td>7.527*** 8.555*** 9.706*** 7.084***</td> <td>5.765*** 0.998 1.102 2.173*</td> <td>0.279 0.559 2.13*</td> <td>3.505*** 3.536*** 2.424***<td>1.351</td></td>	1.351	7.527*** 8.555*** 9.706*** 7.084***	5.765*** 0.998 1.102 2.173*	0.279 0.559 2.13*	3.505*** 3.536*** 2.424*** <td>1.351</td>	1.351
	用途 原因推定 4点描画 想像力	10.935*** 7.765*** 10.70*** 7.968***	9.167*** 0.768 3.111*** 2.327*	4.582*** 0.196 1.370 1.078	3.735*** 0.341 1.306 0.298	3.735*** 0.341 1.306 0.298	10.935*** 7.765*** 10.70*** 7.968***	9.167*** 0.768 3.111*** 2.327*	4.582*** 0.196 1.370 1.078	3.735*** 0.341 1.306 0.298	用途 原因推定 4点描画 想像力
	用途 原因推定 4点描画 想像力	幼児 小学生 中学生 高校生 大学生	幼児 小学生 中学生 高校生 大学生	幼児 小学生 中学生 高校生 大学生	幼児 小学生 中学生 高校生 大学生	幼児 小学生 中学生 高校生 大学生	有 意 差 率 5% 1% 0.1%	有 意 差 率 5% 1% 0.1%	有 意 差 率 5% 1% 0.1%	有 意 差 率 5% 1% 0.1%	有 意 差 率 5% 1% 0.1%

F尺度

創造的構え(MSC)と性差について

—その1. TCT-A型の検討—

○青柳 肇 吉光 清 神戸文郎
(相模工業大学) (早稲田大学) (早稲田大学)

目的:本研究者達は、創造性検査(TCT)の反応を規定する要因の一つとして創造的構え(Mental Set for Creativity; MSC)を仮定し、これを質問紙によって測定することを試み、MSCとTCTとの関連を検討した。(第20回日本教育心理学会発表)先の発表では、男女を一つの集団とみなした上での検討であったが、MSCの反応に男女差のあることは想像に難くないし、TCTとMSCの関連に於ても同様である。従って、TCTの男女差も考えられるのである。そこで、本研究では、TCTに於る男女差、MSCに於る男女差、TCTとMSCの関連に於る男女の相異を検討することを目的とした。

方法: 1) テスト課題、TCT-A型(用途、原因推定、標題掛け)、MSC質問紙110項目。

2) 被験者、大学3年生 男子30名、女子40名。

3) 手続き、TCT検査実施後、MSC質問紙を施行した。

結果と考察: ① TCT-A型の男女差、A型検査の下位尺度得点の平均値を検定した結果、どの尺度にも有意な差はみられなかった。

② MSCに於る男女差、MSCに於る男女のM、S.D.及び平均値(各因子の)の差を示したのが表1である。MSCの男女差はあまりみられない。競争性の因子に5%水準で男子が女子を上回り、探究性の因子で男子が女子を上回る傾向があつたにすぎない。

③ TCT-A型とMSCの関連に於る男女の相異。これを示すのが表2である。向上性の因子は、男女とも有意な相関はみられない。探究性の因子では、男子が原因推定テストのM_m(遠隔性の最高点)の尺度で5%水準の有意の負相関がみられ、標題掛けテストのO(独創性)の尺度、M(独創性のうち遠隔性)の尺度で5%水準で男子が女子を上回る傾向があつたにすぎない。

因子	男子		女子		t
	M	S.D.	M	S.D.	
Ⅰ. 向上性	9.2	3.91	8.9	3.06	-2.355
Ⅱ. 遠隔性	9.5	3.61	8.1	3.82	1.621
Ⅲ. 自己信頼性	3.5	2.35	3.1	2.81	-1.712
Ⅳ. 競争性	3.4	2.87	2.9	1.82	-1.997
Ⅴ. 探究性	2.6	1.47	2.2	1.58	1.061

* 5%水準

度で5%の有意な相関がみられた。自己信頼性の(I)の因子では、男子は有意な相関は全くみられないか、女子では原因推定テストの下(流暢性)の尺度で5%の有意な相関がみられ、同テストのO、C(独創性のうち巧妙性)、Mの各尺度で1%水準の有意な相関を示した。更に標題掛けテストの下尺度でも5%水準で有意な相関があった。競争性因子では、男子が原因推定テストのM_mの尺度のみで5%水準の有意な負相関を示したが、女子では全く相関がみられない。持続性因子では、女子には相関が全くみられないが、男子には用途テストのX(柔軟性)の尺度、原因推定テストのM_mの尺度で1%水準の有意な負相関がみられた。これらの結果から、女子では自己信頼性の(I)の因子か、TCTとの関連が強く、特に原因推定テストとの関連が強い。この事は、自己信頼性の(I)の因子が有意ではないが他の相関の傾向を示していることによって裏付けられているといえよう。しかし男子では関連性が弱く、むしろ逆に自己信頼性の(I)の因子で負相関か、(I)の因子で正の相関がみられるものがあり、この理由は不明である。また持続性の因子にも男女の間に顕著な相異がみられる。男子では負相関、女子では正相関する傾向がみられる。この事は、拘泥であるか、持続性の因子が男子では固定(rigidity)に繋がり、反応を抑制するのに對して、女子では少く繋がらず、逆に反応を促進する傾向があるのではないかとも考えられる。なお探求性因子が原因推定(男)のM_mと負相関しているのは不明である。

因子	男子		n = 30	女子		n = 40
	I. 向上性	II. 遠隔性		III. 自己信頼性	IV. 競争性	
用途			279 -415*		270 -299	348
原因			275 -300	254 254	313	
推定			-302			
M _m			465*		281	
C _m					450 -301	
原					258	
因					51** -288	
推					267 498** -280	
定					488**	
M _m				-252	329	
C _m						
上	306	-386*	332	357 -365*	-514**	407* 311
下						407*
標題						
X						
プロ	2.41	3.71*				
ロ	3.44	3.47				
イ					312	276
テ	212	322*				
ス						
ト						270
M _m						

* 5%水準 ** 1%水準

250未満省略、小数点省略

創造的構え(MSC)と性差について

—その2. TCT-B型の検討—

○吉光 清 青柳 肇 高野 隆
(早稲田大学)(相模工業大学)(早稲田大学)

目的： 創造性テストにおいて創造的反応を産出する背景としての創造的構え(Mental Set for Creativity; MSC)を真に個人の次元で取り扱うためには、それ以前に多くの異なる条件の下での種々な集団の間のMSCの差異について、多くの資料の集積が必要となると考えられる。各集団に対して研究を進める上で予め確認しておかなければならぬ大きな問題は男女をひとつの集団として扱うことの是非である。そこで本研究では、この問題を非言語性テストの結果をもとに考察することを目的とした。

方法： ①テスト課題 TCT-B型(非言語性創造性テスト)，及びMSC質問紙。

2)被験者 大学3年生 男子30名、女子40名

3)手続き 男女両群に從来通りの教示によりTCT-B創造性検査を実施した後、MSC質問紙を実施した。

結果と考察： 3下位テストに対する反応は評価基準に従って、F(流暢性)、X(柔軟性)、O(独創性)、C(巧妙性)、M(遠隔性)、Cm(最高得点法による巧妙性)、Mm(最高得点法による遠隔性)の各尺度につき、それぞれ評価され個人得点が計算された。

MSC質問紙に対する回答から、既に行なわれていた因子分析の結果に基づき暫定的に定められた因子構造の各因子に対して種目合成得点が個人毎に計算された。なお、回答はマジックスケールによる評価で求められたが、いくつかの点を考慮した結果、3段階スケールに対する回答として処理された。

TCT-B検査の各尺度に対する個人得点は男女別に平均値と標準偏差を算出するために利用された。統計2)尺度についてなさいた男女間の平均値の有意差検定の結果、すべての尺度で有意差が認められなかった。

MSCにおける各因子得点(種目合成得点)についても男女別に平均値、標準偏差が求められ、有意差検定が行なわれた。6つの因子得点うちの1つに5%水準で有意差が認められたが、それは男子において競争性が女子を上回ることを示すものだった。

これまでの結果から、TCT-B型においては両性間に差がなく、その背景と考えられるMSCにはわざかながら差異が認められなかつた。今後、性を無視して集

団を取る得るかという問題に対する検討は各性におけるTCT各尺度とMSC各因子の関連性の差異を吟味することによつてなさなければならないと思われた。表1は個人の得点とともにTCT各尺度とMSC各因子の相関係数を算出した結果を示したものである。

男子の結果を要約すると、四点描画テストの各尺度はMSCとほとんど関連を示さず、想像力テストの各尺度は向上性、探究性、自己信頼性の因子と正の相關を示す傾向にあり、图案発見テストのいくつかの尺度は向上性、競争性と正の有意な相関を示しているなどと言えよう。女子においては、四点描画テストのF尺度が向上性、自己信頼性の因子と有意な相関を示し、想像力テストのCm尺度は向上性因子と、またX尺度は自己信頼性の因子と有意な相関を示し、他の尺度もこれら因子と相関の傾向を示している。图案発見テストのいくつかの尺度は自己信頼性と相関の傾向を示しているが有意ではない。MSCが反映される易いテストを男女で比較すると男子は想像力テストと图案発見テスト、女子では四点描画テストと想像力テストと思われた。また、TCT各尺度と有意な相関を示し易いMSC因子は男子で向上性と競争性、女子で向上性と自己信頼性因子と思われた。部分的関連では競争性因子が想像力テストのCm尺度に関して男子と女子とで相反して相関する傾向を示すことが注目される。これらの点から、創造的反応を産出する背景が男女で同一かといふ問題への答えは否定的にならざるを得ないだろ。この結果は、もちろん被験者に関して地歴的、年令的、サンプル数の点で限定付きのものであるが今後の研究で集団を性別に扱う必要性を示唆している。

表1. TCT-B型の各尺度とMSC各因子との関連

	男 子 N=30			女 子 N=40						
MSC	向 上 性	探 究 性	自 信 (+) (-)	競 争 性	持 続 性	向 上 性	探 究 性	自 信 (+) (-)	競 争 性	持 續 性
F	341	307	302	-258	300	367	573	327		
X	301	334	284							
O	272									
C	266									
M	260									
Cm										
Mm										
想 像 力	341	307	302	-258	300	367	573	327		
X	301	334	284							
O	272									
C	266									
M	260									
Cm										
Mm										
圖 案 發 見	349									
X										
O	274									
C	440	297								
M										
Cm										
Mm										

統計検定はすべて1%・5%の有意水準 小数点省略、250未満省略。

社会的動機（達成と親和）とその場面認知に関する研究（その2）

木明 寛 植松信雄 口黒岩誠
(早稲田大学) (東邦大学 医学部)

目的： Murray, H.A. の分類に従い、達成や親和を含めた各社会的動機群と検出できると仮定すれば、その各群は場面や状況から受けた印象にも相違を示すであろう。その仮説検証が本研究の目的である。

方法： 日本教育心理学会第20回大会論文集に詳細を報告。

結果と考察： SD法に用いられた形容詞対をT1に示す。各図版ごとの形容詞対間の相関係数を算出し、さらに直接バリマックス法によって因子分析を行った。T2は各図版の持つ因子構造を各因子ごとに比較する為に達成動機群と親和動機群の因子負荷量を示している。オフ因子に

形容詞対	
1	達成内-自己中心的
2	親和外-他指向的
3	成就外-自己指向的
4	不協調内-内向的
5	支配的内-内向的
6	支配的外-外向的
7	親和外-外向的
8	自己尊重-自尊心
9	不幸感-危機感
10	無能感-失敗感
11	懶惰感-怠惰感
12	販賣感-販賣感
13	販賣感-販賣感
14	販賣感-販賣感
15	懶惰的-活動的
16	活動的-活動的
17	不幸感-活動的
18	不自由-活動的
19	不自由-活動的
20	活動的-活動的

T2. 因子負荷量の比較

図版	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1 Ach	-3.82	6.90					-2.77	8.63	-4.60	8.86	3.89		6.10	-3.18						
Ach	-3.63	3.23						9.33	5.59				2.62							
2 Ach	-4.88	3.23					-5.63	9.05	-8.66	2.51	5.47		8.11	-2.72		5.83		-4.40		
Ach	-4.28	4.28					-9.87	6.09	-4.97				3.20							
3 Ach	-4.32	3.28					9.66			3.70	6.51			-5.93	6.66	5.28				
Ach	-3.63	-4.07								6.55	9.56			3.04	3.56	-6.71				
I			4.55	4.74										4.34	-2.59					
4 Ach	-6.61	4.69					4.01	4.68	-5.61	9.04	-5.07	6.06	7.26		8.65	-3.21	4.13	3.58	-3.19	
Ach	-6.32	3.08								8.59	-4.84	8.11	4.96	4.94	-2.86		8.64	6.48		
5 Ach	-6.28									5.41	-8.07	6.36	5.10	4.66	4.48	-6.59	8.72	7.72	3.33	
Ach	-7.25									-3.03	2.86	-7.81	8.45	5.79	4.63	8.36	-5.82	8.51	7.28	
6 Ach	-6.46										8.92	-7.87	2.87	5.83	7.69	-4.82	6.59	6.86	4.90	
Ach	-6.19	-3.57	4.96							9.47	-4.95	4.66		3.59	7.95	4.37	5.23	4.76		
Ach	-3.97	-3.46								-3.92	8.42	-7.95	6.09	4.73	2.14	-2.33	5.86	8.07		
8 Ach	-5.23	2.66								6.31	-3.77	9.34	8.69		4.55	-1.46	4.13		-3.79	
Ach	-3.41									7.66	-7.87				3.32		4.23			
9 Ach	-3.36	6.79	4.98							-6.90	8.95	-9.66	7.41		2.45		4.03	4.00	2.22	
Ach	-5.30	-3.11	-7.63	6.10						-7.15	9.23	-8.24	5.91		3.47	2.16	6.33	7.22	2.64	

図版	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1 Ach			4.84		3.62	9.32					3.60	4.32						-3.00	-6.88	
Ach	4.92		3.93		3.60						4.43	9.93					9.90			
2 Ach							-5.61	9.99	-4.07				-3.54					-2.58		
Ach	5.68						9.70									6.34	-6.18			
4 Ach							9.14	-6.35					-3.36	-6.22				-2.74	-4.18	
Ach	9.83						3.74											-3.81		
5 Ach	9.25						8.16							-3.89						
Ach	9.11	4.23	-4.9				9.96	-3.47						-4.74						
6 Ach			3.88										5.20				9.96			
Ach	4.16			-9.73			3.76				4.12	9.93				-4.35		-3.25		
8 Ach		-3.05					3.24				8.82	8.25		3.08		9.61	3.84		-6.78	
Ach							-3.24						3.70	-4.20	4.02		3.58	3.10		
9 Ach			-3.33								4.21	-9.31		7.74				3.65		

3 Ach										9.86	-6.04	3.79		3.55					
4 Ach	-6.99									-5.05							9.68		
7 Ach	3.97		-9.66																

・小数点省略
・300以下省略

達成動機の実用的測定法をめざして
——質問紙の作成とセールスマンへの適用——
小林一史
(立教大学)

はじめに

達成動機は、H. A. Murray の社会的欲求のリストでは、「障害に打ち克ち、力を發揮し、できるだけ良くかつ速く困難なことを成し遂げようと努力する欲求」とされているが、一般には、「高い水準での仕事の達成」を説明し、予測する重要な変数の一つとして考えられている。

その代表的な測定法としては、TATがあるが、実施の不便さ解釈の困難さ故に、一般にはあまり利用されていない。たとえば、質問紙形式など、より簡便なその測定の道具立てが要請されているのが現状といえよう。

質問紙の作成と吟味

1) 概念設定と項目の収集

McClelland および Murray の定義を参考に、7つの概念的次元を設定した。それらは、完全、高水準、競争、持続性、フィードバック、展望、責任である。

各次元ごとに、5~10項目、計60項目を用意したが、その際には、EPPS, CPI, MAT, および Lynn [1969], Herman [1970] が参考にされた。

項目は、「～したい」という表現によって提示することとし、回答は、<しばしばそう思う>、<どちらかといえばそう思う>、<あまりそう思わない>、<まったくそう思わない>の4件法により、その願望水準として求めることとした。

2) Dataの収集と項目の吟味

男子大学生94名を対象とし、1978年7月、集合調査法にてDataを収集。

トータル得点と各項目との相関に注目し、40項目を残したうえで因子分析をおこなった。基本的には一次元性を保証する結果であったが、5因子までの解釈をおこなえば表1のごとくであり、初期の概念的次元設定と、ほぼ対応を示す結果であった。

表1 因子分析の結果

	項目の意味	因子の解釈
第1因子	最後までやり通したいなど	完遂
第2因子	第一人者になりたいなど	高水準
第3因子	進んでやりたいなど	責権性
第4因子	見通しをたてておきたいなど	見通し
第5因子	長づきさせたいなど	持続性

3) 項目の再構成と現場への適用

因子分析の結果から、それぞれ5つの因子を代表する30項目がえらばれ、現場への適用のための質問紙が構成された。

現場への適用は、現在1事例であるが、その手続は以下のようにあった。

期日：1978年8月

対象：C自動車会社セールスマン122名(男子)

方法：留置法

測度：Ach(30項目の合計得点), P(1ヶ月間の販売台数), LS(勤続年数)

結果は、表2に示すとおりであり、短勤続群、中勤続群では、高Ach群と低Ach群との間に販売台数において差は認められないが、長勤続群では両者の間に統計的に有意な差が認められる結果となっている。

表2 勤続年数別Ach得点と販売台数

Ach	N 122	全体	満0~2年		満3~7年		満8~13年	
			38	45	39			
H (91~)	62	5.435 (2.978)	21 (0.912)	23 (1.898)	18 (2.007)	8.833		
L (~90)	60	5.003 (2.008)	17 (0.747)	22 (1.809)	21 (1.535)	6.571		
差 (n)		0.402	-0.392	-0.208		2.262**		

a) ** : $P < .01$

未経験なうちは、販売実績が個人の達成動機の高低よりは、むしろ他の外的条件に依存することに考慮するならば、上記の結果は、用意された質問紙による仕事でのパフォーマンスの予測の可能性を示唆するものと考えられよう。

今後の課題

さまざまな現場への適用が可能な質問紙を作成しようとすれば、項目はある程度抽象的なものとならざるを得ず、結果として、個々の現場における適用では予測値とパフォーマンスとの間の相関を低める可能性があろう。今回の適用事例においても、対象を考慮したより具体的な項目が別に加えられたが、そのトータル得点(Ach)は、Achよりもよい高い予測をおこなっている。

Ach的な観点を取り入れることも、もちろん重要なことではあるが、より普遍的に適用しうる質問紙を作成していくことが、達成動機研究の地平を拓くものであることはいうまでもない。今後とも事例研究を積み重ねつつ、適用性が広く、かつ妥当な質問紙作成の努力をおこなっていきたいと考える。

検査（創造性・達成動機）

労働と余暇に関する動機づけ研究（3）

—自動車セールスマンの場合：(1)モデルの妥当性—

○香川 貞 永 松 純
(大阪産業大学) (立教大学)

はじめに

人は、仕事場面ならびに余暇場面において様々な欲求を充足し自己のパーソナリティを成長せしめていると、みることができる。

仕事場面ならびに余暇場面における欲求充足の可能性の増大あるいは後退は、仕事および余暇へのモチベーションに影響し、仕事および余暇のあり様を規定するであろう。そして、そこでの欲求充足あるいは不充足は、当人のパーソナリティの成長を規定するであろう。

上記のような想定に立ち、労働と余暇との相互関係を吟味するために、筆者らは期待道具性理論の適用を試みていているが（応心論文集1976年を参照），ここでは、自動車セールスマンを対象におこなわれた実証研究の結果を報告するものである。

方 法

対象：自動車セールスマン122名。男子。平均年令27.2才，平均勤続5.3年。

日時：1978年8月。

方法：留置き調査法。

測度：12の欲求項目に対しての誘意性(V_i)，仕事および余暇の道具性($I_{(W)i}$, $I_{(L)i}$)。外部基準測度として1ヶ月間の売り上げ台数(P_1)，仕事および余暇への打ち込み程度の自己評価(P_2 , P_3)。 P_1 は実台数， P_2 と P_3 は4段階評定，他は5段階評定。労働と余暇へのモチベーションは， $\Sigma(I_{(W)i} \times V_i)$, $\Sigma(I_{(L)i} \times V_i)$ として求められた。

表1 Mean, SD and Correlation (a)

Measure (b)	Mean	SD	Correlation								
			2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 P_1	3.51	1.48	.31	-.23	.05	.14	.10	-.05	-.02	.60	.85
2 P_2	2.71	0.70		.13	.10	.35	.28	.16	.15	.27	.24
3 P_3	2.64	0.82			.19	.24	.25	.32	.34	-.18	-.26
4 ΣV_i	48.25	5.17				.39	.63	.28	.69	.06	.04
5 $\Sigma I_{(W)i}$	42.82	6.99					.89	.31	.42	.15	.17
6 $\Sigma(I_{(W)i} \times V_i)$	173.52	41.21						.32	.60	.13	.15
7 $\Sigma I_{(L)i}$	40.53	5.86							.87	-.13	-.10
8 $\Sigma(I_{(L)i} \times V_i)$	164.45	33.98								-.06	-.05
9 Age	27.20	4.17									.74
10 Length of Service	5.37	3.73									

a) $N=122$ 。

b) P_i はここでは実台数ではなく、1(月間1台)～6(月間11台)の評定ランク。

結果1——モデルの妥当性

P_2 , P_3 についてみてみると、相関はそれほど高くなないが、それぞれ、 $\Sigma(I_{(W)i} \times V_i)$, $\Sigma(I_{(L)i} \times V_i)$ と有意な相関を示しており、期待道具性理論による労働および余暇へのモチベーションの測定の可能性が示唆される結果となっている（表1）。

P_1 については、年令および勤続との相関が高いので、年令および勤続から2つのグループを作り、それぞれにおいて、 $\Sigma(I_{(W)i} \times V_i)$ との関係を吟味したが、ここでもモデルの妥当性が保証される結果となっている。すなわち、仕事にも慣れたと思われるH-AGE/H-LS群においてはH-M(w)群とL-M(w)群との間で、月間売り上げ台数において有意な差がみられる（表2）。

上記の結果は、個々人における労働と余暇との相互関係を、期待道具性理論によるモデルを用いて吟味できる可能性を示すものと考えられる。

表2 年令・勤続・ $M(p)$ 別平均売り上げ台数(a, b, c)

年令・勤続別	$M(p)$ 別	N	Mean	SD
H-AGE/H-LS	計	41	7.48	2.21
	$M(p) \geq 186$	21	8.14	2.22
	$M(p) < 185$	20	6.80	2.04
	差		1.34*	
L-AGE/L-LS	計	43	3.88	1.29
	$M(p) \geq 168$	21	3.71	1.27
	$M(p) < 167$	22	4.05	1.32
	差		-0.34	
	差		3.60**	

a) $M(p) = \Sigma(I_{(W)i} \times V_i)$

b) 平均売り上げ台数 = P_1

c) * : $P < .05$, ** : $P < .01$ (t検定)

労働と余暇に関する動機づけ研究(4)

—自動車セールスマンの場合：(2)規定要因の吟味—

香川　眞　○永松　純
(大阪産業大学)　(立教大学)

結果2—規定要因の吟味

モデルの妥当性が確認されたことは、その下位測度の吟味を通して、労働と余暇との相互関係を吟味することの有効性を保証するものである。

$I(V_i)$ と $I(L_i)$ との差をみてみると、余暇の道具性が仕事の道具性よりも有意に高い項目は生理、社会の領域にあり、逆の傾向を示す項目は尊敬、自己実現の領域にある(表3)。この結果は、今回の調査対象者である自動車セールスマンの労働と余暇に関する一般的な傾向、すなわち、金銭を得、自分を他人に認めさせ、自己を発展させることのできる場面は仕事場面であり、休息し、人と交際し、自由を得ることのできる場面は余暇場面であるとする認識の傾向を示すものであろう。

モチベーションの強さについても、道具性における仕事と余暇との対応関係と同様な傾向を示す結果となっている。しかし、欲求項目別にモチベーションと外部基準制度との相関をみてみると、生理の領域では仕事および余暇において、安全の領域では仕事において、社会の領域では余暇において、尊敬の領域では仕事において、自律の領域では余暇において、自己実現の領域では仕事と余暇の両者において、高い相関がみられる結果となっている(表4)。この結果もやはり、対象者の一般的特徴を示すものと考えられるが、仕事と余暇が、生理および自己実現の領域では相等しく、他の領域では相互補完的に、欲求が行動に具体化する場を提供していることが、示唆されている。

考 察

本研究は、筆者らが動機づけの観点から継続的におこなっている「Work & Leisure」研究の一つであるが、労働と余暇との相互関係について何らかの結論を出すためには、さらに対象をかえた実証研究の積み重ねが必要であることはいうまでもない。

表3 欲求項目別 V_i , $I(V_i)$ のMeanとSD

Need Item and Area		V_i		$I(V_i)$		$I(L_i)$		difference (a) ($I(V_i) - I(L_i)$)
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
1 健康を維持すること	生 理	4.65	0.53	3.23	1.10	3.74	0.91	-0.51 **
		4.39	0.64	3.31	1.08	3.84	1.01	-0.53 **
	安 全	4.09	0.81	3.83	0.89	3.14	0.89	0.69 **
		3.95	0.78	3.75	0.89	2.74	0.92	1.01 **
5 ひとから好かれること	社 会	4.16	0.79	3.56	0.89	3.45	0.81	0.11
		4.01	0.77	3.34	0.85	3.53	0.81	-0.19 *
	尊 敬	3.27	0.92	3.70	0.86	3.00	0.77	0.70 **
		3.60	0.91	3.67	0.86	2.95	0.76	0.72 **
9 ひとにしばられないこと	自 律	3.53	0.95	3.09	1.12	3.40	1.09	-0.31 *
		4.01	0.75	3.68	1.01	3.32	0.93	0.36 **
	自己実現	4.31	0.64	3.81	0.95	3.40	0.92	0.41 **
		4.23	0.73	3.78	0.88	3.77	0.96	0.01

a) * : $P < .05$, ** : $P < .01$ (t検定)表4 欲求項目別モチベーションのMeanとSDおよび P_2 と P_3 との相関

Need Item and Area	Mean (SD)		Correlation					
	W	L	W	L	W	L		
1 生 理	15.07 (5.54)	17.48 (4.91)	.33	.28	.34	.30	.36	.24
	14.64 (5.56)	16.99 (5.51)	.24	.20				
3 安 全	15.77 (5.28)	12.93 (4.58)	.23	.23	.28	.03	.21	.18
	14.94 (5.09)	10.86 (4.54)	.23	-.18				
5 社 会	14.91 (4.98)	14.45 (4.83)	.17	.21	.10	.26	.21	.18
	13.55 (4.77)	14.31 (4.83)	-.00	.25				
7 尊 敬	12.23 (4.92)	9.92 (4.16)	.22	-.03	.27	.02	.16	.40
	13.45 (5.39)	10.80 (4.12)	.24	.08				
9 自 律	11.07 (5.75)	12.22 (5.58)	.03	.23	.07	.34	.16	.40
	15.04 (5.67)	13.48 (5.02)	.09	.34				
11 自己実現	16.62 (5.35)	14.84 (5.21)	.19	.28	.21	.36	.16	.40
	16.16 (5.16)	16.13 (5.50)	.20	.35				

オペラントライフの視点

○佐藤方哉, 楠口義治, 望月昭, 山口耕一
(慶應義塾大学 文学部)

0. われわれは、いわゆる“基礎”心理学と“応用”心理学を統合する視点として、オペラントライフという考え方を提倡する。

1. 従来、“基礎”心理学と“応用”心理学との関係について、大別して、(1) 基礎(実験)心理学の方法と如見立、産業・教育・犯罪・臨床などの現実場面の諸問題に応用しようとする心理学の分野が応用心理学であるとする立場 (Fig. 1.A) と、(2) 基礎心理学とは独立し、現実場面の諸々の問題を解決するための心理学が必要で、それが応用心理学であるとする立場 (Fig. 1.B) があり、近年は、(2)が主流であるように思われる。

2. (1)の立場が有効でなかったことは、歴史が示すところであるが、(2)の立場も、個々の領域ごと、互いにアド・ホックな枠組をつくりあげ、人間の心理的出来事に関する統合的の理解から遠ざかっていきつづけは、われわれが生産性が乏しいように、われわれは考える。

3. 現在、基礎(実験室場面)と応用(現実場面)とに共存の概念的枠組をもつて、心理的出来事を統合的に理解しようとしている立場として、B.F. Skinner の創始した徹底的行動主義的心理学たる行動分析があり (Fig. 1.C)、今後の成果を示していく。

4. われわれが提倡するオペラントライフの視点は、“基礎”と“応用”といった二分法で心理的出来事を捉えるのではなく、すべての心理的出来事を統一的に概念的枠組で分析し、現実場面の諸問題を解決していくこうとするものである (Fig. 1.D)。その際、われわれは、(1) 心理的出来事はすべて行動的出来事として分析できるとする徹底的行動主義に立ち、(2) 概念的枠組としてオペラント条件づけの枠組 (Fig. 2) から出発する、といふ二点において行動分析に多くと負っている。

5. オペラントライフの視点が現在の行動分析と異なるのは、B.Bijouらが導入した J.R. Kantor のセッティング事象の概念を、時間的・空間的つながりをもった生態学的および社会学的変数を積極的に考慮して、複数社会において生き続けようとしている個体の行動の解明のために、経験的に具体化しようとする点にある。

6. オペラントライフの視点からわれわれの具体的研究の方向を Fig. 3 に示す。

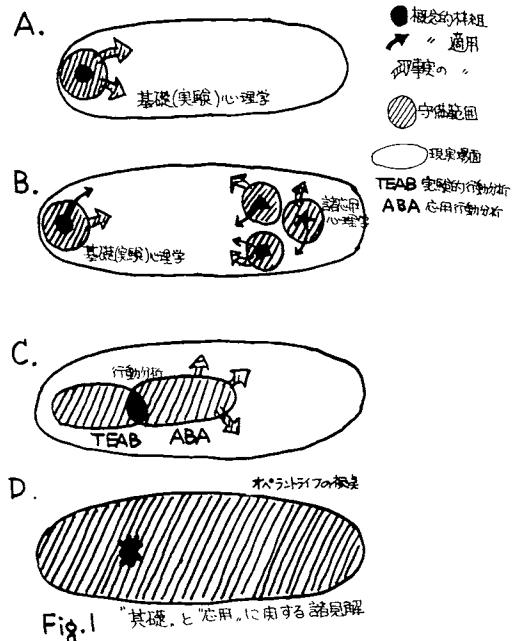


Fig.1 “基礎”と“応用”に関する諸見解

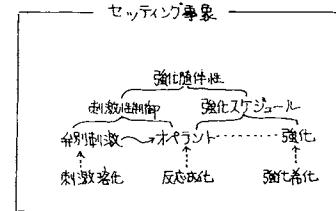


Fig.2 行動分析の概念的枠組

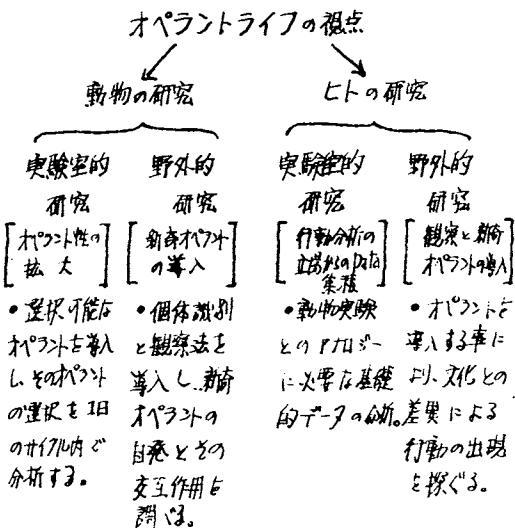


Fig.3 われわれの研究計画

ヒトにおける強化スケジュールの研究

〔1〕ヒトの強化スケジュールの予備的研究

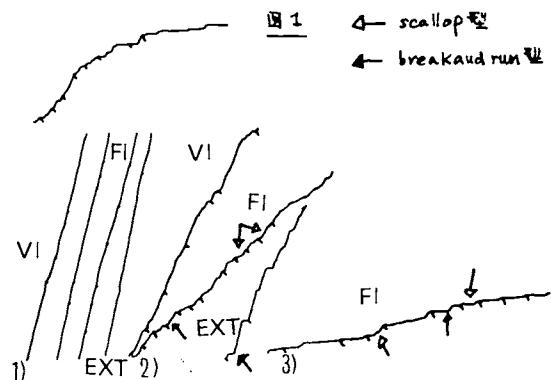
○植口義治・望月昭・山口耕一・佐藤方成
(慶應義塾大学文理部)

〔目的〕行動を維持する重要な要因の一つに強化スケジュールがある。しかし、ヒトにおいては、この種の研究のデータは少ない。強化スケジュールの4つの基本型といわれる、FI(定間隔), FR(定率), VI(不定間隔), FR(不定率)強化スケジュールのうち、本研究では、強化後の一定時間経過後の初発反応が強化されるFI型を扱う。動物実験の多くの結果ではFIにおいて、強化後次の強化までの時間中、漸時反応率が上昇し、累積記録線上にscalloped型がみられるが、本研究では、ヒトを用い、反応中、別の仕事を同時にさせることによるFI型の変化をみる事を目的とする。

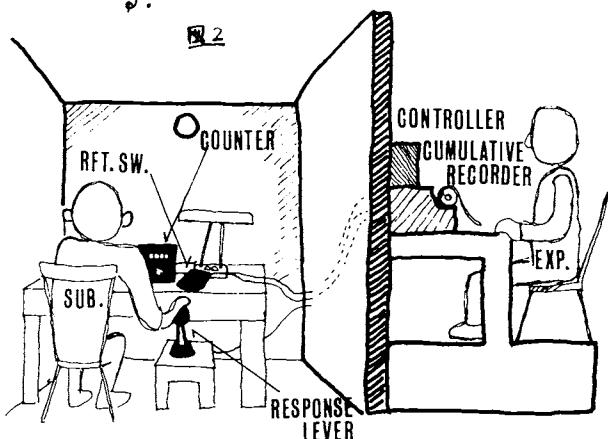
〔方法〕被験者：大学生・大学院生12人、性別及び年齢：被験者はラーメンルームに導かれ、イスにすわりヘッドフォーンを付ける。反応にはペロ付マイクロスイッチを押すことであり、反応によりランプが0.5sec. 点灯する事が強化である。なるべく多くランプを点灯させるよう勧められる。ヘッドフォーンからは、「面白い動物行動」という本の内容が朗読され、後で内容を報告するよう勧められる。強化のスケジュールは、ランプが点灯後間隔ごとに点灯可能となる3FI(3分), FIが30分、その後10分毎に計50分間である。実験条件はヘッドフォーンよりの朗読の有無・反応スイッチの有無・強化の強度(30sec. と 60sec. 又、ランプの点灯を被験者が実験者に知らせる、フィードバック付とそれ以外のフィードバック無し)により5群に分られる。スイッチ押し反応、ランプの点灯は累積記録器上に記録される。

〔結果〕反応パターン：キーの重さ、FIの強度は、反応パターンに影響しない。朗読のない群では図の1)と示すように強化後一定期間 pause があり、その後反応 rate が漸々上昇する break and run 型が出現した。また、ランプの点灯により注意を向けていくればならないフィードバック付の群では、1図の3)のように break and run 型と scalloped 型の2つが出現した。こうしたことにより、当初の目的である、他の仕事をする事により scalloped 型が出現するのではないかという仮説は証明されなかった。また、break and run 型、scallop 型と

もある被験者数名に出現したが、動物実験で得られたデータのように、固定したパターンは生じなかった。



〔考察〕以上の結果、及び他の報告を踏まえると、ヒトにおいては、動物実験のデータのように、累積記録線上にFIの固定パターンであるscallop型が多く見られて出現する事は少ない。我々は、この原因をFIスケジュールに被験者をさらすsession数の不足及び、EXT 1, EXT 2において、多大固定パターンの生じた点をフィードバック付に求め、なるべく動物実験に用いられる装置に近い機能を持つ装置の構造を行なった。2回がそれである。おなじく、反応は一定の重さを持つレバー、強化子を準備するランプの点灯だけではなく、別の足スイッチを机上に置き、強化スケジュールにまとめる。反応によりポインカウニターのランプが点灯する、この時、足スイッチを被験者自身が自分でなければならぬ事により、あらかじめほろにけらうの意図を獲得するよう教示された強化子としてのポインカウニターが上昇する。このことは、この装置が、スキナーワークにおいてハトガpeckingにより飼料をあげ、すきをせり飼料を混食する行動と類似の機能を持つに至ったと考える。



ヒトにおける強化スケジュールの研究

[II] ヒトの FI スケジュール

○望月昭、山口耕一、佐藤方哉、樋口義三治
(慶應義塾大学文学部)

[目的] 固定時隔スケジュール (FI schedule) のもとでのヒトの行動の基礎的な分析を行う。

[方法]

1) 被験者: 心理専攻の学部2年生、男女3名ずつ計6名。(スケジュールに対する知識はまだないもの)

2) 実験者: 大学院学生男3名。実験者と被験者とは、初対面、あるいは、顔を知る程度。

3) 手続: 各被験者は、個別に実験室内に訪ね、室内に設けられた実験ブースに誘導される。その際“磁気”を帯びる危険があるという理由で腕時計を含めた金属製のものを実験者にあづけさせる。ブース内では、強化カウンターのある机の正面に座らせ、反応レバーと、強化スイッチを確認させ、反応レバーを押すことによって机上のカウンターのランプがつき、卓燈中、強化スイッチを押すことによってカウンターの数があかる旨、教示する。そして、なるべくカウンターの数をあげるよう指示し、実験が開始される。(ランプは3秒卓燈)

1日のSession(すなはち50~70分位で)、1~5日目は等しくFI-60"(LH6秒)で行われ、6~9日は、各被験者ごとに、適当にValueをかえ、10日目は、等しく、FI-60"と消去を10分ずつくりかえた。

[結果]

1) 反応パターン: 男の学生の場合、3名ともほぼ直線的なパターンを示し、消滅時においてもその傾向は保たれた(Fig. 1参照)。それに対し女学生の場合には、1~2 sessionから、強化的に“余S.”、“Scallop”、“Break & Run”的型を示している(Fig. 2)。それをいくつかの典型をFig. 3に示した。

2) Rateの推移: 絶対的な値は、男女に大きな違いがみられ(Fig. 4)、圧倒的に男の方がhigh rateである。スケジュールバリュによるrateの変化は、男女ともに見られるが、その推移の上下は、各session内のコンテクストによって変化する。FI-60"と消去をくりかえた場合、女の場合、(ほぼ一律に)消去ごとのrateがあがる傾向がみられる。強化カウンターを1つ上昇するのに要した(レバーアクション数を)冒頭の5sessionと最終sessionと比較すると、累積記録を他のパターンであまり変化のない男の学生も、やや減少する傾向が見られる。(Fig. 5)

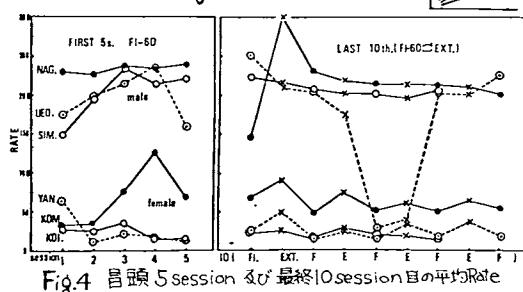
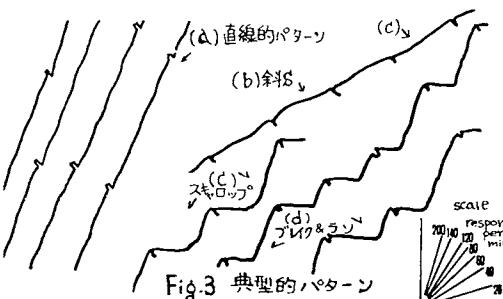
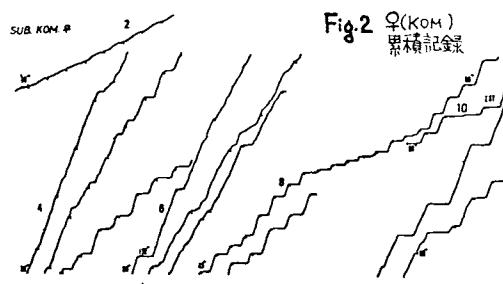
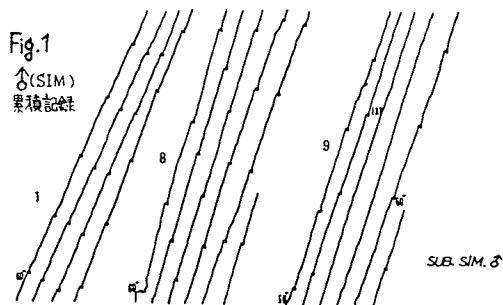
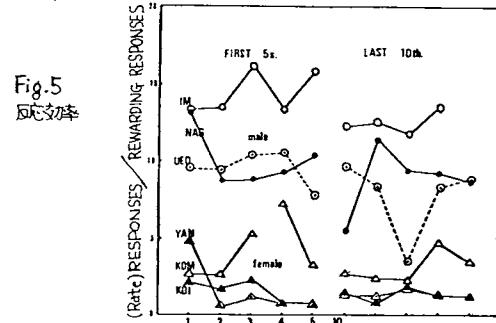


Fig. 4 昌頭 5 session および最終 10 session の平均率



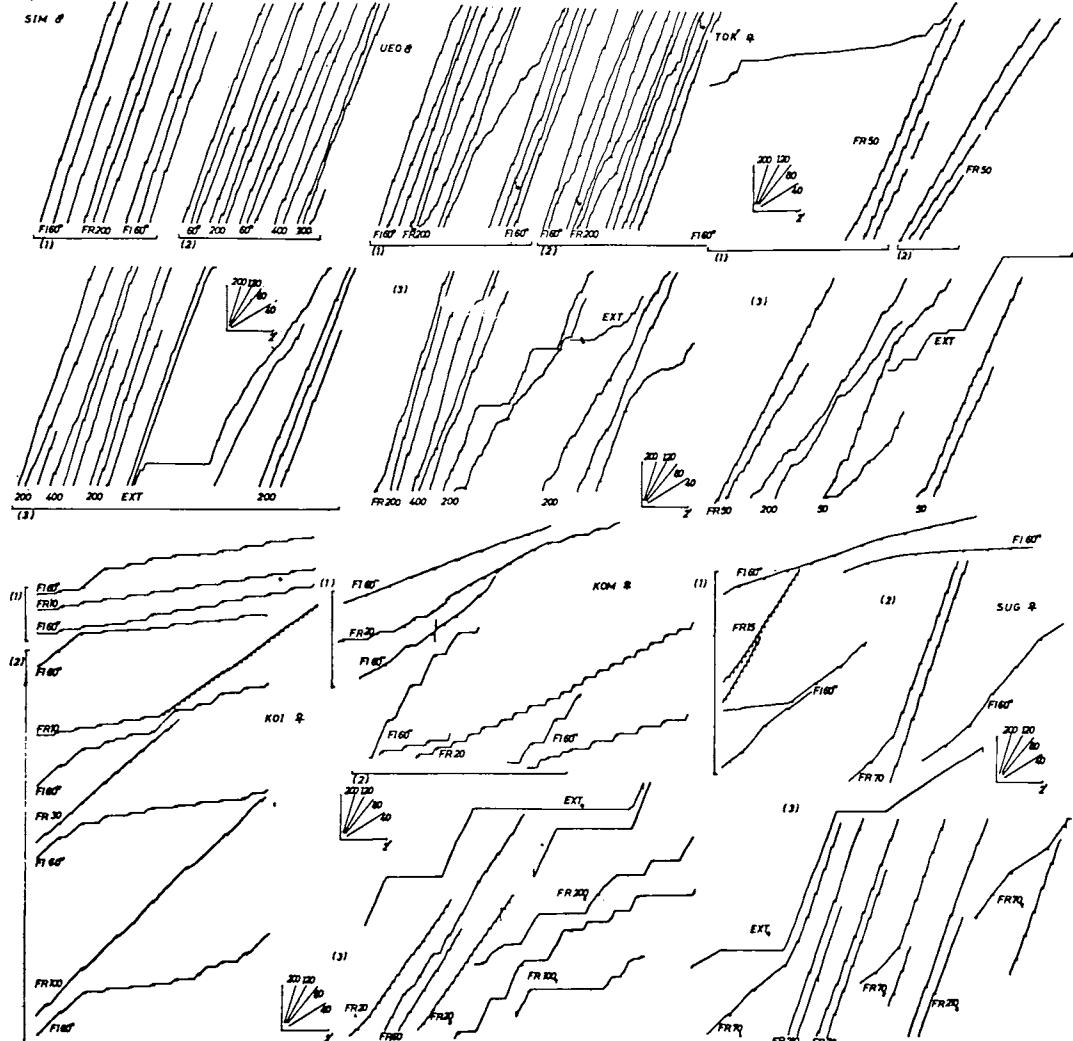
ヒトにおける強化スケジュールの研究

[III] ヒトのFRスケジュール

○山口耕一、佐藤文哉、植口義治、望月 錠
(慶應義塾大学 文学部)

[目的] 固定比率スケジュール (FR schedule) のもとでのヒトの行動の基礎的分析、及び FI schedule のもとでのそれとの比較検討を行なう。

[方法] (1) 被験者：今回の一連研究の四回において実験歴のある大学生5名（男2女3）及び未歴者男女各1名。(2) 実験者：一連研究と同じ。(3) 手続：一連研究と同じ。FI 60" と Value の異なる FR (FR50, FR200 等) のスケジュールが実験変数として採用された。実験期間3日間、3 session。



[結果] 下図の如く男性2名では FR の Value の如何に拘らず、直線的推移が示される一定の高反応率が見られた。女性1(下左)では、オ1日目スケジュールが FI・FR に拘らず Break & Run (以下 B&R と略) と呼ばれるパターンが見られた。オ2日目では FR スケジュールの下で出現していた B&R のパターンから、或は時点を以って、直線状パターンを示すようになり、以降 FI スケジュールに拘らず B&R, FR スケジュール下では直線状パターンを示すようになった。女性2(下中)では FR の Value が大きくなる時に B&R パターンが見られた。女性3(下右)では、特に Post Reinforcement Pause が見られた。EXT(消失)アートでは、各人に典型的な、大きな B&R が出現した。下図中(上左)(上中)が男性、(上右)は FI (一連研究Ⅳ)スケジュールで実験歴がない女性。

自閉症児の行動科学的研究(1)

藤原 豪, 天川 烈, 中静研二, 星 一郎,

(都立梅丘病院)

○高畠 隆

糸生多嘉子

(都立心身障害者福祉センター) (日本大学文理学部)

はじめに

一般児童の行動発達や行動特徴を捕えるのと同様、障害児童の行動発達やその特徴を明確にして行く事は、障害児童の早期発見、診断、早期療養、治療、予後などの上からも重要な事と言える。今日、行動特徴を捕える方法の多くは、自然的観察法により遊戲、治療場面における行動を現象記述的に記載したものが大半である。自閉児についての遊戯行動の特徴について論じた研究は多いが、客観的観察法によつたものは数少なく、TILTON et al (1964), 平井・上田(1962)等僅かである。

我々は、障害児童の行動特徴をより客観的、科学的に捕えて行く手段とするものである。そこで、人間の視覚の延長として発展してきた、産業用TVを利用して行く事とする。これは、遠方監視、集中監視、観察を中心利用されて來ている。さらに、それによつて得られた光学的情報を電気的信号へと変換すること出来る。従つて、それを利用して、各種の映像情報処理を行なえ、記録や再生が容易に行はれ行ける。即ち、これらTV情報を得られた電気信号に、種々の処理を

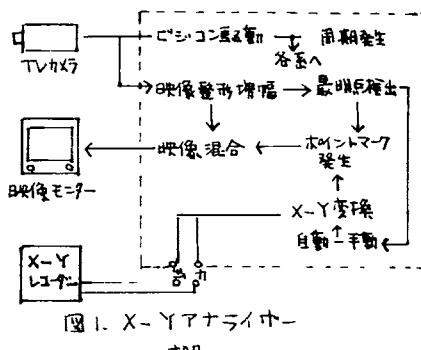


図1. X-Yアナライザー

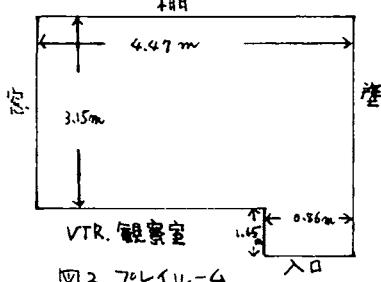


図2. フォレイーム

する事によって、各種の認識機能を持つ計測用TVが開発されて來ており、より広範な分野に利用されて來ている。

目的

今回、我々は目的や用途によつて各種のシステムが考えられる、計測用TVの一つであるX-Yアナライザー（浜松テレビK.K.製）を使用して、障害児童の行動特徴をより客観的、科学的に捕えることが出来るよう応用・開発する事を目的とする。

方法

光学的装置としてのTVカメラを利用し、広角レンズによつて、図2のフォレイーム全体を天井より捕える。それによつて得られた画像は、TV視野内の任意の点の位置を、X-Y直交座標軸電圧出力に変換する機能を有するX-Yアナライザー（図1）によつて、画面内の中から最明点（視野内の最大輝度の点）を最明点検出系で、自動的に探索検出する。計測点は画面の中心を原点とするX-Y直交座標軸電圧出力に変換され、映像モニター上にポイントマークによって表示される。更に、出力としてX-Yレコーダーへフォレイーム内での、一定時間内の児童の行動軌跡として自動的に記録がなされる。更に、同上の系統と別系統の2系統を同時にVTRに記録する。また、日常の臨床的観察結果等に基づいた、5分領域（人物、計人、空間と位置、静止や不関係、言語）の観察項目から成る記録票にチェックする。

フォレイーム室内が均一光状態に保たれる様にし、児童に白い園児服を着用させる事によつて、児童が室内での最明点を保持する様にする。

結果と考察

フォレイーム室内が均一光状態に保持され、児童が白い園児服を着用して、室内での最明点でTV画像上で保持されている状態において、X-Yレコーダーに正確に行動軌跡として記録する事が可能であり、児童の一定時間内における行動を一つの軌跡として、客観的により客観的、科学的記録として捕えられる。しかし、TV画像面より逸脱する出入口や扉の上に登った場合、あるいは、窓のカーテンを児童が開け室内が均一光状態が保持できない場合は、エラーとなる。

結論

本方法によつて、臨床場面で児童の行動により科学的に捕える事が可能である。さらに、今後は他の計測用TVシステム、例えはX-Yトラッカーやなどを応用すれば、同時に3点までの計測がより安定して記録化する事が可能と考えられる。

自閉症児の行動科学的研究(2)

藤原 豪、天川 烈、○中 静研二、星 一郎
(都立梅ヶ丘病院)

高畠 隆 瓜生 多嘉子
(都立心身障害者福祉センター) (日本大学文理学部)

目的

我々の考案した記録システムにより自閉症児の遊戲行動の特徴を出来るだけ客観的且つ多面的にうかえる。

対象と方法

対象は都立梅ヶ丘病院の自閉症病棟に入院中の3才より12才迄の児童11名と都立梅ヶ丘病院の外来と自閉傾向を認められた4才から6才迄の児童3名である。

対象児は自閉症児の行動科学的研究(1)で示した操作アシールームで自由に遊ぶ。出入口付近に大人が人居るが対象児に対する働きかけは一切れない。出入り口に向かいの棚には6種類ほどの玩具が置かれている。観察時間は15分である。記録システムについては自閉症児の行動科学的研究(1)を参照。

結果

表1 各対象児の対人行動

	K-I	T-N	Y-I	H-O	M-H	S-N	M-Y
I 無関係	無関係	無関係	無関係	無関係	利用	人ひと 相手	無関係
II 無関係	無関係	接糀	接糀	利用	利用	人ひと 相手	無関係
III 無関係	無関係	無関係	無関係	無関係	利用	人ひと 相手	無関係
T-W K-Y M-S M-K T-O Y-O T-A							
I 無関係	接糀	無関係	無関係	接糀	無関係	無関係	無関係
II 無関係	接糀	接糀	相手	接糀	無関係	無関係	無関係
III 無関係	接糀	接糀	無関係	接糀	無関係	無関係	無関係

表2 各対象児の玩具の操作

	K-I	T-N	Y-I	H-O	M-H	S-N	M-Y
I 不可 使用	不可 使用	不可 使用	不可 使用	不可 使用	無関係	手ひと 手ひと	不可 使用
II 不可 使用	無関係	投げろ	投げろ	投げろ	不可 使用	瓦キテ 待用	二ね百
III 不可 使用	無関係	無関係	乱打	無関係	投げろ	無関係	無関係
T-W K-Y M-S M-K T-O Y-O T-A							
I 無関係	投げろ	不可 使用	不可 使用	不可 使用	無関係	不可 使用	不可 使用
II 無関係	不可 使用	不可 使用	不可 使用	投げろ	不可 使用	不可 使用	不可 使用
III 無関係	不可 使用	不可 使用	不可 使用	投げろ	無関係	不可 使用	不可 使用

表3 各対象児の室内行動のパターン

K	T	Y	H	M	S	M	T	K	M	M	T	Y	T
I	N	I	O	H	N	Y	W	Y	S	K	O	A	
I	S	S	G	S	E	E	E	E	E	E	E	E	S
II	E	S	E	E	E	S	E	G	G	S	E	S	
III	S	S	G	S	G	E	S	E	S	E	S	S	E

E:探索
G:徘徊
S:静止

表4 各対象児の使用空間

K	T	Y	H	M	S	M	T	K	M	M	T	Y	T
I	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
II	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
III	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m

C:主として中心空間を使用
m:主として周辺空間を使用
Cm:不定

結果は(1)対人行動(2)玩具の操作(3)室内行動のパターン(4)使用した空間の4つに分手析された。分析結果は表1・2・3・4に示される。表中のIは開始後3分間で、IIは開始後3分から12分までで、IIIは開始後12分から15分までを各々意味する。

考察

表1から、対人行動に関して、対象児を無関係に何らかの対人行動を示した関係群と観察中対人行動を示さなかた無関係群ならびに時間の経過にともなう、対人行動の有無に変化を示した変動群の3つに分け得る。

表2から、玩具の操作に関して、対象児を無関係に何らかの玩具操作を示した関係群と時間の経過にともなう、玩具操作の有無に変化を見た変動群の2つに分け得ることがわかる。また何らかの玩具の操作を示した対象児を、操作内容に關して、観察中一定、操作内容を示した群と時間の経過にともない、操作内容に変化を示した群の2つに分け得ることが出来る。

表3から、室内行動のパターンに関して、対象児を継続して探索行動を示した探索群と時間の経過にともなう、室内行動のパターンに変化を示した変動群の2つに分け得ることが出来る。

表4から、使用空間に関して、対象児を無関係に周辺空間を使用した周辺群と時間の経過にともなる、使用空間に変化を示した変動群の2つに分け得ることが出来る。

結語

以上に示した如く我々の考案した記録システムにより自閉症児の遊戲行動の特徴をある程度客観的且つ多面的に示すことが出来たと思う。ただし今回の報告は予備的なものに過ぎず、系統的且つ詳細な考察は後日報告の予定である。

精神テンポに関する基礎的研究(第51報告)

三島二郎 長崎拓士 〇望月穎
(早稲田大学) (職業研究所) (大森大中)

目的:前回の研究に引きづき、本研究は運動および聴覚領域における精神テンポの研究の一環として行なうものである。この実験においては、簡単な英語の歌唱を行なう学習条件下で、指頭打叩をさせ、そのはやさを測定する。さらに、日常、みられる「脅えゆすり」(shake oneself nervously)の行動を観察し、そのはやさを測定する。これららの測定値と精神テンポとの関連性を検討しようとした。また、ある条件下で、「脅えゆすり」の如き行動が、どのくらいおこつているかを質問紙法によって調査した。

方法:本実験は、昭和53年7月~8月に行ない、中学生、123名(男子71名、女子52名)を対象とし、実験は普通教室で実施した。

1. 精神テンポの測定

(1) 運動領域

はじめに、被験者を椅子に坐らせ、閉眼させ、机上をさきての人さし指で、丁度よいはやさで打叩せせる。この10 sec.間の打叩数を測定し、5回試行させる。これを、たがいに影響されない時間間隔をあけて5回行なわせる。これら全ての測定値の最大頻度数の測定値を精神テンポとする。これは、全体の測定値の平均値とほぼ一致する。

(2) 聴覚領域

この実験は universal metronome を用いて、その断続音を被験者に聞かせ、極限法によつて、丁度よいはやさを選択せせる。試行回数は、指頭打叩と同じく、5回が行なわれ、精神テンポが測定される。

(3) 歌唱中の指頭打叩の测定

この実験は、被験者に、英語の歌唱をさせながら、指頭打叩で調子をとらせせる。この間に、10 sec.間の指頭打叩数を測定する。歌唱の時間は 約1分間で、最大頻度数の数値を測定値とした。

(4) 脅えゆすり shake oneself nervously

脅えゆすりという行動がどのようにしておこるかは、必ずしも明白にされていない。しかし、日常、ときには見られるこれらの行動は、無意識的である。この行動は、時々とき、如きの作業が一方で行なわれてからとき見られ、授業中でも、よく注意してみると、觀察できるものである。しかし、一分間位、連續して行なう生徒は学級でも数名である。そこで、このような生徒を対

象に、自由に黙読等させ、足先の行動を観察し、10sec.ごとに測定した。

5. 質問紙法による脅えゆすりの調査

授業等、学習時になんとなく行動をしてしまつ「脅えゆすり」について、学年別に調査した。

結果:Table 1. 2において、指頭打叩の精神テンポと英語の歌唱中の指頭打叩の間の測定値との関係を検討するための群間での比較である。Group 1~2~3 の順に平均値が下降し、1% or 5% Level で有意差が見られた。

Table 3 では、運動領域、聴覚領域の精神テンポ及び歌唱中の打叩、脅えゆすりとの相関係数を示していゝ。

Table 1 精神テンポ(Tapping)群間比較
歌唱中の Tapping の平均値の比較

	Group 1 速い (11名) はやきの群へ21	Group 2 中間の (15名) はやきの群へ20	Group 3 遅い (13名) はやきの群 15~
\bar{x}	22.6	19.0	15.8
SD	3.5213	1.6124	3.1304

Table 2 歌唱中の Tapping の群間における精神
テンポ(Tapping)の平均値の比較

	Group 1 速い (11名) はやきの群へ21	Group 2 中間の (15名) はやきの群へ20	Group 3 遅い (13名) はやきの群 15~
\bar{x}	22.0	18.0	15.2
SD	4.2496	1.7888	1.8439

Table 3 精神テンポ(Tapping·Metronomeによる)と歌唱中の Tapping, Shaking の相関係数

	Tapping ₁	Metro.	Tapping ₂	Shaking
Tapping ₁		.4836	.7654	.5556
Metro.				.9431
Tapping ₂				.7595
Shaking				

Tapping₁...精神テンポ Tapping₂...歌唱中の Tapping

Table 4 脅えゆすりの学年別比較

学年	1年 ± % 男	2年 ± % 女	3年 ± % 計	計 ± %
男	5/20 25.0	9/28 32.1	12/24 50.0	26/72 36.1
女	4/10 22.2	5/15 33.3	4/18 22.0	13/51 25.5
計	9/38 23.6	14/43 32.6	16/42 38.1	39/123 31.7

この表のように、脅えゆすりの行動が学年かず、もに従かいや、増加するか、以下検討する。

幼児の絵單語の反応時間に関する

一研究—絵單語の標準化への試み(3)—

○ 松本佳隆 長野文典
(帝国女子短期大学) (帝国女子大学)

[目的] 絵画刺激に対する幼児の反応過程は成人のそれとは相違することが示唆され、図1の反応過程モデルが仮定されています(日本心理学会第4回大会発表)。本研究は、幼児を対象として、線画に対する言語反応時間(Verbal Reaction Time: VRT)、運動反応時間(Motor Reaction Time: MRT)、および単純反応のVRT、MRTを測定し、絵画刺激に対する幼児の反応過程について更に検討を加える。

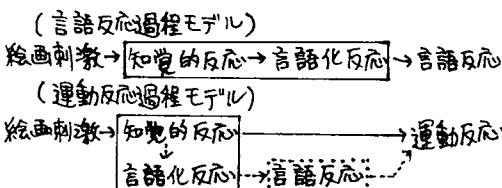


図1 絵画刺激に対する幼児の反応過程モデル

[方法] 1. 被験者: 幼稚園児26名(年長児90ヶ月～154ヶ月、年少児56～60ヶ月)。2. 刺激材料: 37の絵画タイプの線画の35mmスライド12種類(Aタイプ1～8、Bタイプ1～8、Cタイプ1～8)と青色のゼラチンの35mmスライド1種類。3. 実験条件: 反応方法[MRT, VRT], 実施順序[MRT→VRT<MV条件>, VRT→MRT<VM条件>], 刺激材料[絵画タイプA, B, C, 青ゼラチン版]。

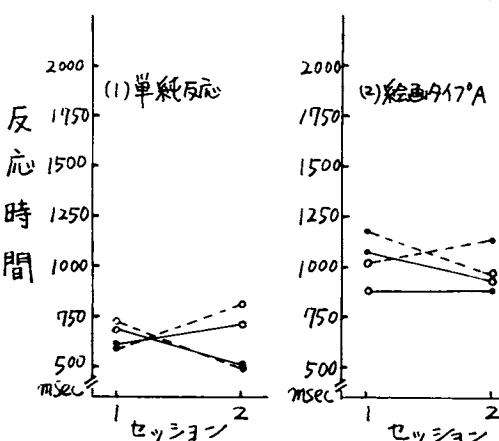


図1 反応方法の交替に伴う反応時間の変化

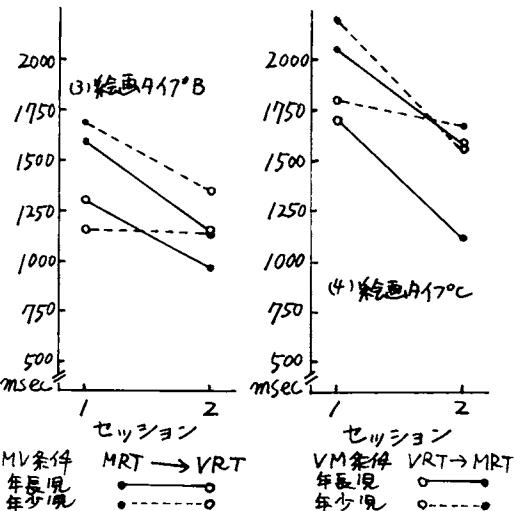
年齢(年長児、年少児) 4. 手続き: 幼児から1m離れた透視スクリーン(28cmH×14cmW)上にスライドプロジェクターにより刺激提示し、T KKテジタマイヤーで反応時間を測定した。マイヤーは刺激の提示と同時に指動させ、ボイス・キー(VRT)あるいはキー押し(MRT)の反応2秒終結させた。提示された刺激は反応の直後に消失させた。MRT, VRTの両条件とも、絵画刺激の提示前に青色スライドを提示し、各反応方法の単純RTを測定した。なお、MRT条件2では、刺激消失後に絵画材料に対する言語反応を求めた。

[結果と考察] 純粋反応についての分散分析の結果、年齢や実施順序にかかわりなく、MRTが有意にVRTより短かった($F=21.25, df=1/44, P<.01$)。しかし、絵画刺激についての分散分析の結果 F^2 は、VRTに対するMRTの優位性は消失していた。特に、年少児では、むしろMRTの方が不利となる。その傾向は命題の容易なタイプA条件で明確に表わされていた(表1、図2)。以上のことから、年少の幼児では、MRT, VRTのどちらの反応方法でも絵画刺激に対して必ず言語化してから反応しているようであり、本結果は表1 絵画刺激についての分散分析表

表1 絵画刺激についての分散分析表

果は図1 反応過程 df MS F

	df	MS	F	
実験群(A)	3	25.656	2.468	
の反応過程				
絵画A17°B	2	190.652	105.357 ***	
モデル				
色支持し	1	12.152	2.323	
2113と	2	0.071	0.071	
AxB	6	3.720	2.056	
考え方	3	30.684	5.866 *	
3.	AxBxC	6	5.649	5.680 **
全体	287	$*P<.05$	$**P<.01$ $***P<.001$	



乳幼児集団活動に関する研究 —集団状況における自己構造化の過程—

○吉川 晴美 鈴木 百合子 土屋 明美
(東京家政学院大学)(東京家政学院大学)(お茶の水女子大学)

〈目的〉幼児前期(1~3才)の集団活動について、関係的立場に基づき、次の観点から研究をすすめる。

自己と人と物とが共にかかわりながら育つ(接在性)を志向する; 集団活動の展開における(進む)自己構造化の過程を、①人間形成の形成位相における(結果)

②自己構造化の類型、③個々集団と相即的展開(構造化)をはかるうえの媒介(交叉領域)としての拠点活動領域の発展の過程(構造化と接點開拓)、④構造化による(もとより)集団活動の特色(内面)から明らかにする。

※松村康平、佐藤啓子「人間形成につれての関係学的考察」(第30回保育学会大会発表論文集1977)より

〈方法〉乳幼児集団実験活動(3才4期)における行為及び態度観察法。小集団のメンバーと役割構成: A(年少CS1年11ヶ月)、B(年少CP2年7ヶ月)、C(年少CM3年0ヶ月)保育者(母的役割、リード的役割)保育機能(方向提示、内容促進、関係展開の機能的役割連携)

自己構造化の類型との対応		拠点活動領域の展開過程		活動の特色(内面)
集団	個々構造	構造	接法	
成定期	〈基本型〉 		T (全体構成) Ba (個別活動領域)(個)	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭基盤的状況明確化技術 ・補助自我的接法 ・集団領域明確化の接法 ・状況設定の接法 ・身体運動による役割取扱い接法
形成期	〈連結型〉 		T S Ba	<ul style="list-style-type: none"> ・物理介人・認知の接法 ・相違行動時の危急化の接法 ・物変化による行動(促進)の接法 ・T-F-設定の接法
展開期	〈複合型〉 		Ba	<ul style="list-style-type: none"> ・コ-ナ-内役割明確化の接法 ・生活範囲的場面設定の接法 ・交叉包囲領域設定の接法 ・役割演示の接法
発展期	〈交叉型〉 		S Ba	<ul style="list-style-type: none"> ・状況内役割明確化の接法 ・色彩や光と影による色彩明確化の接法 ・状況における其時の場面設定の接法
統合拡大期	〈複合型〉 		S Ba	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的場面設定の接法 ・交叉領域軌道化的接法 ・頃成・意味軌道の接法 ・新規活動領域設定の接法

A~D: 自己構造化の類型 S:自己領域 P:人物域 O:物領域 A-F:起動点 (○:潜在的 ○:機能的 ●:現実的)

〈統括的考察〉①集団状況における自己構造化による(もとより)の発達的課題: 基本型→連結型への拡大(例:自己の人、自己的物を媒介にした能動性を高め)、連結型の充実から複合型への発達(例:人(活動)及び生活範囲的場面における機能的役割明確化)、複合型の発達从

②交叉型への転換(ex:交叉軌道領域における媒介に相互に接するよう接點を構成)、交叉型の連続的展開。

③所定活動領域の展開(特質): 共通基盤的→難同的→焦点的→機能的→交叉包囲的→生活範囲的→交叉軌道的→意味軌道的→絏済的問題的→未来指向的(生活範囲的)

幼児言語発達に関する追跡研究(第8報)
 —乳児の言語行動に対する育児者の態度の分析(その4)—
 中塩 純子
 (大分大学教育学部)

目的：乳児期の言語発達に重要な役割を担う育児者(母親)の育児行動について、さきに母子のコミュニケーション場面の分析(教心1975, 広川1976)及び不快発声に対する育児者の育児行動の分析(広川1975)という観点から検討を行った。今回は更にコミュニケーション場面での育児者の反応や働きかけ方と、他の被験者を対象として分析し、その種別的な姿勢について検討することを目的とした。

方法：1. 対象 T児、M児(夫婦)とその母親(第1報と同じ) 2. 資料 0;3から1;0までの毎月の録音テープ並びに同時觀察記録 3. 手続き ①発話単位については浜名ら(1973)の研究を参考にし、1息の音声連鎖を1発話とした。②月齢の区分は津井ら(1964)の運動の発達段階を基にT児、M児の運動発達の状況を加味して3段階(I: 発動的身体制期 0;3~0;5, II: 積極的身体制期 0;6~0;9, III: 振動的努力及び歩行の篤の協同動作期)とした。

結果及び考察 1. 1語文中ににおける発話数 表1 から明らかかのように各期の発話総数はかなりの開きを生じてはいるが、M児母の場合は発達と共に増加の傾向を示している。1語文の構成状況をみると、1語文=1発話という場合が圧倒的に多く、殆どの月で60%を超えており、2発話も20%以上の月が多い。最高はT児母では6発話、M児母は7発話であった。発達的にみると、M児母はどの期でもほぼ同じ傾向を示してはいるが、T児母では1発話は発達の進行に伴って減少し、逆に2発話以上の場合が次第に増加して1語文の長さは長くなっていた。

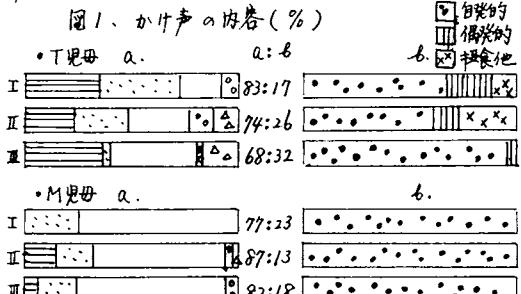
2. 発話 表1. 発話数及び発話内容(%)

回答の会員	I			II			III		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
近全認 誰を浜名 母	820 (45.9)	832 (44.4)	600 (41.4)						
	153 (8.6)	152 (7.6)	158 (10.9)						
	813 (45.5)	1026 (57.0)	691 (47.7)						
計	1786 (100.0)	2010 (100.0)	1449 (100.0)						
の割合									
M 児 母	A 147 (46.4)	B 327 (49.4)	C 619 (51.3)						
ゴリーハ 児 母	A 37 (11.7)	B 42 (6.3)	C 71 (5.9)						
分類し 計	133 (42.0)	293 (44.3)	516 (42.8)						

3群(A群: 相手の反応を期待した発話、B群: 相手の働きかけに対する発話、C群: A,B共に期待しない発話)にまとめたところ、A, C群に集中し、B群は約1割であったが、これは乳児期ということから当然

の結果であろう。発達的にはT児母の場合A群は減少、C群は増加の傾向が、逆にM児母ではA群の増加、B群の減少の傾向が認められた。各群内のカテゴリーについてみると、A群では「問い合わせ」「呼びかけ」がほぼ全期に亘って20%以上を占めているが、「指示命令」はT児母では0;7以降、M児母は0;9以降と発達後半に多くなっている。B群では「発表・承認」がほぼ全期に亘って20%以上、「説明」「あへつち」は特に後半期に多い傾向が認められた。またC群では「かけ声」が全期間に亘って22~25%の他はあまり集中する項目はなく、わざかに「報告」がT児母に0;4から0;10まで連続して20名を示している程度である。以上より発達期を通じて母親が行う発話の内容は特定のものに偏りがあり、子の発達に応じて次第に多岐に亘っていくことが認められた。

3. 「かけ声」の内容分析 発話内容の分析によりC群中最も発話率の高かった「かけ声」について振り上げ、その場面と種類について分類を行った(図1)。



「かけ声」は a: 母親自身の側から積極的に行う場合と、b: 子側の何らかの誘因に対応して行われる場合がある。割合はいずれの時期でもaが過半数を占めていたが、両児母とも子の行動や反応を即座にとりあげた発話が発達の進行と共に増加していた。aについて両児母を比較すると、T児母はどの場面でも常に開けていたが、M児母は0;5までは姿勢を変える時や品物を渡す時にかけ声をかけることはなく、その後も間接的接觸場面での発話が中心となっていた。bは殆どが自然的行動であった。「かけ声」の種類としては行動ばかりかわしい、それらしい表現をする場合が多いが、中には全く関連のない表現や無意味音声が用いられるものがあった。また、同一のかけ声が変形して用いられることが多い、特にT児母の場合、「よいしょ」は発話場面の多様さと共に変形種も認められた。同一行動に対するかけ声の種類についても同様で、これらから表現力の豊かさが伺え好みの育児態度と思われる。

WAISによる年令的知能構造の変化

(1)各下位検査項目

(2)言語性知能・動作性知能の年令的变化傾向

児玉省・龜田紀子・吳孔子 中西郁子 内藤恭子
(情報発達研究所)

I 目的及び方法

児玉は1956年品川・印東丙氏と日本版WAISの標準化をしたが、その時の16歳～64歳の対象1682名の資料のうち特に各対象が言語・動作性検査の下位検査一問一間に即して示した平均通過率を用いて16歳～17歳～19歳～20歳～24歳～34歳～44歳～54歳～64歳の7段階の年令群において①この通過率が成人期においていかに変動するかを考察し②高年令期といわれる55歳～64歳特に65歳の知能状態は成人期中の最盛期(各下位検査ごと)からどの程度落ちているか③各下位検査のうちどの検査が、所謂Hold-testまたはDouble hold-testであるかを検討したいと考えた。WAIS原版の製作者Wechsler博士はこの問題について1958年版成人知能の判定と評価の中で次のように述べている。成人知能の最高能力に到達する年令はテストによつて異なるが大部分の場合20歳代の真中でろである。そして一度その能力が衰退し始めたらこの後は止まるところなく衰退が進行する。30歳～60歳ごろはその能力は多大直線的カーブを示すと述べているが我々の検討もこの線に沿つて進めた。果して一度落ちると段々落ちるのだろうか。又衰退はどのような型で出てくるだろうか。

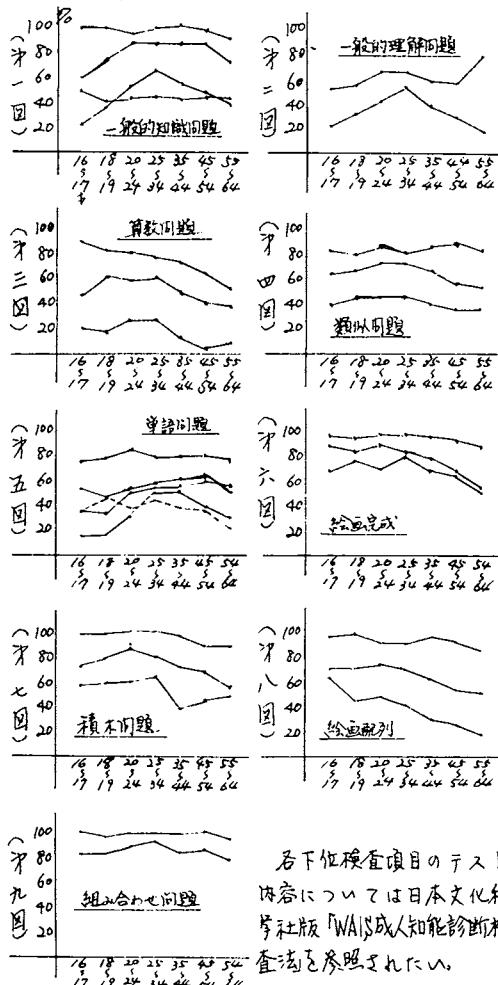
II 結果及び考察

(1)各下位検査項目

各下位検査項目における年令的展開の状態は極めて類似したカーブを画くものがあるのでこれらを複合カーブとして製作し知能の進展状態を考察した。①大まかにいって下位検査のどれも一つだけのカーブで把握されるものはない。大部分は二つ以上のカーブで代表されている。しかもこのカーブの傾向(前高後低に対して前低後高のようにしぶしぶ相反傾向)を示すものがある。②所謂高年令期(55歳～64歳)は数例の場合を除いて年令群中最底の能力を示すのが特徴である。

③下位検査によつては、この平均通過率の曲線が全年令群を通じて殆んど平坦に近いものがある。又減少が徐々に進行するものと急減するものがある。急減とはここでは15%～20%以上の低下を示すものと定義した。また中高で前後が低いもの、年令後半までPlateau状態(高原状態)が続き最後に落ちているものがある。

各下位検査項目における年令的展開



各下位検査項目のテスト
内容については日本文化科学社版「WAIS成人知能診断検査法」を参照されたい。

上記のグラフは言語性及び動作性検査の各下位検査項目における年令的展開であるがその傾向は各回の示すとおりである。特に特徴を示しているのはオーカー＝ハーマンの理解とオハムの絵画配列である。一般的理解の一本は最終年令で最高とし、絵画配列では16歳～17歳でピークの能力が最終年令で始め最も減少していく。

これを類型に分類すると次のようになる。

①20歳ごろから最終年令(55歳～64歳)まで殆んど直線または直線に近いもの

②最初の年令から最終年令まで漸次下降するもの。

③20歳ごろから34歳ごろまで中高年令群(30歳～40歳)がピークの山型で、この前後が下降していくもの。

④25歳までは55歳のところから44歳または54歳ごろまで殆んど高原状態を示しているもの。(次頁へつづく)

(前頁のつづき) <WAISによる年令的知能構造の変化>

⑤最終年令(55～64才)が最高を示すもの。55～64才は高年令またはこの入り口と見ているが、この年令のところが殆んどどのカーブでも最低点となっている。ただし、その例外がある。例えは一般的理解のように一つのパターンは最終年令(55～64才)が最高を示すクレープがある。55～64才でカーブが上昇することは、いうまでもなくこの年令でその能力が改善されたか、新しく獲得されたと考えるべきである。

⑥急落するもの。多くの下位検査の能力は55～64、45～54、35～44才で落ちるものがある。急落とは15～20%以上の減を示すものである。

(2) 言語知能と非言語知能の年令的变化傾向

・高年令期の能力の減衰程度…高年令期の能力は大部分の下位検査で最低を示すが最盛期と比べてどの程度おちているかを見るために次のような表を作製した。

高年令期の能力の減衰程度

テストの種類	最盛年令	減衰度
一般的知識	16～44才	殆んど直線的
	20～54	
	25～34	20～30%
一般的理解	55～64	むしろ上っている
	25～34	30%
算数問題	16～17	35～40%
	18～34	20～25%
	20～34	20%
類似問題	20～54	殆んど直線的
	20～34	20%
	18～34	
単語問題	20～24	殆んど直線的
	45～54	15%
	45～54	
	18～19	20～25%
	35～44	20～25%
絵画完成	16～34	殆んど直線的
	16～24	30～35%
	25～34	30%
積木問題	20～34	
	20～24	25～30%
	25～34	20%
絵画配列	18～19	
	20～24	20%
	16～17	50%
組み合せ	16～54	殆んど直線的
	25～34	

一般的理解、単語、積木、絵画配列組合せにはやはり直線に近いものがある。また直線的でないものでは10～50%まで落ちるものがある。減少を示したのは、絵画配列の一部である。

2. Hold-test と Nonhold-test…Wechsler のこの考え方では能力は他の能力に比べて年令による減衰がおそいという考え方に出発しているもので、例えは単語理解の要求する能力は符号類似記憶中数唱の要求する能力よりもるかに長持ちすると述べ最大能力に達する年令はテストによって違うが30才以後にそれがくることはまれで大部分は20代中期である。一度こひ衰退が始まるとそれは中断なしに進行すると述べ Hold-test として単語知識組合せ、絵画完成。Nonhold-test として数唱類似符号、積木をあげている。しかし我々の資料からは、類似、単語知識、理解それによれば組合せが Hold-test で算数、絵画配列、積木が Nonhold-test に属するかもしれない。(残りのテストは資料不足ではある)。

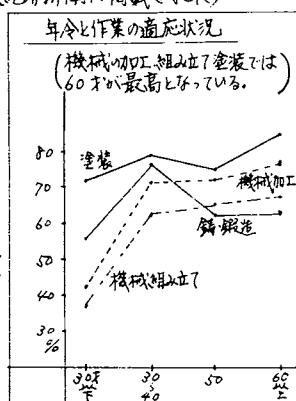
我々は Hold-test を連続する年令グループの通過率が実際的に安定しているもの。その内の変動が最も限10%以内にあるものを定義する。従って年令群の大半について通過率が高原状態にあるものはホールド的特徴を示すものである。

III 結論

知能の成人期における年令的变化及び高年令期における知能の内容と位置は Wechsler 傑士の提案したものよりも複雑なようである。高年令期(55～64才)の知能内容は我々の資料では初期成人期から萎縮した何ものかだけではなくて萎縮から結果したものや後期成人期において改訂せられ、または新しく獲得されたものである。

我々の研究結果を直接そのまま取り扱うわけではないが、最近多めこれと関連があると思われる報告が発表されている。(日本経済新聞に掲載された)

機械振興協会経済研究所で発表して機械工業における年令と職務に関する調査研究レポートで中高年の職業能力が若年層よりむしろ高いとする報告である。専門のようなクラフが該付してある。高年令の能力の再評価として興味深い。



小学校児童の製図における投影一構成行為の発達

城 仁士
(九州大学 教育学部)

目的

製図学習の基本となるのは、実物や2次元平面上に描かれた立体を2次元平面に正投影する行為(投影行為)と、それとは反対の2次元平面上に描かれた正投影図から、3次元立体を表象・構成する行為(構成行為)である。本研究の目的は、小学校児童でも適切な教育を行はえば、ユーリッド的空间表象能力を形成でき、容易に投影図法を習得させることができるという立場から、対象となる上記の2行為の発達の諸相と行為の特質を明らかにすることである。

方法

- i) 被験児 福岡市立H小学校の2年生20名、3年生43名、4年生20名、6年生20名 合計103名。
ii) 実験期間 1977年4月12日～5月11日の約1ヶ月。
iii) 実験手続きおよび課題

実験は、個別実験の形式で行なわれ、子スターは、所定の手続きの書かれた手引きにもとづいて実験を進めた。課題は次の2課題である。(実際は、この他に4課題実施したが、ここでは2課題について考慮する)
①描画課題 子どもの前に実物のカップと描画用紙を置き、3角法でカップの正面、右側面、平面図を描画させる。次に、同じ手続きで、ケント紙に等角投影法で描かれた3角柱の3面図を描画させる。
②読図課題 3角法で描かれた立体の正投影図から、直接、立体をイメージさせ、そのイメージを立体画法(等角投影法あるいは斜投影法的に)で描画させる。

結果と考察

I) 投影行為の発達 Table 1 は、カップあるいは3角柱の3面図を全て正答した被験者数と各面毎の正答者数を示したものである。この結果から、1) 実

課題 項目	カップ(実物)		3角柱(2次元平面上)	
	全図面正答	正面側面平面	全図面正答	正面側面平面
2(N=20)	6(30)	11 9 7	0(0)	2 4 2
3(N=43)	11(25.6)	27 15 16	1(2.3)	10 22 3
4(N=20)	10(50)	14 12 11	4(20)	9 11 5
6(N=20)	15(75)	17 16 19	8(40)	12 17 9

Nは被験者数 ()は%値

物の投影よりも2次元平面上の立体の投影の方が困難である。2) 実物の投影に関しては、ほぼPiagetの発

達段階にそって発達している ($X^2_{(3)} = 15.478 \quad P < .01$) のに対し、2次元平面上の立体の投影は未発達である。3) 2次元平面上の立体の投影の場合、平面への投影が最も困難であることがわかった。2次元平面上の立体が实物よりも困難である理由として、対象が2次元平面上に描かれているため、対象を再度、表象レベルで立体化して投影しなければならないので、实物の場合より、高次の空間表象能力が必要とされるからだと考えられる。

II) 構成行為の発達(表象レベルでの立体の構成)
読図課題では、全学年を通じて、正答者は1名もいなかった。そこで、子どもたちの描画をもとに、反応水準を設定し、発達および課題の困難性の特質を検討する。反応水準は、次の6レベルである。0レベル: 教示が理解できない。Iレベル: 教示は理解できるが描けない。IIレベル: 3面図の中の1面図をとりだしたり、図面を単純合成して平面的に描画する。IIIレベル: 立体的に描画するが、立体の形がまったく違う。IIIaレベル: 立体的に描画し、形もほぼよいが、一部が誤っている。IIIbレベル: 完全正答。これらの反応水準にともすいて、子どもの反応を整理、分類すると Fig. 1 のようになる。読図、つまり正投影図から、直接、

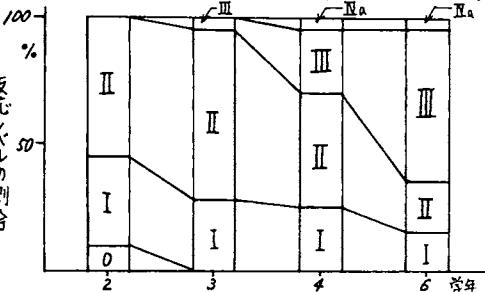


Fig. 1 読図課題における反応レベルの学年別割合
立体イメージを表象するという構成行為の困難性は、低、中学生児の反応から明らかのように、正投影図情報を加工せず、そのまま利用していることに起因している。また、6年生は、遠近法を習得しているので、立体的な描画はできるけれども、正確な立体イメージを表象しているとは言えない。すなはち、読図能力を形成するためには、立体画法を教えるだけでは不十分であって、正投影図から立体イメージを得るための一般化された情報変換操作を同時に教える必要がある。

緒論

投影一構成行為は、小学校児童において十分発達しておらず、特に、表象レベルでの構成行為を形成するには、正投影図情報を立体情報を変換する操作を具体的、対象的行為として教える必要があると考えられる。

選択的記憶について

大下文輔 (リハビリテーションセンター鹿敷湯病院)

Treisman (1964) のモデルをはじめとする多くの情報処理モデルでは、刺激の意味的特性による選択は高次の処理であるという前提がある。そしてその中では、一回認知されたら棄却された情報は、復唱されることもなく、何の作用ももたらさないとされている。そこで、積極的に忘却しようとして注意を払われるのではなく、認知はされるが再び引き出されることのない記憶に、処理の影響がないかどうかを実験的に調べることにした。もし、認知における *attention* を主張するなら、ある注意の配分にもとづいて処理が行われているはずである。その注意配分の程度に応じて、認知段階の処理の影響が出力に何らかの形で表われるととき、それを選択的記憶と呼ぶ。

2つの実験が計画され、両者とも人為的に注意の配分をその集中する部分とそうでない部分とに分けられる場合において、情報の選択状況をできるだけ反映するようにした。

〈方法・手順〉

実験 I

使用刺激：2文字から4文字のひらかたで構成される有意味の單語を刺激材料として用いた。それらの単語は、熟知されていてしかもその帰属するカテゴリが日常的に容易にそのカテゴリ名を連想し得るものであるという基準で選ばれた。

対象者：健康な一般成人。大学生56名。

実験場所：早大教育心理学教室知覚実験室。

日時：1977年9月より11月まで

方法：40アイテムを1リストとしてプロジェクトにより、スクリーン上に刺激を視覚的に1つ1つ連續的に提示する。但し、1リストの内訳は、1カテゴリ8アイテムのものを5カテゴリ用意し、うち1カテゴリをR(relevant)カテゴリ、残りをIR(irrelevant)カテゴリと称する。提示にあたって被験者に、Rカテゴリ(例えば魚の名)だけを覚えよとの教示をうえ、提示後に再生させるというtaskを課した。さらに、このtaskの終了後、再認リストを5え、IRを含む提示カテゴリの再認をさせるというtaskを課した。再認リストは提示リストの各カテゴリより4アイテムずつ計20アイテムを選び、新たに各カテゴリ4アイテムずつ計20アイテムを加えて提示リストと同じサイズになる

ように作られた。再認タスクは1枚の紙面に並べられたりストに、スクリーン上で見たと思うものに○、そうでないものに×をもやなくつけよとの教示のもとに行われた。リストは再生、再認各2種類作成した。

実験 II

実験Iとリストの大きさを等しくしたうえで、Rカテゴリを4アイテムずつ2カテゴリ、IRカテゴリを4アイテムずつ8カテゴリ計10カテゴリについて、実験Iとはほぼ同様の手順にて行なった。なお実験IとIIの10カテゴリは共通のもので、実験IIの被験者数は16であった。

目的：実験Iと比較して、もし再認率が低下するならば、刺激認知後にカテゴリ処理を行い、なんらかの形で保持するための分類が行われたことが考えられるし、もし再認率が実験Iと等しくかつカテゴリ間の再認率が等しいならば、選択的記憶の performance はカテゴリ数ではなく、リストの大きさに依存していると考えられる。実験IIではこの点の検討を目的とした。

〈結果および考察〉

再生率(Rカテゴリ)においては、両実験ともほぼ90%で、taskが容易であったことを示す。実験Iでは提示順と同じ順序でアイテムの再生を行ったものが殆んどであったが、実験IIにおいては再生項目のカテゴリによる群化が認められる被験者が多かった。

IRカテゴリの再認率では、実験I 2.1%，実験II 76.7%とともに1%水準でチャансレベルよりも有意に高い値を示した。しかし、この両者に差は認められず提示時におけるカテゴリ数は再認率に影響を及ぼさないということが少なくともカテゴリ数8以下の範囲で示された。ただ各カテゴリの再認率を実験IとIIで比較すると両者に差はないが、全体の再認率は実験IIが5%水準で有意に高く、仮説の検証は行えなかつた。IRカテゴリの再認率はまた、Rカテゴリのリハーサル量の増加に伴い、やや低下する傾向を示した。しかし、提示順序、カテゴリ、その他の要因に較べて、個別のアイテムのもつ質的な適切性、たとえば、音韻、他の語との意味的統一性の強固性などによると思われる原因から、個々のアイテム間の再認率の差は非常に大きい。再認率の高さは、選択処理の痕跡であると同時に、再認時におけるguessなどの再体制化の効果にも依存し、この両者を分離することはできず、今後の課題となつた。

いずれにせよIRカテゴリのわずかな選択処理の効果を引き出そうとする方略がもしかしながら、再認率はチャансレベル内に収まつたであろう。

非行少年の教育

奥沢良雄
(法務総合研究所)

1 非行性とは

非行は導きやすい人格的準備状態、あるいは反社会的行為を行いやすい性格と一般に言われていますが、その形成過程や、社会・文化的意義を統合して言えば、社会的人間関係の学習を失敗した精神構造とも表現されよう。例えば、幼少期の親子關係の不調から子どもの情緒障害や、親に対する同一親の発達障害などがあるたらされるとされる子が、それは同時に、親・教師等に表現される社会的心理学への同一親の発達障害の意義を持つ。また、非行少年・犯罪者の多くの類型研究からも、このことは裏付けられる。

2 積正とは

非行性をこのように見えるならば、積正とは社会的人間関係の再学習を指導することとなる。積正は、単に、教科教育、職業指導、体育、医療、保健調整等を行うことと指すではなく、これらをその一部に想み入れながら、社会的人間関係の再学習を指導することである。

3 積正の方針としての集団的処遇

積正が社会的人間関係の再学習を目指すものであれば、その指導は、集団場面でなされた指導も自然である。そこに、施設内処遇の修飾した機能、役割がある。一方、施設外処遇においては、従来、いわゆるケースワーカーとして、個別的指導を中心的に行われてきたが、それも、個別的、社会的人間関係の再学習を指導していけるものとして考えることができよう。

4 施設内処遇の欠陥の克服

施設内処遇については、従来、教育の場としての欠陥として、①自由拘束化 ②施設主義の風土 ③犯罪集団の下位文化支配などが指摘されていく。しかし、①については、そのような状況からならざれば法的、道義的、社会的背景は、非行者達の社会的学習のよい契機となりうる。③については、元来、教育とは確固たる性格を有するものであり、かつ、多かれ少なかれ強制的指導等を必要とする矯正にとって、教育的機能は却って欠くべからざる指導条件でもある。いわゆる管理的な権威主義的色彩は、現在の少年院には見ることが困難である。②については、共通の問題を持つ者の集団では、却つて共通の問題意識による活潑な相互作用が見られる。かくして、施設へマイナス機能と目されていくものは、却つてプラスの機能にも転化されるものとなる。近年における施設の設備改善、処遇改善、収容者の質・量の変化等、これまでの動向を経て今日の矯正施設は、すこじて明るく健康的な雰囲気のものとなっている。

能と目されていくものは、却つてプラスの機能にも転化されるものとなる。近年における施設の設備改善、処遇改善、収容者の質・量の変化等、これまでの動向を経て今日の矯正施設は、すこじて明るく健康的な雰囲気のものとなっている。

5 施設内処遇の現況

今日の施設内処遇は次のようないくつかの特徴とフルに展開しつつある。①集団場面における相互作用、②集団編成、個別処遇混合を含む計画的教育、③24時間中、かつて重要な期間における子集中的教育、④整備された教育設備、社会的資源の活用の便宜性、⑤教育専門家集団による教育。こうした状況の中で、特に、GIGI、役割活動、自治的活動、集会活動などの集団処遇技法、カウンセリング、心理療法、心理劇、施設療法等の事例的処遇、各種教育・技能指導、各種資源、免許取得などが活潑である。

6 集団的処遇の諸相

(1) 積正性・民主性—集団的処遇は、管の高い集団を作り直さねばならない。個人の尊重を基調に、自己への配慮、相互批判、相互援助等を重んじ、集団と個人が同時に成長する。それは、特殊教育における統合教育と並ぶ積正性・民主性を持つ。

(2) 社会性—施設は元来社会的施設である。いわゆる地域社会の教育、保護者による教育、院外補導、精神鑑定などの業務は、この点から理解されねばならない。就放前準備教育も、單なる施設外処遇への移渡ではなく、施設内処遇の社会的教育の完成段階として理解せねばならない。

(3) 類型別処遇—集団場面で個別的問題に応じて処遇を効果的に行うために、類型別処遇が考案された。類型別処遇は、処遇の効率と高められ、現実吟味に乏しくなる。このため、施設内処遇の展開過程で、適当な集団編成替え、混合収容、子育、帰省、外出、外泊、院外補導などを考案されている。

(4) 施設外処遇との役割分担—施設内処遇は、施設外処遇の失敗者を改善策として収容処遇する場ではなく、上記のような集団的処遇場面における教育的对象者として小さめの問題を処遇する場であり、対象者は子供では早期に収容処遇すべきものである。現在の少年院は、このため、短期、開放的な施設もある。

(5) 成行き—昭和32年全国少年院出院者の3年間の再入率は54.1%、49年出院者のそれは17.6%と、その成績は相当改善されている。また、別の研究からは、施設の教育訪集は、社会的人間関係に対する洞察、神人の態度の改善にあるとの指摘もされている。

幼児教育者の適性に関する研究(第4報) —教育実習を通しての自己評価を中心に—

後藤嘉介
(東京家政大学)

目的:保育者の適性を規定する要因を追求し、養成上の方向性を見出そうとする窮屈の目的を達成するために、保育者の条件という観点から、性格特性、志望動機、適性感、実践経験等の関連と総合的に捉えようとするものである。先に(庄内1976)、保育関係の学生と対象に、実習効果に視点をかいて保育者と(以降自己評価)に関する分析を試みたが、今回は更に、実習段階における評定の変化を実習状況と考慮に入れて検討し、併せて保育現場から要請される保育者の条件について考察する。

方法:面本による保育者の自己診断表と参考に、質問並びに実践的側面を考慮して19乃至29の評価項目を設定し、幼稚園教職課程履修者13対して、1次(観察・参加)、2次(総合的)実習終了後の7、1月に自己評定を求めた。評定には5段階尺度を用い、肯定的評価から否定的評価まで5~1点をえた。対象となる学生は、1973~4年度の児童学科4年65名、短大保育科2年228名である(幼稚園希望者はいずれも7割弱)。また、1974年9月~1975年3月、東京及び近畿の幼稚園に依頼した保育問題調査のうり、保育者の条件について回答があつた160園の資料を分析の対象とした。

結果及び考察:(1)実習段階における評定の変化 表1は、1、2次の共通項目につき評価得点の平均値を示したものである。胸筋点の評定を比較してみると、

表1 実習段階における評定の相異

評価項目	大学生		短大生		
	第1次	第2次差	第1次	第2次差	
健康	3.91(0.70)	3.88(0.69)	3.842	3.92(0.80)	3.42(0.67)
清潔感	4.06(0.63)	4.17(0.83)	0.847	3.96(0.77)	3.74(0.71)
言語・音声	3.45(0.68)	3.49(0.66)	0.428	3.47(0.71)	3.61(0.70)
態度	3.75(0.66)	3.82(0.98)	0.528	3.83(0.77)	3.75(0.74)
明朗性	3.65(0.79)	3.88(0.77)	2.027	3.64(0.79)	3.74(0.80)
誠実性	4.02(0.73)	3.72(0.83)	0.765	3.92(0.76)	4.05(0.77)
責任感	3.77(0.65)	3.78(0.73)	0.158	3.79(0.74)	3.86(0.75)
愛容性	4.00(0.63)	4.06(0.72)	0.518	4.00(0.77)	4.23(0.71)
協同性	3.78(0.57)	3.87(0.99)	0.174	3.79(0.70)	3.86(0.71)
積極性	3.85(0.61)	3.82(0.82)	0.246	3.72(0.71)	3.93(0.73)
園の保育方針の尊重	3.75(0.68)	3.80(0.81)	0.342	3.64(0.70)	3.81(0.77)
幼児に対する愛情と理解	3.74(0.71)	3.82(0.74)	0.597	3.57(0.73)	3.86(0.74)
幼児との接觸	3.89(0.73)	3.95(0.81)	0.457	3.93(0.82)	4.12(0.75)
保育者としての立場の意識	3.82(0.63)	3.57(0.70)	2.153	3.82(0.74)	3.55(0.63)
保育研究に対する興味・熱意	3.66(0.64)	3.40(0.63)	2.172	3.62(0.74)	3.48(0.70)
幼児の発達及び行動的理解	3.49(0.64)	3.26(0.53)	2.068	3.35(0.61)	3.39(0.62)
保育環境への配慮	3.83(0.71)	3.65(0.64)	1.554	3.77(0.72)	3.74(0.68)

() 内は標準偏差

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

大学生では健康、明朗、意識、熱意、理解の5項目に差がみられ、しかも明朗性を除いてどれも得点が低下していく点が注目される。他方、短大生の場合には愛情、接觸、積極性等凡てが減少傾向に变化が認められるが、健康、意識以外は高くなるものもある。健康並びに保育態度に対するのは、実習成績が准じて従来、觀察的、補助的域から主体的立場の行動が増加すると、指導と考慮した再評価がなされたものと考えられる。こうした傾向は特に大学生に著しいといわれられる。一方、短大生にみられた評定の上昇は、幼児への直接的接觸による興味と理解の強化に基づくと推察される。

(2)実習状況による評定と相異 実習初期の受入れ態勢に着目し、比較的標準的であると思われる幼稚園(a)と、これ以外の場合(b)とに大別(く)、両者の組合せで4条件に分類した(I-a×a, II-a×b, III-b×a, IV-b×b)。1、2次共通項目の平均評価得点を条件別に平均値に表したものである。実習段階と条件の2要因から

表2 実習段階別 条件別平均評価得点 分散分析を行

	大学生		短大生		F結果、大學生の場合
	I	II	III	IV	
第1次	3.88	3.87	3.76	3.58	4.01 F(3,448)=2.617
第2次	3.78	3.51	4.02	3.69	3.90 F(3,63)=3.65
N	18	19	15	13	15 65 73 25

れで、短大生には条件と交互作用がそれなり(F(3,448)=2.617 P<.05, F(3,448)=4.499 P<.01)で有意であった。更に、条件別に実習段階における差を検討すると、条件Ⅱは1次、Ⅲでは2次の得点が高く(T(64)=3.448 P<.01, T(22)=3.803 P<.001)。他にいずれも有意差が認められない。即ち、標準的な実習状況で高評価する傾向があるのがわかった。また、園側の受け入れ態勢が自己評定と方向づける要因となり得ることが示唆された。

(3)幼稚園側の求める保育者の条件 保育者

として採用する際、特に要望する条件にはいくつ回答されたものと上位10位まで表示して示す。全404件のうち、人格特性に関するものが最も多く(47.3%)、次いで外的資質に関するもの(23.8%)、園側の要望する保育者の条件(20.8%)、保育者

	件数	%	態度に関するもの
健康	84	52.50 (15.1%)	に該するものは47
明朗	61	50.63	以上が伴う。
誠実	29	19.13	られ、知識、能力
保育に対する熱意	25	15.63	に該するものは47
協調性がある	21	13.13	以上が伴う。
責任感がある	18	11.25	%に重きない。
勤務態度	15	9.38	勤務ではあるが勤務
門構な人格	15	9.38	の不従順性と併せ、
思想稳健	15	9.38	勤務態度
努力する	14	8.75	保育者養成工習意
勤務の不従順性	14	8.75	するべきであろう。

教育実習による学生の教職意識の変化Ⅲ—教職意識・態度と教師イメージとの関係について—

○山田 喜美子 中原 弘之
(茨城大学 教育学部)

前回までの研究報告の経過：本研究は、学生の教師観や教職観を明らかにし、それらが教育実習という現場体験を通してどのように変容するかを検討することによって、教員養成学部における教育実習の改善の資料を得ることを目的として企画されたものである。方法は①教職に關する意識（質問紙法による）、②教師観（態度尺度による）、③教師イメージ（S-D法による）の3側面から教育実習前と後の又回にわたって調査し、その変化の様相を探るというものである。前回及び前々回において教師観を測定する為のサーストン法による態度尺度の作成の過程、その態度尺度によって測られた教師に対する態度と意識との関係、及ぶS-D法によって捉えた教師イメージの因子分析の結果とイメージの実習前後での変容について報告してきた。

今回は、教師イメージと教職意識及び態度との関係について検討し、合わせて教育実習の持つ意味について考察したところを報告する。

結果：S-D法によって捉えた教師イメージのデータを因子分析した結果、I因子：価値、II因子：仕事の時代適合性、III因子：立場の安定性、IV因子：社会的地位又は権力の4つの因子が抽出された。これらの因子と教職意識、態度との関係を実習前、後について検討したのが表1及び表2である。

表1 実習前における教師イメージと意識・態度との関係

他要素因子	I 価値	II 時代適合性	III 立場の安定性	IV 社会的地位
教職志望	m.s.	m.s.	*	m.s.
態度	*	m.s.	*	* *

* 5%水準で有意 * * 1%水準で有意

表2 実習後における教師イメージと意識・態度との関係

他要素因子	I	II	III	IV
教職志望	m.s.	*	* *	*
意欲の変化	* *	*	* *	* *
態度	m.s.	m.s.	m.s.	m.s.

表1が示すように教育実習前においては、教職志望は教師イメージのIII因子との間に5%水準で有意な関係がみられた。即ち「立場の安定性」の因子で高得点者は積極的な教職志望を持ち、低得点者は志望が消極的であった。他の3因子との間に有意な関係はみられ

なかったが「価値」の因子で高得点の者は積極的な教職志望で、「権力」の因子の低得点者は教職に対する消極的であるという傾向はみられている。態度との関係ではII因子以外の他の3因子との間にすべて有意な関係が認められる。即ち、教師への好意度は教師とう職業の「価値」「立場の安定性」「権力」を認めることが関連している。特にII因子との関係が顕著であることから、「権力」の因子が学生の教師への好意度に大きな役割を持っているらしいことがうかがえる。

表2は実習後のものであるが、教師イメージと教職志望との関係は更に強くなる。特にII因子は低得点者に教職への消極的な志望者が圧倒的に多いという結果を得ている。言うなれば、立場の安定性や時代適合性の高得点者に教職を積極的に志望している者が多く、教師に権力を認めない低得点者は教職に対して消極的である。また意欲の変化との間に有意差が認められないが、これは教育実習後にあいて教職への意欲が上昇した者はイメージの各因子での得点が高く、意欲が下降した者は各因子の得点が低くかったことを示している。この意欲の変化はイメージの変容とも関係し、イメージが(+)の方向へ変化した者に教職への意欲の上昇者が多くみられ、(-)の方向へ変化した者に意欲の下降が多くみられている(但し有意差はない)。実習前にはイメージとの間にかなり有意な関係が認められた態度が、実習後においてはII因子とIII因子にやゝ傾向らしいものがみられるだけで、どの因子も有意な関係がみられない。このことは、教育実習が権力というファクターの持っていた教師への好意度を規定する力を失せていると解釈することもできるが、おもしろ、教育実習によって教師に対するイメージ構造が変わり、教師への好意度を規定する実習前の因子では説明し得ない他のファクターを見い出すのではないかと考えられる。

ところでイメージの変容をみると、実習前に高い得点を示した者は実習後にも有意に高く、実習前の得点の低い者は実習後でも有意に低かった。しかし得点の上昇した者、下降した者に分けては、II因子で得点の上昇した者が比較的多かったのにに対し、III因子で得点の下降した者が多かった。この結果と先に述べたII因子と教職志望との関係を考え合わせると、教職志望の不安定な者は教育実習によって更に(-)の方向へ志望が落ちていく学生がみられるということを答えらねよう。とすれば、それらの学生に対する指導体制を考えいく必要があるのではないかと思う。

向合せ：水戸市文京2-1-1 茨城大学教育心理学研究室

中学生の悩み(III)

—聴覚・言語障害群の因子分析—

○ 内藤 哲雄
(早稲田大学)

遠藤 徹
(浦和市立教育研究所)

目的

聴覚・言語障害群における悩みの因子構造をあきらかにし、前報告の健常群と比較検討する。

方 法

前報告で用いたのと同じ質問紙によって、聴覚・言語障害者16名を対象に1978年4~7月に調査したもの、直接バリマックス法により因子分析した。

結果と考察

因子負荷量はTABLE 1のようになった。解釈の困難な因子もあるが、0.600以上の負荷をもつ項目をもとに検討したい。第I因子で負荷の高い順にあげると、28・22・6・7・27・26・3・16・33・14・29・15となる。かなり困難であるが強いてこころみるならば、先生・親・友人と感情・意志の交流がうまくいかず、将来に不安を感じるところから、“対人交流の不充足”の因子とでも名づけられよう。第II因子は、12・13・4・25で、“虚弱・意志薄弱”的因子と命名できよう。第III因子も解釈はかなりむずかしいが、35・32・2で第I因子といくぶんか似ており、“親密な対人交流の不充足”的因子とでもよべよう。第IV因子は1・19・20となり、“学業に関する不充足”的因子と名づけられよう。第V因子は34・5で、“消極的・自己否定的傾向”的因子と命名できよう。第VI因子は10・9で、“将来への展望欠如”的因子とよべよう。第VII因子は21であるから、“友人からの孤立”と命名できよう。

前報告(I)の健常群と比較すると、健常群では独立の因子となった“親による承認と信頼の欠如”が、障害群では第I因子に包含されていること、障害群独自のものとして“虚弱・意志薄弱”的因子がみられたことがあげられる。

また、健常群の場合ほぼ単純構造であったのに対し、障害群では負荷が2つ以上の因子にわかれられた項目が多くみられる。とくに注目すべきものには、自分の体や性格のいやなところが目についたりひけめを感じるとか、意志が弱いこと(24・17・5)、さらに将来への展望欠如や

不安(9・10・14・31)が、第I因子や第III因子での負荷が0.300以上となっていることがあげられる。さらに寄与率において、健常群が第VII因子まで分散の46.68%を説明したにすぎないのでに対し、障害群では第III因子で51.90%となり、第VII因子で79.47%となっている。これらは、障害による劣等感感情が、対人交流や将来に対する不安など、さまざまな悩みと関連することを示すものと思われる。

結 論

聴覚・言語障害者は、まさにその障害のため他者とのコミュニケーションにおいて円滑さを欠き、さまざまな社会的場面で悩みをもつことが予想される。本研究での因子分析の結果はこの点を裏づけ、障害群では悩みの各領域が緊密に関連していることを示唆するものであった。

TABLE 1 FACTOR LOADINGS

VAR	I	II	III	IV	V	VI	VII
1	-153	029	023	955	-041	-036	-086
2	338	-120	717	-217	028	087	091
3	797	099	-074	192	-008	210	331
4	-028	733	-130	-079	-234	037	-265
5	-228	345	302	-097	667	169	-031
6	884	-035	-074	-099	058	057	-223
7	874	-040	143	112	067	-006	-105
8	482	248	-025	-080	104	-183	244
9	579	288	369	-111	-028	614	012
10	375	-510	009	-058	105	750	-041
11	449	032	100	-452	-014	-079	229
12	070	937	175	-029	025	085	011
13	-151	860	-119	-175	056	188	082
14	655	-173	310	262	167	356	285
15	632	254	462	083	059	-216	-059
16	731	100	290	041	258	-274	-189
17	387	222	218	336	410	276	330
18	126	-117	207	241	428	-103	112
19	-134	-163	-449	651	125	164	-017
20	465	314	073	642	-031	003	128
21	194	-099	167	-056	073	-119	950
22	929	013	025	037	131	-108	240
23	508	402	053	530	032	016	439
24	417	520	-228	309	221	-227	-155
25	181	671	066	460	122	-457	136
26	863	040	-083	-154	-288	164	098
27	872	-152	061	-104	-100	-001	-038
28	943	-005	-002	-077	012	-131	031
29	638	398	101	340	288	077	088
30	588	053	-327	-156	232	-045	243
31	415	-383	484	295	114	379	226
32	216	018	840	-008	104	-348	071
33	697	018	126	286	253	-106	053
34	343	221	096	007	877	-079	-002
35	-065	093	867	171	-064	232	-091

Decimal Points omitted

中学生の悩み(IV)

一 聴覚・言語障害群と対照群の 質問項目ごとの差の検討 一

○ 遠藤徹 内藤哲雄
(浦和市立教育研究所) (早稲田大学)

目的 前報告(Ⅲ)では因子構造について検討したが、ここでは、項目ごとに障害群と対照群との差を検討するのが目的である。

方法 前報告(I, II)に用いた健常者のデータを対照群とし、障害群との間で項目ごとに平均値の差の検定を行なった。

結果 TABLE 1において有意差・傾向差の認められた項目をみていくと、まず親に対しては、障害群は対照群よりも、本人の能力を理解せず(項目16, $P < .05$)、自分の考えをおしつけ(7, $P < .05$)、干渉する(27, $P < .10$)と感じる傾向を示している。教師に対しては、本人の努力をなかなか認めてくれないし(32, $P < .001$)、気持ちや考えを理解してくれず(28, $P < .01$ 、6, $P < .10$)、そのうえあまり話しかけてくれない(23, $P < .05$)と感じる傾向をみせている。友人との関係においては、うまく協調できないでくやみ(22, $P < .01$)、ときにはのけものにされていると思い(33, $P < .01$)、話の輪の中へはいっていけない(21, $P < .10$)と感じる傾向がうかがわれる。勉学については、むずかしすぎてついていけない授業があり(19, $P < .001$)、授業に興味をもてない(20, $P < .05$)と感じる傾向をみせている。将来については、自分の将来は不幸であるように思い(3, $P < .05$)、将来に対して希望がもてず(14, $P < .10$)、みつてみたいと思うものがない(10, $P < .10$)と感じる傾向がみられる。身体については、自分の体でひけめを感じ(24, $P < .05$)、無理をすると疲れやすい(25, $P < .10$)と感じる傾向がわかる。性格については、心配性でひとつのことにつこだわりすぎてしまう(29, $P < .05$)と感じる傾向を示している。

考察 全般的にみると、障害群は対照群と比べて、自己に関する領域は勿論のこと、対人関係においての悩みが大きいということが注目される。対人関係から検討していくと、親については、気持ちの上では受容されていると感じているが、その干渉過多には不満をいだき、もっと本人を理解し自主性を尊重してほしいと感じているといえる。教師に対しては、意思疎通の困難にもよろうが、受容されていないと感じとてお

TABLE 1 障害群と対照群の M , SD および t

質問 項目	聴覚・言語障害群		対 照 群		t
	M	SD	M	SD	
1	2.44	(1.27)	2.64	(1.14)	-0.690
2	1.31	(0.98)	0.90	(1.07)	1.519
3	1.56	(1.06)	0.97	(1.15)	2.034*
4	1.56	(1.27)	1.09	(1.42)	1.306
5	1.94	(1.34)	1.74	(1.29)	0.606
6	1.31	(1.10)	0.78	(1.06)	1.963*
7	1.63	(1.36)	0.96	(1.22)	2.161*
8	1.81	(1.17)	1.75	(1.22)	0.419
9	1.63	(0.78)	1.49	(1.35)	0.412
10	1.31	(1.40)	0.72	(1.21)	1.903*
11	1.13	(0.99)	0.90	(1.15)	0.793
12	1.31	(1.16)	0.93	(1.25)	1.188
13	1.88	(1.05)	1.75	(1.27)	0.406
14	1.50	(0.94)	0.85	(1.06)	2.407*
15	1.13	(1.27)	0.83	(1.20)	0.968
16	1.50	(1.00)	0.91	(1.05)	2.185*
17	1.94	(1.25)	1.49	(1.34)	1.324
18	1.94	(1.39)	1.39	(1.33)	1.618
19	2.44	(1.00)	1.31	(1.24)	3.531***
20	1.81	(1.18)	1.22	(1.08)	2.107*
21	1.38	(1.11)	0.74	(1.05)	2.370*
22	1.69	(1.16)	0.94	(1.06)	2.778**
23	1.69	(0.98)	1.05	(1.11)	2.286*
24	2.00	(1.22)	1.23	(1.32)	2.265*
25	2.13	(1.27)	1.41	(1.45)	1.946*
26	1.06	(0.97)	0.79	(1.08)	0.964
27	1.56	(1.32)	1.04	(1.19)	1.677*
28	1.69	(1.16)	0.95	(1.08)	2.643**
29	2.56	(0.86)	1.77	(1.47)	2.135*
30	1.13	(0.93)	0.84	(0.98)	1.160
31	1.38	(1.38)	0.93	(1.18)	1.500
32	1.75	(1.03)	0.86	(1.01)	3.423***
33	1.63	(1.32)	0.93	(1.15)	2.333*
34	1.38	(1.17)	1.03	(1.33)	1.029
35	1.88	(1.17)	1.44	(1.31)	1.333

* $P < .10$ * $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

り、より親密な理解とより積極的な働きかけを期待しているといえよう。友人関係においては、劣等意識が強く、自分から積極的に友人に働きかけられない消極性を示していると思われる。授業場面への不適応も、こうした対人交流の不足とも関連があろう。このような悩み・自信の欠如が、将来に対する暗い展望へと結びついているように推察される。また、努力が効を奏さず絶えざる不安にさらされことが多いため、心配性となり、疲労感を覚えやすいと考えられる。

結論 前報告の因子分析の結果と同じく、コミュニケーションそのものの障害にとどまらず、広汎な領域において障害群は対照群よりも悩みが大きいことが明らかとなった。なかでも、親・教師・友人との対人関係における悩みが大きいということが注目される。この点についてさらに検討することが要請されよう。

手本ねの心理学的意義 (2)

金田 喜美

1 うるお者の創造文化的遺産

うるお者たちが手本ねで会話をやりとりをする時は見えたからには生きとしと内容と豊富に話しあつたり。日本へ手本ねは日本のうるお者たちの創造力から工夫されたものでうるお者社会の文化的な業績を評価する。

手本ねは体力欠如のために耳から刺激が入ってこない、自然癡聴に因する感覚は心理的に意味行動である。耳よりは姿勢と相まって意緒的に行動する。手本ねの姿勢は、耳よりは指示と描写であるが普通人の耳よりと本質にありてはちがつてないからうるお者の創造的工夫とい得體的なかほりつの型とっくりあげた特質が明りかである。手本ねで会話をうるお者には不信感はないし時代のズレもない。手本ねはうるお者の母言語である。

かつての日本の社會構成が一般的にうるお者を蔑視して陽のあたりないと云ふ生半可した學究的口と名詔され手本ねを研究しようとするものもいなかった。然しそれより研究してみるとき声言語と同時に粗細な体系をなしていき、手本ねは声言語と表現の形式を異にするので比較はどうかい。

手本ねことはは相対的で、上下、廢立起立する、始まり終り、大きめ小まき、などはをする意味行動で耳より耳よりはことは以前である。つまり言語以降の意味行動を展開させたものである。一語文が意味行動に寄声とのせたものであるように、そして思考も相対的である。言語操作では聴者に変換をあくあまり意味内容を教えないところにうるお者の混亂がある。

手本ねを意味として考える時その統制が向徳になる。普通の人は音声言語を通して社会生活ができる更に抽象的な論理を展開していくコミュニケーションの中で論述してもうようによく大まかな役割を占める。手本ねはコミュニケーションとしてみるとき伝達は可能であるが記録と保存ができないなど意味として条件を欠く。抽象的な耳より耳よりは周囲であるし文法がないそして堅苦連続であり反駁行動である。例えば赤いことばは普通の人はそれが抽象されたひとつの概念で「赤い花の赤」とか赤い唇というように抽象概念を考えようとするが、うるお者にはそれがない。

2 うるお者の心的構成

先づ生理的侧面のうるおと普通のあらわんには確信がある。聴者の中に多く生まれるうるお者を養すと会話瘦に自發的に偶發的につき、そのうちにうるおと普通の聴者と聴覚器官に適切な刺激が常に与えられることである。これができたといふ状態であるがうるおのあらわんには気がかけられない聽覚器官の故障である。聴者は大切を幼さが欠けていてうるおの幼児の口の中を破くと口の中では舌が浮いて安定しない。そつ頬の筋肉が弱い、声はどちらですかが部揚めなり聴者とか聴者とか話をするとうるおは私たちが毎日食事をするおやつを食べる置宿と同じもので特別な置宿があらわせない。普通のあらわんは耳から入ってくる刺激が常に全身全般をしゃべらからうるおのよな故障はあらわせないことはか言いにくいところである。社会の内因言語とかリヤーべリーや大人になつてからことばで思索するといふことはあらわんのところ知識つくりにことはは大切であるそして6ヶ月もたつては脚踏が芽生るのにうるおのあらわんはこの間に既に音声言語と統合がされ、耳聴力欠如が解かれておもなしの子供にも育つている。耳より耳よりはうるおした環境から自癡能開いたもので聴覚や触覚は徐に敏感化感覚表現の結果ははこんなところに原因がある。うるおの判断基準は何時からか見えなくなつたかといふうるおの判断基準の時期。どの程度見えないかといふ聴力損失の程度、弱音聴力の程度はうるお者の思想に大きな影響を与えていた聽力欠如といふことは医学的視点といふ高音な抽象的知能はあつてはるが具体的な場面での行動は普通の人におかれることはない。昭和26年憲法改正のための検査は田中ビネ-知能診断テストは1.0138。普通知能以上と4.6%。性格特徴は内向型ペルソナ神経疾患はローランツト候群は、自我的の硬さと内向性格不安定固執傾向正直性など非社会的で人格形成は異常でないが幼稚。手本ねは智力が少ないので行動と意志の矛盾を察知的表現方に制限がある表現と要點にこれを施している。

3 うるお者の社會構成

自己中心的固執傾向向社会的などの性格から手本ね構成要素に近似する傾向は5~600位を中心と組合せ3~4000位の複雑であるとして一語文3~4の方言がある。隔离されたヨコ社会の構成組織は仁義を重視する傾向は今もあつて新参者は仲間入りを其実する新しいグループをつくつて主と隸属性のある影絵の獣を示すなどは猪鏡心の現れであるうるお者が做了文章構成は特殊な人を除いて普通の小学低学年レベル手本ね結構に文字を書けず時間がない手本ねも解するにはうるお者と22に従事することである。etc.

教育評価の研究—その18—

する側とされる側の条件分析へのアプローチ

岸本英男(目黒区立鷺巣小学校)

1. 目的

前回の発表では、主として評価する側である文教政策の評価観について、指導要録の変遷を軸に考察し、今日の教育病理学的諸問題を応用心理学的に解明した。つまり教育評価の原理は、する側とされる側の集團構造に、更に時間帯介入変数とする実験関係、 $E = S(G, A, T)$ で示され得ることが確認された。今回は評価における時間の意味を明らかにする目的とする。

2. 方法

筆者は現在勤務校で、心身障害学級を担任しているが、児童数8名の小集団学級なので、すこぶる密度の高い教育実践が可能であり、理想的な学級形態と言える。したがって定説となつていい了教育評価法の3原則(橋本重治教授)を、ほど完善できる立場にあるので、この3原則(診断的、形成的、総括的)を軸にして評価しながら、学校教育における評価に機能する時間の意味を明らかにする方法をとった。

(1) その手続き；1クラス45人の標準学級に代表される教育評価の原則として、前記(橋本重治)は実験され、定量化されたものであるため、個人差への対応としては限界がある。ベテラン教師の証言によれば、診断と総括の面では盡然的に可能であるが、形成的面では到底不可能のことである。このことは、子ども1人1人についての Readiness 情報と、教授法に対するモニター結果のみが評価の在りみとして向かわれるだけであり、1人1人の児童の心身の発達と、それに基づく指導との individual 在度係を明らかにすることによってのみ可能だ。指導場面毎の累加的な資料を向う時間変数を明確にすることは困難であり、したがって、すぐれた精神理論も、直前に帰しておらず、ここに今日の教育病理のひとつの原因を、さぐりあてることができる。しかしながら、臨床的治療的指導の必要性から、1学級児童数が10名内外に法定化されていよい特殊教室(心障害)ならば、橋本理論が十分に生がされ、そこで行われている形成的評価の在りみに評価における時間の意味を明らかにすことができる。

(2) その具体的方法；筆者の担任している心障害学級は、7, 8, 30 内外が3名、50 内外3名、70 内外2名の、精薄用特殊学級であり、(1978.3月現在)

4年男2、5年男3女1、6年男2、の人员構成で、小学校卒業指導要領による学年配当時間割に基づいて、鷺巣小学校児童の1員として学校生活を楽しんでおり、筆者は、その全教科を担任し、ほかに養護訓練講師が週2時間 music therapy を担当している。

筆者は、学校勤務時間中、彼らと生活を共にし、登校から帰宅まで、授業と看護を続けながら、行動觀察カードにメモし、就寝前(10時頃)に、カルテに書きこむ方法をとった。理由は、その日の児童の行動で最も顕著なものをレリーフするため、ルーティンワークという時間のフレイム用いて選択し、カードと共にせながら communarative record を作成し、学期末休暇に、pattern recognize したり、clustering する方法をとったためである。

(3) 記録結果の情報化； pattern recognize は、あらかじめ pattern しておいた評価標準(1961年、第28回本大会、東京教育大での発表論文、「精神児童(主として精薄児)の教育評価に關する研究」において明らかにされている)7項28目の精神機能アイテムに基づくチェックリストを作成し、アイテム毎の、また個人毎の出現頻度を算出し、S, D, グラフを作成して、1次元的な時間的要因を明らかにしていく。clustering は、新しい行動変容の意味を求める解釈の素材として、指導と発達との individual 在度係を tracking しながら、2次元的な時間要因を明らかにする手がかりとする。

3. 結果

(1) pattern recognition に於ては、それぞれのグラフに(発表資料参照)精薄児の特徴が顕著にあらわれており、また2学期から3学期にかけて学級集団の凝聚度が、極めて濃密になる。

(2) Readiness 結果を先入観とする記録態度が次第に、指導場面における S-P-A-T 係を重視するようにならざる事実、つまり形成的評価のプロセスの浮遊化が明らかになる。

(3) 発達病理と教育病理の記述頻度が逆相関する傾向にあるが、それは集団凝聚度の向上に起因することが明らかであり、それが形成的評価に起因するものであることがわかる。

4. 考察

形成的評価は、時間要因の実数であることが実証され、またが、2次元的な時間要因(発達と時間の individual 在度係)の探究が今後の課題である。

5. 結論

生涯教育の時代、評価観は再検討されねばならぬ。

学業成績の評価における因果帰属のちがいが対人感情におよぼす効果(2)

内藤哲雄 ○ 小嶋正敏 内藤忠昭
(早稲田大学) (国際基督教大学) (株-地中海)

目的 学業成績の評価にあたっては、内的な原因によるものか外的な原因によるものか、あるいはまた、教育指導の効果が直ちに現われるようを変動しやすいものか、比較的長期にわたって形成されてくるものか、といった所謂 Locus of Control と Stability の次元の重要度は同じとはいえない。前報告(内藤 1977)では、因果帰属のズレの効果を検討するにあたって、4 要因の全体を移行するといった手順をとったため、次元間の差異の検討がなされなかつた。

そこで本研究の目的は、評価のズレが対人感情におよぼす効果を、帰属の次元別に検討するものである。

方法 実験材料は前報告と同様のものを用いた。
(被験者) 大学生 96 名 (手続) 前報告では、プロフィール全体を反対方向に 0 または 1 または 3 移行させたが、本報告では 1 要因のみを 3 移行させた。他の手続は前報告と全く同じであった。

結果 (被験者の内訳) 能力を移行させた者 23 名、努力 23 名、課題の困難さ 25 名、運 25 名であった。
(評価能力の判断) 評価能力の判断における要因別の平均値は Fig. 1 のようになつた。得点が高いほど評価能力が優れていると判断したことになるから、Fig.

1 により、能力のズレは非好意的な対人感情に最小の影響しか与えず、努力のズレは最大の影響を与えたことがわかる。分散分析の結果は Table 1 のようになり、Stability 次元と交互作用に有意差がみられた。このことから、不安定要因の方が評価能力の判断を非好意的にすると言えるが、交互作用が有意であることから、一義的にはそのように言うことはできない。そこで、さらに Stability の効果を Internal-External 別に検討したところ、Internal の場合

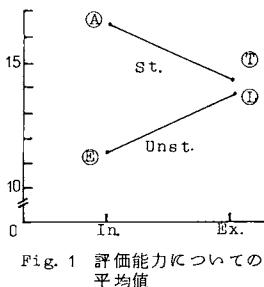


Fig. 1 評価能力についての平均値

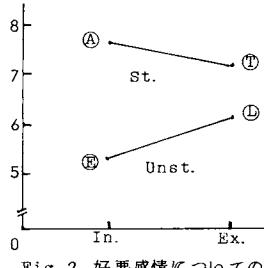


Fig. 2 好悪感情についての平均値

Table 1 評価能力についての分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方和	F
L. of C.	1.499	1	1.499	-
Stability	194.617	1	194.617	108.50**
交互作用	132.318	1	132.318	7.577
誤 差	165.0249	92	1.7937	

*** P < .005 ** P < .01

Table 2 好悪感情についての分散分析表

変動因	平方和	自由度	平均平方和	F
L. of C.	2.488	1	2.488	-
Stability	75.352	1	75.352	155.49**
交互作用	15.003	1	15.003	3.096
誤 差	445.844	92	4.846	

*** P < .005

においてのみ有意差がみられた ($t = 4.541, P < .001$)。
(好悪感情の生起) 好悪感情の生起に関する要因別の平均値は、Fig. 2 のようになつた。得点が高いほど好感情が生起したことになるから、Fig. 2 により評価能力の判断の場合と同様に、能力のズレは非好意的な感情生起において最小となり、努力のズレは最大となつてゐる。分散分析の結果、Table 2 に示すように、Locus of Control と交互作用においては有意差はみられず、Stability のみが有意であった。さらに、Stability について検討すると、能力と努力との間にのみ有意差がみられた ($t = 4.221, P < .001$)。

学業成績の評価においては、その成績をとった原因が、本人にとって内的か外的かが問題になるといふよう。そこで、Locus of Control における評価のズレが、対人感情に差をもたらすことが予想される。しかしながら、本研究においては評価能力の判断および好悪感情の生起のいずれにおいても、Stability における有意差はみられたが、Locus of Control における有意差はみられず、評価能力の判断において交互作用がみられたことにより、その要因の効果が示唆されたにすぎなかつた。

考察 評価のズレが対人感情におよぼす効果を帰属の次元別に検討したところ、Locus of Control では差異はみられず、Stability で差異がみられた。さらに詳しくみると、Internal においてのみ Stability の差がみられた。すなわち、能力よりもむしろ努力でのズレの方が、非好意的な感情を生起させることがあきらかとなつた。このことから、学業成績の評価にあたっては、能力よりも努力の評価が重要であることが示され、努力の評価基準の客観性、明瞭性が必要であることが示唆されるのではないか。

引用文献 内藤哲雄 1977 学業成績の評価における因果帰属のちがいが対人感情におよぼす効果 日本教育心理学会第19回総会発表論文集 Pp. 526-7

文章の理解と記憶

-教科(英)の教育心理学的研究-

永沢幸七
(東京家政学院大学)

目的: 英語理解力のすぐれた者と劣った者の再生記憶力(数列記憶)および英語の単語記憶に如何なる相違があるかを検討する。

方法: 被験者-K女子短大1年生(英文科)。

材料-Metropolitan Achievement Test (MAT)- 英語の理解力、語彙力、短文読解力を検査する。② Probe Digit Test、

第1実験、まず、英文理解のある者とない者たちの間に短期記憶検査となる数列記憶力を調べ、差異を明了にし、その後第2実験により文章(英文)の中の単語記憶力における差異を検討するものである。理解力のすぐれた者と劣った者のグループ化は MAT によつて2分類。このテストでは英語の理解力を調べるもので語りかたとともに、短文読解力を検査するものである。最初は MAT によつて平均値 + SD を理解力のすぐれた者とし、平均値 - SD を理解力の劣った者とする。

Table 1 テーブルに書きこんだ練習用リストと30組の理解力のすぐれた者と劣った者37名、理解力のすぐれた者は32名、理解力の劣った者は32名。日時: 1977.9.22. 13:00~14:30.

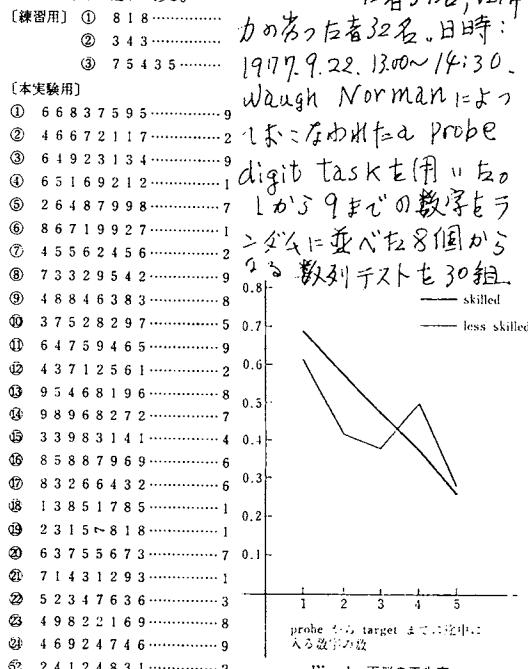


Fig. 1 両群の再生率

被験者群	すぐれた者 (37名)	劣った者 (32名)
合計、平均、SD		
再生合計	561	435
再生平均数	15.61	13.59
偏差値 (SD)	4.88	4.35

Type I M. S.

It had been a beautiful day for rowing. Nick began to have trouble, when a thick fog came in from the sea. (Nick)

Type II S. M.

It had been a beautiful day for rowing. When a thick fog came in from the sea, Nick began to have trouble. (When)

Type III XS. M

It had been a beautiful day for rowing, when a thick fog came in from the sea. Nick began to have trouble. (When)

結果: 表(I)理解力のすぐれた者と劣った者の再生数の組の数割の最後の数字をprobe数字とする。また各組の中には

二のprobe数

字と全く同じ数字がかかるず前

に出てくる。二の前にでてくる数字の次の数字もtarget数字とする。

結果: 表(I)の表示ごとく、理

解力のすぐれた者と

者が短期記憶ですぐれてるかは意図

はみられるがつた。第2実験:

目的: ある文章の中にある語をprobe語として、その次にくる語を再生する

二とでは、両群

どのような差

異がみられるか

を検討した。

方法: 材料

物語を含むテ

テープ(600語、

114節から3

物語、その中

1/2の文は、オベ

リオモ。その

Table 2 3 各タイプでの正答数

被験者群	Type I (I)	Type II (II)	Type III (III)	合計
理解力のすぐれた者 のグループ	37	33	60	130
劣ったグループ	21	23	46	90

Table 3 タイプ(3つ合計)での平均値、偏差値

被験者群	平均偏差値	平均値	偏差値
理解力のすぐれた グループ	2.08	3.51	
劣ったグループ	1.53	2.81	

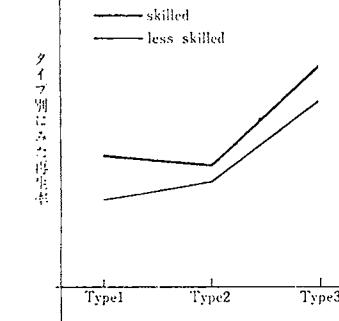


Fig. 2 各タイプの再生率

Table 4 comprehension テストの結果

被験者群	平均値、SD、正答数	正答数	平均値	S. D.
理解力のすぐれた グループ	246 6.65 246			
理解力の劣った グループ	192 6.0 1.58			

t 値での両グループの結果の比較 t = 1.292, oft = 67, で有意差はみられない。

これまでの文は構造上3つのprobeに変形される。それと他のタイプIとタイプIIは文の主節と従節を入れかえたものである。そしてタイプIIIは前の文に、probe語が含まれるもの。結果: Fig. 1-2, Table 1-2 有意味性はみられながらすぐれた群が再生した点でよく似た結果である。Fig. 1-2 ではタイプIIIの再生率がType Iの再生率よりも高い。Fig. 2 ではタイプIIIの再生率がType Iの再生率よりも高い。

力がわり方の発展にかんする研究(4)

一 起動点の同時的成立による状況構造化の過程

松村康平（お茶の水女子大学・新設学部）

○佐藤裕子（文教大学・新設学部）

1. 目的：「自己」・「人」・「物」の関係状況における3起動点の同時的成立による状況構造化の過程を明らかにする。

2. 状況構造化の類型

(1). 潜伏的構造化 (Potential Structurization)

$\langle P, S_o \rangle$ ：領域構造化の可能性を有しながらも、現実的には活性化していない状況構造化

(2). 機能的構造化 (Functional Structurization)

$\langle f, S_o \rangle$ ：現実的に活性化し、機能している状況構造化

① 単領域構造化：1領域による構造化

② 複合領域構造化：2領域以上の要素構造化

3. 起動点の同時的成立について

①. 開拓状況において、2起動点が同時に成立する：とは、3起動点、すなはち3起動点と説明し、状況（領域）構造化を開拓する契機として機能することである。

②. 3起動点が同時に成立することは、（開拓活動における充実をもたらす。開拓状況において障害しあう3起動点が同時に成立することは、状況（領域）構造化を可能的に成立させることのみならず、他領域の状況（領域）構造化を説明し、促進する。

③. 状況内3起動点の同時的成立（起動点 $a \sim f$ ）は、それと内接する他領域の構造化を説明し、促進する。

①. 起動点 b, c, f の同時的成立（自己形自己： S_s ）は、起動点 a, b もしくは c を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (S_p) もしくは自己形物 (S_o) の構造化を促進する。

②. 起動点 c, d, f の同時的成立（自己的自己： S_p ）は、起動点 a, b もしくは c もしくは d を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (S_p) もしくは自己形自己 (S_s) の構造化を促進する。

③. 起動点 a, f, e の同時的成立（自己形物： S_o ）は、起動点 a, b もしくは c もしくは d を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (S_s) もしくは自己形人 (S_p) もしくは統合的自己 (S_{sp}) の構造化を促進する。

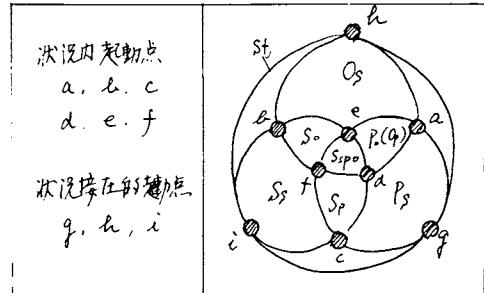
④. 起動点 a, d, e の同時的成立（人形自己： P_s ）は、起動点 e もしくは f を説明し、状況（領域）構

造化自己の自己 (S_p) もしくは統合的自己 (S_{sp})、物形人 (D_p) の構造化を促進する。

⑤. 起動点 a, b, c の同時的成立（物形自己： D_s ）は、起動点 a, b もしくは c を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (P_o)、物形人 (D_p) もしくは自己形物 (S_o) の構造化を促進する。

⑥. 起動点 d, e, f の同時的成立（統合的自己： S_{sp} ）は、起動点 a, b もしくは c もしくは d を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (P_o)、物形人 (D_p) もしくは自己形人 (S_p) もしくは自己形物 (S_o) の構造化を促進する。

⑦. 状況接在的起動点（起動点 g, h, i ）と含む3起動点の同時的成立は、それと外接する他領域の構造化を説明し、促進する。



①. 起動点 a, i, c の同時的成立（自己形自己： S_s ）は、起動点 g もしくは h を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (P_o) もしくは統合的自己 (S_{sp}) の構造化を説明し、促進する。

②. 起動点 c, g, a の同時的成立（人形自己： P_s ）は、起動点 a もしくは i を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (P_o) もしくは自己形自己 (S_s) の構造化を説明し、促進する。

③. 起動点 a, b, c の同時的成立（物形自己： D_s ）は、起動点 i もしくは g を説明し、状況（領域）構造化自己の自己 (P_o) もしくは人形自己 (P_s) の構造化を説明し、促進する。

以 上。

参考文献

1. 松村康平・佐藤裕子、「かがわり方の発展にかんする研究(1)～(3)」第42回～第44回日本応用心理学会大会論文集、1975～1977。
2. 松村康平・佐藤裕子・白石伸子「人間発達についての開拓的的考察 I～IV」第29回～第31回日本体育学会大会論文集、1976～1978。
3. 「開拓学研究第1巻～第6巻」開拓学研究編集委員会 1973～1978。

関係発展の理論と技法に関する研究

一对人間関係のかかわり構造について
松村 康平 ○土屋明美
(あ茶の水女子大学)

I 関係学における「かかわり構造」について

関係学においては「関係」について、内在、内接、接在、外接、外在的の五つのかかわり方をみいだし、このすべてのかかわり方に価値(=問題意味)をとらえ、自己・人物の接在実存状況にありこれをそれのかかわり方の特徴と顕在化している。ここでのかかわり方はトロジー的にモデル化され(潜的モデル)現象(発達段階・位相)ならびに発達の過程(構造的転換)を認識的に明らかにしており、人間生活における関係発展の実践的課題の解決に貢献している。本研究ではこれらのかかわり構造が人間現象の潜伏現象としての説述モデルにとどまらず構造的モデルとしてあることを諸理論との対応において考察する。

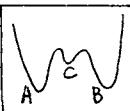
II 関係学研究の有効性について

関係学は人間関係の諸理論の概念枠といろいろその発展をもたらすことに貢献している。精神療法の諸理論および諸技法の発展に貢献していることが漸次明らかにされてきている。ここでは Transactional Analysis (以下TA) の基本的概念であるストロークとより基本的位置について関係学の立場から考察をすすめ関係学の理論的枠組の有効性を明らかにする。

[ストローク] TA		類型的考察(かかわり構造の特性)	発展的考察(自己化 ②かかわり方)					
①人間へのはたらきかけ	②人のかかわりを自己化する過程におけるかかわり方		① 内在化	内接化	接在化			
1.肯定的ストローク…自分はOKだと感じられる場合	1.自己接在化する方向へ自己に接在的にかかわる	内 在 的	④[無条件のストローク]	思いすごしのストローク	おもねるストローク (働きを利用する)			
2.否定的ストローク…自分はめごとに感される様子(嫌い)	2.自己接在化する方向へ自己化に外在的にかかわる	内 接 的 【援助・保護】	3[条件つきストローク]	おEのストローク				
3.条件つきストローク…自分が嫌な行動に対し良い(喜ばしい)	3.自己内接化する方向への自己化に内接的にかかわる	接 在 的 【親心・内側的・向むかひ】	おもしやりのあるストローク		1[肯定的ストローク]			
4.無条件ストローク…自分の在り方に対するOK(かかわりなし)	4.自己内在化する方向へ自己化に内在・外在的にかかわる	外 接 的 【外心・外側的・離れたところ】	ひややかなストローク SのSのPの領域活動に対するSのSのPの領域活動	好きほめるストローク	あほにまがせりストローク			
〔基本的位置〕		外 在 的	4[無条件ストローク]	お気の弱まじのストローク	2[否定的ストローク]			
③自我体験におけるChildが自分自身に対して、他人に対する感じ方	④自己構造における自己の領域、自己の領域に成立する自己体験(S:S)	I	OK	OK	not OK	OK	not OK	not OK
1.In OK: You're OK (共有共榮・構成場)	1.SのSのSのPの領域活動に対するSのSのPの領域活動	Y	OK	OK	not OK	OK	not OK	not OK
2.In not OK: You're not OK (無視・排除)	2.SのSのSのPの領域活動に対するSのSのPの領域活動	U	OK	OK	not OK	OK	not OK	OK
3.In not OK: You're OK (心地よい・開放的)	3.SのSのSのPの領域活動に対するSのSのPの領域活動	I	OK	not OK	OK	not OK	OK	not OK
4.In not OK: You're not OK (無性欲性)	4.SのSのSのPの領域活動に対するSのSのPの領域活動	T	OK	not OK	OK	not OK	OK	not OK

III 関係学のカタストロフ理論活用の手がかりについて
「カタストロフ理論は難病」というよりはむしろモデル論である*と創始者ルネトムは言っている。このモデルという語を記述モデルとして捉える視点からは社会経済現象・心理現象・大脳生理等の現象解明時にトムの理論の応用がなされている。構造的モデルとして捉える視点からは、「既存的実在と現象世界における可視的実在との間の構造上の対応または類似としてモデルの意味を了解しなければならない」といわれており社会現象も物理現象も同時に説明する普遍モデルを構築しようとした試みられている。本研究ではかかわり方という質的現象をモデル化するときに提起される課題、たとえばかかわり方の違い・混合や程度にハシゴカタストロフ理論との対応を考察をすすめる。

[活動] CがAから分離する瞬間、CがBのもとに到着する瞬間といふ臨界的な状態に応するボンバルは構造不安定で並行移行(カタストロフ)が発生する。[実践例] 健児集団指導における一窓(ドア)の場合は時間の経過とともに少しずつ連続的に変化し店(シャン)領域より構造的転換をもたらす。[技法] 差し点をつくるとの動き(流出・流入活性化)・集団分節化(サル領域の選定)・個の動きを軌道化(構造安定・不安定)・コト群の明確化(流入・内接化)



(原参考文献) 「関係学研究概観」関係学研究編集委員会
*「形態と構造—カタストロフ理論」みずほ書房(著者:木下信也・佐野隆光)
「あなたがためのトロジック入門」JICE

幼児臨床活動の一研究

一集団状況の展開過程について—

安島裕子(お茶の水女子大学)

幼児との臨床活動において指導者は、①幼児が自己人・物の相互にいかわる関係状況のどの部分に気づきながら幼児自身の状況を成立させているか、②幼児が集団状況とどのようないかわり方をしていてその活動が可能となるしているか、を把えながら、同時に幼児との活動が幼児の気づくところの広がり、いかわるとところの広がりのつくられる指導をする。それは幼児の自己の構造化される領域を広げていくこととも言える。

ここでは、臨床活動における実践例をあげ、①幼児の特性構造の領域化、②幼児自身が成立させる状況、③指導者の設定する状況などに視点をおいて考察し、そこでの臨床技術を明確にするこ、臨床活動において集団状況を展開させる意味を明らかにすることを試みたい。

行動観察

活動		関係状況	自己に成立した関係状況	関係状況の変遷	場面別	自己構造	技法	全体運用状況
場面I	K①K l ₂ ②l ₂	SaPeOd 内在	物(トラック) 内在 内接	床の上 S P T 床 構造	音・活動物 運動自己 表現の複合化 技法	K①K l ₂ ②l ₂	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化
場面II	K①K l ₂ ②l ₂	SaPeOd 内在 内接	物	アリ ルム	行為言語化 自己状況 内接化の技法 パルコニー=パルコニー	K①K l ₂ ②l ₂	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化
III	K②K l ₂ ②l ₂	SbPeOd 内接	物 自己	アリ ルム	トネル トネル	K②K l ₂ ②l ₂	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化
IV	K①② l ₂ ②	SbcPdOd 内接 接在	物 自己	トネル	人状況明確化 個人化 接在化の技法 トネル化	K①② l ₂ ②	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化	トネル化 トネル化 トネル化 トネル化 トネル化
V	K③ l ₂ ⑤	SbcPcOd 内接 接在	物 自己 個人	動物的 外接状況 明確化外 トネル	場面別 外接状況 明確化外 トネル	K③ l ₂ ⑤	動物的 外接状況 明確化外 トネル	動物的 外接状況 明確化外 トネル
VI	K⑥ l ₂ ⑥	ScPcOd 接在	物 自己 個人	動物的 外接状況 明確化外 トネル	接在状況 明確化外 トネル	K⑥ l ₂ ⑥	接在状況 明確化外 トネル	接在状況 明確化外 トネル

以上のことから幼児臨床活動において指導者が幼児に成立する状況に内接し同時にその状況の発展を予測する自己状況を成立させていかわることは、幼児の気づくところを広げ特性構造の領域化をもたらすことが

【臨床活動実践例】Kちゃん(果樹時5才2ヶ月)
来談理由:言葉が遅れている。幼稚園では一人好きなことをしている。友達と遊べるようになつてほしい。
現在までにS53年5月10日より、8回の活動がおこなわれている。(児童臨床研究会)

第八回活動内容(2.望満美 l₂ 安島裕子 竹原土屋明美)

場面I	K①K l ₂ ②l ₂	遊び(?) ①K. トネルをもってて走りかずはじめめる l ₂ 「アッ!アッ!」 ②K. トネル遊び	l ₂ とKを見ながら いふ
場面II	①K. ハサミ=ーーあから トネル遊びから車庫へ から車庫へ	②「もーとトラックあるからしら」 ③K. トランクとともにくる l ₂ 同じくトラックをひってくろ ④l ₂ トランクの車庫へうかなく ⑤K. トランクをとりにこいく	l ₂ トネルづくり 積木をみて いふ l ₂ トネルづくりに んだよでさたよ
場面III	トネルの中 動物を のせだる	①K. トネルをぐぐらせている ②l ₂ . Kの直線とそごみなか ら「うさぎ」とのせてもいいと きでる」とうこゑEかでドン レヨンセせる ③K. l ₂ のうさぎをトランクにのせ動かす ④l ₂ 大(?)トランクへとのせKのトラン クを交差 ⑤K. のせていたうさぎをおけ k直進でるの」	⑤
			動物を並べて

あさうかとなる。また幼児が自己活動状況にして他の活動状況に気づく、交差することは異なる場面設定、l₂のいかわりがありて可能となり、集団状況を展開させていくことによるものである。結果的に心理的早期整備

集団活動への参加過程に関する考察

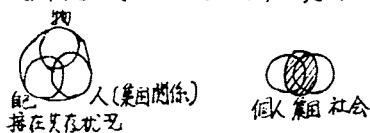
細川直子
(みどりのく女子大学 家政学部)

<目的>

人はさまざまな集団に所属し、その所属集団をふやしながら生きていく。現象的には所属集団の数が減っても所属集団での体験は、個人の内において集団所属の体験として蓄積していく。本研究では、個人と集団の関係に焦点を当て、集団活動への参加過程を明らかにする。

<関係論における集団の概念>

関係論においては、集団を人ととの関係のまとまり(関係体系)、また、個人がいかかって変化発展する運動体ととらえる。それは3者関係的人間関係の延展する現在実存状況において、主として「人」に焦点をあてて構成される概念である。集団は、人間関係の3者関係的に展開する運動体である。個人と社会、社会集団と社会集団の媒介的役割を果たし、それが社会変革、文化創造の原動力ともなりうる契機をつくる。



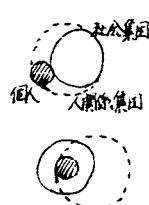
木関係論；松村康平著、後玉忠也訳、岩波新書

<集団活動参加過程>

集団には、それぞれ異なる性質(内容、詳細のひだり、社会的役割など)があり、それらの集団に所属するということと、その集団に内在する価値と一緒にしてことにつながる体験をする。もとよりこれは、集団と社会的側面からとらえた場合であり、個々の集団では、その集団成長によって集団づくりがすすめられづづけ、集団自体を変化していく。

個人の集団活動参加に関して、集団活動参加過程を①～④の位相に類型化することができます。また、そのときの、個人と集団の関係を図示すると、下図のようになります。

①集団の存在を認識する
<併立活動>



②集団に参加し存在感(規則など)を受け入れる
<入党活動>

③集団の価値(規範)を受容する

<志向活動>

④集団の価値を受容・創造する

<創造活動>



①～④は、さらに2つの位相に分けることが可能である。①～③、と④～④である。①～③の過程は、集団の展開過程(個人の適応過程)に対応してとらえることができる。③～④の過程は、集団の変革過程(個人の自律過程)に対応してとらえることが可能である。

K. Lewin は、再教育、新しい価値の受容という観点から集団所属性について述べている。その場合の集団とは、前回の②にみられるような社会集団である。そこでは、個人は、自己の価値転換をしなくては集団に所属しきれないし、また、集団に所属するという行為自体が、その集団に内在する価値を受容していく工夫の方法になっている。その場合には、研究者の視点は、社会集団の側におかれしており、個人の価値を変化させるために、どのように社会集団を形成しないければよいかという発想になっている。この社会集団においては、個人の参加によって集団自体の性質が変化していくという観点が強く、つまり集団の構造は必ず構造ととらえられることから様々な問題が生じる。

①個人にとっては、集団に内在する価値を受け入れるかそれに反対するか(拒否するか)の二択が一つの問題となる。

②ある集団に内在する価値は、個人に受容されて、「超自我」的意味をもたらす。

③複数の価値をもつ社会集団に所属し、しかもそれが他の社会集団はそれとして存在するため、個人においてこれらの価値を整理、統合することに困難が生じ、個人の生活態度に分裂が生じる。

社会の側から集団ととらえると、個人と集団との間にダイナミックな動きを展開させにくくなる。そして集団とは個人の力によっては変わらないものであるとか、また、集団に所属することによる価値を受容することであり、それ故に集団には所属せず、主体的個人の確立をという考え方や思潮が生じたりする。

集団を「人間関係の3者関係的に展開する運動体③④」ととらえることで、①個人においては、価値の転換、新しい価値の感受、②社会集団においては既存の価値の修正に、③集団においては、集団内個人における価値受容のされ方の変化、新しい志向性の形成などに効果がある。

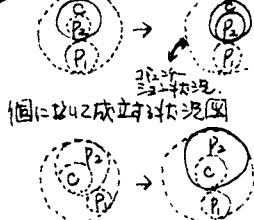
コミュニケーション状況の発展を 志向するもの。

浅野恭子
(筑波大学附属看護学校)

研究の目的 コミュニケーション状況の発展はすなはち、人の関係の発達としてとらえられる。コミュニケーション状況の発展を志向するには、状況の側面においてコミュニケーション状況の構造が明確にとらえられることが必要であり、その構造が誰も人が用意することごく明確にまとまれば促進される。構造化を用意するに当たっては、ことば・動かさないの表現方法を有力に用いることが肝要であろう。本研究は、コミュニケーション状況が成立・発展する過程は、人とのようにかのうい個によじてようなら構造がどうなるかとらえられることが必要なのか、臨床場面を通して、既基本構造をさぐることを目的とする。

方法と結果 臨床場面で、おわいの状況・特に人と関係に参加することがむずかしい問題が成立する子どもの、約1年間の臨床活動の変化過程を関係構造^{*}を用いて(1)コミュニケーション状況の関係図及び個における成立する状況図、(2)場面の特徴(表現・行動主義の特徴・役割)の側面から整理する。関係の仕方から、全くのせずしてやや中性的段階に分けて述べる。(図中Cは個子)、P、Rは機能を意味する

I コミュニケーション状況の関係図



考案
全体が漠然として
状態の中で、個に
内接する機能だけが、コミュニケーション
状況において目立つ
とらえられる。

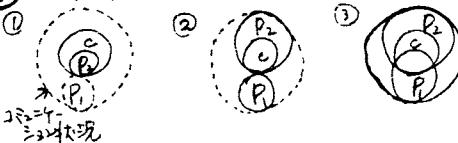
場面の特徴

役割 ①個に内接する機能が目立つ。②「へようからね」「へしたからね」など個の動き・えさしを予測することばかりが多い。

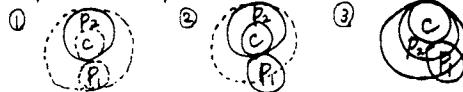
循環の特色 コミュニケーション状況は瞬時に成立、その後ほとんど消滅する。

表現 の個の場は内在化(やなし)。②おわいの状況は関係づけ、ひとりひとの表現もしくはじみの高い声の表現。③動きFも重かれ。

II コミュニケーション状況の関係図



個に由りて成立する状況図



考案 ①動機的では状況に内在化する個に、内接的に
かかるP₂の機能と、その2つの関係を外接的にしかも
コミュニケーション状況には内接的にかかるP₁の機能の成立。
②個に内接する機能は子どもが内接するようになると。③
P₁がはつきりくると、同時にコミュニケーション状況も明確に
なり、人の媒介によつてセイヒが始まる。

場面の特徴

役割 ①個の動きを促進するにはかけにより、動きが盛んになる。②2つの役割が「場面2」へはきりするようになるとほどを便。③個に内接する機能と状況に内接する機能との多くが内接から接在関係へ変わる。

循環の特色 機能が明確になると循環がすむ。内容的にはくじらの形である。

表現 ①特定の人を中心にして動くようになり、自己の安寧のみられる、動きの走る車輪ができる。人に近づいて、「おもうする」となどと言ふのが込みむ。②過去に自己において樂していき体験につながったことを表現する(=2語文を使う)。③ピッカの高い声の表現が消え、自分のしたいことをことはじめ表現する(=おもひえ、すへて)おもひ形で表現し、人にむけようやべりにはす。

III コミュニケーション状況図



考案
個はP₂の機能に内接
しつつ、他の機能P₁
との外接→接在関係
が可能となる。

場面の特徴

役割 機能間の接在関係の底辺より「循環輪が広がる」。
循環特色 ①輪が切れると子どもつかない。②循環の中でも人を乗せて続ければ。表現 ①人をもうけかけが見える。②人の積み込みと並び自ら場をつくれ。律)。

考案 子どもの内接機能が満たされ、個によるその機能がどうなるかになると、個がその機能内接的にかかるようになる。他の機能とのやりとりが可能になる。そこで機能間の接在関係、人の接在的役割負担が可能となる。すなはち、個に由りて、内接的機能を媒介してコミュニケーション状況全体が明確になり、自分の立場と、自分とは異なる立場とを分別的につなぎ、そこにはおもひ、せりつけが可能になる。そこは機能整理から状況を明確にする動きが大きくなる結果となる。

*関係論の構成と展開の正統本流派、「関係論研究」著者1号。

児童臨床活動における役割の研究

谷中孝子
(お茶の水女子大学 家政学部)

〈目的〉児童臨床活動においては、子どもの役割のとり方の変化過程の解明がめざされる。本研究では、具体的事例をもとに、子どもの役割のとり方の変化過程を、場面状況に参加しているリーダーのかかわり方、子どもの自己の構造化などから明らかにする。

〈方法〉小学3年男子との児童臨床活動における「電話の活動」(計3回)をとりあげ、本研究者のリーダーとしての体験及びその記録をもとに分析、考察する。

〈考察〉関係理論においては、状況における役割行為として「自己身体的」「心理行為的」「対人関係的」「場面構成的」「社会地位的」の役割行為をあげる。人間の行為における役割から役割への転換は、自己、人、物の関係の発展をもたらすのに重要な動因である。連続3回の電話活動における子どもの役割のとり方の変化は、「自己身体的役割→心理行為的役割(第1回)→対人関係的役割(第2回)→場面構成的役割→対人関係的役割(第3回)」となっている。これらは、どのようにして生じたのか。第1回の活動における役割の変化は、私が場面構成的役割をとる(子へ電話をかける)ことによって生じている。子どもにおいては、物(電話)の機能に誘われて自己構造における自己の領域が成立し、心理行為的役割がとり

続けられる。この役割の持続は、電話をかける l_2 の行為をアナウンスする l_1 、子どもに補助自動的にかわる l_3 の行為によって促進されると考えられる。第2回においては、 l_2 の場面構成的役割(電話局をつくろ)、子どもが電話を買う、電話局の人になるという細かい役割、 l_3 のことばで、子どもにとって具体的な行動(何を話すといいか)の明確になったことか、子どもに対する人間的役割を成立、展開させている。また、電話局の人であるとか、子どもに、自己に近い物(電話)と人に対しての自己をとらえることを可能にしている。第3回の活動における役割の変化は、直感的には l_1 の場面構成的役割(子のぬいぐるみをとらえて、対応する場面づくりをする)、子どもとの関係における対人関係的役割によるものだうされていると考えられる。ここでは、子どもが l_2 と一緒に場面設定をする(場面構成的役割をとる)新しい始まり方がみられる。子どもの主体的活動による自己の成立が、前述した l_1 の役割行為を促進し、それが子どもの対人関係的役割の変化へつながっている。子どもは、電話による l_1 の頼みによって人的自己、人的物、物的自己を成立させる。子どものことは自己的自己の成立も明らかであり、子どもに「自己における自己、人、物の接在実存状況」が成立している。3回の活動を通して子どもにおいて主として人との関係の発展が促進されている。児童臨床活動における子どもの役割は、リーダー、物、場面状況とのかかわりにおいての役割であり、変革可能なものである。

活動経過		子どもの役割、行為	リーダーの役割	リーダーの役割消滅	子どもの自己構造
第1回	<p>1. お電話を出す。子l_1電話かける舞台の上に立つ。 2. 3. 近くに立つ。</p> <p>1. 舞台下に「づきしき電話を置く。 2. 「4~500円ですか?」 3. 「電話がかかるまでお待ち下さい。 4. 子: あなたがよーくめじやないか。 5. あらかじめいたい。 6. 金めてこないかな? 7. 「4~500円のお金でよし。 8. おねだりしてだけ話をきてきま。</p>	<p>自己身体的役割 電話かける音跡る。</p> <p>心理行為的役割 自己と物の関係が 強く、物の機能に 誘われて話す(電話) 自分の言いたいことだけ話をきてきま。</p>	<p>l_1 場面構成的役割 l_2 心理行為的役割</p> <p>l_1 場面構成的役割 l_2 場面構成的役割 l_3 心理行為的役割</p>	<p>l_1 補助 l_2 配置操作の技術</p>	<p>S_0 D_0 $P_0(OP)$ S₁ D₁ P₁ 自己の物 S₂ D₂ P₂ 自己の自己の 成立</p>
第2回	<p>1. 舞台下に電話局をとる。電話局ができるまでお電話を買ひに下さり。子l_1買ひにいく。</p> <p>2. 子: l_1 おれで電話局の人になる。</p> <p>3. 舞台の上から電話局に電話をかける。 4. おれ、電話かけるといふと、どんぐり電話かい? 5. おれ、シノン! どうから買ひにいきま 6. おれ、</p>	<p>対人関係的役割 経営者として電話局をとる 他人との接在</p> <p>対人関係的役割 経営者として電話局をとる 他人との接在</p>	<p>l_1 場面構成的役割 l_2 対人関係的役割</p> <p>l_1 対人関係的役割 l_2 対人関係的役割</p>	<p>l_1 补助自動的技術</p>	<p>S_0 D_0 $P_0(OP)$ S₁ D₁ P₁ 自己の物 S₂ D₂ P₂ 自己の自己の 成立</p>
第3回	<p>1. 子と舞台の上に「ちやくまくべ」電話をおく。 2. 舞台下に電話を買ひ家をとる。 3. われわに電話を置き、家に入る。</p> <p>1. 電話のかみこみをとむにあくろ(舞台の上) 2. 小さり: クリキンといいだを家に運ぶ。</p> <p>1. l_1, l_2 とおれに電話をする。おまえ、あくろ007の おでかけ酒屋ですか? 大きな友だちがいい いうて、おれ、おれ物へきていいますか? おれ、おれおお下さり、おれいますから。 子: おれ、おれ、おれのねぐらおれのねぐらもあく。 2. おれのラスボン! おーびーのーー地獄</p>	<p>対人関係的役割 電話かける音跡る</p> <p>場面構成的役割 好む者とめぐらかく</p> <p>対人関係的役割 電話かける音跡る</p> <p>対人関係的役割 電話かける音跡る</p>	<p>l_1 場面構成的役割 l_2 場面構成的役割 l_3 場面構成的役割</p> <p>l_1 場面構成的役割 l_2 場面構成的役割</p> <p>l_1 場面構成的役割 l_2 場面構成的役割</p>	<p>l_1 補助 l_2 表現技術</p>	<p>S_0 D_0 $P_0(OP)$ S₁ D₁ P₁ 自己の物 S₂ D₂ P₂ 自己の自己の 成立</p>

Tグループによる変容の様態

片野 卓 小山 一郎
(奈良大学文学部)(人間開発研究所)

〔目的〕 Tグループの効果の詳細は 参加者の実績向上等により直接的に知り得るところであるが、その実態をより客観的指標を用いて一般化することができないかといふのが、本研究の目的である。

〔方法〕 そこで、A社のTグループを実施するに当つて、実施直前と事後にあつて次の検査又は調査を実施した。(○印は実施、×印は実施せず。)

摘要	I	II	III
参加人員(カッコ内は検査完全実施者)	10(9)	10(9)	10(9)
①参加者に対するアンケート調査	(一括実施)		
②ペーパーナリティ・インベントリー	○ ○ ○		
③C.A.S子実証前検査	×	○ ○ ○	
④判斷語による連想検査	○ ○ ○		

(②は講研方式第357; ③は対馬忠夫著による)

〔結果〕 判斷語による連想検査については、見えた成果が得られなかつたが、その他につけては、われわれは、次の如く一般化を試みた。

1) アンケート調査 以下に実施したアンケート調査を一部あるが、五段階法を用いて、既参加者に「もう一度参加したい」か「させられた」ところ、次の結果を得た。(1は最も積極的、5は最も競争的)

1	2	3	4	5	
5は最も競争的、尚対象人數	0	4	7	8	9

は参加者の一部) この意欲の度合と、T体験(主体性)の深さ、および会員側による実績向上等に対する評価の度合とは一致した。

2) ペーパーナリティ・インベントリー われわれは、本大会第4回において、「ペーパーナリティ相互間の親和性について」という標題で研究発表を行つた。

その結果は、ペーパーナリティ相互間の相関係数を算出したところ、神経質(N)、分裂気質(S)、癮癥性気質(E)、ヒステリー(H)、宿遷性気質(Z)の順位に従つて相関係数があること、いうことであつた。

今、その各々の性向について簡単に表現すれば、N—自我進行性向、S—自我混乱性向、E—自我固執性向、H—他我超克性向、Z—他我愛容性向 とすることができる。更に類別すれば NSE—自我固執性向(内向性)、HZ—他我指向性向(外向性)とすることができる。これらの結果から、NSEと得点がHZと得点を越える場合が大である程、自由性が大であるとし、その度合が小である程、逆の關係にある程

自由性が小であるといふよう。この度合を大数把握してT実施グループ別に纏めたものが、次表(第1表)である。

実施	NSE	H	Z	得点		差額(A-B)
				事前	事後	
各個共	I	294	259	35	207	244
NSE得	II	266	246	20	174	163
美とH	III	203	212	9	173	209
				36	30	32
						9

得点の差額の増減分は、何れも減少しているが、これには自由性の減少を見ることができよう。

3) C.A.S子実証前検査 この検査は、Q₅—自我統治力の欠乏、C₄—自我の弱さ、L—パラノイド傾向、O—罪悪感、Q₄—欲求不満又は癇願による緊張の五つの一次因子にそれぞれ項目、計40項目の順序から成り立つ。その事前事後の検査結果の粗実をT実施グループ別に纏めたものが、次表(第2表)である。

項目	I	II	III	増減	
				事前	事後
個別複因因子粗実	子	事前	事後	増減	合計
減少しており、不	Q ₅	84	78	6	56
対照的)の減少を示す。	C ₄	59	48	11	46
L	51	46	5	34	38
O	90	93	3	54	54
II	61	53	8	37	27
がNSE、H乙の合計	345	318	27	227	205
丙得点が増加しているが、これは、H+1と、NT+1の増加が主な原因である。これら2の増加は、HとNの得点と関係あるものと思われる。即ち、次表(22	49	10	18	

〔考察〕 ①第1表でIIIのみ Q₄ 61 53 8 37 27 10 18 がNSE、H乙の合計

丙得点が増加しているが、これは、H+1と、NT+1の増加が主な原因である。これら2の増加は、HとNの得点と関係あるものと思われる。即ち、次表(

N H 丙 幾何平均値(何れも平均値)で、IIIだけが

I 10 10 87 比較的高く、Nは極めて低い。丙欄 II 85 78 92 はNSEとH乙の差であるが、何れ III 55 10 52 も外向性を明白に示している。これらが、Tは超競争的なものとし、Hは生ず生ず大とし、丙欄にNは競争したものと思われる。②)イローゼにおいては、他の因子と比較し、C₄、Q₄とC₄が極めて大きな得点を示すことが知られておりが、第2表では、これら2の減少が著しい。(増減合計欄参照)

忍耐Tグループのほとんどは正常人であるが、正常人もこの上うな因子を持っていふから、Tグループは、このような因子の解消を特徴とすると考えて大過仕立つてあらう。③第1表と第2表の関係であるが、逆か又はそれに近い相関を示すものが、8名中5名(エク.8%)であった。④発達クノイローゼ又は、狂一病は、自由性が増加する傾向がある。

〔結論〕 今後は上記分析に基いて、メンバーの構成等に考慮を拂つ、より有効なTグループの実施を努めたい。上記未解決の問題は今後の研究課題とする。

職場管理着層のチームビルディング・
プログラム設計過程に関する研究
凌辺 康
(鉄道労働科学研究所)

目的 本研究は、国鉄の現業職場の機能活性化をねらって、管理着層の協働体制づくり (Team Building) のための訓練プログラムを開発することを目的とする。

問題とその背景 近年国鉄の現業職場では、とくに産業界としこの管理者をめぐる諸関係の様態が、その業務遂行機能に、また個々の構成員の労働意欲に大きな影響を及ぼしている現状から、管理着集団の觸角を協働的はさみにし、職場の機能を活性化する方法開発の実際的要請が生じて来ている。この問題の研究的背景には、昭和41～47年にかけた共感性訓練の実践研究の展開があり、その延長線上に本研究は位置づけられる。ここで協働体制づくりとは、現場管理者の協働への意欲づけを可能にするよう、一定の価値的方針性をもった集団の行動様式・風土の形成(変革)を意味する。

方法 この変革の方法としては、変革目標・その達成のアプロセスモデル・促進技法・結果評価法などの要素を備えた体験的教育訓練を採用した。この訓練プログラムの設計は、アクション・リサーチ的方法によった。すなわち、組織開発の理論や実践例から、仮説的アプロケラムを作成し、その実践結果を当該集団の状況、問題意識とつき合わせ、修正し、一定の効果を期待できる標準アプロケラムの確定を行なった。

実験フィールドは、国鉄S局の職場の管理者集団(26名)である。業務内容は電車両の定期検査修繕であり、その部門の人員は109名である。

アプロケラム設計の経緯 設計期間は48～50年である。その経緯は、準備期・試行修正期・確定期に分けることができる。このうち試行修正期の質的展開は、①全員参加の研修会方式による対人コミュニケーション能力の向上をねらった段階、②実際的効果への要求が高まり、研修会に問題解決的要素を加味した段階、③研修会をベースに、問題解決の実践からの体験学習を、日常活動レベルまで拡大した段階、に区分できる。

標準アプロケラムの特色 ①全員参加の研修会(複数回)を中心に、職場の現実的問題の一連の解決活動を行ない、その過程で、合理的な問題解決技法、開放的受容的なコミュニケーション能力、合意を旨とした参加的意思決定・基盤処理の能力の体験的教育を行なう。②この教育の促進技法として、集団の行動様式につい

このサービス、フィードバック、討議場面における言語的介入、演習、知識情報の提供などを用いる。③アプロケラム運営は、管理着集団内リーダー(複数)が主体であるが、リソース提供と外的条件整備のためのオニシヤの側面的援助を、とくに初期に必要とする。④当面の対象集団は現業管理者であるが、一般従業員を含めた職場全体、業務上関連する他職場、S局全体への拡大を意図する。⑤その際、対象集団の構造、問題意識などの状況により、標準アプロケラムを創造的に展開する自由度をもつ。

効果の評価 評価の指標としてここでは、12項目の変革目標(望ましい行動様式を記述)についての当該管理者の認知を5点評価法によりとった(N=23)。評価時期は50年6月と翌年3月である。その平均値のアプロフィールは下図の通りである。その平均値の差の検定では、



4項目について **<管理着風土の評価プロフィール>** と、また分散の差の検定では、職場の問題に対する取組み姿勢の積極性(8)の項目について、それぞれ、positiveな方向での有意な差が認められた(両側検定、5%水準)。

考察 この評価結果からは、基本的姿勢の認知の変化はある程度認められるが、行動レベルでの変化についてはあまり認められない。しかし問題の改善実績、当該集団に対するオニシヤの觀察報告からは、行動レベルでの変化を裏づけることができる。

今後の課題として、①新たな集団への導入にあたっての障害(リーダーの動機づけ等)への対応、②定着過程における主体的展開と側面的援助の関連、リーダー層の人事異動の影響への対応、③変革の進展にともなう組織全体の機構・風土との抵触への対応、④効果の評価法およびアプロセスの理論化、の4点の窺明が必要である。

管理者による職場管理目標の設定 とリーダーシップ行動

古川久敬
(鉄道労働科学研究所)

先の研究(古川 1977)では、管理者がリーダーシップ行動を行使する程度は、彼が、自己の職場管理目標の実現にとってそのリーダーシップ行動が貢献すると信じている程度(道徳性認知)と密接に関係することを、期待理論の観点から明らかにした。

本研究は、管理者が自己的職場管理目標を設定する過程で、彼をとりまく職場状況がどのようにかかわっているかを検討したものである。

方法

〈被験者〉国鉄の現業職場に勤務する第一線管理者 1576 名が調査対象となった。

〈測度〉①職場管理目標: 被験者に 5 つの職場管理目標(「部下との信頼感をつくること」、「業務上の目標を達成すること」、「秩序ある職場をつくること」、「なごやかな雰囲気の職場をつくること」、「部下の仕事に対する意欲を高めること」)を提示し、彼自身が職場を管理していく上で、最も重視するものをひとつ選択させた。②職場状況認知: 職場の状況を記述した 19 項目の質問(大会当日配布の表 1 参照)を被験者に提示し、それを自己の所属する職場の現状と照らしあわせて“非常にうそだ——全くうそではない”の 5 段階で評定させた。前者を肯定度 5 点として得点化した。③リーダーシップ: 課題達成機能、集団維持機能それぞれについて 4 項目(大会当日配布の表 2 参照)を用意した。各被験者は、これらを“いつも行なっている”や“非常にうそだ——全くうそではない”の 5 段階で自己評定した。

結果および考察

表 1 は、各職場管理目標を選択した被験者たちの、「職場状況」項目に関する肯定度の強さを表示したものである。この表は、たとえば“国鉄の将来は管理者の双肩にかかる”に高い肯定度(表中では +10)を示すのは、「秩序ある職場」、「部下の仕事意欲」、「業務上の目標の達成」を選択した管理者であり、かつ 5 つの管理目標間の肯定度の差は統計的有意性をもつ($F=3.437$, $p < .01$)ことを意味している。

管理者にとっての職場状況のよさ(有利性)に注目しながら表 1 を詳察してみると、管理目標の設定過程には、図 1 に示すとく明瞭な階層性が認められることがわかる。すなわち、たとえ“管理者自身の意欲”が高くても、“労働組合との関係”、“部下との関係”をし

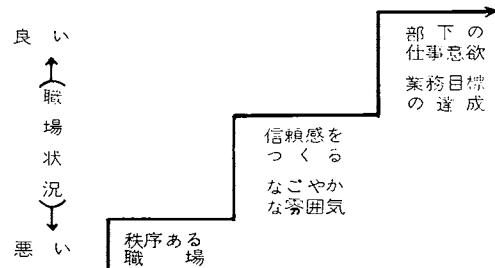


図 1 職場管理目標の階層性

て“労働組合との関係”が悪いというように、管理者にとって職場状況が極めて不利な場合、「秩序ある職場をつくること」という管理目標が選択されている。次に、“労働組合との関係”、“部下との関係”が好転し、管理者をとりまく状況がそれほど“悪くない場合、たとえ“管理者自身の意欲”は低くても、「部下との信頼感をつくること」、「なごやかな雰囲気の職場をつくること」という職場の人間関係をさらによくするよう管理目標が選択されている。さらに、“労働組合との関係”、“部下との関係”、“管理目標との関係”がよくなり、“国鉄経営への信頼”と“上司の指示・命令”が増加し、さらに“管理者自身の意欲”も高いというように、職場状況が最もよくなった場合には、「部下の仕事に対する意欲を高めること」や「業務上の目標を達成すること」という職場の仕事遂行をさらに向上させるよう管理目標が選ばれることがわかる。

表 2 は、管理目標別にみたリーダーシップ行動得点を示したものである。「秩序ある職場」、「部下の仕事意欲」、「業務上の目標達成」を管理目標とする管理者は課題達成機能を、逆に「部下との信頼感」、「なごやかな雰囲気」を目標とする管理者は集団維持機能をより多く発揮していることがわかる。この結果は、管理者が、自己の管理目標の実現に役立ちうるリーダーシップ機能をより多く行使することを示唆している。

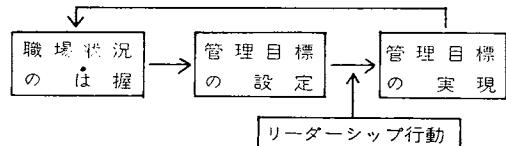


図 2 職場管理目標とリーダーシップ行動

図 2 は、本研究で明らかにされた変数相互の関係を図示したものである。

引用文献

古川久敬 1977 リーダーシップ行動の動機論的研究。
鉄道労働科学, 31, 43-50.

家族関係と調停技術の一考察

北原 武子
(東京家庭裁判所)

1. 目的:

「家事調停は家庭に関する紛争について家事調停委員会の審査により、当事者間に合意を成立させて解決をはかる点について、司法機能を発揮し、より解決のための紛争の背後で存在する人間関係を是正するよう、当事者に指向する点について、人間関係調整技術といふことをもつてある」。こゝでは夫婦間の調整事件の一例をとり、家族成員個々の内面的な葛藤がどのような相互作用をもたらすか、また、葛藤の解決に役立つ方法として、どのような心理技術が生かされるであろうか、その紛争要因解明の理論と方法を考察したい。(1)初回取扱い(2)最終回)

2. 方法:

夫婦間の役割分化と相互充足の機能を考えし、役割行動の裏容とはかることが、問題の発見、解決に効果をあげるであろうという仮説立てた。一般には、調停の手続きは、事実の収集、問題点抽出、問題点の判断、対応策の立案、調停場面での実施、修正、結論の調停等とした経過を経たが、この手続きを役割理論の視点から理論づけるために、若ハカツプロセス調停のプロセス(関係発展過程)を例にとって説明する。

3. Amicable Divorce 友愛離婚の一案例(J.S. 53.7月)

<当該事件の原因内至問題点>

- 申立人: 妻(女) 相手方: 夫(男) 申立理由: 夫婦間調整
- 当事者双方の役割期待への不適応: 当事者双方が現への甘え(経済的依存)や当事者双方の父性受容性の喪失。夫婦間の相互作用、相互理解の欠如。申立人親友と当事者妻子との同居。親の介入。申立人の生子子孫感覚の変化。相手方の消極的生活態度。天・妻双方が別々に家を去、子ども2人は、申立人親に抚养される。
- 調停第1回目: 导入、問題の明確化、当事者双方の自己提示、自己主張
- 調停第2回目: 問題点の展開、第1回目から1ヶ月経過、その間の当事者双方の心理的変化の表出、問題点の展開、状況変化の確認、当事者双方の人格、価値観、人間性の追究
- 調停第3回目: 調停とりまとめ、協議離婚成立

Amicable Divorce の特徴: 当事者双方の発言から一・離婚することが自分たちの生き方に必要だから。二・離婚が不満の人の間接成長にならねば。子どもに向ひ

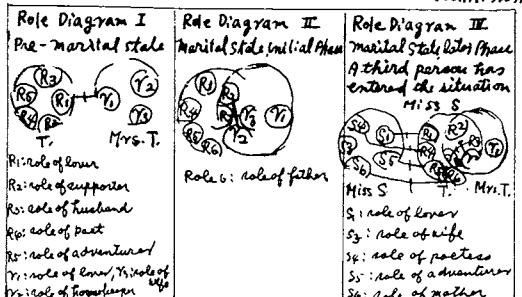
は別に考え方。つまり2人々ことを2人で考えるの際結構はいらない。養育費は夫の42入りの1/3、困れたりつづても援助する。お互い訪問権、子どもへの訪問権を認め合う。友達約18人に別れることは、将来を更好的に向むく。子どもの地位、監護権は双方どちらかどまい。もし妻が親か夫と住むことを希望すれば、子どもは親と子ども住むよりもよい妻は夫、子供から独立して夫に付く。

離婚をする必然性は全くないと思われる。カルタク夫婦離婚に至るプロセスは、新苗派とはかなり違った素朴、精神的な基盤の上に立っている。婚姻、離婚は自己の幸福の手段であると見て、価値感を持ち、個人の幸福が第一にあつて、離婚することが双方の個人的成長に役立つようにといふ志向性がある。離婚は家庭崩壊のプロセスと見て考へ方が合致してすた例とかみにとかいざる。

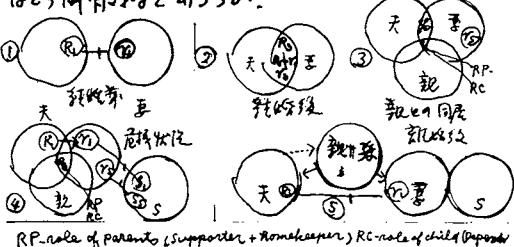
4. 考察:

すでに述べた目的、方法との関連で、J.L. Morenoの役割理論の視点から考察しよう。

参考: J.L. Moreno 「A Psychological Triangle in Marriage, A Frame of Reference for the Measurement of Role Psychodrama, Vol. II, p. 303



Morenoの役割理論におけるAmicable divorce 99-2はどう解釈されるか。



5. 結論: 潜在化、顯在化された役割構造を知ることにより、行動行動の変容をはかる手がかりとすることができる。夫の価値感からして、夫は妻の経済同居に拘泥されることは、自分に比て女性が富むことである。妻に比て、アドヴァンチャーを下すことで決まり家庭の構造がPDRSとなる。

神経質症体験のある母親とその子との関係の変化

—母親の子供観の変化を中心として—

我妻則明
(東京大学)

1. 目的

①神経質症に陥り、それを克服した体験を持つ母親の子供に対する見方、考え方をどの子供観が、その克服する過程においてどのように変化するのか？

②どのような母親の子供観の変化が、子供に対してどのように影響を与えているのか？特に症状が最悪の時には、何らかのマイナスの影響を与えているのではないか？

①、②の点を探索的に調査し、仮説を導き出すことを本研究の目的とする。

2. 方法

①母親に対して：生活の発見会（後述）の会員のうち、子供を持つ母親で、本研究に協力していただけの方を、生活の発見会から推薦していただき、11名となった。その11名に問い合わせたところ、10名から受諾の連絡を受けた。

10名の家へ訪問し、あらかじめ用意した項目にしたがって調査的面接を、1～2時間ほど行った。

10名のうち、半数の5名は、さらに詳細な事実の確認をする必要があると思われたので、もう一度、調査的面接を行なった。

さらに、10名のうち9名が、自分自身の神経質症を克服する過程を記録した体験記を書いており、その体験記をも資料とした。

②子供に対して：10名の母親のうち、5名の母親の子供、6名（9才～26才）に対して、10分から1時間ほど調査的面接を行なった。

残り5名の母親の子供に対して面接を行なわなかた理由は、母親が子供との面接を拒否したり、子供自身が拒否したからである。

〔生活の発見会とは、神経質症で悩む者が、森田療法を学習することによって、神経質症を克服していくこうとする、ボランティアの精神衛生運動団体である。会員は2,400名ほどで、全国の48カ所で、月1回以上の会合がもたれている。〕

3. 結果

10の事例の症状、家族歴、神経質症で悩んでいた時の子供に対する考え方、症状を克服していく過程での、子供に対する考え方の変化は、発表資料参照。

4. 考察

①母親が症状で苦しんでいた時期には、症状のために子供を育てる自信をなくし、さらに重症の時は、自罰意識が大きくなる。一方、子供の行動のために、自分の症状がますます苦しくなると考え、子供に対して適切な対応ができるない例があった。また、自分の症状しか頭の中になく、症状の苦しさからくるイラ立ちを子供にぶつけたり、症状のために子供のことをまことに配慮できず、放ったらかしにする例もある。他に、非常な心配性から、子供について、あり得ないことを危惧し取越苦労をする例、親の価値観、あるいは理想を子供に押しつける例があった。

しかし、以上のような諸傾向は、母親が神経質症を克服した後には、次のように変化していったと考えられる。

子供の現実の姿をありのままに認められるように変化していく。そこから、子供の気持ちを汲み取り、行動できるようになる。これは、母親が症状中心的な考え方から離れるようになる、たたかれて若まるれる。一方、子供の成長への信頼感が生じてきた。これは、母親が、神経質症を克服したという自分自身の成長を経験したためではないかと思われる。子供を育てていく自信も回復していく。

②母親の神経質症の子供への影響については、10の事例のうち、母親の神経質症が子供へマイナスの影響を明確に与えたと考えられる事例は1例のみである。4例は、母親が症状にくらわっていた時期、子供に何らかの心身の異常が認められたが、それが母親の神経質症の影響かどうかは不明である。残り5例は、母親の神経質症の影響はないと考えられる。

5. 結論

①次の4つの仮説が導かれた。

①症状中心的な母親の態度は、症状を離れて子供の立場に立って考え、行動できるようになる。

②親の理想を子供に押しつけることもなくなり、子供の現実の姿をありのままに認められるようになる。

③子供を育てる自信を症状のために失っていたが、その自信も回復していく。

④子供に対する取越苦労も、子供の成長への信頼感へと変わる。

②母親の神経質症が、日常生活において具体的な行動として発現するため、家庭生活が破壊された場合のみ、母親の神経質症が子供にマイナスの影響を与えることが示唆された。

本研究は、藤田恵子氏（東京大学）の協力を得た。

少年とのイメージ交流

その1：父親を失った少年の場合

○佐々木 初夫・坂内 功
(山形少年鑑別所)

1. 目的 非行の背後に強い心的葛藤の存在が推測される1少年とのイメージ交流の経過を報告し、比較的短期間のうちに葛藤の表出がなされてイメージが現実的なものへと変容してきた要因とイメージ交流の過程における相談者自身の心の動きについて分析し、今後の外来相談のあり方について考察したい。

2. 方法 1). 対象少年：16歳の男子工員。職業訓練校在学中から同級生への暴行や恐喝を繰り返し家庭裁判所に係属。家裁からの依頼による在宅鑑別の対象者として少年鑑別所へ通所するようになる。53年2月に父が亡くなつたが、その前後から強い自罰を伴つた悪夢に悩まされるようになり、失神や立ちくらみ「金しばり」にあうなどの症状が同時に出現するようになる。2). 診断と処遇指針：I.Q = 85 (新制田中B式第1形式)。神経質でささいなことでも気になり、あれこれ思い悩んで堂々巡りをし積極的な問題解決ができない。劣等感やひがみから安定した対人関係をもつことができず、目上の人や同僚の自分に対する評価が気になり被害感をいだきやすい。また無理に不平・不満を抑圧する傾向があるが、内的緊張が高まって抑制しきれなくなると反発的に粗暴な行動に出る。根底に強い心的葛藤があり社会性の未熟さがあることから、専門家の手によって少年の心情を受容しながら密着した指導を続けるほか心理療法を自分の間慎重に加えていくことが望ましい。家庭が少年にとって安住できる場となるよう環境の調整が必要であり、とくに長姉・次姉との関係の調整が大切である。3). 手続き：毎朝見た夢を自由画に描かせ来所時に持参させて、絵の説明を求めながらイメージ面接を行なうと同時に前回の来所時から今回来所時までの生活状態を聴きとり助言を行なつた。担当の技官2名、教官1名。

3. イメージ交流の経過 1). 「自殺するつもりでつり橋を渡ってがけの上からとび降りれば死ねると思って橋を渡っていたら、足をすべらせて川に落ちて岩にぶつかり血だらけになった。死んだあと心配して誰かが泣いてくれるかと思ったが、死んだ所は人目につかない所だったので骨だけになってしまった。「一死んだら父のところへ行けると思っていたら死んだ夢になつた— 2). 「父が僕を迎えてきた」 3). 「寝

ていたら窓をどんどんたたく人がいた。窓から出て行ったらわらじをはかせられ、死んだ人が着る服を着せられた。極楽のような所に行つたら父がいた。父が来いよと呼ぶので、行くつもりになって登ついたら眼がさめた。」 — また寝ようと思ったら腕と脚がピンと伸びて汗がだらだら出た。肩をぶるぶるとふるわすと力がぬけて気持がよくなつた。— 4). 「父が死んだ時の夢」 — 前にも見た。正夢で本当に父が死んでしまつた。5). 「買物に行った時父が自分を見ていて来いと呼ぶので道路を横断したら、何かにはねとばされて気持よくなつた。空に登つて横になつていたらいつの間にか父がいなくなつていて。兄も連れてこいと言われたので連れて行つたら、突き落とせと言わゆる突き落とした。兄が死に自分は生き返る。自分は好かれないのでかななどと思い、今度は自分から車にぶつかって死んだが、誰も助けようとせずに見て見ぬふり。」 6).

「家で考えごとをしていると友達が迎えに来て僕は遊ばないと言つたらうしろからついて来て、いきなり僕を押すと殴つたりけつたり。僕は何も言わずそのまま倒れた。」 7). 「きれいで明るい所にきれいな橋がかかっていて向う側に父がいた。父は、来たいならその橋を渡れと言うので、少し考えたあと決心して橋を渡つた。」 8). 「保護司宅へ往訪した帰り、父の葬儀をした車を見た。父は何も言わず笑つていた。」

4. まとめと考察 少年のイメージは、初めは父との接触がうまく行かず、みずから破滅の道を選びその結果誰からも見捨てられ孤立無援の状態になるか、あるいは共犯者であった不良仲間から圧迫されなすすべのない状態であった。実際にこの時期少年が相談者と接する態度は、落ち着きのないおどおどしたものであり、白昼夢や「金しばり」の訴えが続いた。しかしその後夢を見なくなつて不眠に悩まされなくなり、たまに見る夢も3—7)。8). のように父と明るく接触できるようになったり父がやさしく見守ってくれるものへと変わって行った。このようにイメージが変容してきた機制はよくわからない。あえて推測すれば、相談する人がおらず表出が妨げられていたところへ外来相談の機会を得て一気にあふれ出るに至つたという時期の適切さと自由画によるイメージ面接という手法が本事例の場合は適切であったということになる。この過程での相談者の不安は、少年の防衛の構えをとくことにより損傷を与える危険であった。従つて臨機応変に指針を修正する柔軟さと一人よがりにならず少年と実感を交流し合う姿勢が最も必要であり、相談者と関係者のチームワークがそれを可能にした

少年とのイメージ交流(2)

学校嫌いの少女の場合

○長橋千佳子・長谷川孫一郎
(山形県庁) (山形少年鑑別所)

目的:母親の病気療養とクラス編成替えを契機として登校しなくなった女子中学生の例をとりあげ、今回は特にイメージ面接中の心的交流について報告し、8ヶ月以上の緩慢な動きの中で、少女の内面世界を模索し、ゆれ動く相談者のイメージの変化について検討したい。

手続と方法:本例は、山形少年鑑別所外来相談室に通所している中学3年のP子1例、家族構成は父(公務員)、母(会社員)、兄(学生)である。相談者は男性職員2名と女性相談員1名。初回は、父母から生育歴などを聞きとり、P子に心情質問診を行い、次いで全相談員と全来談者の合同面接の上、週1回の継続通所を約束し、家庭の安静日課、メンタルワーク(自由画、日記、連続加算3分法)、生活時間割を決めた。以後毎回の通所時には、相談員が分担して家族面接、箱庭療法、自由画、各種の心理テスト等を行い、その経過にそってイメージ面接を主とする相談を続けてきた。特に家族面接は、少女の家族関係の変化を知る上で最も重要なものと考え、毎回のメンタルワークから少女の心の変化をみた。イメージ面接は、自覚しにくい感情の現れを理解しあうのに役立つと考えた。

経過の分析 1). 通所までの概要:彼女は中学1年までは特に問題なく学校生活に適応していたが、2年生になりクラス編成替えと共にこれまで親しくしていた友人と別々のクラスになり、新しいクラスに友人を作れないままに夏休みになった。当時は母親が病気療養のため家に終日いた。夏休みが終るころから頭痛や腹痛を訴えて欠席がちになり、11月に入ると全く登校しなくなった。来所したのは1月末である。

2). 通所初期の状態:母親は姉から、少年鑑別所の外来相談の話をきき、はじめの2回は父母だけで相談に来所し、次いで教師とも相談し、P子と全家族で来所するようになった。当時のP子は、外出をいやがり1日中家でテレビ、ラジオを見聞きしている以外なにもしなくなっていた。だが家族の者とは変りなく話したりはできる状態であった。初めの2回にSCT、言語連想検査、P.F.スター、MAPSなど一連の心理検査を行い、両親との相談をつづけたが、登校を拒む理由は明らかではなかった。直接受けた印象は、親に全く依存的で、表情もかたく落ち着かぬ様子で、窓視

や口を手でかくして空笑するなどがみられ、「なんとかして治って学校に行かなれば」という感情がまるでないかのようであった。両親の説得をも無視するような態度であった。3回までの面接場面においても、全く沈黙が続き、言語的コミュニケーションが極めて困難と思われ、毎回、自由画をかかせて少しづつ言葉をひき出すという状況を設定した。通所3回目から女性相談員が加わって、交替してイメージ面接と家族相談を行った。面接初期には、著しい退行がみられ、自由画もほとんど動きのない静物画であり、会話は虫の鳴くような声でうなずくだけであった。10回の面接が終っても変化がなく日課の三分作業や日記も中断した。

3). 通所11回～22回まで:11回目からはじめた箱庭には父母の参加を求めたりし。12回目では、はっきりした大きな声で作品について説明することができた。この頃はすでに3年生に進み、週2日程度であるが、登校するようになり、修学旅行には是非参加したいというので両親と共に担任の先生を説得し許可をもらったが、当日の朝、突然拒絶してしまった。15回目に将来は市内某女子高からY短大に行き保母になりたいという希望を述べた。その後も学校へ行かない日が多く、父は家でTVを見るのを厳禁した。1学期中の登校は20日程度である。夏休みに入り、やりたいことは「テレビを見たい」「レコードを聞きたい」のみであり、母と外出することもいやがり1日中家の中で過ごす日が多くなった。しかし、徐々に相談員には表情がやわらぎ、自発的な発言が多くなってきた。再度MAPSを実施すると、前回に比べて多数の人間の動きと関連性を持つてきている。現在の彼女は、箱庭を拒否し、登校も少なく、通所もとぎれがちながら継続している。

考察:本事例の場合、登校しなくなって以後次第に外出や人との接触を好まなくなり、退行し、しかも言語的には表現できないが、登校できないことを自ら強く意識しそれに苦しんでいることが推察できる。親子関係や教師との関係からは明確な原因が指摘できず、今なお手ぐいの状態で面接を続けている。今回までの自由画やSCT、MAPS、WISCなどのテスト結果を用いたイメージ面接は、なおいっそう専門的な技術としての検討が必要であり、本事例のように長期間の緩慢な経過を示し、しかも言語的手段や遊戯療法を用いることができない場合には、一つの有効な方法と考えられる。また家族全員を含めての相談のみならず、相談員を通じて、教師集団との関係づくりが、困難であるが不可欠である。施設職員の相談員の外に、地域に定住する非職員の相談員が果す役割はここにある。

問題行動に関する一調査

○大道安廣 犬山俊夫 鶴光代 高山靖子
 (原西小学校) (福岡教育大学) (岩戸北小学校)

I. 目的

最近、非行・家出・自殺などの問題行動が低年齢化し、社会問題となっている。現代の親は、子どものこのような問題行動に関して、いかに対処したらよいか困惑している場合も多い。そこで、現代の親たちは、子どものどのような問題に対して困惑しているのかを知り、今後の子ども、ならびに親の指導のあり方を考える基礎とするために、本調査を試みたものである。

II. 調査対象

幼稚園児および小学校児童(3才から12才迄の子ども)、計418名の親を対象とした。回収率は94.0%であった。

III. 調査内容と方法

本調査における質問は、(1)生活習慣、(2)睡眠、(3)食事、(4)性的問題、(5)痺、(6)性格、(7)社会性、(8)反社会性、(9)言語、(10)身体に関する問題の10分野からなり、各分野それぞれ10項目からなる。それらの項目には、どれも困らない(全く気にならない)、(2)あまり困らない(ほとんど気にならない)、(3)困るときがある(時に気になるときがある)、(4)やや困っている(やや気になる)、(5)とても困っている(とても気になる)の5段階の選択肢がついている。

結果の整理は、(4)および(5)の項目にチェックしたものの割合で、問題行動が認められる者として、考察の対象とした。

N. 調査結果

結果は表1・表2の通りである。

V. 考察

年少組の親は、生活習慣に関する項目に高回答を示している。これは、明らかに入園を意識し、幼児の自立の願いと親の規準で考えたさせりがあるかもしれません。また、3才児なら当然認められようの反社会的な項目にも、年少組の親は大変問題視している。この傾向は高学年になると「わがまま」、「口答え」といった行動になる。すなはち、幼児のときから早く自立し、自主的な行動がとれることを期待する一方、親の思う通りになる子どもであることを期待しているといつてよいかもしれません。このように、子どもの自立を願う気持ちと依存性を願うアンビバレンツな気持ちを持つという、現代の親の子ども観がうかがえるよ

うな気がする。

問題を持つとする者の男女の割合は、小学校において明らかに男児の方が高くなる。これは、親の男児に対する期待と女児に対する期待のかけ方の違いによって生じたものと考えられる。つまり、マイホーム主義の親たちの願いが、男児に背負わせているといつてよいかもしれません。それは、母親の学歴が低いほど問題を持つとする者の割合が多い傾向にあり、また、高学年になるとほど勉強に対する関心が強くなっていることからも、それがいえるような気がする。

以上、現代の親の子どもの問題行動に対する態度、もしくは考え方を全般的にみがめてきたものであるが、今後は、親のパーソナリティとか生活状況をより詳細に調査し、子どものあり方と親の問題意識との関連を明らかにしていきたい。

表1 各分野の占める割合

分野	年少	年中	年長	幼稚園	1年	2年	3年	4年	5年	6年	小学校
生活習慣	18.0	9.5	10.3	12.0	7.5	10.4	16.7	18.4	14.9	19.0	14.4
睡眠	3.9	4.7	6.5	5.2	5.6	2.4	3.3	1.6	9.3	8.9	5.2
食事	18.8	29.5	25.0	21.5	15.0	23.2	9.2	17.6	11.8	8.9	14.5
性	0.8	1.1	0.0	0.6	0.9	0.0	0.0	0.0	0.6	0.1	0.3
痺	3.9	7.4	8.2	6.8	4.7	4.0	3.3	6.4	5.6	2.5	4.6
性格	21.1	23.7	25.5	23.7	27.1	20.0	28.3	25.6	22.4	26.6	24.7
社会性	7.0	6.8	7.1	7.0	14.0	12.0	7.5	8.8	10.6	3.8	9.8
反社会性	14.1	6.3	8.7	9.2	11.2	11.2	16.7	13.6	10.6	16.5	13.0
言語	5.5	1.1	3.3	3.0	1.9	3.2	7.5	3.2	4.3	0.0	3.6
身体	7.0	10.0	5.4	7.6	12.1	13.6	7.5	4.8	9.9	13.9	10.0
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

表2. 問題行動の比較

項目	年少	年中	年長	幼稚園	1年	2年	3年	4年	5年	6年	小学校
男児	82.4	70.0	64.3	70.6	72.5	76.2	78.9	70.0	68.4	70.8	70.7
女児	72.7	75.9	62.5	69.4	76.5	68.4	47.6	47.4	58.8	52.2	57.3
被験者	78.3	65.5	66.1	67.9	71.9	60.5	69.0	67.7	61.3	62.9	55.5
年齢	80.0	92.9	25.0	78.3	100	100	16.7	42.9	83.3	47.9	57.6
性別	78.6	69.2	63.3	68.6	75.8	67.5	61.0	62.2	62.9	60.0	66.2
年齢	—	100	—	100	—	—	—	—	—	—	100
性別	—	100	—	100	—	—	—	—	—	—	100
年齢	100	—	100	—	33.3	—	100	100	50.0	55.6	53.6
兄弟	100	88.9	71.4	82.4	66.7	100	100	—	100	91.7	86.2
複数	77.8	68.3	62.3	67.9	74.2	63.4	61.5	63.2	62.9	56.4	63.2
年齢	75.0	76.2	66.7	72.3	68.8	61.5	62.5	64.7	71.8	63.2	68.0
年齢	80.0	71.4	66.7	72.0	50.0	77.8	55.6	66.7	50.0	62.5	61.1
年齢	78.6	58.3	58.6	62.7	84.6	58.8	57.1	57.1	52.6	41.7	50.4
兄弟	75.0	62.5	61.5	64.9	50.0	40.0	100	50.0	66.7	66.7	64.2
姉妹	66.7	75.0	64.3	69.0	85.7	80.0	42.9	75.0	66.7	28.6	61.1
混合	81.3	67.7	60.0	68.1	83.3	65.5	50.0	65.4	10.9	61.5	65.0
王	83.3	60.0	61.5	65.5	72.7	72.7	83.3	63.6	78.6	72.2	74.0
婦	80.0	72.9	64.4	71.0	75.0	64.3	57.1	61.5	56.5	50.0	65.2
父	100	66.7	75.0	80.0	80.0	71.4	87.5	83.3	42.9	73.9	73.8
高卒	63.6	75.0	72.2	71.1	76.5	82.4	61.9	58.3	66.7	64.7	67.4
大卒	93.3	67.3	57.1	67.7	66.7	50.0	53.8	60.0	42.9	33.3	54.2
年齢	—	—	—	—	—	—	0.0	—	100	50.0	50.0
年齢	—	—	—	—	66.7	—	100	0.0	100	—	59.5
母	—	100	100	100	100	80.0	71.4	83.3	87.5	66.7	79.1
高卒	83.3	70.0	67.6	71.1	74.4	86.4	65.2	77.3	50.0	52.9	69.3
大卒	80.0	69.7	50.0	66.2	100	37.5	25.0	28.6	—	50.0	57.4
年齢	—	—	—	—	66.7	—	100	0.0	100	—	75.0
年齢	—	—	—	—	0.0	100	—	100	100	—	83.3
年齢	21~25	100	78.9	70.0	76.7	72.7	66.7	62.5	33.3	82.5	75.0
年齢	26~30	78.6	76.7	72.1	71.2	57.1	66.7	62.5	72.7	60.0	57.7
年齢	31~35	75.0	46.7	75.0	50.0	54.5	100	70.0	50.0	42.9	25.0
年齢	36~40	100	0.0	100	66.7	100	—	66.7	100	100	—
年齢	41~	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

登校拒否児の合宿指導における自我の成長
について

高橋宣昭 高安成志 ○坂口 洋
(千葉県立こども相談所)

目的：収容治療の一般的な意義とされている親子関係を客観視できようになること、自分自身についての洞察が得られること、情緒の安定、社会化的促進などについて、二橋他(1977)¹⁾に仿らって、児童相談所に入所したケースを分析し、二橋他のいう治療過程を判定する指標の妥当性について検討する。あわせて児童相談所における合宿指導の方法についても検討したい。

方法：児童相談所における一時保護所を利用して、合宿指導が適当とされた登校拒否児(登校を強制すると反抗したり、親に対して攻撃的になってしまっている。生活ルーチンになってきて、勝手気ままにすごしていく、ほとんど外出しなくなっている状態を示す)の集団をつくった。登校拒否児以外の児童も一緒に加わった。

一時保護所では、生活指導を中心となり、息をつく暇がないような日課をつくり、これを守らせた。学習は、一時保護所内の学習室で、基礎的なものの獲得をめざした。

午後は作業またはレクレーションを行ったが、それにより感情の発散をはかり、職員への挑戦の機会とした。

心理治療的なかかわりとしては、毎日集団面接を行った。この面接では、面接者はできるだけ受容的に接し、厳しい日譲からうの解放の場とした。またロールプレイングもありいた。その他に、個別面接、知能検査、性格検査も実施した。

保護者に沟しても、個別または集団面接を実施し、家庭復帰後のうけいれについて話하였다。

退所の見通しがついた児童については、学校退室に采配してもらい、登校の終り、登校後帰後のうけいれについてうちあわせを行った。

入所期間は次のとおりで、改善の方向が見えてきた児童から退所させた。退所の見通しについては、一週に一度協議した。

今回分析したケースのうちわけは、表1のとおり。

表1

	小6	中1	中2	中3	計
男	1	2	3	2	8
女		1			1
計	1	3	3	2	9

資料は、行動観察、面接(集団・個人)、保護者の面接、家庭状況の調査、学校の記録、心理テストによった。

結果：表2のとおりである。

表2

ス	模型	治療段階 (終終期)	心的年 齢	自立	挑戦	適応 状態	登校 状態
A*	過保護	胎動期	+	-	-	-	○
B	愛情抑制	自己確立期	+	+	+	+	○
C	愛情抑制	自己確立期	+	+	+	+	○
D*	過保護	自己確立期	+	+	+	+	○
E	過保護	自己主張期	+	+	+	+	○
F*	過保護	自己主張期	+	+	-	+	○
G	過保護	胎動期	+	+	-	-	×
H	過保護	胎動期	+	-	-	-	×
I	過保護	胎動期	+	-	-	-	×

(-)：課題が達成できなかったもの

○：問題なく登校しているもの

×：登校に失敗したものの

A,B,Cの三人は、♂53.2に実施、D-Iは、♀53.6に実施。

* A, D, F は、今回が2回目の参加である。

考察：登校している6人は、Aをのぞいて自己主張期が自己確立期に達しており、4つの指標についても1つのぞいて(+)になっている。登校していない3人は、1つ(も胎動期にあり)、4つの指標についても課題が達成されていない。このことは、二橋他¹⁾のが述べていることとほぼ一致しており、治療過程を判定する指標としては妥当性があり、治療を終結させてよいかどうかを決める際に有効であるといえる。

Aが登校した理由は、Aが会宿に参加していた時は即行動的な活動をもつ教諭・職員に児童に剥奪されて積極性をもつたこと、またA自身のもつ自身的ではあるが人のよさを彼らがうけいれ、Aが自分がうけいれられたという人間関係における安心感をもうえたことなどが考えられる。また挑戦と闘争の相手となる男性職員との接觸が多く、強い男性像に対することができたためと考えられる。

今回用いた方法は以下のとおりで有効であった。
1.期間を決めておいたので任性適応が防げた。2.男性職員へ挑戦することにより、環境の压力に対処できるようになった。3.異質の児童との交流により、自分に新しいところを学ぶことができた。

今後もこのような方法を用いて、自我の成長を助けるためのよりよい方法を見つけていきたいと思う。

参考文献 1)二橋他 1977. 登校拒否児の収容治療、児童精神医学とその近接領域、Vol. 10

No. 5. pp. 296-308

登校拒否児の治療過程について

秋山 俊夫 ○前田 豊
(福岡教育大学) (福岡県教育センター)

登校拒否児の治療の本質は、未成熟な自找を変容させ強化することにあるといえる。具体的には、子どもが Self-esteem を回復し、自己統制が可能になり、自主的に行動できるようになり、自己実現をめざして意欲的に集団適応していくことにあるといえる。

本症例研究は、Self-esteem の破綻から回復と自立をねらった治療過程を催眠療法や箱庭療法を通して明らかにしようとしたものである。

〔主訴及び生育歴〕

小学校時代は、学級の人気者であった S 子は、中学校 1 年生の 2 学期頃からテストの成績や数学の授業中に指名されることや友だちが悪口をいっているというようなことが気になって学校に行けなくなってしまった。

S 子の父親には、先妻の子が 3 人おり 25 才の長男だけが同居している。母親は、先妻の子に気兼ねをしながら S 子を育ててきたが、幼少期は、ヒステリックに泣く興奮傾向の強い子であった。学童期は、学業成績も上位で人気者であり欠席も少なかったが反面淋しがりやで犬や小鳥の世話を好んでいた。

しかし、中学校入学後小学校時代と異なりテストの成績が思わしくないため、それが気になり朝登校時になると全身倦怠感があり、両親が無理に登校させようとすると全身を硬直させ興奮して反抗する状態であった。昭和 50 年 11 月に K 病院で Depression の診断を受けたあと A 心療内科、H 病院を経て、昭和 51 年 5 月 1 日に来談した。

〔諸検査の結果〕

脳波検査：所見なし

ロールシャッハテスト：R=18, FC・FK の欠如
Content Range=4
(所見) 修正 BRS=-16

「やや不適応」「一種の逃避状態で自找への脅威を神経症的に防衛している」

Y-G 性格検査：B 型

精研式パースナリティ・インベントリィ：N 型
親子関係診断テスト：(父) 盲従溺愛型

(母) 消極的拒否型

〔治療経過〕

昭和 51 年 5 月～昭和 53 年 3 月、週一回 60 分間面接

期間	生活場面	カウンセリング中の内容	催眠イメージ	箱庭表現
5.1 5.5 5.7	登校拒否 拒食反応 胃痛復讐	胃が悪い。 テストが二 かい。	自律訓練法 上・下肢重 感反応。	アフリカ草 原の動物、 二つの世界 で内側広い
5.1 5.8 5.12	1日間だ け登校。 胃痛復讐	朝、吐氣。 数学の授業 が二かい。	楽しくバレー ボールをし たり勉強を したりしている	動物の親子 が平和にえ さを食べて いる。
5.2 5.3 5.3 5.3	断続的に 登校開始。 数学のない 日は登校	友だちヒュ ーくいって いる。 気持ちが樂 できる。	男の子とい うに楽し そうに授業 を受けてい る。	中央の森を 境に二つの 世界があり 内側に猿馬 がいる。
5.2 5.4 5.5 5.7	断続的に 欠席をする。 がテストけ り受験する。	登校に対する 不安がある。 出席日数が 気になる。	テストや体 育の授業を 受けている。	ライオンが 数匹で猿馬 を狙ってい る。
5.2 5.8 5.12	登校拒否。 運動会に は参加。	進学のこと が心配であ る。	何かにおび えている自 分。	動物が左へ 大移動、裏が 争っている。
5.3 5.1 5.3	外出や外 泊をする。 登校開始	卒業が心配。 登校に対する りきみが とれる。	母に抱かれ ている赤ん坊 の自分がいる	二つの世界 が統合し、 平和な世界。

〔考察〕

登校拒否児 S 子の治療過程を、生活と治療の両場面について相互に比較してみると、初期段階では、Self-esteem の破綻へ向っての危機感が表出され、逃避の防衛があったが次の段階からは、外界への発展に対する葛藤や願望が見られ、更に第 3 段階では現実適応への行動化がイメージや箱庭表現と一致してきている。しかし、断続的に登校できるようになった段階では、不安や恐怖のイメージを表出しながら自己洞察が見られている。

最終段階では、退行反応と行動化が同時に起こり、箱庭表現だけ、二つの世界は統合された世界への適応が表出されている。

S 子の治療過程を通して、催眠イメージや箱庭表現が Symbolic に表出されなかつたが、現実への適応の傾向は見られてきたといえる。

現在、S 子は、洋裁関係の専門学校に通い、母親と共に家事に励んでおり、毎日、落ち着いた生活を送っている。

自己変革過程について

宮本直美
(児童臨床研究会)

1. 立場と目的

私たちの臨床相談者は、臨床を生者の一つの出会いの場として捉え、診断即治療の実践者として“いま・ここで・新しく”来談者の課題状況を展開し、相互の役割の明確化、意識化を行いながら多様な関わり方を施設、創造し、“自己も人も物も若かれる接在共生状況”で、誰もが主体的に関係を組んでいくようなり方を育てることを目指しているといえよう。ここでは、この活動を通して見られた来談者(母親)の接在共生状況へと自己を変革していく過程と共に自己変革過程と呼び、その特色を明らかにしたい。

主基本となる理論は「関係存」であり、方法としては「関係療法」に基づきおくる。

2. 方法

相談場面で見られた来談者の母と子の関わりに関する発言から、臨床活動中に展開された技術を取り上げ、関係構造図やゲーム分析を活用し、自己変革につながるかを明らかにする。

3. 結果と考察

類型Ⅰ<一般型>



※L=Leader, M=Mother, S=Self, P=Person, O=Object
類型Ⅰで来談者が、相談長方に内向あるいは内接し

ながら、人間関係で外接→内接→接在へと変化するには(①～⑦の構造図)、相談者が、課題状況、人格構造の明確化→構造内次第部分の明確化→人格構造領域の拡大→接在領域の設定→接在領域の活性化との発展を目指してふるよう。(⑧～⑩の相談者の機能)

類型Ⅱ<ゲーム型> (アトA理論に準拠)

相談過程では、前期・中期に多く見られる。(類型Ⅰの図中①～⑦に対応)

来談者(相談)の構造化パターン	構造の後程	展開されて相談者の役割
①自己否定・他者否定	自己肯定	①ミラー、アフレット、アブル、 苦勞逃避(何故私がいいことにどうぞ) など
②自己否定・他者肯定	他者肯定	②良いところばかりいふこと 意見、肯定、はじめて新しく かしい悪いことをいふこと
③自己肯定・他者否定	構成	③場面、状況の中での発展 比較、摘出、反復(同じように) など

類型Ⅱで、来談者が無意識に展開する二重的、否定的構えから、意識的、三重的・多層的、肯定的構えへと変容するには、相談者が、その変容過程に対応する技術を展開して、来談者に於いて、いま・ここでの肯定的、体験的な気づきが起きるようにならわる。

類型Ⅲ<發展型>

相談過程では、主に後期に見られる。(類型Ⅰの図中⑧～⑩に対応)

構造図(相談者(母親)の行為)	構造相談者の行為	相談者の構造
①) 気づく	①) 生活領域別関係	①) 構造明確化、規則的原則
②) (発見を整頓しながら 伝える、みる、考むなど)	②) 伝統、母の個性の発見	②) 構造の底辺
③) 工夫する	③) 現場の明確化開 発の開始、生活領域 の拡大など	③) 基礎
④) (小おいかから居る、 関係を創造するなど)	④) (関係、状況を創造 する) 主体的自発的	④) 創造
⑤) 变化し発展する	⑤) (関係、状況を創造 する) 主体的自発的	⑤) 創造
⑥) 制造する	⑥) (関係、状況を創造 する) 主体的自発的	⑥) 創造

類型Ⅲで、来談者が生活領域を拡大させながら、自発的、創造的に関わっていき過程であり、そこで展開される相談関係は、来談者とともに穿ぶ立場で、誰もが主体的に関係を組うあり方をもたらす。

参考文献

- 関係学研究 第1巻～第6巻
- 児童臨床 松村康平編著 光文館 昭和48年
- 児童臨床研究会月報 第1号、第2号 1978年

精神病者に於ける智能検査、性格検査成績の集計と検討

竹原一雄・池田直博
(中京大・心理) (三河病院)

1. 研究目的

多様な精神症状を持つ被検者に対して容易に行いうるテストを用いて、その結果と臨床病像との関連を追求した。

2. 研究方法

被検者は私立精神病院に入院中の266名で、1年間の検査期間に新田中B式智能検査及びクレペリン精神作業能力検査短縮版30秒型を行った。後者は加算と平行して数字に丸をつけただけの変法(以下丸付け法と記す)を試みた。

3. 結果

智能点の平均は 34.5 ± 18.8 であった。作業能力検査は加算法と丸付け法で量及び質を比較した。量は丸付け法で著しく増加するが、その状態は頻度分布ヒストグラムと観察した。質の分段による頻度分布ヒストグラムでは、丸付け法では準定型が増加し疑向型、異常型が減少する傾向を認めた。智能点と丸付け法の量との相関係数は0.61、加算法の量との相関係数は0.50であった。尚ほ智能点と加算法及び丸付け法の質との相関は殆ど無相関であった。次に最も困難な問題として病像と以上3種の検査の成績との関係を調査した。69例について数日以内に検査を行った。病像を4群に分類し検査結果との関連を分布の状態から観察した。この69例についての作業能力検査の加算法及び丸付け法の量及び質の推移を含めて、病像との関連を示す分散の状態を以下に図示する。

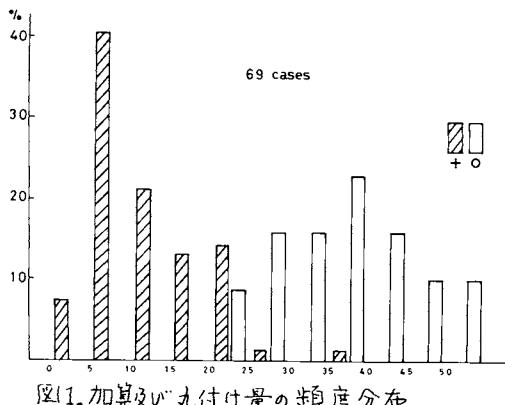


図1. 加算及び丸付け量の頻度分布
前述した丸付け法による量の増加の状態が頻度分布に於ける山の分離としてはつきり認められる。

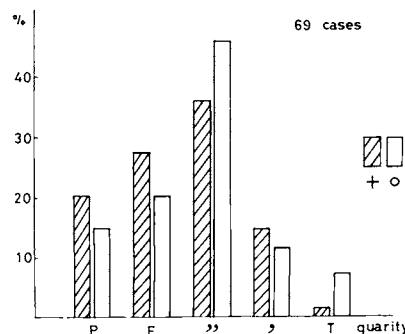


図2. 加算法及び丸付け法の質の頻度分布

図2では前述した丸付け法による質の推移がはつきりと認められる。

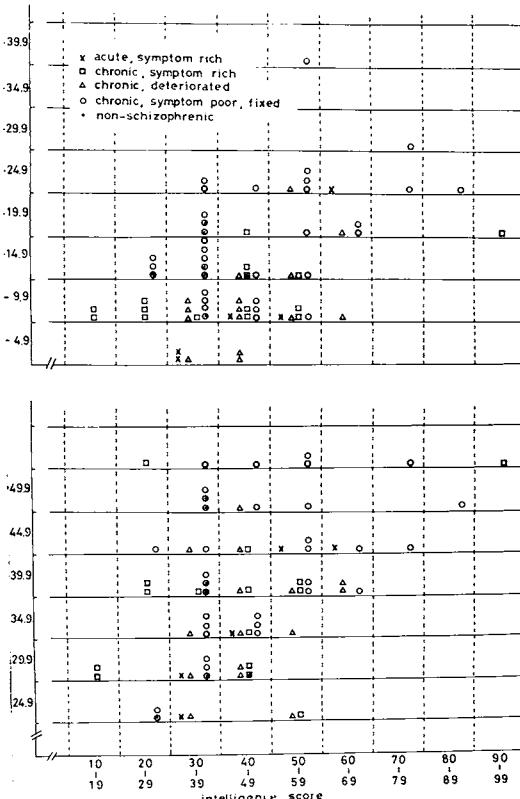


図3. 病像との関係(上の図の縦軸は加算の量、下の図の縦軸は丸付け量)症例の分布の状態を示す。

図3の如く症状貧乏固定(○印)群は智能点に比して加算及び丸付け量が多く、他の群は智能点に比して加算量が少ない。尚ほ図3と同じ様式で質を縦軸として症例の分布図を作つた。その結果○印群は丸付け法で質が改善する傾向が目立つた。

天候と心理との関係(1)

今井 省吾
(東京都立大学人文学部)

研究法には、統計的方法、行動観察法、実験などが考えられる。筆者はこれまで、研究着手の第1段階として、主として「統計的方法」による「自然季節の天候と心理との関係」の質問紙法調査を実施してきた。(今井: 1965~)。

調査項目の主なものを列挙すると、「春と秋の彼岸の頃の主観的な暖かさ」、「寒暑に対する主観的な強さ弱さ」、「暑さ寒さのはじまりの時期とあわりの時期の主観的評価」、「年間の、晴、くもり、雨の日数の主観的評価」、「自然季節(真冬、初春、真春、初夏、梅雨、真夏、初秋、秋霖、真秋、初冬の10区分)の天候の快・不快、好き・きらい」、「自然季節の主観的な寒暖系列の順位」などである。これらの心理的反応と、質問紙調査の実施時期(季節)によるちがい、さらに、性格との関係が分析された。性格テストはY-G, と MMPI。被験者は、いずれも東京およびその近郊に永年在住する多数の男子大学生。

えられた結果の主なものを要約して示す。

「秋彼岸の方か春彼岸よりも暖かく感じられている(主観的評価の平均値の差、約4°C)か、物理的温度差(気象庁の観測値、約11°C)よりもかなり小ささい」。
「初夏の時期の調査では、暑さへの弱気化と、寒さへの強気化の傾向がみられるが、一方、真秋の時期の調査では、逆に、暑さへの強気化と寒さへの弱気化の傾向がみられる」。「初夏の時期の調査では、暑い期間はより長く、寒い期間はより短かく感じられるが、一方、真秋の時期の調査では、逆に、暑い期間はより短かく、寒い期間はより長く感じられている」。「年間の晴、くもり、雨日数の主観的評価の平均値は、晴157日(43%)、くもり131日(36%)、雨77日(21%)であるのに対して、気象庁の観測統計値は快晴(雲量、0~2.5未満)58日、晴(雲量2.5~7.5未満)107日、くもり(雲量7.5~10)84日、小雨(雨量、1~10mm未満)57日、雨(10mm以上)。雪、雷雨59日である。これらの天気日数の主観値と気象庁観測値との比較対応によって試算(直線内挿法)推定すると、「晴」と「くもり」との主観的境界値は、全天雲量(0~10)の尺度でいえば、「7」付近

にあり、主観的に「雨」の日と感じはじめる境界値は、1日の降水量の単位でいえば、「8mm」付近にある。「気温の気象庁観測値による自然季節の寒暖系列順位と主観的順位とのくいちがいをみると、初秋(8月下旬~9月上旬、気温の日平均値25.2°C)よりも初夏(5月上旬~6月上旬、18.1°C)の方が暑く感じられ、また、真秋(10月中旬~11月中旬、14.1°C)よりも真春(3月中旬~4月下旬、11.2°C)の方が暖かく感じられる。一方、真冬(12月下旬~2月上旬、4.0°C)に次いで寒く感じられるのは、初春(2月下旬~3月下旬、5.2°C)ではなく、初冬(11月下旬~12月中旬、7.7°C)である」。「自然季節の10区分における心理的寒系と心理的暖系との境界は、初春(5.2°C)と真春(11.2°C)との間、および、初秋(25.2°C)と秋霖(秋の長雨の時期、20.8°C)との間に存在する」。

性格との関連性についていえば、例えは、「一般的活動性(活発な性質、身体を動かすのが好きな性質)の大なる者は暑さに強く、年間の晴日数をより多く評価する」。「神経質、抑うつ性、気分の変化の大なる者は、真夏、真冬、梅雨をより不快に感ずる」。「思考的に内向(反省的、瞑想的)の者は年間の雨日数をより多く評価する」。「心気症傾向(自分の健康状態について不当に懸念する傾向)の大なる者は暑さ寒さに対して弱いと感じている」などの事実が確かめられた。

当面の重要な研究課題は、天候「観」と天候「感」、季節「観」と季節「感」とである。(便宜的な区別だが、「観」は知覚・認知の面を、「感」は感情・情緒・気分の面を意味する)。具体的な研究項目についていえば、天候・季節に対する感情・気分の問題については、快・不快感を中心としていろいろな感情的現象面をあらわす形容詞の分類、重みづけ、因子分析などにより「天候(または天気)の心理的評価の多次元的尺度」を構成すること。各種の心理反応のデータから、天候季節の心理学的区分、分類をおこない、心理的現象面に影響する「天気型」の構造を探ること。いわゆる個人差としての「天気・天候の心理的過敏症」の問題については、過敏型者を検出できる信頼性、妥当性のある心理テストを作成し、各種のパーソナリティ・テストとの相関を調べ、天気過敏型者の心的構造を知ること。この種の過敏症の増加傾向の実態を確かめ、できれば、社会的背景と関連させて考察をすめること。

心的現象場の一検討

東林仁
(電電公社)

1. まえがき

心的現象を力動的な場として論じた報告は既にあるが、これを時間的・空間的な場に於て系統的な展開と試みようとしたものは少ないようである。

本報告は心的現象の基本場として、環境を含めた素質域、気質域および重合域の3領域を設定し、かかる場に時間的・空間的な場の変化を記述できる電磁場論的対応づけを行ことにより、心的現象の基本要因とその機能等の究明に必要な具体的な知見を系統的に得ようとしたものである。即ち、心的現象は電磁場形成の基本則である誘導法則および巡回法則に類似でもあると仮定し、心的現象である心理状態はそれを電・磁界に対応づけた外向的および内向的な特性を有する2つの心基底の重合域における時間的・空間的なベクトル場の様態である、として検討したものである。

2. 心的構造

心的構造を静的常態時的心的構造と動的常態時的心的構造に分けて考察する。図1は静的常態時的心的構造を示したもので、周辺域(環境)の中で知覚域および融合域の2領域からなる空間的構造体であると仮定する。静的；無刺激、無動機、融合域；素質域(先天的情感作用域)と気質域(後天的情感作用域)の融合した領域

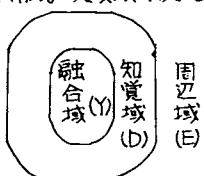


図1. 静的心構造

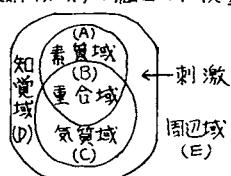


図2. 動的心構造

図1に何等かの刺激等を印加すると図2のように素質域、重合域、気質域に分化した動的心構造となる。重合域は融合域が素質域と気質域に分化重合した領域で、かつ気質域が素質域を挟み込んだ領域であつて、その混在領域ではない。この重合域に於る2つのベクトル的心基底(心傾；F、情傾；G)の存在様態場を心的現象場と呼ぶ。心傾；外向的、創造的志向を有する他傾的心基底、情傾；内向的、後退的志向を有する自傾的心基底、両心基底は相互に直交して存在する。

3. 心的現象場の生起過程とその式化

心的現象の心理状態が図2のBに於るF、Gの電磁界的対応様態であるとしてその生起過程を述べる。

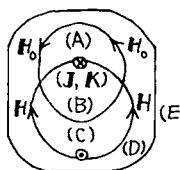


図3. 心構造に於ける心搖(Hn)の分布

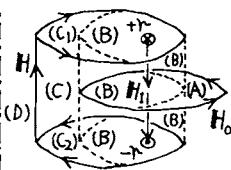


図4. 心構造の側面概観上の心搖の揺動状態

まず知覚域が動機(刺激)すると図1から図2のように心構造が分化し、各領域に心搖(Hn)が図3のようになる。心搖；心元(心的励起源(ト))の揺動」即ち、素質域には素質心搖(Ho)が、気質域では気質心搖(H)が揺動する。各Hnの揺動状態を図4に示す。図4により心理状態生起過程と場の変化として述べる。(a). HoによりAの構造と特性に依存したGをAに生起する。(b). GはBの心空間に誘導され、Bの構造と特性に依存する情集密度(J)でBの心空間に集束する。「情集密度；BがGを集束する度合」(c). Bの心空間ではJの時間的変化を打消すようにBにFの空間的変化を生ずる。次に、(d). CはBの心空間に於て図4のように分化している為、C内のC1からC2にHnが揺動して閉路となるには重合域心搖(H1)の揺動が必須となる。

(e). H1の揺動原としてC1およびC2にトが生起する。(f). トはBに於るC1からC2にFを生起する。(g). 生起したFはBの構造と特性に依存する心集密度(K)でBに集束する。「心集密度；BがFを集束する度合」(h). BでのKの時間的変化はBにGの空間的変化を生ずる。(i). Jの発散は零。(j). Kの発散はトとなる。

よって、心的過程である心理状態は、以上(a)から(h)により、重合域に於るF及びGの直交変化の場の様態である、と言える。(a)から(j)を式化すれば、 $\nabla \times F = -\partial J / \partial t \cdots (1)$, (a)～(c). t: 時間。
 $\nabla \times G = \partial K / \partial t + H \cdots (2)$, (d)～(h).

$\nabla \cdot J = 0 \cdots (3)$, (i). $\nabla \cdot K = T \cdots (4)$, (j).

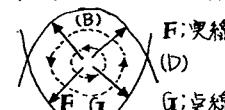


図5. Bの心理状態場

図5はBの心空間に於けるFとGの直交分布状態、即ち心理状態の場を例示したものである。

4. むすび

心的現象は心基底の重合域に於る直交変化の場の様態であるとして、これを時間的空間的な場に於て考察し、式化した(なお、心基底は正常異常に関係なく不变であるとした)。即ち、各個の心理状態は心基底の様態(mode)種別であり、この様態種別を規約すれば心的現象を系統的に知見する補助手段にならうと考える。但し、心的時空とは何か、等の問題は残る。^{(1) レビン等。} ^{(2) Maxwell Eq.}

ラムダ反応による 視覚作業の評価

八木 昭宏
(製品科学研究所)

眼球運動をトリガーにして、後頭部脳波を加算平均して得られるラムダ反応が注意のレベルによって変化することが明らかにされている。今回は、そのラムダ反応を指標にして人間の視覚的作業の評価が可能か検討した。

方法

被験者は6人の成人男子。

被験者は、電極装着後、防音室に座った。実験条件は、次の4つであり、被験者は、各条件での作業が指示された。1：暗室；暗室ではあるが、目を開き、眼を動かすこと。2：白紙；眼前50cmの白紙を、自由に見る。3：地図；国土地理院の地図の上を、目で走査する。4：地名探し；地図上の特定の地名が与えられ、その地名を探す。各条件は、4分間であった。

脳波は、後頭部に付けた電極より導出し、時定数0.3秒の生体アンプで増幅した。水平の眼球運動は、左右の二めかみに付けた電極よりEOGを導出し、DCアンプで増幅した。まばたき電位は、右目の上下に付けた電極より導出した。これらの反応は、すべてデータレコーダに記録した。

ラムダ反応は、眼球運動の終了時点に同期しているためデータレコーダを逆転再生させ、眼球運動の終了時点に同期したパルスを成形した。そのパルスをトリガーにして、その前100msec、後300msecの脳波を50回加算平均した。

結果

図1は、4つの条件下での6人の被験者のラムダ反応を示している。太い線は、6人の総平均波形を示している。暗室中では、波は一定した傾向はないが、視覚刺激が与えられると、潜時が約100msecのラムダ反応(P1)が現われる。刺激がパターンを持つ場合、反応はより明確となる。さらに、地図と地名探しの両条件とも、同一刺激であるか、地名探し作業が課された場合、ラムダ反応の振幅は有意に増大した($P<0.05$)。

それだけではなく、反応の波形がより安定している。この事実を確かめるため、それぞれの条件内で、二人づつの波形の相関係数を算出し、Z変換後、15組の組合せより、平均相関係数を求めた。図2に、各条件での平均相関係数を示す。この値も、暗室、白紙、地図、地名探しの順で増加し、それぞれ有意差があった($P<0.05$)。

論議

以上のように、ラムダ反応も誘発電位と同様、人間の注意のレベルのような精神負荷の評価に応用する可能性が得られた。ラムダ反応は、誘発電位と異なりトリガーのための刺激を必要とせず、被験者の眼球運動をトリガーにして、脳波を加算平均すれば“よいので”、適用の範囲が広い。また振幅だけではなく、反応の安定性が、作業の評価に使えるならば、その応用範囲は、より一層、広まるであろうと考えられる。

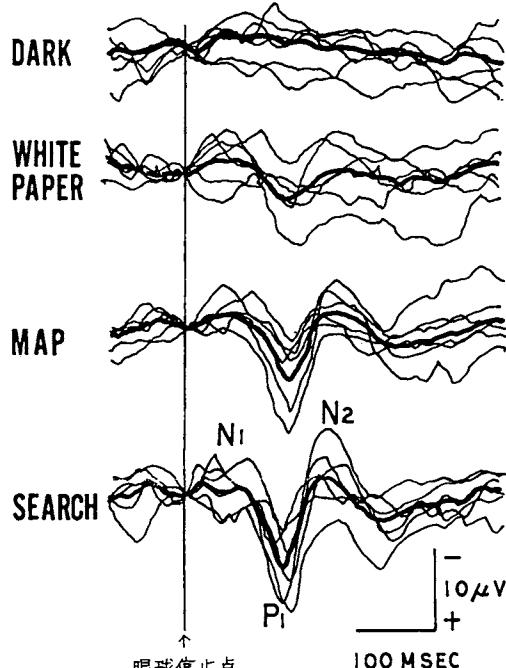


図1 4つの条件下でのラムダ反応

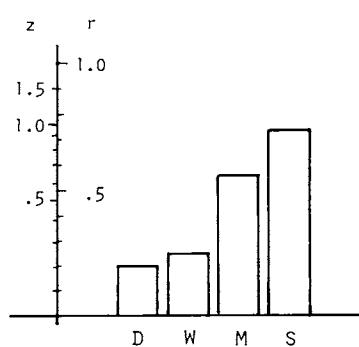


図2 6人の波形間の平均相関係数

D；暗室，W；白紙，M；地図
S；地名探し

ポリグラフ検査における質問内容と反応表示

— innocent subjectsを対象として —

山下 素邦
(科学警察研究所)

はじめに: ポリグラフ検査(とぞ発見検査)の質問法の1つに Peak of tension test (POT) がある。POTの質問内容とその虚偽検出率について、日本応用心理学会第44回大会に発表した。これは guilty subjects を対象としたものであったが、今回は POT における innocent subjects を対象として、質問内容の検出有効性を明らかにする目的をもって、実験記録・実務検査記録の両面からの分析をこころめた。

方法: [実験] 被検査者はポリグラフ検査初体験の19才~21才の大学生15名であった。被検査者に犯罪者無実者の各行動内容が記された、いずれかの指示書を任意に選ばせ、指示書に記された行動をした後、ポリグラフ検査をうけさせ、その検査記録並びに検査直後に CPT 内観から検討を行はつた。無実者用指示書には、あなたは横握窃盗事件の無実者の役割をしてもらいます。目前の時計が2分経過してから検査室にはいり、ポリグラフ検査をうけて下さいというものであつた。質問は分類質問 A … 指示された行動目的に直接関係ある質問(質問 A1, とられた金券の額面…(a) とられた金券の額は3200円ですか、(1)9000円、(2)22000円、(3)13000円、(4)18000円、(5)25000円、質問 A2 金券がとられた場所、) 分類質問 B … 指示された行動目的に直接関係ないが行動場面に比較的強い因連があると思われる質問(質問 B1, とられた金券と同じ場所にあつたもの…(a) とられた金券と一緒にオーバーパーありよじつか、(1)万年筆、(2)銀行通帳(3)カメラ④印鑑(5)オペングラス、質問 B2 とられた金券と同じ場所にあつたもの) 分類質問 C … 指示された行動目的に直接関係ないが行動場面に比較的弱い因連があると思われる質問(質問 C1, 金券がとられた室内にあつたもの…(a)金券がとられた室内に置時計がありよじつか、(1)ステレオ、(2)電気計算機(3)電話器④テープレコーダー(5)掛け時計、質問 C2 金券がとられた室内にあつたもの) の計6質問が用意され、各質問と試行を行なわれた。(注… O SP の質問は Critical question) 測定指標は GSR (コンデンサー回路)により、結果の整理判定は平均順位得点法によつた。検査直後、 critical question に対する先行経験等の想起と不成功数との関連について内観丘といた。

[実務検査]: 分析資料は昭和4年~5年の間に警視庁公安部埋立研究所心理鑑定室小杉常河技師によつて行なわれたもので、ポリグラフ検査(罪種窃盜)実施後当該事件が解決せずとなつた innocent 被害(無実者群)18名の POT の質問記録(測定機械は竹中式トランジスタ型ポリグラフ、J-パンチ-回路)にハシゴがあり、整理判定は実験の方法に準じた。質問は実験の質問分類に準じて、分類質問 A … 犯行に直接関係ある質問(盗られたもの、盗られた場所)、分類質問 B … 犯行に直接関係ないが行動場面に比較的強い因連があると思われる質問(盗られたものと同じ場所に江持したもの)、分類質問 C … 犯行に直接関係ないが犯行場面に弱い因連があると思われる質問(盗られたものと同じ建物内、室内等にあつたもの)にわけられた。

結果 [実験]

分類質問	A	B	C
成功数	20*	27*	23*
不成功数	10	3	7
成功率%	66.7	90.0	76.7
二項検定 (30, 15)			
* P < .001			

A B 間有意差あり ($\chi^2 = 4.81, P < .05$)
A C 間有意差なし ($\chi^2 = 0.74, P < .50$)
B C 間有意差なし ($\chi^2 = 1.92, P < .20$)

(1) 実験における分類質問の成功率は $B < C < A$ の順であり、分類質問 B の検出有効性は他の分類質問に比較して高い傾向が認められた。内観数に対する想起数は $A < C < B$ 、想起数に対する不成功率は $C < A < B$ であり、分類質問 B の想起数並びに不成功率の少ないのがめだつている。

(2) 実務検査において分類質問 B, C はいずれも成功率 100% であるが、分類質問 A は 74.3% であり他の分類質問に比較して低かつた。(3) innocent subjects においては分類質問 B の検出有効性が高く、分類質問 A, C は低い傾向が認められた。これは C に対する想起数並びに不成功率の少ないのがめだつている。

	分類質問		
	A 不成功数	B 不成功数	C 不成功数
C 有	10	6	3
C なし	(33.3)	(60.0)	(10.0)
Q1に対する不確認、誤認が一回ではないかと考えられる。	20	4	27
想起 %	(66.7)	(26.0)	(90.0)
Q1に対する不確認、誤認が一回ではないかと考えられる。	3	25	3
想起 %	(11.1)	(83.3)	(12.0)

情動刺激の知覚

鎌田勇（早稲田大学）

情動研究に於ける認知論的アプローチの立場では、生体の睡眠から情動的興奮までを脳幹網様体の活性化機能による activation level の果たす行動的連続体、 arousal 連続体であり、有機体は情動的流れの連続的状態にあるのであって、情動は全ゆる環境との共存・全ゆる行動に伴つているといわれる。情動の種類と強度は刺激と内的状態との相互作用の結果であり、とりわけ主観的評価の役割が重要なものである。Arnold はこの評価 (appraisal) を、全ゆる知覚材料の受容に伴つて直接的に即座になされる直感的過程であつて、必ずしも意識的なものではないとして、情動における appraisal の結果、対象に近づこう、あるいは遠ざかろうとする傾向を感じ取られたものである、としている。

この様な appraisal の考え方には知覚研究に於ける raw look 研究としてなされてきた。rawlook は知覚過程に於ける媒介変数として主観的原因と問題にしたのであるが、やがて主観的原因を情動として統一的に扱う様になり、刺激の情動的意味が刺激の知覚自体に影響を及ぼすという研究と並んで、perceptual defense (以降 PD) がその代名詞となる用いられる様になり、今。

PD 研究は 1950 年代に非常に盛んに行われたが、批判が多く、60 年代には一時期否定されたかの観を呈した。しかし情報理論等最近の知覚理論では PD に対する受容的であるといえる。知覚はいわゆる認知と同じく input から output までの conversion、種々の投射を経た過程であり、この過程に於てごく早期から意識されない情報の分析と選択がなされる、とされるのであるが、PD は情動に基づくこの選択の一つの現われ、と考えることが出来るのである。

前記の appraisal 仮説は情報理論に於ける知覚情報から分析の考え方と近くしている。appraisal 仮説を検討するには PD 実験は適切であると思われる。また長く議論を繰り返されてきた PD を追試するところ興味が持たれ、以下の実験を計画された。

方法： 統制群法による事前事後計画、被験者大学生 39 名、刺激ランダムト環をタキストスコープでスリットで呈示、事前測定 — X + 1 秒呈示直後刺激 30 msec、前後呈示直後白色光照射、呈示時間の上界系列、切り目のみ方位 (上下左右) を発見させ、各方位 4 回ずつランダムに計 16 回測定、実験装置 — 実験群 (E 群)

32 名、記憶テストを行ひ、テストの失敗・成功体験とリンクを結合させる。9 個の並意味練りを 1 組として 4 組を 4 つハーリングと組み合わせる。組み合せは被験者により異なり、組み合せは從ひハーリング 1 秒意味練り 4 秒リンク 1 秒順に 2 回、これを各組み合せセッション 1 に 4 回ずつタキストスコープで呈示、直後にリンクだけ呈示し再生テストを行ひ、並意味練りの連想価と呈示順序で難易を調整、統制群 (C 群)、E 群より連想価の高い意味練りによる容易な記憶テストを行ひ、E 群と同回数リンクを呈示、事後測定 — 事前測定と同じ手続き、所用時間、1 人 1 時間。

結果： 各々の測定値を片数変換して包埋、1. C 群の各方位の前後差の下検定 — P > .1、有意差なし、2. E 群の記憶テスト失敗リンク (X)、成功リンク (O)、残りエリック (△) 及び C 群 (C) の前後差の値の度数分布の正規性の検定一般で正規性が認められる。X、O、△、C の前後差の分散の差の検定 — X < O、△ < C の間に有意差なし、X < △ 及び C、O < △ の間に 0.5%、O < △ の間に 5% 水準の有意差、從て

図 1. 相対度数分布

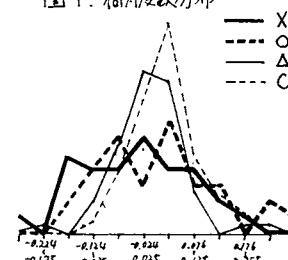
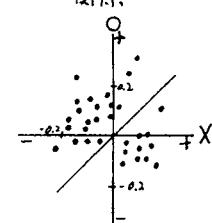


図 2. E 群の X と O の関係



失敗・成功リンクは neutral リンクとは異なる反応分布をしていくことになる。(図 1 参照) 3. E 群の各被験者の X と O の関係をみると 2 つのタイプに分かれ X の前後差が一方に向かう者 (見えたくなつた者) は O が見ええた様になつてあり、逆に X が見ええた様になつた者は O が見えにくくなつてゐる。O を横軸 X を横軸に各被験者をプロットすると図 2 の様になり、データの中の斜線は J. T. 2 群に分けることができる。両群は X と O の関係がほぼ平行の一一直線上に沿つてゐる。斜線上部を I 群 (31 名)、下部を II 群 (11 名) に分類する。4. I 群の X O Δ の前後差の正規性、分散に有意差がないことが検定されるので、F 検定する — 1% 水準で有意、X < Δ の間に 1%、O < Δ の間に 5% 水準で有意差あり。5. II 群を下検定する — 1% 水準で有意、X < Δ の間に 1% 水準で有意差あり。

結論： appraisal 仮説は実験的に支持され、情動の知覚への影響が現われ方には個人差が認められる。

文字で構成された隠絵の諸相

—古事記が描く女体像と倭人伝が描く倭國の所在地図および帶方・狗邪韓國間行路地図—

木村俊夫
(茨城大学教育学部)

1. 問題

「絵の中へ更に他の絵を目立たなりように描き込んだもの」(庄舜苑)を隠絵という。ここでは比喩的用法に従い「文字で構成された隠絵」を「文章中の字句が或種の工夫を施されることにより他の意味ないし图形を枕やかに表示・象徴するもの」という意味に使用する。Ulyssesにおける隠絵は「他の文字・文章」、古事記における隠絵の一つは「圓形」としての女体像である。
11,2366-73

後者における身体各部縦長比の、人皇33代記載字数比による表示は安萬信の独創かも知れぬが、33段の身体部位名柄や横幅比の表示方法の範型の一つは倭人伝と考えられる。

2. 目的と方法

文字で構成された隠絵には種々の型がある。本研究の目的はその型の発見・分類にある。方法はテキストを宮内府書院部藏、昭熙本三國志の字典とし、変形文字および故意の誤字等(為巧文字)を隠絵の所在暗示および隠絵讀解の鍵として受容し、簡略化された記述を時に説文解字等により補足しながら讀解し、正解を得た時に初めて隠絵の存在を確認することにある。

3. 結果と考察

3.1 倭國の所在地図

倭國の所在位置記載は次の3章句であろう。

A 倭人在帶方東南大海之中
從郡至倭猶海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗
邪韓國七千餘里
計其道里當在會稽東治之東

A・B・Cが暗示する3直線は順に倭國の東・北・南を限定している(西は東シナ海)。治の変形性は旁の上方へのぞれにある。これは、後漢の會稽郡治(紹興・北緯30°00'・東經120°35')を西治と考えた上で、秦漢の會稽郡治(蘇州・北緯31°18'・東經120°37')を東治と略記したことの暗示と解される。こう解すれば、A・B・Cは倭國の版圖がほぼ對馬・壹岐・九州本土にあることを3直線より成る圓形で表示した所在地図を内蔵していたと言えよう。

3.2 帯方・狗邪韓國間の行路地図

Bは

京城_{y里}仁川_{x里}水行_{y里}分山_{y里}金海_{y里}釜山_{y里}

$$x + y = 7000 \text{ (里)}$$

$$y' + y'' = \text{餘里}$$

D

E

F

の圧縮記載と解される。3世紀中葉の朝鮮半島西岸における帶方領・韓國領の境界は分山付近である。南鮮の地形により分山から乍南乍東は水行では不可能、陸行ならば可能である。ところで、韓伝の

韓……方四千里(千は千の故意の誤字) G

は、韓の國形の各辺を四千里と表示すると共に圓の正方形の各辺を2000里と表示したものがである。なぜなら、説文解字によれば、十は「一爲東西一爲南北」、韓は「井垣也」、井は「八家一井構韓形」である。井垣を正方形とすれば一家当りの構えは、構え = $\frac{4(\text{里})}{8(\text{里})} = \frac{1}{2}$ である。従て、乍南乍東の行路を包む正方形と井垣と見做しその1辺の長さを \overline{AB} とすれば、 \overline{AB} は次のように表示される。

$$\overline{AB} = \frac{\text{四千里}}{2} = 2000 \text{ 里}$$

圓およびD・E・Hによれば

$$y = 2 \overline{AB} = 4000 \text{ (里)}$$

$$x = 7000 - 4000 = 3000 \text{ (里)}$$

I

J

である。yに対するxの見かけ上の過大性は仁川・分山間の襟丸な半島や深い入り江を含む海岸線の錯雜性にある、と解される。こう解すれば、GとBは帶方・狗邪韓國間行路がDの如くであり、特に乍南乍東の行路に関して圓の如き行路地図を内蔵していた、と言える。

なお、 \overline{AC} は圓によれば2824.4里、地圖によれば24.05里である。従て上記の1里は0.085里である。高さ「二十餘里」の「天柱山」(魏志オ十七・張連伝)の標高が1860米とすれば、餘里を10%の2里と見た場合22里 = 1860米から算出される1里の実長は上記に一致する。

引用文献

- 1) 井手一馬、古事記における裸美女の隠頭、佐賀大学教育学部論文集1、昭26.
- 2) 抽稿、文字で構成された隠絵の諸相、教育心理と近接領域、第3号、昭53.
- 3) 抽稿、魏志倭人伝における為巧文字、茨大教育研究紀要、第10号、昭53.
- 4) 古田武彦、邪馬壹岐の論理、朝日新聞社、昭50.

二色配色における色彩の誘目性

神作 博
(中京大学文学部)

二色配色における誘目性に関しては、すでに同心円の二重円を用いた研究を日本心理学会第41回大会、日本色彩学会第9回大会において発表してきている。この両研究においては、純色同志の組み合わせを用いたり、内円あるいは外円の一方の色相、明度、彩度を組織的に変化させたりして、配色間の色彩の相違がいかに配色全体の誘目性に影響を及ぼすのかを検討した。

本研究では実用性を考慮して、①単色の誘目性の高い色同志の組み合わせ、②安全色彩などの視覚表示にしばしば用いられる色彩の組み合わせ、などを色刺激として2色並置した場合につき検討し、また、調和との関係、二色配色の誘目性の予測について言及する。

装置および方法: 暗室内に光源を吊下げる高さ5mの鉄製の架台を設置し、被験者の頭より照明する。支柱で囲まれた架台内部床上75cmのところに中灰色(N5)の刺激提示台が置かれ、その中央部に色刺激(24cm×24cm(視角2°)の色標2枚並置き二色配色)が提示される。被験者は原則として2名ずつ刺激提示台に向かって座り、両眼視にて刺激を自由に観察する。刺激提示面の照度は500lx±20lx。照明光は白熱灯光。実験の一部に白色蛍光灯、水銀灯、螢光水銀灯、ナトリウム灯も用いた。教示において「二色としての誘目性(あるいは調和)を判断すること」を強調した。

色刺激は表のとおりで、尺度値はカテゴリー法による主観的判断(「目立つ—目立たない」;「調和—不調和」の2尺度、各7段階)により測定された。

結果およ

び考察: 結

果は表のと

$$r=0.67$$

おりである。

(1) 单

色において

誘目性の高

い色彩同志

の組み合わ

せは二色配

色において

も誘目性の

高いこと、

また、その

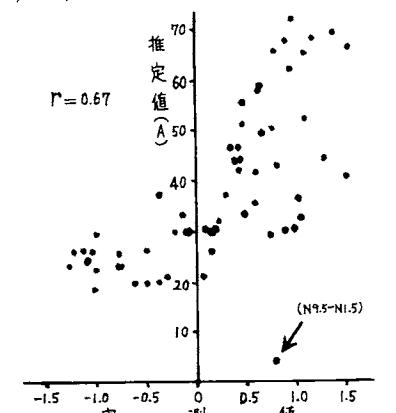


図 実測値と $A=2I+3C$ による推定値との関係

* I: Godloveの色差式、C:配色の彩度の平均

逆も確認された。

(2) 誘目性を2通りの方式により推定した。

- ① 単色の誘目性尺度値の相加平均から推定する方式
- ② 納谷らの提唱する $A=2I+3C^*$ の式による方式

①の推定値と実測値との関係は、 $r=0.97$ と極めて相関が高く、②の推定値と実測値との相関も $r=0.67$ で高かった(図)。黒(N1.5)と白(N9.5)との組み合わせは図の矢印の位置にあり、相関性が認め難い。これを度外視すると②の相関は $r=0.73$ となり、無彩色同志の組み合わせはこの式に適合し難いと言えよう。

(3) 調和の尺度値は表に示すとおりであり、誘目性に極めて類似した傾向を示している($r=0.94$)。

(4) 納谷らの色彩調和論で高、中、低の調和度を示した配色10対を用い、5種の光源下で実験してみると、白熱灯、白色蛍光灯では(3)と同様の高い相関(各々 $r=0.94$, $r=0.81$)が見られたものの、水銀灯($r=0.58$)、螢光水銀灯($r=0.36$)、ナトリウム灯($r=0.58$)などの相関はあまり高くなかった。これは光源の演色性によって調和感の方が著しい影響を受け、その結果、照明光の種類によて相関度が異なるものと思われる。

表 実測値と推定値 ($N=50$)

色刺激の 修正マッチ値	誘目性		色刺激の 修正マッチ値	誘目性		調和	
	実測値	推定値		実測値	推定値		
5Y 1/2 - 25Y 1/3	0.96	1.07	0.71	25B 1/4 - 10R 1/4	-0.76	-0.79	-0.44
5Y 1/2 - 5Y 8/10	0.79	1.02	0.53	5B 1/4 - 10R 1/4	-0.79	-0.88	-0.64
5Y 9/10 - 25Y 1/3	0.90	1.04	0.73	10G 3/4 - 10B 6/7	-0.31	-0.57	-0.15
25Y 1/3 - 7.5R 1/4	1.39	1.10	0.37	25B 1/4 - 10B 6/4	-0.50	-0.66	-0.03
25Y 1/3 - 25R 1/2	1.16	1.10	0.99	5B 1/4 - 10B 6/4	-0.62	-0.75	0.04
7.5R 1/4 - 25R 1/2	1.08	1.10	0.76	5Y 9/2 - 5B 4/6	0.15	—	0.11
N9.5 - 25Y 1/3	1.09	1.03	0.88	10B 3/4 - N6	-0.78	—	-0.37
N9.5 - 5Y 8/10	0.76	1.01	0.87	9.5 - 5G 6/6	0.59	—	0.57
10P 1/2 - 10R 1/4	-0.23	-0.03	-0.16	10P 1/4 - N2	-1.00	—	-0.75
10P 1/2 - 10B 6/4	0.23	0.11	0.15	N3 - 10G 1/4	-1.03	—	-0.81
10R 1/4 - 10B 6/4	-0.38	-0.25	-0.28	10GY 1/2 - 5Y 1/2	0.80	—	0.26
10G 3/4 - 5B 1/4	-1.04	-1.22	-0.81	10G 3/2 - 5Y 1/6	0.06	—	-0.01
10G 3/4 - 25B 1/4	-1.24	-1.13	-0.74	10G 6/8 - 5Y 1/8	0.38	—	0.16
25B 1/4 - 5B 1/4	-1.28	-1.29	-0.75	10P 1/4 - 10R 1/4	0.15	—	0.24
10G 3/4 - 5G 3/4	-1.00	-1.12	-0.87	5R 1/2 - N9.5	1.01	—	0.67
5B 1/4 - 10P 1/2	-1.14	-1.37	-0.81	5G 5/6 - N9.5	0.72	—	0.64
10P 1/2 - 25B 1/5	-0.14	-0.37	-0.49	25Y 1/2 - 25R 1/2	0.94	—	0.71
5Y 8/10 - 10P 1/2	0.46	0.69	0.54	25R 1/2 - N1.5	1.02	—	0.46
5Y 8/10 - 10R 1/4	0.57	0.34	0.54	N9.5 - 25B 1/2	0.48	—	0.41
5Y 1/2 - 10B 6/4	0.42	0.47	0.45	25Y 1/2 - N1.5	0.98	—	0.67
5Y 1/2 - 10P 1/2	0.47	0.66	0.42	5R 1/4 - 5Y 1/2	1.52	—	0.66
5Y 1/2 - 10R 1/4	0.29	0.30	0.13	5R 1/4 - N9.5	1.50	—	0.93
5Y 1/2 - 10B 6/4	0.41	0.43	0.30	5Y 1/2 - N1.5	0.99	—	0.53
25I 1/3 - 10R 1/2	0.61	0.71	0.55	N1.5 - N9.5	0.79	—	0.64
25Y 1/3 - 10R 1/4	0.41	0.36	0.58	25P 1/2 - 5Y 1/4	-0.37	—	-0.50
25Y 1/3 - 10B 6/4	0.65	0.49	0.45	5Y 1/4 - 5Y 1/2	0.34	—	0.53
10G 3/4 - 10P 1/2	0.08	-0.37	-0.12	N1.5 - 5Y 1/4	-1.07	—	-0.78
25B 1/4 - 10P 1/2	-0.08	-0.43	-0.25	25R 1/2 - N1.5	1.29	1.04	0.80
5B 1/4 - 10P 1/2	-0.10	-0.53	-0.14	5B 1/2 - 5Y 1/2	0.18	—	0.25
10G 1/4 - 10R 1/4	-0.50	-0.72	-0.34	25GY 1/2 - 5Y 1/2	0.62	0.83	0.64

** この推定値は、単色の誘目性尺度値の相加平均

主観確率による情報量の測定(1)

○市原 茂・増山英太郎

(東京都立大学人文学部)

常木 喜生

(電気通信総合研究所)

この研究の目的は、Weltner (1973) によると、紹介された主観確率から文字の情報量を測定する方法を用いて、新聞における文字の情報量を測定することである。これは、Shannon (1951) の確率ゲームと同様に、文章中に出現する文字を次々に予測してゆくものであるが、それと大きく異なる点は、必ずしも被験者が、言葉の統計的特性を完璧に知っている必要はなく、むしろ、個人個人が持っている主観的確率のほうに目を向けていることと、図1に示すような樹状図を用いて文字の予測を行なうことである。被験者は、図1の出発点のところから始め、次に来るべき文字は、右半分の文字群にあるか、それとも左半分か、仮りに左半分だとすると、次は、その上半分にあるか、それとも下半分か、という具合に判断を下してゆく。すると、いやなる場合でも、7回判断を下せば、一つの文字に行きつくことになる。その他の decision point (i)において、被験者は、主観的な誤差確率が低いほうを選択してゆくのである。一方の主観的誤差確率を P_i とすると、他方は必然的に $1 - P_i$ となるので、decision point (i) における情報量は、 $H_i(P_i) = P_i \log_2 \frac{1}{P_i} + (1 - P_i) \log_2 \frac{1}{1 - P_i}$ ……(1) となり、一文字当りの情報量は、 $H_{letter} = \sum_{i=1}^N H_i(P_i)$ ……(2) となる。被験者は、左右、あるいは上下を予測する際に確信度を5段階で答える。このようにしてすべての文字を予測しに後で、確信度の等しいものの同志を集めて誤差率を求める、それを主観的誤差確率 P_{RH} とする。この方法によると、一文字当りの最大情報量 H_{max} は、 $H_{max} = \frac{1}{N} \sum_{k=1}^N n_k \cdot P_k (P_{k+1})$ ……(3) となる。Nは、予測文字数、 n_k は、確信度をと答えた数、 P_k は、確信度 n_k の時の誤差率で、 $H_i(P_i)$ は、(1)式より求まる。なお、一文字当りの最小情報量は、 $H_{min} = \frac{1}{N} \sum_{k=1}^N n_k \cdot \frac{(P_{k+1} - P_k)}{\Delta P_k} \cdot H_i(P_{k+1}) + n_k \cdot \frac{(P_k - P_{k-1})}{\Delta P_k} \cdot H_i(P_{k-1})$ ……(+) であらわされる。 ΔP_k は、 $P_{RH} - P_{k-1}$ である。

△実験1

予測材料：新聞やらランダムに抽出した文章をひら仮名に書き改めたものの4種類。各文章とも336文字からなり、そのうち、はじめの294文字を読んだ後

で、続く42文字(1グループは14文字)の予測を行なった。

被験者：78名の成人男女。4グループに分け、各グループ一種類ずつ、計4種類の文章を予測させた。手続きは、前述の通りで、集団で行なった。

結果：式(3)と(4)より各被験者別に一文字当たりの情報量を求め、その平均値を材料ごとに求めたのが表1である。次に、被験者を込みにし、(1)式を利用して各文字ごとの情報量を求めたところ、今回のように294文字も前もって読んでいても、それに続く各文字の情報量は一定にはならず、単語の最初にくる文字が一番情報量が多く、後ろにゆくにつれて徐々に低下する傾向がみられた。(図2参照)

材料	人数	検査文字数	H_{max}	H_{min}
1	13	42	3.15 (.08)	2.55 (.55)
2	32	14	2.24 (.65)	1.86 (.64)
3	16	42	3.33 (.57)	3.00 (.56)
4	17	42	3.27 (.57)	2.85 (.56)

表1. 一文字当りの情報量 * 単位はビット
カッコ内はSD

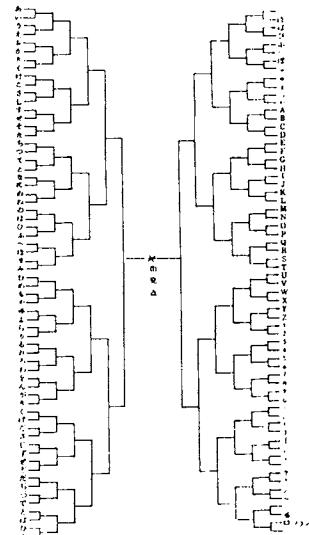


図1
樹状図

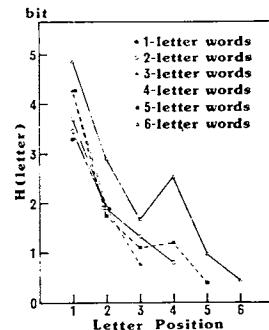


図2
単語内の文字の位置と情報量

主観確率による情報量の測定(2)

○ 常木 喜生

(電気通信総合研究所)

増山 英太郎・市原 茂

(東京都立大学人文学部)

画像情報が文字情報の伝達に果たす役割りの重要さについては、視覚教育の場などを考えると明白であるが、今回は、それを、客観的の情報度でとらえてみた。Frank (1967) は、絵と説明文がある時に、絵を見ながら説明文を推測して求めた文字の情報量と、絵を見ずに求めた情報量との差が絵の説明文に対する伝達情報量であると述べている。彼によれば、伝達情報量が多くなればそれだけ、画像情報が文字情報に果している役割りが大きいということになる。そこで今回は、試みとして、絵本を材料に、絵と文字との間の伝達情報量、即ち、 H (画像; 文字) を求めた。

実験1で用いた方法は、一つの文字を予測するのに7回も判断をせねばならず、非常に手間のかかる方法である。そこで今回は、Weltner (1973) によると考案された簡便法を用いることにする。この方法は、文字を直接予測し、答えるが、ていうがいいまいか、その都度正解の文字を数えてゆき、その誤差率 (C) やら情報量を測ろうとするものである。Weltnerによれば、実験1の方法で求めた H_{max} と H_{min} の平均値 H_{ave} と、文字を直接予測した時に得られる誤差率 (C) との間には直線的な関係があるので、誤差率 (C) やわかれれば、一文字当りの情報量が簡単に推測できる。一つの文字を予測するのに、実験1では7回の判断が必要としたが、もしも、被験者が最初から文字を正しく予測できていなければ、7回とも正答するはずである。逆にいふと、もしも正しく予測できていないならば、1回以上は誤答するはずである。そこで、7回の判断中、少なくとも1回以上誤答のあつた文字を被験者別に数え、予測文字数全体との比をとて C とし、 H_{ave} との関係を図示したのが図1である。これに原点を通る直線をあてはめたところ、 $H = 6.35 \cdot C$ となり、しかも $r^2 = .74$ とよく適合した。そこで、この直線を用いて情報量を測定した。なお、この直線は、実験1の結果から求めたもので、今回の条件と若干異なるため、被験者2名を用いて、今回用いた材料を実験1の方法で確めてところ、非常に良く適合した。(図1参照。 $r^2 = .99$)

◆実験◆

予測材料: 絵本2冊。

被験者: 女子短大生2人名。11名ずつの人群に分け、一方は絵を見ずに文章を予測するグループ(統制群)、他方は、絵を見ながら文章を予測するグループ(実験群)とした。

手続き: 被験者は、まず1ページ分の文章を読み、次のページの文章全体を一字ずつ予測していく。その際に、統制群は絵を見ずに、実験群は絵を見ながら予測した。実験者は、一字ごとに正解を知らせていく。そのページ全体の予測が終了したら、統く1ページを読み、次のページの文章を同様の方法で予測するという具合に行なった。なお、統制実験として、両群とも絵を見ずに予測する条件を行なった。

結果: 統制実験の結果は、両群とも同じ値を示したもので、これら2群はほど等質な集団と考えられる。絵本1でもえども、実験群のほうが統制群よりも一字当りの情報量が少なく、明らかに画像情報が文字情報の伝達に寄与していることがうかがえる。この傾向は、絵本1よりも2のはうが顕著である。ただし、絵本1が幼児向けの絵本であるのにに対し、絵本2は、大人の鑑賞にも耐えられるようなもので、そこに描かれた絵が意味的情報よりも美の情報を多く含むものであるからであろう。(表1参照)

材 料	検査 文字数	H_{ave}		T (画像 ; 文字)
		統制群	実験群	
絵 本	Cont.	54	2.72	2.72
	1	59	1.84	1.85 -0.01
	2	67	2.82	2.40 0.42
	3	84	3.04	2.96 0.13
絵 本	4	71	2.55	2.57 -0.02
	1	107	2.59	2.29 0.30
	2	35	1.62	1.34 0.28
	3	33	0.83	0.68 0.15

表1. 画像と文字の伝達情報量(一字当り)
* 単位はビット

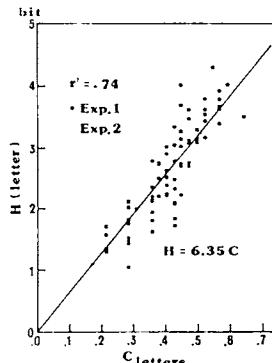


図1.

文字を直接予測
した時の誤差率(C)
と情報量

ヒューマン・アセスメントの管理者研修への 応用・展開——その5

○ 桑原 衛、伊藤格夫
(マネジメントサービスセンター) (松下電器)

—昨年以来、順次報告を続けてきたこのシリーズは、アセスメントの技法を受講者どうしの相互啓発のために応用した場合の妥当性を検証せんとするものである。

昨年の報告では、受講者の相互評定によって、用いられた20項目から成るディメンションが8因子に分化していることが明らかになった。

今回の報告は、これらの因子が、職能別にどのような特徴をもってみられるかを概観するものである。

1. 因子得点 (Factor Score)

用いた原データは、上記の因子を抽出したのと同じ144名の被験者のもの。

各被験者ごとの因子得点の算出は、その推定値と理論値(真の値)との誤差を最小にする、いわゆる最小誤差法を用いて推定した。

2. 被験者の職能別分類

144名の被験者は、いわゆる課長職新任者であるが、この相互啓発研修実施時の職能に応じて、次の5区分に大別した。

(1) 研究開発専門職—主として、各研究所に所属し、基礎研究、応用研究、開発設計などの技術専門職の立場にある者(21名)。

(2) 技術系管理職—研究・開発・設計・品質管理など技術系の職場において、管理職としての職責をもっている者(43名)。

(3) 製造系管理職—生産現場の管理者、または生産現場へ材料を供給する購買部門の管理者(17名)。

(4) 営業系管理職—販売もしくはアフターサービス部門の管理者(34名)。

(5) 業務系管理職—上記以外の部門の管理者で、人事・経理・企画、あるいは国際などのスタッフ(29名)。

3. 結果

因子得点は、各因子ごとに、被験者全員(今の場合には144人)の平均が0、標準偏差が1になるように標準化された値で示されている。したがって、各因子ごとに、被験者の約半数がプラスの値、残りの約半数がマイナスの値をとる。

表1に、被験者を職能区分別にして、各因子ごとに因子得点がプラスのものの人数と、マイナスのものの人数を示す。

表1. 相互評定における因子得点の分布

職能区分	因子得点									
	影響力	積極性	判断力	耐忍性	感受性	綿密性	選取性	柔軟性	一貫性	対人感受性
(1) 研究専門職	+7	-14	5	16	9	12	13	8	14	7
(2) 技術管理職	16	27	23	20	23	20	25	18	19	24
(3) 製造管理職	11	6	8	9	6	11	10	7	9	8
(4) 営業管理職	24	10	16	18	15	19	16	18	17	17
(5) 業務管理職	16	13	18	11	12	17	12	17	10	14
計	74	70	70	74	65	74	76	68	69	75
	64	75	70	74	74	75	70	74	76	68

表1で、たとえば、研究専門職の影響力因子の因子得点がプラスの者が7名で、マイナスの者が14名である。このように、プラスの人数とマイナスの人数に偏りのある樹があることがいくつかみられる。そこで、各樹について、両数値の差の有意性検定をおこなった。

ところで、上例の7:14は33.3%:66.7%であるが、表1にみる如く、影響力因子では全被験者の合計は74:70であって正確に50%:50%にはなっていない。そこでその調整のため、表1の各数値を、それぞれの列の最下段(合計値)で除すことにより、ウェイトを完全に均等にした。これにより、たとえば上例の7:14は9.46:20.00となり、これは32.1%:67.9%である。この比の差の有意性検定のため帰界比を算出した結果は1.42である。同様にして、表1のすべての樹の帰界比は表2に示すとおりである。

表2. 相互評定における因子得点分布の帰界比

区分	因子得点									
	影響力	積極性	判断力	耐忍性	感受性	綿密性	選取性	柔軟性	一貫性	対人感受性
(1) 研究専門職	1.42 [△]	2.07 [*]	—	.76	1.48 [△]	—	—	—	—	—
(2) 技術管理職	1.69 [*]	.49	.43	.55	.34	—	.49	.87		
(3) 製造管理職	.87	—	.60	.27	.17	.17	—	.71		
(4) 営業管理職	2.09 [*]	—	—	.49	.06	1.31 [△]	—	.89		
(5) 業務管理職	.22	1.25	.23	1.03	1.28 [△]	.96	.22	1.39		

*は5%水準の有意差。(参考、×は10%水準、△は20%水準)。
表中の一の樹は、エーツの修正によって値がマイナスになったもの。

4. 考察

研究専門職は積極性が低く、営業管理職は影響力が高いといえる。これらその他に、5%水準での有意差は認められないが、その傾向があるものとしては、研究専門職は影響力が低く、感受性が高い傾向。技術管理職は影響力が低い傾向。営業管理職は綿密性の低い傾向。業務管理職は感受性と柔軟性の低い傾向がそれれみられる。なお、さらに確度は低いが、その他の傾向が表1および表2から読みとれる。これらの傾向は概ね各職能の日常行動から直観的に把握される特性とも常識的に合致するが、ただ、研究専門職の「対人感受性」が意外に高いことなどは注目される。

ヒューマン・アセスメントの管理者研修への応用・展開——その6

○伊藤 格夫, 桑原 衛
(松下電器) (マネジメント・サービス・センター)

アセスメント技法は、系統的に設定されたシミュレーション場面での行動を観察評定するものであるが、一方、現実の職務場面での行動はどうであろうか。その一例として、本報告は、上司による評定について検討せんとするものである。

II. 上司評定による因子得失の分布の概要

昨年の報告で、上司による評定結果は、用いられた20項目が6因子に分化していることがわかった。そこでこれらの因子が職能別にどのような傾向を示しているかを見るために、相互評定の場合と同じように、因子得失のプラスの者とマイナスの者とを分けて、その分布を一覧にしたもののが表1である。そして、相互評定の場合と同じく分布の調整をした後、有意差検定をおこなった結果を同表の中に符号で示してある。

表1. 上司評定における因子得失の分布

職能区分	因子得失									
	説得力	リーダーシップ	知的機能	粘り強さ	適応性	緻密性				
研究専門職	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-
(1) 研究専門職	10	11	6	15	7	14	9	12	8	13
(2) 技術管理職	15	28	16	27	26	17	24	19	23	20
(3) 製造管理職	9	8	8	9	6	11	8	9	10	7
(4) 営業管理職	26	8	20	14	17	17	22	12	18	16
(5) 業務管理職	17	12	16	13	15	14	13	16	14	15
計	77	68	66	78	71	73	76	68	73	71

※※ 1%水準、※ 5%水準で有意差。(参考: ×10%, ▲20%水準)

(考察)

上司による評定では、技術管理職は説得力が低く、営業管理職はそれが高いとみられている。他に、5%水準で有意差はないが、その傾向がみられるものは、研究専門職と技術管理職はリーダーシップが低く、一方、営業管理職はそれが高い。また、技術管理職は緻密性が低く、一方、業務管理職はそれが高い傾向に評定されている。技術管理職の緻密性が相対的に低くみられているのは注目される。

II. 相互評定と上司評定との関連性

昨年の報告で、相互評定、上司評定などの因子得失の相互相関を求め、それぞれの間に共通因子の存在することが検証された。これにもとづいて、相対応する因子について、職能別に相互評定と上司評定との結果を対比してみると(「その5」で報告した表1, 2と

本報告の表1とを対比してみると)、両者に共通しているのは、研究専門職の積極性(リーダーシップ)が低いこと、技術管理職の影響力(説得力)が低く、営業管理職のそれが高いことである。そこで、相互評定と上司評定との関連性をさらに追及するために、次の分析を試みた。

表2に示す如く、両評定の相対応する因子について、職能別に、因子得失の相関関係を γ 係数によって求め、その有意性を Z によって検定した。

表2. 相互評定と上司評定との関連性

	I	II	III	IV	V	VI
相互評定の因子	影響力	積極性	判断力	耐忍性	感受性	緻密性
上司評定の因子	説得力	リーダーシップ	知的機能	粘り強さ	適応性	緻密性
研究専門職	φ	.337	.141	.213	-.113	.139
	X	2.386	.420	.455	.269	4.04
技術管理職	φ	.244	.134	.009	.384	.360
	X	2.563	.832	.003	6.344	5.581*
製造管理職	φ	.537	.056	.227	.544	.408
	X	4.898	.052	.878	5.130	2.837
営業管理職	φ	.403	.430	.415	.450	.118
	X	5.517	6.275	5.846	6.876	4.72
業務管理職	φ	.510	.010	.251	.369	.461
	X	7.535	.003	1.830	3.448	6.152

* * 1%水準、* 5%水準で有意差。(参考: ×10%, ▲20%水準)

(考察)

相互評定と上司評定との間に5%水準以上の有意な相関関係が認められるのは、技術管理職の耐忍性・適応性・緻密性、製造管理職の影響力・耐忍性、営業管理職の影響力・積極性・知的機能・耐忍性、業務管理職の影響力・耐忍性・適応性である。反対に、殆んど関連性が認められないのは、研究専門職の積極性・知的機能・耐忍性・適応性、技術管理職の積極性・知的機能・製造管理職の積極性・知的機能・緻密性・営業管理職の適応性、業務管理職では積極性である。

ここで、特に研究専門職が、すべての因子にわたって、相互評定と上司評定との間に有意な関連性のみられないことが注目される。これは、ひとつにはサンプル数が少いために Z の値が低いことにもよるが、それを差し置いても、他の各職能に比して関連性の低い傾向が整然としている。これは、アセスメント技法における評価が一般管理能力・資質をねらっており、R&D(研究開発)能力とは別ものであることを示唆しており、別途にR&D能力のディメンションとその評価方法が開発されねばならないことを示しているものと考えられる。

企業人事行政に対する中高年全雇用者の意識と態度

藤井 耐
(高大穂商科大学)

1. 調査の目的

労働省統計情報部調査(昭和57年、調査企業7,000社)によれば、今日、55歳先年制を実施する企業は約半数の約33%にも及ぶ。平均寿命70歳を超えた今日、企業の中高年全雇用政策の実態は、いかがなう状況にありのか、そして、中高年全雇用の人達は、この55歳先年制度をいいめ、現在実施されてる3人政策でどうか評価し、どうだ、自らの老年後の生活に何とどうかを考慮してどうぞうのをあらうか。以上が本調査の目的である。

2. 調査方法

本調査は、昭和57年7月～8月にかけて、40～65歳の中高年全雇用の人達を対象にアンケート調査により実施した。

専門回答数は500ある、た。

3. 結果

まず、(1)はあり(2)勤務して3事業所における中高年全雇用政策の実施状況を問うたわけであるが、その結果、既に実施して3事業所の企業8%、今後、実施予定者32%、まだ実施しないと答えた者は20%であつた。専門、実施企業は勤務する中高年全雇用者の満足度は、非常に満足83%、やや満足48%と両者合せで66.6%の人々が満足感をいたる21%。今後、実施予定とするもの17%、未実施して35%、やや期待25%である。又、実施予定にならうる企業の人では80%の雇用選択への結果を希望して34%である。

次に(3)では、(1)職場における若年層の行動をどのようになつておるか、(2)職場における若年層の人は中高年層の人達をどう思うか、(3)あなた自身、職場における若年層の人達をどう見なさうか、(4)思ふ子が、以上4点について、1.他事人間関係ともに好まずれり、2.人間関係の不好まずれり、3.人間関係ヒツヒツのみ好まずれり、4.他事人間関係ともに好まずれり、5.やからなり、の各項目から1つ選択してもらった。結果は、(1)は、1.32%、2.12%、3.8%、4.20%、5.28%。(2)は、1.40%、2.16%、3.24%、4.16%、5.4%。(3)は、1.68%、2.12%、3.8%、4.4%、5.8%である、た。

次に(4)では、(1)勤務して3事業所の先年年全に就き満足度を問うたわけであるが、1.満足(10%)

2.やや満足(48%)、3.どちらなし(10%)、4.どちらも満足かけたり(40%)、5.全く不満(12%)である。又、(2)先年年全は何次であるかと答えた結果は、ヒツヒツに答えた回答者は、60次(58%)、65次(44%)と、二の三点に集中した。(3)では、今日多くの論議がなされ、3日車の経営運営一具体化され、終身雇用制度、一種延年制度、年功序列昇給制度の一見直しについてもやけに多いが、1.全面構造(4%)、2.部分構造(16%)、3.どちらなし(16%)、4.改革之をも化方なし(4%)、5.修正する必要はない(10%)、といった。具体的回答として何を能力主義導入へいかべらざつたようである。

次に(4)では、(1)～(4)にあたり、再就職への必要性を問うたわけであるが、1.再就職する(しなければならぬ)、(52%)、2.できれば再就職したいと思つて3.(28%)、3.どちらともいはね(16%)、4.あまりしたくはない思ひない(0%)、5.再就職する必要はない(4%)であった。(1)～(4)にあたり、1.2.1.2.は回答率が右肩上がり、再就職への手段を問うて、1.会社の斡旋(10%)、2.個人自身の紹介、(5%)、3.公英機関の斡旋(10%)、4.自営用業(10%)、5.やからなり、(5%)である、た。次に、(2)～(4)では、中高年全雇用の従業員10%が3再教育の実施状況を問うたわけであるが、1.既に実施(20%)、2.今後、実施予定(48%)、3.何も言えない(10%)、4.現在、その状況になら(32%)、5.将来も実施されないだろ3.(10%)である、た。2.は、(2)～(4)と同様、現在実施、あそひは実施予定の10%はいかからず、再教育への参加は71%前後であった。その結果、1.積極的に参加(68%)、2.消極的ではあるが参加(20%)、3.やからなり(8%)、4.仕事なく参加(4%)、5.参加しなり(0%)である、た。

最後に(5)の(1)では、老後の経済生活への手段を1つのみ選択してみた。(1)年金(32%)、2.退職金預貯金(12%)、3.再就職による所得(48%)、4.不動産利子などの収入(0%)、5.その他(8%)、又、(2)老後の生活がヒツヒツは、1.仕事(48%)、2.社会活動(20%)、3.家庭及び零用金(8%)、4.趣味嗜好(24%)、5.その他(0%)である、た。又(3)の健康維持は71%前後、適度な運動ヒツヒツ回答が多く、た。

4. 感想

企業の中高年全雇用政策は、現在の制度改革への開始して3年をくまざる。今後再教育、職場再設計などが必要となる。また、中高年全雇用の人達は、高齢化社会に適応して3意欲度革新が望まれる。

人事管理の人間化について

Design Approach

宮本昇

(高大穂商科大学)

① 理論的に可能な人事システム

① 脱工業社会における企業の存在意味

企業を構成する人、その企業と密接な関係にある人たち、さらに社会のすべての人々の生活を、より一層、人間的なものにするため、具体的貢献を企業がなしうる限りにおいて、その存在意味をもつ。

- 企業の公共的責任
 - 経済有効性の責任
 - 生産能率性の責任
 - 人間形成の責任

② 「人間的な生活」の内容

- 物を活用し、心の豊かさを求める
- ひとりをもって生活を楽しむ
- 人びととつながり共存していく

③ 経営における「人間中心」の条件

- 形成される社会集団が、その構成員に、労働を通じて生きる意味を体験させうる場となること
- 構成員相互の協力によって、各自が最大限に成長していくことのできる雰囲気が形成されていること
- 構成員が共通の責任に参加することにより、集団の一員としての自覚をもち、組織を創造的に発展させていくことができるよう、制度的な配慮がなされていること

④ 「人間中心」人事システムのモジュール

行動レベル	構成員個人	職場集団	経営組織
心理	自己統制 自己理解と 自己溶解と 自由と責任 (精神性)	恩リヤリと 励まし 競争と共存 開かれた集団 存在意味の 実現	成員の心理的充 足性(個との統合) 有機的適応性 存在意味の 実現
社会			
文化			

② 開拓的に可能な人事システム

① 組織における人間観の転換

道徳的要素 → 道具的要因 → 目的的存在

② 潛在観の転換

OCCUPATION → VOCATION → CALLING

③ 仕事観の転換

Labour → Job → Work

④ 修正されるべき人事管理の軌道

会状況理	工業社会(管理社会)	脱工業社会(関係社会)
人事管理の目標	経営の効率化 人間関係の改善・発展	経営の民主化 人間性の回復・伸長
背景理論	管理技術論	産業社会論
組織関係	人間の組織化	組織の人間化
雇用関係	経験的年功序列	専門的職務能力秩序
作業関係	機械のリズム	生命のリズム
能力関係	断続的教育訓練	継続的能力開発
外層関係	タラの職位との角張り合	ヨコの役割との角張り合
厚生関係	团體的企業幸福論	開放的元会幸福論
労使関係	労使対等の原則	労使協調の原則

③ 技術的に可能な人事システム

① 現在解説を迫られている人事管理の諸問題

影響	適応目標
フクター	企業経営レベル 人事管理レベル
現状の長期化	減量経営→人件費削減 退職雇用調整・少人数精算
合理化	体质改善→組織活性化 簡素化動態化・OD
合理化	付加価値生産性の向上 人材導入・育成・活用
生技術化	自主技術の開発 R&D
集中化	労働の質的向上 自己啓発・OJT・職務輪換
合理化	仕事の改善 ZD・QC, IE
和萬能化	学歴主義の改編 CDP, 専門職制度 PA
会高令化	経営雇用 職務能力秩序 定年制・再訓練・職務交替
流動化	年功序列 序の確立 PDS・仕事給・労働移動
意都市化	作業環境・作業条件の改善 週休二日制・環境音樂
情簡化	コミュニケーションの円滑化 フードバック・システム, HR
職管理化	職外状況の克服 QWL (職務充実など)
個多様化	共同体(属属意識)の形成 経営福祉・全般的行事
個極分化	モラールの昂揚 管理監督者削減・意向調整
個同一性	仕事の意味の自覚 経営参加・目標管理・自己啓発

② 問題解決を久遠化の方向に導く理論と方法

i) 理論心理学の発展

生理心理学 → 社会心理学 → 実行心理学

ii) 精神分析学の発展

行動への意志 → 確力への意志 → 意味への意志

iii) 産業心理学の進歩への実用

行動レベル	基本的原理	行動目標	理論的取り扱い	方法的
セク・アラン	心身相関	自己啓発	精神分析	自己剖露法 行動療法
イントラク谷	關係存在	連絡	交流分析	組織心理学 方法グリード etc.
トランザク	次元的存在	生きがい	現存分析 実存分析	

組織におけるコンフリクトについて

小野公一 (亜細亜大学大学院経営学研究科)

目的：ここ十数年来の欧米の研究によって、ロール・コンフリクトとロール・アンビギュイティ、それらと組織のコンフリクトの関係が明らかになりつつある。本研究の目的は、それらが、我が国においてどのような関係にあるのかを知ることにある。

本研究では、組織の中で個人の役割を規定するものとして、組織の目標や計画、職務記述書等、上司の指示をとりあげ、それらの目確さや頻度をロール・アンビギュイティの規定要因とし、それらがロール・コンフリクトや組織のコンフリクトに繋がっていくものと仮定した。

方法：予備調査にもとづき作成された以下の内容をもつ質問紙を用い、P.S.で回答を求めた。

1. 目標や計画の知覚 a) 全体の目標や計画 b) 部・課等の目標や計画 c) 係・班等の目標や計画
2. 目標や計画と仕事との関係についての知覚 (a, b, c は、1 に同じ)
3. 職務記述書等の役割規定の明確さ
4. a) 役割知覚の程度 b) 役割と予算の関係
5. 役割のあいまいさと仕事のしやすさ
6. 上司の指示の頻度
7. さまざまな要因の知覚 a) ジェネレーション・ギャップ b) 明確な役割規定の必要性 c) 競争の痛効 d) 職場間の競争 e) 役割知覚の不一致 f) 目標の不明確さ g) ロール・コンフリクト h) 能力以外の要因の影響
8. さまざまな要因とコンフリクト a) 役割の侵害 b) ロール・コンフリクト c) 競争 d) 職場間の競争 e) ジェネレーション・ギャップ f) 目標の不明確さ g) 役割のあいまいさと仕事の結果についての確信 h) 能力以外の要因の影響

対象：組織で働く人々を対象とし、男性管理監督者と一般社員、男性一般社員の3者に分け、比較を行なった。回収された質問紙は413部(回収率49.6%)で、そのうち集計・分析の対象となったのは、400部であった。

結果と考察：単純集計結果から役割規定に関する質問項目1, 2, 3, 6をみると。

1. 乙からは、責任や権限が大きくなるにつれて目標や計画をしてそれらと仕事の関係についての認知

度が高まっていることがわかる。また、男性管理監督者 一般一般社員、男性一般社員の3者とも、乙→丙→Cの順で身近なものにちるにつれ、認知度が高くなることを示している。

3については、3者とも得点が以下で、我国では職務記述書等が充分に整備されていないという意見を裏付けている。

6については、3者どうほんど差がなく、指示が時々は行なわれていることを示しているが、職務内容が複雑で、より大きな責任を負えられている職種ほど指示が多くなることを示している。

従来、一般に職務の責任・権限のあいまいさが、円滑な職務遂行に不可欠であるように考えられてきたようであるが、ちにみてみると、男女の別なく、多くの人々が、大なりトなり明確な役割規定を欲しておられる。まいまいさが、職務遂行に貢献していると言えないという結果がえた。

相関関係の算出結果から次のことがわかる。

1). 4と1, 2, 3, 6の関係から、役割の明確な知覚は、組織の目標や計画の明確さ、職務記述書等の規定の明確さに依存することは明らかであると考えられるが、上司の指示の頻度との関係は明確であるとは断言できない。

2). 1, 2, 3, 6と8の諸項目との関係からみて、ロール・アンビギュイティと組織のコンフリクトやその一部であるロール・コンフリクトは、明らかに強い関係を持つ。しかし、目標や計画の明確さとロール・コンフリクトは、直接的には結びつかない。ただし、仕事の場で役割が不明確さや目標が不明確を感じる人々にとっては、ロール・コンフリクトが生じる傾向が強いと言える。

3). 上司の指示は、女性一般社員にとっては、ロール・コンフリクトの生起につながる可能性をもつと言える。

今後の課題：本研究は、不特定多数の人々を対象としたため、調査の方法、対象、質問内容などに種々の制約をもつた。今後は、役割の規定要因の操作や、職種、年齢、職制上の地位、性などによって限定された対象を用いた研究の実施により、役割と組織のコンフリクトの関係を分析・検討することが必要である。また、役割をもつてどのように認識するかという点についての研究も必要となってくるものと考えられる。

対組合態度測定の試み

——フィッシュベイン・モデルの適用——

丹治和典
(立教大学)

目的

Fishbeinによれば、ある対象 O に対する態度(A_O)は、その下位対象 i への評価(a_i)と、 O が i を導びくであろうとする主観的確率(B_i)との関数、すなわち

$$A_O = \sum (B_i \times a_i)$$

として定義される。

本研究は、当モデルの妥当性を、対組合態度測定を通して吟味したものである。

方法

日時：1977年10月。

対象：鉄道労働組合員(国鉄)、男子75名。

方法：留置法。

測度：8項目の下位対象に対する a_i と B_i 、基準測度として、組合役員の経験の有無ならびに5項目の組合員としての行動尺度。

結果

結果は、表ならびに図に示すことく、フィッシュベイン・モデルの対組合態度測定への適用の可能性を支持するものであった。

さらに、結果から、当対象においては「職場の設備が改善されること」、「より多くの一時金(賞与)をえられること」などの下位対象が、対組合態度を規定していることが明らかとされた。

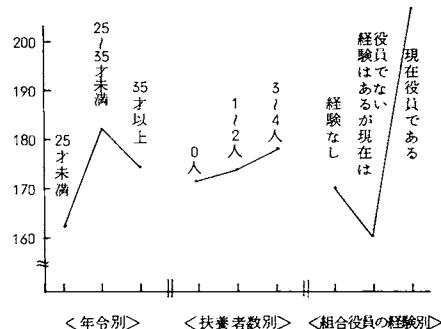


図1 年令、扶養者、組合役員の経験別態度得点

表1 態度測度と基準測度の平均値、標準偏差および相関

	Mean	SD	Correlation (n)								
			2	3	4	5	6	7	8	9	
1 Σa_i	40.61	5.08	.33	.65	.10	.22	.15	.21	.76	.22	
2 ΣB_i	35.72	6.94		.92	.18	.17	.14	.37	.40	.36	
3 $\Sigma (B_i \times a_i)$	174.12	44.69			.19	.24	.15	.38	.35	.39	
4 他の組合へ移ろうと思ったことはない (P ₁)	0.70	0.45				.15	.27	.30	.26	.58	
5 職場大会にはかならず出席する (P ₂)	0.57	0.49					.35	.37	.27	.65	
6 指示には積極的にしたがう (P ₃)	0.57	0.49						.42	.46	.75	
7 仕事は進んで引きうける (P ₄)	0.36	0.48							.36	.73	
8 方針には全面的に賛成する (P ₅)	0.26	0.44								.68	
9 ΣP_j	2.48	1.60									

a) $|r| > .26$ のとき $P < .01$ 表2 a_i 、 B_i 、 $B_i \times a_i$ の平均値、標準偏差と $B_i \times a_i$ と ΣP_j の相関

	Mean and SD			Correlation (n)
	a_i	B_i	$B_i \times a_i$	
1 職場の設備が改善されること	5.08	0.91	4.31	.35
2 能力を生かせる職場をえらべること	4.64	1.14	3.68	.19
3 共済制度など経済的援助がえられること	4.83	0.96	4.28	.90
4 職場での人間関係が良好にたもたれること	4.93	1.06	3.97	1.39
5 月の収入が保証されること	5.45	0.79	4.36	1.20
6 より多くの一時金(賞与)をえられること	5.24	0.81	4.20	1.17
7 有給休暇を自由に利用できること	5.32	0.87	4.53	1.15
8 意にそぐわない配置転換がなされないこと	5.12	1.01	4.39	1.22

a) $|r| > .26$ のとき $P < .01$

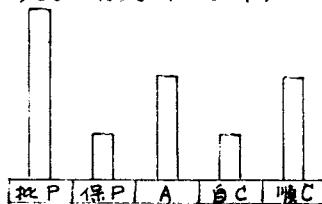
企業内肩書の持つイメージ に対する一考察 林 誠治

企業内で用いている職位を使って会社訪問した場合と全く所属や職位なしで会社訪問した場合の、訪問先待者から感受するものとおして、交流分析(TA)によるエゴグラムとその特性をとらえてみた。エゴグラムとは、各人の持つ自我状態の強弱を個體化したものであり、批判的ペアレント・保護的ペアレント・アダルト・自由のチャイルド・順応するチャイルドの5区分で表現する。

期間は、昭和53年2月から5月まで。株式上場会社約100社の方々と面接の過程で、言語・非言語の状態を観察した結果をまとめたものである。

1 自己の職位相当以上のお相手と会った時と、自己の職位以下もしくは全くない相手と会った時、言葉づかいや身ぶり態度の違いが大きいタイプ。

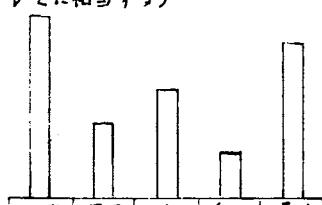
批判的ペアレントが強く、保護的ペアレントが弱い傾向がある。(約65パーセント)



<図1. 1のタイプの1例>

2 1に属するタイプで、相手が自分の職位以上だとわかる時、変化を及ぼすタイプ。

1の特徴(つまり、順応するチャイルドが強い傾向)がなくなる。(1が約65パーセントから、約45パーセントが2に相当する)



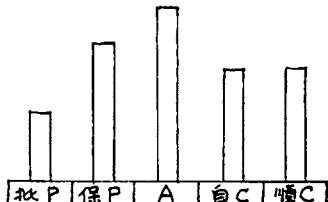
<図2. 2のタイプの1例>

3 職位の上下、所属の有無にかかわりなく、相手をひとりの人間として接しようとおるタイプ。

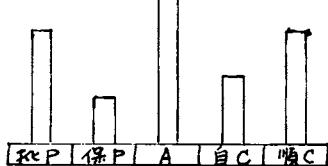
このタイプの特徴はアダルトが強く、必要に応じて他の自我状態をコントロールできる力を持ってい

る。(約25パーセント)

ここでは、あたたかく感じさせるブループ(保護的ペアレントが強い)と、つめたく感じさせるブルーブ(批判的ペアレントが強い)に2分してみることができる。



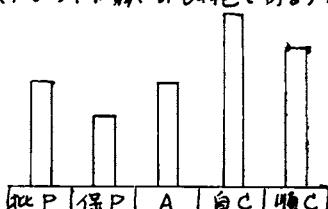
<図3. 3のあたたかく感じさせるタイプの1例>



<図4. 3のつめたく感じさせるタイプの1例>

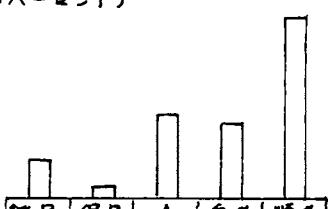
4 職位の上下、所属の有無にかかわりなく、相手に対して皮肉の態度を取るタイプ(約5パーセント強)

自由なチャイルドが強く直観的に物事を判断して相手の感情を傷つける(批判的ペアレントが強く、保護的ペアレントが弱いのも特色である)。



<図5. 4のタイプの1例>

5 相手に関心を示さず一方的に他人に甘えるタイプ。批判的ペアレント・保護的ペアレント・アダルトが弱く、順応するチャイルドだけが強い傾向にある。(約5パーセント)



<図6. 5のタイプの1例>

年令層でみると1と2は中高年に多く、3は比較的若手に多く見られ、4と5は年令に関係がなかった。

職業興味と職業志望との関連性

宇田 勝也

(職業訓練大学校 職業訓練研究センター)

1. 研究目的

職業興味(すきーきうい)と職業志望(なりたいーなりたくない)とは類似概念であるが、相異なる心理的構造を持つと考えられる。このわずかに心理的構造のずれを取り上げて慎重に比較検討することによって單に職業興味を把握する場合よりも、職業的適応、あるいは職業訓練上の適応を予測するための、より各当を指標が得られるのではないかと仮定した。そして、藤原・河井との共同研究により、興味と志望との関連構造を検討した。(日教心、'74、'75)

その際、職業興味の下位項目として職業活動に関する短文を用い、職業志望の下位項目として職業名を用いたが、職業興味の下位項目として職業名を用いた場合、興味と志望との関連がどのようになるかは検討していかなかった。そこで、本報は職業興味と志望を職業に対する好みと職業志望との関連性を用いた下位項目として職業名を用いて検討することを目的とする。

2. 調査方法

既に設定した職業興味の10領域ごとに、60個の職業名を選定した。そして、上段目の用紙に職業名に対する「好きーきうい」の選択を求め、次に、2枚目の用紙で職業名に対する「なりたいーなりたくない」の選択を求めた。主たる被験者は、総合高等職業訓練校養成訓練課程1年生、291名、2年生241名の統計、532名である。さらに、高創2類生24名、訓大指導員研修生15名について併せて調査した。

3. 調査結果

(1) 平均値でみた場合、職業名に対する興味プロフィールと志望プロフィールはほぼ重なるのであるが、職業興味と職業志望の反応には大きな差異は認められない。

しかし、60個の職業名に対する全体的な傾向をみると、興味の場合、すき(17.2%)、どちらでもない(34.1%)、きらい(48.7%)である。それに対して志望の場合、(なりたい)-9.7%、(どちらでもない)-57.6%、(なりたくない)-32.7%であり、職業志望の方が両極の反応が少なくなっている。

(2) 職業興味と職業志望との反応をクロスさせてみると、「好きでなりたい」-8.8%、「兩者ともに、どちらでもない」-32.3%、「きらいでなりたくない」が31.6%である。つまり、全体的にみれば72.8

%、職業興味と職業志望とが一致している。

しかし、興味でなくすき、あるいはきらいと反応しながら、職業志望でなくどちらでもない」と反応する場合が25.3%である。この辺に、職業興味と職業志望とを比較検討する意味がみ出だされる。

(3) これらの関連を年齢段階でみると、15才時の1年生よりも、16才の2年生の方かけんのわずかではあるが、興味と志望とのずれが大きくなっている。

特に、社会・産業領域、対人・社会領域、科学・研究領域において、興味より志望の平均値が大きくなっている。また、自分の専攻精神を含む、生産・技術領域では技能に関する職業名について、2年生で志望より興味が大きくなっているのが特長である。

さらに、興味と志望との組合せタイプを、「好きでなりたい」を[I×A]、〈兩者ともどちらでもない〉を[B1×BA]、〈きらいでなりたくない〉を[N1×NA]とあらわし、年齢段階ごとの興味と志望との関連をみると、1年生では[I×A]-8.4%, [B1×BA]-29.5%, [N1×NA]-35.9%で興味と志望の一一致度は73.8%である。それから、2年生になると、[I×A]-9.3%, [B1×BA]-35.6%, [N1×NA]-26.5%で兩者の一致度は71.3%となり、1年生よりも低くなる。さらに、高年者についてみると、この化粧向は認められないが、成人では、[I×A]-10.9%, [B1×BA]-22.4%, [N1×NA]-23.4%と兩者の一致度が56.6%と低くなっている。

調査人数が少ないことで正確なことは言えないが、年齢段階が高くなるにつれて、職業興味と職業志望とのずれが大きくなるといえるよう。

(4) 自己の選択した訓練職種科に関する職業名に対して、「好きでなりたい」という傾向は、訓練科によって差があるが、一般的にみて、その他の職業名に対するより高くなっている。例えば、H校、1年生では6訓練科のうち、「好きでなりたい」は88.0~91.4%に分布している。しかしながら、同校2年生では、81.8~86.1%に分布しており、「好きでなりたい」という傾向が緩和している。

逆に、自己の選択職種名に対して、「きらいでなりたくない」とする者が全くいない科が調査した28科のうち、半数であるが、問題行のは自己の訓練科に対して「きらいでなりたくない」という者が40%もいる科があることである。

以上の二点から、年齢段階によって職業興味と職業志望との兩者から解説したほうが多い場合と、興味のみ多い場合があることがわかった。

自己実現による人間性の回復

石津元

〔目的〕

この研究の目的は、現代の産業社会の心理的砂漠化をくいとめるため、従業員たちの人間性を回復して、“働きがいのある楽しい職場”をつくる方法を示すことにである。

〔方法〕

すでに、この大会において、登表したふたつの実験をふくめ、登表者が“試みないくつかの実験を中心にして、ひとつのモデルを考案した。”

※・集団決定によるモラール向上についての実証的研究 / 1970 第37回大会

・産業における小集団活動によるモラール向上についての実証的研究

/ 1971 第38回大会

〔結果〕

もし、われわれが、従業員たちが働く喜びを味わうことを期待するならば、われわれは、かれらの参加意識を向上させると同時に、仕事を通じて自己実現の欲求を満足させてやらなければならない。

そのためには、職場グループのリーダーは、つきに示すような仕事を、5つ×ステップ°によって、かれらが自発的にするように、しなければならない。

1. 仕事をとりまく作業環境
 - a. 作業環境
 - b. 職場の安全点検
2. 仕事をもの
 - a. 作業方法の改善
 - b. 不良品の原因調査
 - c. 新人のための教科書づくり
 - d. 原料、材料、燃料の使用法の検討

(5つ×ステップ°)

ステップ°1

職場グループのリーダーは、メンバーたちが、上記の仕事のうちひとつを、グループの仕事として選ぶために、group meeting をするようにし

むける。

ステップ°2

リーダーは、メンバーたちが“つき”的ことを討議するため、group discussion をするようにしなければ。

1. ビック仕事が、彼らの力でできるか。
2. ビック仕事が、現在最も必要か。

ステップ°3

リーダーは、メンバーたちが、上記の仕事のうちひとつを、グループの仕事として実施することを、group decision するようにしなければ。

ステップ°4

リーダーは、group decision した仕事を、メンバーたちが自発的にするようにしなければ。

ステップ°5

リーダーは、メンバーたちが、その仕事の成果を発表するようにしなければ。

〔考察〕

経営者および管理者が、能率万能主義によって、パラメトリック砂漠化した職場を、人間中心の“働きがいのある楽しい職場”に変革しようとしなければ、このモデルの実施は不可能である。

〔結論〕

もし、企業の経営者および管理者が、従業員たちの人間性を尊重して、この5つ×ステップ°を職場で実施するならば、職場のパラメトリック砂漠化を、あるいは“くいとめる”ことができる。

(連絡先)

〒189 東村山市萩山町 3-11-19

TEL. 0423-91-1151

精神薄弱者のCPT所見

中川大倫
(信州大学人文学部)

1. 目的 精神薄弱者にCPTを施行し、その結果を、ほぼ同精神年令の幼児のそれと比較し、精神薄弱者の特長を吟味する。

2. 手続・対象 実験群(EG)…施設収容精神薄弱者35名、男17名、女18名、CA 15:0~22:

3. 平均CA 19:3.1 IQ 21~49 平均IQ 38.3.

表1 色彩の選択

	Pr		Ug		M	SD	M	SD	M	SD
	EG	CG	EG	CG						
Red	18.2	8.0	17.7	5.9	15.2	5.0	16.0	8.4		
Orange	9.5	5.8	9.9	8.1	6.6	5.0	5.5	5.4		
Yellow	10.5	6.9	9.3	4.5	7.4	9.9	5.7	5.1		
Green	17.5	6.6	16.5	6.2	22.3	11.1	15.5	6.2		
Blue	16.5	7.5	17.5	8.0	14.0	6.7	12.0	7.5		
Purple	10.1	4.9	12.1	4.9	10.2	5.3	13.6	6.2		
Brown	7.9	5.7	6.1	4.0	9.9	7.3	13.3	11.4		
White	3.5	3.1	4.4	3.5	2.6	3.0	3.8	3.9		
Gray	3.0	2.8	2.8	2.8	4.2	4.5	4.0	4.2		
Black	3.2	3.8	3.6	3.6	7.4	9.3	10.6	12.5		

表2 ピラミッドの構造

	Pr		Ug		N	%	N	%	N	%
	EG	CG	EG	CG						
1C 純粹じゅせん型	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2C アンバランスじゅせん型	2	2	3	2	2	2	7	4		
3C びきりかねじゅせん型	7	7	3	2	2	2	5	3		
4C 構造じゅせん型	49	47	116	61	49	47	108	57		
じゅせん(C)型	55	65	51	64						
5L 単色層型	0	0	1	1	2	2	3	2		
6L 多色層型	12	12	11	6	13	12	4	2		
7L 相称層型	0	0	0	0	2	2	0	0		
8L 構造型	0	0	0	1	1	0	0			
層(L)型	12	7	17	4						
9S 相称構造型	3	3	12	7	3	3	9	5		
10S マントル型	0	0	0	0	0	0	7	0		
11S 非相称力動型	32	31	43	23	31	30	0	28		
12S 階段型	0	0	0	0	0	0	53	0		
構造(S)型	33	29	82	33						

平均MA 5:6。対象群(CG)幼稚園、保育園に通園中の幼児63名、男36名、女27名。CA 3:8 ~ 6:8。平均CA 5:4。ともに正常。CPTの実施はSchaele & Heiss (1964)のテキストにより、色票はH. Huber 社のものを用う。

3. 結果と考察 ① EGのピラミッド完成時間はCGのそれよりも短いが有意でない。個体内の相関関係はEG +0.74, CG +0.34。EGの+0.74は固執的反応傾向を思わせる。因みに、正常大学生のそれは+0.47(中川, 1971)、精神分裂病者は+0.71(中川, 1975)、欠陥精神分裂病者は+0.91(中川, 1976)である。② 色彩選択 EGの選択傾向は大学生のそれ(中川, 1971)よりもCGの傾向と一致している。有意差のあるのはUgにおけるEG緑と紫である。EGのUg緑は大学生の値よりも高い。これは精神薄弱者の内面に情緒の平衡維持機能の弱い要因のあることを思わせる。(表

1. 表中Prは美ピラミッド、Ugは醜ピラミッド)。③ ピラミッドの構造 EG、CG(まぐまぐ)傾向にあるが大学生のそれと比べるとC型が多くL型S型が多い。これは人格の未熟性、未分化性を思わせる。Sub-typeでみると、EGの4C(人格分化の移行過程)、9S(成熟と適応の良さ)はCGのそれよりも少く、6L(情緒障害、硬い反応型)と11S(情緒障害傾向)が多い。これはEGに情緒障害者のいることを示唆する(表2)。④ 色彩症候群 Pr、UgともEGのDsynが高いため、これは精神薄弱者の内面に情緒コントロールへの指向があることを示す。しかし大学生の結果に比べると、ともに甚だ低く、EGの特性を思わせる。

⑤ Sequence Formula これは3位のピラミッドに同一色が使用される傾向を示す示標であるが、EG、CGとともに高い。しかも大学生のそれよりも高い。これは固執的反応の傾向を思わせる。

⑥ 精神薄弱者のCPT結果はほぼ同年令の大学生よりもほぼ同じ精神年令の幼児の結果に驚くほどよく似ている。しかしそくみると人格発達の遅滞、人格の硬さ、情緒障害等を示すいくつかの所見がえられた。

以上は大石まり子の精力的な活動のためそのための構造の判定は筆者との合意の結果である。大石は非会員のためその氏名をここに記す。

なお、本研究は長野県信濃学園、同西駒ヶ岳の脳貧の方々の大きな援助と協力によるもので、ここに深く感謝の意を表しておく。

検査・適性

精神障害者の就職に関する一考察(その1)

東京都心身障害者福祉センター
(田嶋善郎 白井優子)

<目的> 精神障害者の就職の可否について、一般的には作業能力があり、知的水準が一定の基準にあれば就職は可能であると判断されやすい。しかし、これらの要件を満たしながら、現実には就職せず、公共職業安定所から当センターを経由して就職するケース、あるいは、一旦就職をすると、作業能力・知的水準以外のことが原因で職業生活に失敗し、相談来所するケースが多い。職業主導とセイセンターによる就職活動の検査を実行する。更に次々・次々に亘り調査・観察を重ね、就職の可能性がはっきりしないケースでは、訓練・指導により就職の可能性が生じると判断されたケースが、精神障害者の訓練室を利用できる。つまり、訓練室を利用できるケースは、知的能力・作業能力からみて場合、就職可能な範囲にあり、経験の精神病、著しい問題行動等となり得るケースと言える。

本研究では、知的能力・作業能力以外に就職を阻むているのはどのような要因であるかを明らかにする。
尚本研究で就職といふのは一般的の就職試験や就労の経験での就職に成功せず、センターの訓練室を利用した後、次の条件を満たして就職したものを指す。

- (1) 就用期間6ヶ月以上
- (2) 最低賃金以上の収入を得ている。
- (3) 社会保険に加入している

以上の条件の全てに該当しているケースを就職群とし、取扱完習中や6ヶ月未満の就職期間で退職したもの(或はエスカレートした)、専属用にならないものの最低賃金以下の収入しか得られないものを非就職群とした。

(表1)

性別	就職群		非就職群		計
	男	女	男	女	
男	2	0	0	0	2
41~50	3	4	2	4	13
51~60	18	2	6	4	30
61~70	6	5	5	4	20
71~	2	0	2	1	5
計	31	11	15	13	70

<研究方法>

対象：1975年～77年の間に訓練室を利用した精神障害者70名。

就職群・非就職群の内訳を示したのが表1である。

次に、就職群・非就職群、平均年齢、訓練室の平均利用期間

(表2)

性別	年齢(年)	IQ(録出点)	訓練室利用月数
就	25.14	56.31	4.93
就	5.422	9.787	2.463
群	42	42	42
就	22.93	58.14	7.93
就	5.721	9.026	4.073
群	28	28	28
就	m.s.	m.s.	p<.001

内在化している問題の改善及び通勤場の選択が容易となることがあげられる。

児童群の厚生(表3)

性別	就職群		非就職群		計
	男	女	男	女	
学年					
中卒(男)	12	4	6	7	29
中卒(女)	6	1	1	4	12
中・中退	1	0	0	0	1
小・中卒	1	1	0	0	2
養護(男)	6	2	3	2	13
養護(女)	1	3	2	0	6
高卒	1	0	1	0	2
高・中退	0	0	1	0	1
大学中退	0	0	0	0	0
施設	3	0	1	0	4

(表4)

性別	A(上)		B(中)		C(下)		χ^2 値
	就	非就	就	非就	就	非就	
就	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	ns
性別	29.3	24.0	68.3	68.0	2.4	8.0	ns
因に子	34.1	20.0	63.4	80.0	2.4	0	ns
の比	17.1	40	78.0	80.0	4.9	16.0	ns
手続	31.7	16.0	63.4	68.0	4.9	16.0	ns
工種	計	9.8	0	90.2	100	0	ns
評定	作成	(当)					

日賃料配分(2~4名の群を1組とし、A、B、Cの三段階評定を行った)。

検査・適性

精神薄弱者の職業に関する考察(その2)

東京都心身障害者福祉センター
(○白井優子 田嶋喜郎)

<結果1> 評定項目52項目につけて、両群がテラフを受けて延年率は表上のとおりである。表1(表上)評価の全体的傾向

	A	B	C	計	χ^2 程度
就取群	1617 (74.2)	452 (20.7)	110 (5.0)	2179	全体 A-B-C P<.001
非就取群	875 (55.2)	503 (21.2)	207 (13.1)	1585	A-B PC.001 C-A PC.001

いい評価を受けていたが、次の傾向は就取群に一層多いと言える。

<結果2> 評定項目中 有意差の生じた項目は表2とおりである。(52項目中 22項目)

(表2) 就取-非就取群に有意差生じた評定項目
(0.05未満時に高い評価を受けて低い評価を受ける項目)

	Z ^a 値		
	全体	A-B	B-C
③ 就取意志	PC.001	PC.001	PC.01
⑤ 家族の協力体制	PC.005		PC.005 PC.005
⑦ 罪といふ行為に対する不機嫌構成			PC.05 PC.05
⑧ 他の非難-攻撃		PC.10	
⑩ あいさつ回数	PC.005	PC.01	PC.005
X 遠見の回数	PC.001		PC.001
○ 集団行動に対する意図	PC.005	PC.05 PC.10	PC.001
X まんじゅう販賣量	PC.05	PC.05	
⑫ 明るい態度		PC.05	
X 可愛い外見を作り			PC.05
協調性がある	PC.005	PC.01	PC.01
○ 人間関係の改善	PC.05	PC.05	
落丁回数	PC.02		PC.10 PC.005
豪華			PC.10
親切周到	PC.05		PC.05 PC.05
X 指示-意見に従う			PC.05 PC.05
人のことを喜ぶ	PC.02		PC.05
○ 生活や運動が豊富	PC.05		PC.05
○ 固定化する			PC.05 PC.05
○ 鍛錬のための運動	PC.02	PC.005	
活動的	PC.02		PC.05
経験(人の)広い			PC.10

表1, 2から ①両群共、問題行動はないが、現場等で望ましいと思われる社会的態度や行動がどちらもいい、又は子どもが就湯生活で問題が多く家族の協力体制も不十分である、②全体的に高い評価を受けていたものは殆んど全員就取群に入るといくものが多かった。これを表3にあげた。表3の一一番上の欄の例ご

(表3) 22項目共 A評価を受けて就取-非就取群に言及する

項目	A 個数	就取群 名	非就取群 名	備考
就取意志 A あいさつ A	20 (100)	20 (100)	0	「就取意志 A あいさつ A」
「直率 A	20 (100)	20 (100)	0	「直率 A」
「家族の協力 A	16 (88)	14 (88)	2	「家族の協力 A」
「集団行動 A	16 (74)	15 (74)	1	「集団行動 A」
「協調性 A	22 (95)	21 (95)	1	「協調性 A」
「親切 A	20 (93)	28 (93)	2	「親切 A」
「落丁回数 A	25 (92)	23 (92)	2	「落丁回数 A」
「活動的 A	25 (92)	23 (92)	2	「活動的 A」
「まんじゅう販賣 A	16 (100)	16 (100)	0	「まんじゅう販賣 A」
「直率が22 A 家族の協力体制 A	11 (100)	11 (100)	0	「直率が22 A 家族の協力体制 A」
「集団行動 A	14 (92)	12 (92)	1	「集団行動 A」
「家族の協力体制 A あいさつ A	10 (100)	10 (100)	0	「家族の協力体制 A あいさつ A」
「落丁回数 A 集団行動 A	11 (100)	11 (100)	0	「落丁回数 A 集団行動 A」
「T.B.調性 A	19 (95)	18 (95)	1	「T.B.調性 A」
「人間関係 A	19 (95)	18 (95)	1	「人間関係 A」
「集団行動 A-B-C 落丁回数 A-T.B.調性 A	21 (86)	18 (86)	3	「集団行動 A-B-C 落丁回数 A-T.B.調性 A」
「協調性 A	17 (82)	15 (82)	2	「協調性 A」
「落丁回数 A	16 (88)	14 (88)	2	「落丁回数 A」
「活動的 A	21 (86)	18 (86)	3	「活動的 A」
「人間関係 A	16 (88)	14 (88)	2	「人間関係 A」
「親切感と持つ A	14 (86)	12 (86)	2	「親切感と持つ A」

出せない、すなはち就取阻害要因によるものと推測され、検討した結果、全員が対応障害との他の問題が有った。

上記の項目は、能力的に就取可能範囲を有すれば、就取-非就取にかなり大きくなる要因と言える。

年齢推移による心理機能の変化(3)

萩原晃
(鉄道労働科学研究所)

1. 目的

成人の心理機能の経年変化に関する研究の一環として、単純作業における速度、長時間作業での作業過程について検討する。

2. 方法

作業課題として内田・クレペリン検査を用いる。分析は横断的方法による。データは国鉄の運転関係業務従事員に実施(昭和43年~47年)した検査結果を使用する。データ数は1次検査受検者N=19,005、2次検査受検者(1次検査で合格しなかった者)N=4,514である。

3. 結果

1次検査受検者群(一般集団とみなす)について、次の諸指標の年齢段階別平均を表11に示す。特定の群については標準偏差も示した。また平均作業量に関しては20才群(20~24才の群、他も同様の呼び方をする)を100とした時の指標と変動係数($CV = SD/MX \times 100$)も求めた。

- A. 平均作業量
- B. 各分作業量の標準偏差
- C. PF値
- D. 後期の初頭部と終末部の作業量の比(後期13~15分の作業量/後期1~3分の作業量×100)
- E. 休憩効果率(後期作業量/前期作業量)

4. 考察

(1) 作業速度(作業量)

表1-Aに示されるように作業量は20才群を最高として以後年齢と共に減りしており、50才群においては約23%減っている。また変動係数は年齢と共に増加し、個人差が次第に大きくなっていく事を示している。個人差の增大に影響を与えると思われる要因の一つを調べるためにG-P分析を行ったのが表2である。

1次検査受検者群と2次検査受検者群の作業量を20才群と50才群とについて比較すると、前者は差ではなく後者は1%水準で有意差があり、2次検査受検者群の方が低下が著しい。また助役群と一般職群とをデータ数の都合上30才群と45才群について比べると、作業量が減少しているにもかかわらず後者の方が差が増大している。以上の結果からG群の方か加齢による作業速度の低下の度合いが少いと言えよう。

(2) 作業過程

①30分間の作業における各分作業量の標準偏差(表1-B)は年齢と共に減少しており、作業のでき高にムラが少なくていく。つまり作業ぶりが次第に安定していく。

②作業曲線を考える場合には各分作業量にある程度の分散があるのは当然である。そこでPF値(表1-C)を指標として各人の作業量の平均曲線からのズレを調べる、30才群までは値が小さくなっていくが、以後ほぼ一定である。

③作業曲線は作業過程に関する慣熟、疲労など、さまざまな因子が統合されたものであるが、後期定型曲線は右下がり型であり、これは疲労、飽和など作業量を低下させる要因が強く働く結果と思われる。これらの要因について調べるために、後期の初頭部と終末部を比較したのが表1-Dである。年齢と共にわずかずつながら値が小さくなっており、20才群と50才群との間には有意差(1%水準)が認められる。

④休憩効果率(表1-E)はどの年齢段階においても約1.11で相違が認められない。

表1 年齢段階別平均作業量、PF値、休憩効果率など

年齢段階	A. 平均作業量		B. 標準偏差	C. PF値	D. 後期 休憩効果率	E. 休憩効果率	被験者数
	平均	指標					
~19	63.0	98.6	5.2	6.9	95.1%	1.11	390
20~24	63.9	100.0	5.2	6.5	94.9	1.11	3,221
	(12.9)	(20.2)	(1.2)	(3.3)	(6.6)		
25~29	64.4	100.8	5.0	6.2	94.6	1.11	2,684
30~34	63.8	99.8	4.8	6.0	94.5	1.10	1,533
35~39	56.7	88.7	4.5	6.1	94.0	1.11	1,860
40~44	56.1	87.8	4.4	6.1	94.0	1.11	4,686
45~49	55.2	86.4	4.3	6.1	93.8	1.11	3,232
50~54	50.2	78.6	4.0	6.1	93.8	1.11	1,337
	(13.4)	(26.7)	(1.2)	(3.5)	(8.1)		
55~	49.4	77.3	4.1	6.2	92.5	1.10	62
合計	58.8	92.0	4.6	6.2	94.2	1.11	19,005
	(13.8)	(23.5)	(1.2)	(3.4)	(7.2)		

(注) ()内は標準偏差、[]内は変動係数。

表2 平均作業量のG-P分析

年齢	G-P	1次検査			2次検査			(G群)(P群)-(P群)			年齢	G-P	助役			一般職			
		(G群)	(P群)	(G群)	(P群)	(G群)	(P群)	(G群)	(P群)	(G群)			(G群)	(P群)	(G群)	(P群)	(G群)	(P群)	
20才	M	63.9	64.2	-0.3							30才	M	67.0	61.1	5.9*				
	SD	12.9	13.6									SD	11.6	11.6					
群	N	3,221	1,337									群	N	3.9	10.7				
50才	M	50.2	45.9	4.3*							45才	M	61.3	52.8	8.5*				
	SD	13.4	14.4									SD	11.0	10.5					
群	N	733	304									群	N	1,040	44				

(注)*印は有意差あり(1%水準)。

Baumtestに関する研究

—印象評定をもとにして—

(山田 麻有美 千葉明徳短期大学)

<問題>

Koch, K. は、投影法の過程を図1のように示しているが、解説者も被検者と同様に内面的なものをもっていると考えられるので、Baumtestの解説の際に、樹木画によって、解説者の内面的なものが激活されるということを考えられるだろう。

さて、Baumtestの解説には、解説者の直観的把握が重要とされる。そして描かれた樹木画を直観的に把握することができるようになるには、数多くの樹木画を受身の形で見ることから始めなくてはならないとされている。しかし、数多くの樹木画に接することで、解説者の解説に際しての投影が減るものであらうかといふ疑問が生じる。

もし、数多くの樹木画に接することで解説者の投影が減るのであれば、樹木画に数多く接した者と樹木画にはほとんど接したことのない者との間には、同一の樹木画に対する印象に違いがある筈である。

そこで、以下の作業仮説立てて、研究をすすめた。
仮説1：数多くの樹木画に接した者（以下習熟群とする）と樹木画に接したことのない者（学生群とする）との間は、同一の樹木画に対する印象評定に差異があるだろう。

仮説2：習熟群では、同一の樹木画に対する印象評定に一致がみられるだろう。

仮説3：学生群では、同一の樹木画に対する印象評定に一致がみられないだろう。

<方法>

1. 評定者：①習熟群 … Baumtestを現在使用している臨床家10名（男4名、女6名）

②学生群 … 心理学系大学院生9名（男8名、女1名）

2. 樹木画：①ソシオメトリックテストにて、支架しないしは孤立と考えられる児童の絵（各2枚ずつ）

②Y-G性格検査で、Calm typeとされた児童の絵（2枚）

3. 評定尺度：相良ら（1961）にもとづき、単一因子によって説明された15尺度を用い、5段階評定とした。（論理的評価次元、巨大性次元、感性的評価次元、力動性次元）

<結果と考察>

1. 結果の処理：印象評定は、各樹木画について尺度毎に1～5点に得点化し、各次元毎に、平均、標準偏差値を求めた。（表1参照）

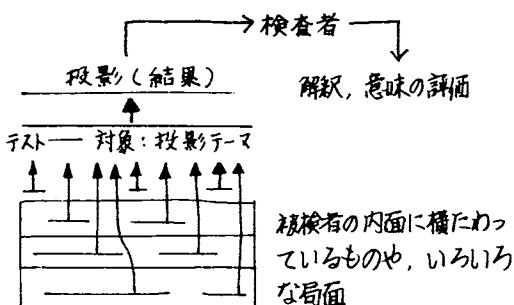
2. 仮説1について：各樹木画毎に、平均評定得点を群間に比較したところ、4枚の樹木画について有意差があった。また、各樹木画について次元毎の平均評定得点を群間に比較したところ、論理的評価次元では4枚の樹木画に於て群間の有意差がみられ、力動性次元に於ては1枚の樹木画に有意差がみられた。以上の結果から、習熟群と学生群との間には、樹木画の印象評定に、何らかの差異があると言えるだろう。

3. 仮説2および3について：各樹木画の次元毎の評定得点の分散を群間に比較したところ、論理的評価次元では4枚、巨大性次元では1枚、感性的評価次元では3枚、力動性次元では2枚の樹木画に於て、学生群の分散が習熟群よりも有意に大きいことがわかった。このことから、習熟群では印象評定に不一致が少なく、学生群では印象評定に不一致が多いということが言えるだろう。

以上のことから、樹木画に多く接することで解説者の解説に際しての投影が減るということが、部分的に確められた。

<表1. 印象評定の結果>

	1	2	3	4	5	
論理的評価	2.97 (0.44)	3.30 (0.83)	2.73 (0.63)	2.13 (0.33)	2.63 (0.57)	3.03 (1.12)
巨大性	2.93 (0.22)	3.03 (0.56)	2.73 (0.52)	2.73 (0.67)	2.95 (0.55)	2.75 (0.81)
感性的評価	2.67 (1.47)	3.37 (0.53)	3.55 (0.38)	3.32 (0.36)	2.87 (1.35)	3.00 (1.56)
力動性	2.06 (0.57)	2.63 (0.49)	2.25 (0.26)	1.99 (0.51)	2.50 (0.46)	2.78 (0.67)
全 体	2.90 (0.75)	3.06 (0.64)	2.81 (0.53)	2.54 (0.67)	2.69 (0.63)	2.92 (1.09)
論理的評価	3.16 (0.93)	3.73 (0.93)	3.46 (0.67)	2.58 (1.09)	2.67 (0.57)	2.84 (1.42)
巨大性	3.11 (0.77)	3.33 (0.67)	2.85 (0.67)	3.60 (1.17)	2.18 (0.64)	2.74 (0.83)
感性的評価	2.78 (0.77)	3.28 (1.44)	3.14 (1.91)	3.04 (1.02)	3.37 (0.52)	3.14 (1.06)
力動性	3.28 (0.78)	2.86 (0.86)	2.64 (0.86)	2.22 (0.57)	2.40 (0.60)	2.28 (0.76)
全 体	3.02 (0.77)	3.33 (1.42)	3.07 (0.89)	2.77 (1.18)	2.86 (0.55)	2.79 (1.12)



<図1. 投影法の過程>

教示の相違による四点

描画テストの検討

○小間賀 黒岩誠 伊賀寛子
(上戸女子短大) (東邦大医学部) (文化女子大)

目的: 四点描画テストに、描画例を示すことによって、反応数にどのような効果が生ずるかを調べることを目的とした。

方法: 1) テスト課題、統制群(C群)は従来の四点描画テスト；実験群(E群)は四点描画テストに、描画例として簡単な絵を加えた。課題数とその他の教示は共通であった。

2) 被験者: 中学生男女計81名、C群(38名)、E群(43名)。C群は四点描画テスト(以下、テスト0)の後で他の4種の描画テストを実施、E群は反対に4種の描画テストの後でテスト0を行なった。

3) 分析手続き: i) 各個人ごとに総反応数(F)、有効反応数(E)、カテゴリ数(X)、巧妙性(C)、および遠隔性(M)の合計点を算出した。ii) Cは革新性・合理性、Mは奇抜性・現実性の観点から、0～5の6段階で評価した。

表1 平均とSD

群	C群		E群		
	平均	SD	平均	SD	
テスト0	F 13.105	4.564	* * *	7.023	3.477
	E 0.342	1.176	* * *	3.302	1.874
	X 0.211	0.731	* * *	3.140	1.875
	C 0.553	1.369	* * *	7.605	5.031
	M 0.826	1.916	* * *	6.140	4.003
テスト1	F 6.105	2.280		6.093	2.044
	E 4.184	2.405		5.000	2.102
	X 3.163	1.929		4.140	1.875
	C 7.526	4.794	*	9.767	5.062
	M 8.738	4.620		9.116	5.306
テスト2	F 5.211	2.307		5.233	1.654
	E 3.658	1.736		4.093	1.582
	X 3.211	1.641		3.651	1.792
	C 9.053	5.390		10.535	4.347
	M 6.763	3.996		8.000	3.213
テスト3	F 5.342	2.736		4.791	2.018
	E 2.789	1.922		3.488	1.576
	X 2.316	1.598	*	3.116	1.261
	C 5.605	4.196	*	7.442	3.617
	M 6.553	4.459	*	8.721	3.775
テスト4	F 5.568	2.688		5.372	2.053
	E 2.789	2.079		2.907	1.197
	X 2.447	1.665		2.721	1.127
	C 5.421	4.184		6.070	3.076
	M 5.316	4.027	*	6.698	3.217

*有意水準5%， **有意水準1%， ***有意水準0.1%.

(小数点省略)

結果と考察: テスト0と描画テスト(以下、テスト1～4の平均とSDを表1に示した。テスト0では各要因について、0.1%水準で両群に有意差が認められた。また下のみはC群>E群となつたが、残りはすべてC群<E群になった。テスト1ではC、テスト3ではX、C、M、テスト4ではMに関して両群間に有意差が生じた。しかしながらF、Eにおいては、どの描画テストでも有意差が生じなかつたことから、反応数は両群ともほぼ等質であったといえよう。

テスト0と他の描画テストについて、相関係数を表2に示した。テスト0の内部相関では、C群でFが他の要因(E, X, C, M)とすべて負の相関(1%水準で有意)があつたのにに対して、E群では有意に達しなかつた。次にE群では他の描画テストのいずれかの要因と高い相関が生じたにもかかわらず、C群では有意に達したもののは一つもなかつた。以上を要約すると、テスト0のE群は「総反応数」、特に「無意味反応数」が大きく抑制されることが示された。またテスト0のC群は他の描画テストとほどんど関連性がなく「独立的」であるに対し、E群では他の描画テストとかなり高い相互相関の関係があることが示された。そして、総反応数は、X、C、M等の質的な側面と逆の傾向があることを示された。

表2 相関係数

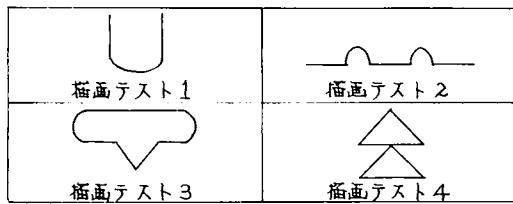
	C 群					E 群				
	F	E	X	C	M	F	E	X	C	M
F										
E	-0.472					235				
X	-0.480	743				042	848			
C	-0.466	634	979			-0.26	792	871		
M	-0.482	621	954	990		-0.34	726	834	791	
F	204	085	-092	-136	-145	1521	314	191	173	172
E	-0.11	-190	008	045	030	185	136	236	286	287
X	-0.96	-156	054	100	091	103	259	391	413	502
C	0.18	-172	006	042	010	142	147	253	248	432
M	-0.18	-184	-018	034	026	121	177	277	288	445
F	258	-230	-198	-182	-204	538	255	222	154	234
E	121	-110	-109	-091	-112	199	155	239	162	284
X	0.99	-119	-059	-028	-052	-029	312	443	362	482
C	110	-111	-076	-052	-071	-030	383	493	445	529
M	144	-117	-064	-021	-049	035	382	502	514	360
F	157	094	-089	-103	-110	626	275	124	143	099
E	165	-317	-249	-206	-213	377	289	308	285	336
X	195	-318	-243	-194	-197	356	438	465	421	508
C	192	-298	-239	-197	-190	071	454	495	463	601
M	183	-312	-237	-188	-188	231	469	485	430	567
F	162	129	-017	-039	-052	683	260	053	010	039
E	077	-250	-161	-126	-137	152	344	358	326	338
X	094	-253	-142	-099	-115	168	227	238	235	194
C	062	-216	-115	-076	-100	009	138	164	236	122
M	054	-228	-130	-092	-110	088	131	157	195	155

新しい描画テストの反応 の検討

○伊賀憲子 小関賢 黒岩誠
(文化女子大) (上戸女子短大) (東邦大医学部)

目的：新しく構成された描画テスト4種を用いて反応の分析を試みることとした。

方法：1) テスト課題、以下に示した描画テスト4題、各課題の表示は共通で「次にあげに図をつけて、できるだけたくさん絵をかいて下さい。」であった。



2) 被験者、中学生～3年生男女合計311名。3) 分析手続、i) 各個人ごとに総反応数(F)、総反応数から無意味反応数および不適切な反応数を差し引いた有効反応数(E)、カテゴリーフィルタ(X)、巧妙性の合計得点(C)、遠隔性の合計得点(M)を算出した。Fは流暢性、Xは柔軟性に該当する。ii) 巧妙性(C尺度)は課題の形体を、反応の本質的な構成要素として、どの程度合理的に描いているかという基準で、また遠隔性は与えられた課題を、どの程度奇抜な発想から処理しているかという基準で、それぞれ0～5の6段階で各反応を評

価した。なお両者とも無意味反応や不適切な反応を0点にして集計した。

結果と考察：i) 各描画テストのF、E、X、C、Mについて相互相関を求め、表に示した。無相関検定を行なったところ、すべての相関係数は0.1%水準で有意であることが認められた。特に各テスト内でのCとMの相関はそれぞれ、0.949、0.912、0.934、0.944、でいずれも0.90以上で非常に高いことが示された。ii) 各テストの内部相関をみると、FとEが0.442～0.675、FとXが0.362～0.503、EとXが0.768～0.946であった。F、E、XとCの相関はそれぞれ0.264～0.431、0.722～0.853、0.846～0.908、前者とMは0.334～0.445、0.693～0.851、0.872～0.911となつた。このことから総反応数(流暢性)はカテゴリーフィルタ(柔軟性)や巧妙性(C)、遠隔性(M)とあまり関連性がないが、反対に柔軟性と巧妙性、遠隔性は、かなり高い関連性をもっていることが示された。iii) F、E、X、CおよびMについて、各テスト間で相関係数をみると、F(0.590～0.728)、E(0.414～0.499)、X(0.447～0.555)、C(0.336～0.520)、M(0.396～0.512)となり、Fのみが各テストを通して比較的-費性をもっていることが示された。以上を要約すると、柔軟性、巧妙性、遠隔性は同一テスト内で高い関連性をもっているが、異なるテスト間では、比較的独立していること、これに対しても、流暢性は同一テスト内では、他の要因との関連性は低いが、各テストを通してみると、高い関連性をもっているといえよう。

表. 各描画テストの要因の相関係数

	F	E	X	C	M	F	E	X	C	M	F	E	X	C	M	
1	F															
	E	508														
	X	362	817													
	C	300	735	905												
	M	334	744	897	949											
2	F	633	383	261	284	297										
	E	381	499	442	494	482	675									
	X	330	459	523	517	500	503	768								
	C	385	420	503	520	496	431	722	889							
	M	307	436	510	527	512	445	693	872	912						
3	F	596	324	212	213	240	639	396	232	199	213					
	E	399	414	414	422	430	422	440	419	417	399	506				
	X	412	433	477	478	483	403	495	531	525	498	405	884			
	C	300	373	449	485	477	317	431	443	453	418	264	737	846		
	M	358	400	460	489	489	369	472	493	509	473	342	807	907	934	
4	F	525	333	210	230	263	590	393	260	192	223	728	378	318	211	291
	E	332	446	463	456	466	329	461	434	398	396	310	526	576	504	555
	X	299	444	494	474	489	272	421	447	415	426	244	474	555	471	518
	C	281	409	445	434	444	247	377	365	336	360	191	424	508	464	493
	M	314	426	452	435	453	281	407	401	372	396	226	444	527	458	497

すべての相関係数は
0.1%水準で有意に達した。

〈小数点省略〉

検査・適性

Blachey Test に関する研究IV

丸井 澄子 (岐阜大学教育学部)

- 北瀬抹美代 (慈恵中央病院) 林 忠弘 (大垣病院)
- 渡辺 朝美 (美濃加茂病院) 丹羽 純 (富岡小学校)

(目的) 投影法として一般に児童にもちいられ、子供の発達過程と情緒的問題に関するテーマを引き出すように考えられている CAT と、精神分析学という心理的発達段階や、その段階内での対象関係を把握するように計画されている Blachey test を、同一被験者に施行し、その反応の形式的側面を比較することにより、 Blachey test の特徴を検討していきたい。

[方法] 岐大版 CAT と Blachey test を 6 才男女各 13 名、 8 才男女各 15 名、 10 才男女各 14 名に施行し、“性差” “年令段階の比較” “CAT と Blachey test の比較”について下記の 4 側面において形式分析をおこなった。

- 反応の量：物語の長さをみるための反応語数。
- 感情語：名詞、形容詞等、感情を示している語数。
- 感情の色合い：感情の色合いがどうかみをもつて明るい方向 +1 、それより明るい方向 +2 、暗い方向 -1 、それより暗い方向 -2 、の 5 段階評価。
- 解釈水準：反応なしを無反応、単に單語をあげるだけのものを枚舉、絵の説明のみを記述、解釈では普通と思われるものを解釈 2 、それより劣っているものを解釈 1 、優れているものを解釈 3 、の 6 段階評価。

表1. 性差

項目 年令	CAT		BL			
	(男-女)	(男-女)	(男-女)	(男-女)		
6	6	8	10	6	8	10
反応の量				*		<
感情語	*					
感情の色合い						
解釈水準	*		**			*

〔結果・考察〕

検定結果だけ、表1・表2・表3 と示した。性差は、 10 才で出現しやすいようであり、年令段階の比較では、 CAT 、 Blachey test 共に、反応の量、感情語、解釈水準で年令が進むに従い、高くなることが認められる。

表2 年令段階の比較

年令	反応の量			感情語			感情の色合い			解釈水準		
	男児	女児	男女総合	男児	女児	男女総合	男児	女児	男女総合	男児	女児	男女総合
CAT	BL	CAT	BL	CAT	BL	CAT	BL	CAT	BL	CAT	BL	CAT
6+8				<	<	<	<	<	<	<	<	<
8+10	*			*								
6+10	**			**	*		*					
	<			<	<	<	<	<	<	<	<	<

* 5%以下の有意水準を認めたもの

** 1%以下の有意水準を認めたもの

これは、知的発達がすくみ、語彙、自己の情緒的表現力、理解力が増すために考えられる。ただ、反応の量で女児に差がみられないのは、一般的に言われるように女児の方が男児より、年少の頃から語彙が豊富であろうからと思われる。一方、感情の色合いでは、両テスト共に逆となり、 6 才の方がやさしいことが認められる。これは、 8 才・ 10 才では自我が飛躍し、情緒的表現をする際に、自我機能の働きである合理化・昇華・反動形成等の防衛機制を使用するので、 6 才児の生の情緒的表現とは異なり、妥協の産物として現われるために、このような結果となったと考える。

CAT と Blachey test の比較では、反応の量においては差がみられず、感情語・感情の色合い・解釈水準で Blachey test の方が高い。このことから、子供にとって CAT よりも Blachey test の方が理解しやすく、そのためには主人公に同一視し、感情の投影がしやすいと考えられる。その理由として、 Blachey test では、犬のみが登場し、主人公が設定され表示もあり、刺激としての状況もわかりやすく描かれており、親子関係・家族関係に限定され、精神分析理論という單一の理論背景でも十分に解釈することができる。しかし、 CAT では、複種類の動物が登場し、家族関係以外の状況も描かれており、刺激の複雑さ、あいまいさがあり、理論背景も精神分析理論・欲求圧力理論・他の理論など多くの多種類の理論背景がある。つまり、この刺激複雑性と理論的背景の違いが、形式分析の結果に現われてきていたのではないかと考えられる。

また、発達段階の特徴、男根期・潜在期の様相が、 CAT 、 Blachey test 共に、その反応にあらわれているのは、年令段階の比較の結果から認められるが、しかしこれらのこととは、形式分析だけでみるとには不十分であるため、今後、内容分析をおこなうことにより、こうした点を、さらにまた、 Blachey test の特徴を明らかにしていきたい。

表3 CAT と Blachey Test の比較

年令	テスト			男児 (CAT・BL)			女児 (CAT・BL)			男女合計 (CAT・BL)		
	6	8	10	6	8	10	6	8	10	6	8	10
反応の量												
感情語	*			*			*			*		
感情の色合い	<	<		<			<			<	<	
解釈水準	*			*			*			*		

音韻の特性(語頭と語尾の場合)について(作業性格)

(検査56)

適性研究所
板倉善高

目的: 作業の分野を、手足、筆記作業から発音に拡大して考察すると、発音に当つて音韻が関係してくる。今回は先づ、日本語の語頭と語尾の頻度から各語音の特徴を考察する。
井上英和辞典

方法: 先づ国語辞典に掲載の62969語の中の動詞5441語、形容詞1394語の語頭と語尾を母音別、子音別に分類し、その出現率のみを比較する。

結果: (発音分析) 音頭語尾

語音別語頭頻度、() 内は分子動詞、分母形容詞

		子音別語頭				
ア	イ	ウ	エ	オ	語尾計	
ア 1380	11945	ウ 1158	エ 751	オ 1513	6747	
(69/26)	(178/39)	(189/51)	(8/1)	(239/69)	(683/186)	
カ 4723	1896	ケ 1702	ケ 1599	コ 4444	14364	
(464/55)	(282/64)	(129/33)	(149/40)	(198/60)	(1222/252)	
サ 2216	3151	ス 2413	セ 2151	ソ 2944	12875	
(244/90)	(589/142)	(143/74)	(206/71)	(162/78)	(134/455)	
タ 2353	1632	ツ 1035	テ 1343	ト 2216	8579	
(260/81)	(32/18)	(239/40)	(144/49)	(295/50)	(970/238)	
チ 894	ニ 577	キ 272	チ 401	チ 470	2614	
(104/49)	(92/28)	(53/4)	(56/10)	(75/19)	(380/110)	
ハ 2607	ヒ 1708	フ 2234	ヘ 1159	ホ 1875	9583	
(157/35)	(139/39)	(106/20)	(40/10)	(53/31)	(495/135)	
マ 993	ミ 823	ム 565	メ 548	モ 596	3525	
(111/30)	(116/28)	(35/40)	(48/22)	(119/27)	(429/147)	
ヤ 777		エ 706		ヨ 985	2468	
(82/40)		(80/35)		(124/33)	(286/108)	
ラ 317	リ 354	ル 222	レ 351	ロ 547	1791	
(27/6)	(53/15)	(10/2)	(31/16)	(18/5)	(139/44)	
ワ 423					423	
(47/21)					(47/21)	
音頭出現率順位: カ サ ハ ソ フ ユ リ ュ テ チ ミ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ						
母音別順位: カ サ ハ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ						

語頭出現率順位: カ シ ウ ハ ソ フ ユ リ ュ テ チ ミ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ
母音別順位: カ サ ハ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ

子音別順位: カ サ ハ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ リ ヲ

語頭母音別 語尾の頻度

動詞の場合					形容詞の場合				
語頭	ア	イ	ウ	エ	語尾	ア	イ	ウ	エ
う	62	42	56	18	47	225	い	106	69
く	72	62	71	12	51	268	う	2	3
ぐ	8	1	10		10	29	之		1
す	176	144	144	41	157	632	か	2	
ぶ		2		1	1	4	き	4	1
つ	12	6	12	3	12	45	ぎ		1
ぬ		2	2		3	7	く	16	15
ふ					2	2	ぐ		1
ぶ	7	4	7	2	7	27	げ	1	
む	67	43	56	13	37	216	こ	1	1
る	1006	972	583	507	833	3901	さ	1	
よ							し	2	1
れ	1						す	1	3
語頭	1423	1301	950	601	1166	5441	あ	1	5
語尾	~	~	~	~	~	~	せ	1	1
語尾出現率順位:	る	す	く	も	う	つ	や	2	2
語頭出現率順位:	た	6	13	4	4	5	た	32	
語尾母音順位:	つ						つ	2	2
語頭母音順位:	て	7	2	2	2	4	て	17	
語尾母音順位:	で						で	3	6
語尾母音順位:	ど	39	27	52	9	34	ど	161	
語頭母音順位:	な	47	37	37	65	50	な	236	
語尾母音順位:	に	24	18	10	11	29	に	92	
語尾母音順位:	ぬ	4	1	1	1	1	ぬ	8	
語尾母音順位:	の	65	52	30	28	23	の	198	
は							は	1	1
形容詞の場合	き		1	3	4				
語尾出現率順位:	や	2					や	1	3
語尾母音順位:	ら	2	2				ら	4	9
語尾母音順位:	り	8	10	10	5	13	り	46	
語尾母音順位:	る	24	6	12	21	12	る	75	
語尾母音順位:	れ	1					れ	1	
語尾母音順位:	ろ	1					ろ	1	
語尾母音順位:	ん	2	1				ん	2	5
計	366	254	257	200	317	1394			
語頭母音順位:	ア	オ	ウ	イ	エ				
語尾母音順位:	イ	行	オ	行	ウ	行			
語尾母音順位:	ナ	行	タ	行	カ	行			
語尾母音順位:	ヌ	行	ラ	行	サ	行			

連絡先 松戸市 本町3-15

情緒障害児の精神強化に関する心理学的研究 —— 痢心理学的研究 (233) —

今 福 寿代・座間味 京和
(駒沢大学文学部・日立梅ヶ丘病院精神科)

目的

我が国に児童審査が公布されてから既に4分の1世紀余りの歳月を経てゐるが、児童の問題は年々増えており、しかも大衆社会の複雑化に伴い多彩な精神身体症状を呈し、学校生活や家庭生活における適応を困難とすう児童が年々増えている傾向にある。そのような児童は一般に情緒障害児といふ名で表現され、教育相談所・児童相談所・医療機関等で治療並に指導を受けているが、今日未だ決定的に有力な方法ともいいくべきものは見出されていない。牧田によると、一般に情緒障害児は、身外的な原因よりも心理的原因が主役となる機能的行動の障害者であるといふ。また平井は、情緒障害児の多くは、情動あるいは情緒の面における発達停滞または発達障害と考え、多くの症例に対して精神衛生学的・発達心理学的な見地から研究し、その成果が多數報告されている。

従来の情緒障害児に対する治療の方法を直観すると薬物療法・環境調整及び精神療法が主となっており、呼吸コントロールを中心にして心身の調整をはかる治療法は殆んど見られない。秋重・座間味らは、禪の原理と実践法を精神分裂病・神経症・心身症等に応用し好ましい研究成果を挙げている。本研究は、情緒障害児と呼んでいた児童を対象に禪セラピーを施行し、その前後における精神テストや内省報告等に現われた人格の変容について調べたものである。

【方法及び症例】

1. 本症例においては、主に呼吸訓練法とレンマ・カウンセリングを用いた。呼吸訓練法は、主に「心の目」で入息・出息を眺めるよう「耳持」で行い、しかも通常の呼吸運動よりもゆるやかに、呼吸の延長を重視し、朝・昼・晩に10分乃至20分間坐禅及び仰臥の姿勢で150日余の訓練を続けた。

2. 一週間に2回の面接時は、主に親子關係に焦点をしおって禪的内観の方法を用いた。

症例I：H. M 14才・中学生(女)。

主訴：頭痛・不眠・下痢・食欲不振・不安感。

本ケースは社員中異常なく10ヶ月で正常出産(出生時体重3000g)。新生児期より就学期に至るまで身外的発育及び知的発達等の面においては問題なく小学校へ入学している。性格的には圓滑・内向的で神経質、

甘えん坊で依存傾向が見られ交友關係も狭い。一流の公立小学校へ入学した本ケースは、学業成績が常に上位で親の期待も大であった。しかし父親が職務上の失敗からアルコール依存になり、屡々暴力から離婚をし、母親の実家で生活することになり転校を余儀なくされた。本ケースは元来の性格が固有であり、学校生活における適応が困難になり、多彩な精神身体症状を呈し、学校を拒むようになつたため、医療機関を転々として某精神科を訪れた。

初診時における精神検査結果は、身外的な異常所見は認められていが、諸心理テストの結果によると精神的問題点が認められ、特に不安感・焦慮感そして精神的外傷体験等が顕著で、積極的な治療の必要性が認められため禪セラピーを応用した。

症例II：Y. K 14才・中学生(女)。

主訴：不眠・頭痛・腰痛・倦怠感・食欲不振・不安感

本ケースは妊娠中異常なく10ヶ月で正常出産(出生時体重3100g)。新生児期から就学期までの身外的発育・知的発達等に問題なく小学校へ入学しており、小学校の低学年までの学業成績は普通の上位を維持しているため、高学年より母親の希望でピアノを習い始めてから漸次学業成績が不振となり人気が動搖している現初期が始まり、専一層精神的動搖が続いているときに体育の先生から不快なことを云われ、自閉的な生活に陥ると共に身外的な起訴が多くなり学校を拒み始めた。しかし要求水準の高い母親は、子供の状態を配慮せずにアノのレッスンと学校を強制したことから、周囲に対する不信感と同時に精神身体症状が著しくなり、母親に連れられて某精神科へ受診を求めてきた。

初診時の医学的心理学的な精神検査結果では身外的異常は特に認められなかったが、諸心理テストの所見は著しい情緒不安定な反応が多く、積極的な治療の必要性が認められ、繰り薬物療法と禪セラピーを施行した。

【結果と考察】

症例I・症例IIに対して、呼吸を中心とする禪セラピーを試みた結果は、呼吸訓練の時間的経過に伴い精神的安定が得られると共に、諸心理テストにおいても内的葛藤が除去され、さらに精神的外視野も拡大される一面が見られた。また通院時の面接の内省報告においても、呼吸訓練を行うことにより情動の安定が得られるという好ましい報告があつたため、禪セラピーは情緒障害児の精神強化に対する有益な療法の一つと考えられる。しかし症例が少ないので今後さらに症例を増し、研究を続けて行きたい。

真言の意味論：意味論テストよりみた参禅者的人格構造——禅心理学的研究(234)——
駒沢大学心理系研究室 及川 卓

あくまでも刺激語とし、連想をもつて反応語を求める連想連語テストを使用し、また反応語語中の個人独自反応要素、社会常識反応要素を解析することによって、参禅者に特有の意味構造を明らかにしたい。その場合、反応語の出現機制(特に第一反応語)、反応語系列の変動、この二点に注目したい。これらについては、二つの意味論的仮説が成立する。第一は《強意味説》、つまり最も強い意味、連想を持つ言葉が選択される子という仮説。第二は《意味干涉説》と呼ばれる、反応語が階層構造に従って出現するとみる仮説である。この二つの仮説をふまえて、参禅者における、①意味の独立性、②意味の普遍性、常識性、③どのようにして、これらの矛盾する意味素が構造化されているか、を検討してみる。

I. 被験者。庵禪体験を持つ25~48才までの男子18名。および未経験の普通学生20名。

II. 方法 1. 連想連語テスト

連想連語テストとは、あくまでも刺激語に対して思いついで言葉を次々に、制限なくあげるように指示して行なわれたテストである。この時、刺激語としては、『GSRの手引』に情動刺激語とある言葉より選んだ。

2. 判定基準

常識的反応から独自的反応まで、刺激語に対する反応語で、普通学生の各刺激語に対する反応を参照として、次の様に段階づけし評価点を与えた。

30%以上に出現した反応語 5点

29~10%に出現した反応語 4点

9~5%に出現した反応語 3点

4~2%に出現した反応語 2点

1%に出現した反応語 1点

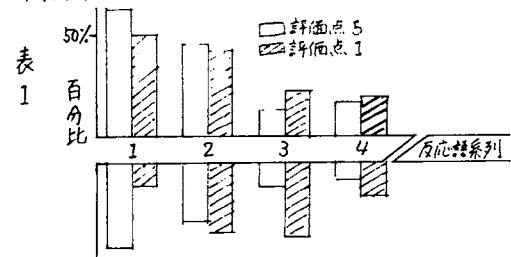
参禅者のみに出現した反応語には1点を加点した。

III. 結果 a. 表1 参照

b. 結果の要約

① 第一反応語に関しては、参禅者群は常識反応語、独自的反応語が出現したといふ《両極性》を示した。

② 参禅者群では、反応系列中、常識反応語の直後に、独自的反応が出現したといふ《変換性》が多発した。



V. 考察

参禅者群では、第一反応語に常識反応語と独自的反応語の《両極性》が出現した点が、注目すべき特徴である。また第二反応語でも独自的反応語の出現が多く、第一反応語で常識反応語を示しても、第二反応語では、独自的反応語へと変化する系列中の危険字《変換》がある。その一方、学生群では、反応語系列に従って、評価点の高い反応語より低い反応語への单纯な低下のみである。

次に下記問題となる事は、参禅者の反応語の《両極性》、《変換性》である。これは参禅者の意味構造が、普通学生のそれと異質であることを示唆しているのではないかだろうか。これらの結果を二つの仮説とり検討してみると、①、参禅者群で、独自的反応語が多く、独自的意味が強調されたのは、参禅者では言葉の意味が《深化》、《凝集化》されたりしていないだろうか。強意味説の立場からすると、意味反応抑制が参禅者では何よりも、《深層的意味素》とかかわっており、参禅体験によつて得られた《意味の階層構造》の《階層的生起》となる。もちろん非参禅者でも、言葉の中に独自的意味を持ったはいるが、それは常識性を欠くものとして反応としてではなくて個別的な傾向である。②、意味干涉説から検討すると、参禅者の連想、連語に独自性がみられるのは、反応抑制の一時的《無化》が連想過程中に生じ、固定的反応系にしばられない自由な反応がとらわれたようになつたためと考えられる。

生き方に関する心理学的研究(22)

— 禅 心 理 学 的 研 究 (235) —

松浦 光和

(駒沢大学文学部)

[目的] 今回の報告は、調査票「CLS」の第3条件「物理的環境条件」を構成する3つのカテゴリー、「衣」「食」「住」について、各カテゴリー間の関連性を明らかにし、併せて各調査対象群の特性を検討するものである。

[方法] 調査対象者：(1) 健康優良者群、(2) 一般正常者群、(3) 精神病者群、(4) 身体病者群、(5) 受刑者群。各群50名。成年の男女、合計250名。

これらの対象者に関し、「CLS」の「物理的環境条件」内の3カテゴリーを調査し、その結果に基づいて、3カテゴリー間相互の相関係数をグループ別に求めた。

[結果] 各グループにおける、カテゴリー間相関係数値は表1～表5に示した。(表中の*・**は相関係数の有意水準を表わし、前者は1%、後者は5%の水準を示す。)

表1～表5をえらんでまとめたのが表6である。

I. グループごとのカテゴリー間の相関は次の如くである。

(1) 健康優良者群におけるカテゴリー間相関は「衣」と「食」、「衣」と「住」、「住」と「食」間に有意な相関がある。

(2) 一般正常者群におけるカテゴリー間相関は「衣」と「食」、「住」と「食」間に有意な相関がある。

(3) 精神病者群におけるカテゴリー間相関は「衣」と「食」、「住」と「食」間に有意な相関がある。

(4) 身体病者群におけるカテゴリー間相関は「衣」と「食」、「衣」と「住」、「住」と「食」間に有意な相関がある。

(5) 受刑者群におけるカテゴリー間相関は「衣」と「食」、「衣」と「住」、「住」と「食」間に有意な相関がある。

II. カテゴリー間相関の内容とグループとの関係。

(1) 「衣」と「食」間では、全グループにおいて有意な相関がある。

(2) 「食」と「住」間では、全グループにおいて有意な相関がある。

(3) 「衣」と「住」間では、一般正常者群、精神病者群を除く3グループにおいて有意な相関がある。

また、有意な相関係数のグループ間比較では、各相関係数間に有意差はなく、各相関は同質である。(表6)

[考察] 今回の研究は、「CLS」の「物理的環境条件」を構成する3つのカテゴリーについて、それらの関連性を明確化したものであるが、分析の結果以下のことが判明した。

カテゴリー間相関を中心にして検討すると、「食」と「衣」、「食」と「住」間に全グループにあり且つ高い関連性がある。これらのこととは「食」と「衣」、「食」と「住」間に生き方の差異による影響を受けない密接な関連性のあることを示すものである。

次に各グループについてであるが、健康優良者群、身体病者群、受刑者群においては、3つのカテゴリー間に高い関連性があり、一般正常者群、精神病者群は「衣」と「住」間に高い関連性の無いことが分かった。

表1. 健康優良者群

	衣	食	住
衣			
食	*.559		
住	*.419	*.519	

表4. 身体病者群

	衣	食	住
衣			
食	*.493		
住	*.382	*.340	*

表2. 一般正常者群

	衣	食	住
衣			
食	*.284		
住	*.162	*.321	

	衣	食	住
衣			
食	*.332		
住	*.496	*.444	

表3. 精神病者群

	衣	食	住
衣			
食	*.469		
住	*.448	*.340	*

表6. 表1～表5のまとめ

グループ	良健常者群	精神者群	身体病者群	受刑者群	有意な相関
カテゴリー	群優	群正	群病	群體	差数
衣—食	*.559	.284	*.469	*.332	P>.7
住—食	*.519	*.321	*.340	*.340	*.444 P>.7
衣—住	*.419			*.382	*.496 P>.8

自我に関する東洋心理学的研究
—呼吸療法を中心として—
—禅心理学的研究(236)—

簡 仁 育
(駒 池 大 学)

〔目的〕

近年、臨床場面で神経症や心身症の治療法として坐禅が注目されている。調身・調息・調心を基本とする坐禅は、心身の調整をはかり、精神的安定を得る方法としてすぐれており、特に「調息」については、古くから歴史的にその効用が認められていた。さりに最近の心理学的研究の結果からも、呼吸は、心理的活動を敏感に反映すると言われる（Cohen, H.D.ら：1975）。呼吸訓練に対する基礎的研究はまだ十分ではない。そこで本研究では、呼吸訓練（数息観）の基礎的研究として、呼吸訓練の心理的側面、特に不安水準への影響と訓練効果について検討を加えた。

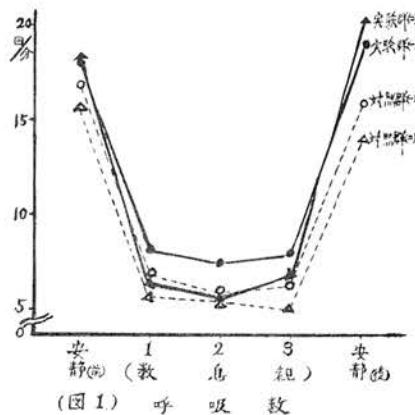
〔方法〕

(1) 被験者は大学生および大学院生計10名。(2) 装置：呼吸曲線、GSR、皮膚電位反射、および心拍は、三栄測器製E-130型脳波計で増幅記録した。不安水準をしらべるために Spielberger 3 (1970) による State-Trait Anxiety Inventory (以下 SAI と TAI とする) を用いた。(3) 手順：10名の被験者を5名づつランダムに二つの群に分け。一方を実験群、他方を対照群とした。実験群は数息観による呼吸訓練を2週間課し、対照群には訓練を課さなかつた。測定は2週間の呼吸訓練測定をよそんじ2回行なつた。各々の測定は安静（5分）-課題（数息観による呼吸15分）-安静（5分）であつた。各被験者に測定前に SAI と TAI の測定を終了してチェックさせた。実験群の呼吸訓練の用紙を渡し、2週間の訓練記録をさせた。データの整理は安静時最後の1分間および課題時の5分毎ごとの各1分間づつ計5分間を分析した。

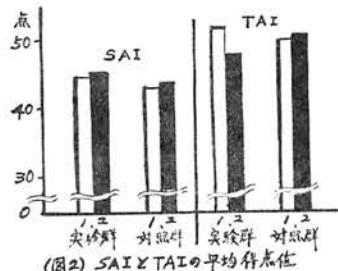
〔結果と考察〕

結果は表1および図1、2に示す通りである。実験群、対照群とも安静時に比べて課題（数息観による呼吸）時に呼吸数が減少していた（訓練前 $t_0 = 3.721$; $p < .05$, $t_0 = 7.030$; $p < .01$ 訓練後 $t_0 = 4.786$; $p < .01$, $t_0 = 10.210$; $p < .01$ ）。これま、被験者が課題遂行の努力をしていたことを示していると言える。EEGの波については、実験群で止安静時に比べて課題時に減少する傾向があつたが、対照群では、逆に課題時に増加していた ($t_0 = 3.510$;

$p < .05$)。訓練前後にあける課題時の呼吸数については、実験群では、訓練前に比べて訓練後に減少する傾向があつたが、対照群では明瞭でなかつたが、これは2週間の呼吸訓練の有無による影響と言えよう。不安得点（SAI, TAI）については、実験群と対照群との間に差はみられなかつたが、訓練前後の比較では、実験群で TAI の得点が減少する傾向がみられた。これは、呼吸訓練が長期的な性格特性としての不安を減らさせることができることを示唆している。



(図1) 呼 吸 数



(図2) SAI と TAI の平均得点

(表1) 実験群と対照群の安静時および課題時の平均値

	安静(前)	数 息 観			安静(後)
		1	2	3	
実験群	Resp	1 1.8	8.4	7.6	8 19.2
		2 1.8	6.6	6	7 20
	HR	1 64.8	65	64.4	65.6 65.2
		2 65.8	65.6	67.4	68.2 64.8
	GSR	1 1.2	0.6	0.4	0.6 0.7
		2 0.8	2	1.2	2.6 0.8
対照群	EEG	1 36.72	28.01	40.46	39.31 35.46
		2 48.62	45.79	43.24	40.27 38.92
	Resp	1 16.9	6.8	5.9	6.4 15.8
		2 15.6	5.6	5.6	5.0 14.2
	HR	1 86.2	83.4	83	81 80.4
		2 85.8	85.2	84.8	85.4 85.4
	GSR	1 0.2	0.6	0.6	0.9 0.8
		2 1.2	0.6	0	0.8 1.2
	EEG	1 19.48	30.90	35.16	29.08 27.52
		2 28.43	31.11	35.74	22.36 24.56

ユング心理学と禅—見性体験者に於ける死と再生—

— 禅心理学的研究(乙37) —

金城 充
(駒沢大学)

筆者は禅が従来知られて居る精神療法の一つの原理をなすものであり、「その背後に偉大な実践的真理が存在する」という觀点から、ユングのいう個性化、魂の問題に對して、禅の心理学的研究は重要な課題となると思考する。

禅の心理学的研究には、脳波等の一連の実験研究や文献研究、比較研究等があるが、本論は、一人の参禅者が主觀的に體験した見性が具体的にどういうものであるかという報告であり、その心理学的一考察である。

心理療法家は、クライエントの一成長に必要ないニシエーションを施すシャーマンのふうな働きがあり、禅の老師は、苦に病む衆生を悟りの世界へとニシエートさせる役割りをもつと思われる。ニシエーション儀礼はある団体から他の団体への入団式としてよく知られる。キリスト教に於いては洗礼式等があげられる。エリアーデは、「ニシエーションの宗教體験、聖との出会いを構成するのは、きびしひ試練である。」という。「あらわゆるニシエーションの中心のモメントは、修練者の死と、その生者の仲間への復帰を象徴する儀式によってあらわされる。修練者は新しい人間として生まれかわる（別の存在様式を身につける。）ニシエーションでの『死』は同時に幼年時代の終焉無知と俗的状態の終止を意味する。」しかし、そのような儀礼は、ほとんど形骸化されているようと思う。眞のニシエーションは、個人の内面より始めるものであり、個人の内面に於いて行なわれるものであると考える。

目的：本論では一見性体験者の手記をもとに、その参禅者がいかにして死と再生を體驗していくか。その経過を述べ、考察してみたい。

参禅者：A氏 61才 (S.51年現在) 医師 五年前に心筋梗塞の大病 摘心会二回目 無事に参禅

この手記は、Aの「記憶の生々しいうちに一氣呵成に書き下された」だけに、状況がはつきりしめされ、読者に強い印象を与える。

(イ) 「出息入息で滑らかに上下した『ム』の字の

エレベーターは全く停止してびくとも動かない。見れば『ム』の字はバラバラになって床に散じ、残骸をとどめるのみ。そして真黒な墨になつて微動だにしないのである。あーあ『ム』が死んだと感じた。何んてかわいそうなことになつたんだろう。何んなに一生懸命につとめた『ム』が死んでしまつた。そうしてもう動かないのだと思つたら、いとしくてかわいそうでどうしようもない。今や新たな涙が音を立てて両頬を伝つて落る。」

(ロ) Aは(イ)の事を老師につけると、「流涕ぼうだの態となつた。老師の前で私は手ばなしで泣いた」、老師は「『それはあなたをとりまいていた知識煩惱が、あなたから離れていたんです。』」と述べる。

(ハ) 禅堂で警察の応援を受けながら、「新しい『ム』で、「羊泣きの状態で自己とは、自分とは『ムームー』を繰返す。自分とはとやると急に苦しくなつてどうにも止まらなくなる。『ムー』と下降するエレベーターが途中で大きな『自』の字とカチャリと接触して一寸へこんだ。あー！こりゃいかん。なにも『自己にこだわる手はない。』『ムー』に居さうすれば何の苦もないではないか。どこにいた何者か知らない。ピヨンと『ム』の字のエレベーターに乗り移って坐禅している。あー安樂日々。唯々『ムームームー』心はひろびうだ。これだ！」その後、初聞を述べる。

考察：Aは、呼吸にあわせて「ムー」とやり、エレベーターが上下する気持ちで「ム」と一枚になる事つまり、ムに同一化する努力をしている。その結果、(イ)、ムと同一化して自我はム一片となり、それほど自我を縛っていた關係系は消失し、脱落した。それは、(ロ)に於いて老師が言った知識煩惱いわば、自我コンプレックスの消失を意味し(真黒な墨で死んだムとして表出)、その象徴的死を意味するものである。

ある人の場合には、坐禅していて真黒な大入道のよくなものに襲われそうになつたと語る人もいる。その人に對して老師は、「飲み込まれてしまえばよかつたのに」と言つた事もある。

(乙) (ハ)の段階に於いて意識の転換が生ずる。今まで自分が「ムー」とやりていたのが、ムの字のエレベーターに乗り移っている。ここに兩非から兩是への転換が見られる。すなわち、ここに死から生への蘇生が成立するのである。

見性と再生・死の問題は、今後、ユング心理学との関連に於いてさらに研究を進めていきたい。

(連絡先 駒沢大学 心理学研究室)

自我に関する東洋心理学的研究

禅心理学的研究 (238)

(駒澤大学 講 約)

I. 天台智顗の禅観

智顗の教學思想は一般に実相論の名で呼ばれてきている。そのように呼ばれる理由は、智顗の教學的明心がわれわれをとりまく世界(諸法)の眞のありかた(実相)を徹底して究め尽くすところにただ一途に向けられているという点にある。ところで智顗の教學思想に認められるこうした特徴に眼を送えて、智顗の教學思想の形成の経過を追ってみてゆくと、何人をそこにはっきりと質的変容の跡をみないわけにはゆかないであろう。

智顗の初期の教學思想を内容的にも、とも端的にあらわす著述は「般若波羅蜜次第法門」である。彼の三十オ付の作品であり、全十巻からなる。これは量的にも、智顗の教學思想の根本をもつとも鮮かに伝える円熟期の著述:「法華文句」「法華玄義」「摩訶止観」のいわゆる「三大部」のそれぞれに匹敵し、また内容的にみても、初期の智顗の思索の動向を集約的に表示するばかりか、生涯を貫く彼の教風の特徴を暗示的に啟示しもする著述であって、智顗の作品中きわめて重要なものの一つである。

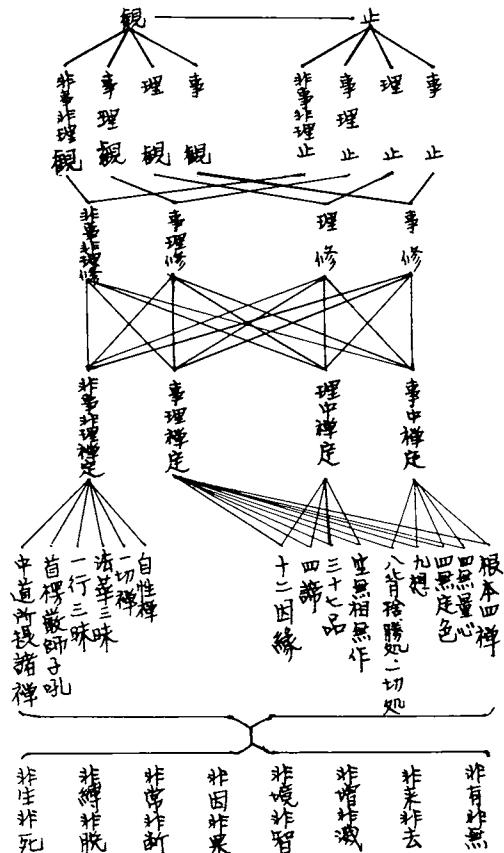
「般若波羅蜜次第法門」の「禪波羅蜜」というのは、大乘佛教が人々を悟りへと導引するために人々の守るべき德行として擧出した六種德行—六波羅蜜(Sat-Pāramitā)のなかの一つ「禪定」に相当する。布施(dāna)、持戒(sīla)、忍辱(kṣanti)、精進(virya)、禪定(dhyāna)、智慧(prajñā)の以上六種の德行のうち禪定をとりだし、これこそが人々をして悟りへと導くもっとも効果的な德行であると見做して、「禪波羅蜜」を中心に悟りへの方途を識き明かしたのが、「般若波羅蜜次第法門」であったわけである。だから「般若波羅蜜次第法門」という本書のタイトルこそ、行=実践を取にした悟りの実現など予想だにできるものではなく、行の徹底においてこそ悟りは現実性を帯びてくるという智顗の宗教的确信をいみじくも語っているのである。悟りを実践的性格を帯びたものと捉え、悟りの実現の過程の中で占める行のウエイトの大きさが強調されている。

II. 実践の体系とテトラ・レンマの論理

「止」とは、われわれをとりまく世界のもろもろの動きにどうわれ、引きずられて、心が散乱、動転する

のを防止するとともに、心を専ら一一所に集中させる禅定の行法であり、「観」とは、それを基礎に、われわれをとりまく世界のすがたを全体的にありのままの相において正しく直観し把握するレンマ、すなわち観である。

ここで注目すべきことは、次の表に示す如く「止」も「観」も共にテトラ・レンマの論理を本質とする。止と観によって、事修、理修、事理修、非事非理修が成立し、この四修の上に、事中禅定、理中禅定、事理禅定、非事非理禅定が成立する。そして、これら四種の禅定の上に、根本四禪から中道所授諸禪に至る15種の境地が出現するのである。



四種の禅定のうち、低次の禅定には低次の境地が対応し、高次の禅定には高次の境地が対応していることが注目される。然しながらこれらの諸境地は、いずれも世俗の相対性を離れた純粹性をその特質とするものである。このことは止と観がテトラ・レンマをその本質とすることに由るものである。これによって竜樹によつて確立されたテトラ・レンマが中国の天台禪においてもその根本原理となつてゐることが明瞭に知られる。

レンマの機能・構造に関する心理学的研究

—禅心理学的研究(239)—

鈴木順一
(駒沢大学文学部)

西欧のロゴスの論理の特色が、知的・言語的・抽象的・意識的であるのに対し、このような悟性的分別心を棄却・根絶したところに現われる具体的にして直観的な非言語的体験が禅の求める悟りであり、その体験の基底にある論理がレンマの論理である。

最も原初的な認識様式は直観的知覚である。言語的認識は進化するが、直観的知覚は遺伝的に組み込まれた認識機構であり、今も昔もそれほど変わらない。言語は、直接に知覚できる世界を抽象し、組織化し、構造化することによって理論を構成し、それによって直接に知覚できない世界の認識を可能にする。言語的認識は、人間の行動を拡大しより合目的的にするが、生物字的にいってより基礎的な認識機構である直観的知覚と切り離されて独走すると、かえって身体の有機的生命の働きを阻害することになる。

禅仏教は、知性よりも感性、知識よりも体験、分析よりも直観、言語的認識よりも非言語的認識を重視する。それは言語以前の生命の本質的機能を重視するからである。利己的欲求に基づく分別的思考を弄することは、かえって生命の本質的機能を損なうものであると考える。それ故、利己心に基づく知的分別・概念的思考を一掃しようとする。

禅が根源的真理と称するところのものは、世俗の差別的な分別を排除したところに現われる自然法爾の体験である。「心」「仏」「智」「道」「悟」「無」「空」などとさまざまに表現されるが、いずれも仮に与えられた名前にすぎない。名前を知ったからといって体験そのものが自覚されるわけではない。冷暖自知の体験的覺知に導くとして、あらゆる分別的思考の手がかりを奪い取る。

仮にAと名づけるならば「Aでない」と言ってこれを奪い、「Aでない」というとこれも一つの言語的表現であるから、「Aでないでない」と言ってこれを奪う。こうしてあらゆる言語的表現を奪い取って「今ここ」における体験過程をそのままに生きることを要求する。

悟性的分別を前提とするロゴスの論理は、「Aであ

るかAでないかのいずれかである」という排中律を守らねばならない。しかし、悟性的分別から解放されたレンマの論理は、排中律を逆転して「AでもなくAでないでもない」という容中律を容認する。このような「AでもなくAでないでもない」ことが容認される結果、「Aである」とこと、これと矛盾対立する「Aでない」とことが同時に成立することが可能となるのである。

「AであるかAでないか」とらわれ違うところに私たちの悩みは生まれる。そして分別的思考を働かせれば働くほど今ここで体験過程から遠く離れてしまう。悟性的分別が固着化すると、知覚や意識が狭まり今ここで全経験に気付きにくくなるからである。例えば「自分は駄目な人間だ」と分別すると、それにとらわれ「駄目でない自己」が見えなくなる。そこで一旦「駄目でなく、駄目でないでもない」本来の自己に立ち返り、即ちに流れている体験過程に気付いて、それを受容すれば自己一致がなされる。「駄目な自己」と「駄目でない自己」とが両立し、統合された眞実の自己となるのである。

「肯定でもなく否定でもないからして肯定でもあり否定でもある」という両否から両是への転換は、絶対主体の自由無礙な動き、一切の二元的制覇を断ち切った禅的動きを産み出す原理である。それは知的理理解に属するものではなく、実践的修行を通じて体験的に把握されるるものである。

禅修行上の一方法である公案は、知的分別をもってしてはいかんともしがたい矛盾の迷路に修行者を投げ込み、一切の分別意識を放棄させて絶対否定から絶対肯定への転換を体験させようとするものである。徳山禪師は、「言い得るも三十棒、言い得ざるも三十棒」と叫んで一棒を振る。真理のただ中に稽ひ込めし励ました。語默を自由に使い得る絶対主体に目覚めさせようとしたのである。

禅では、人間の知識活動以前、分別意識以前に、すでに生きるうえでの十全な機能が備わっていることに目覚めることが肝要なのである。悟りとは、これから悟るものではなく、すでに悟りのただ中にいることの自覚を得ることであり、知的分別によって根源的生命の動きを損なうことなく十全に發揮して主体的・創造的に生きることである。

128 保息に関する心理学的研究

—禅心理学的研究(240)—

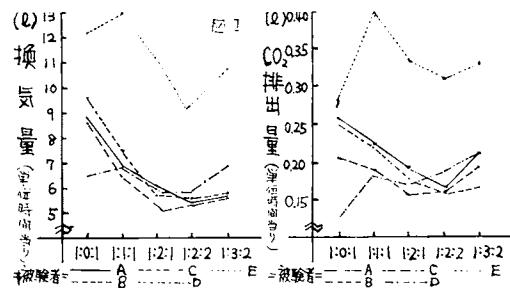
根本伊左夫

(駒沢大学・文学部)

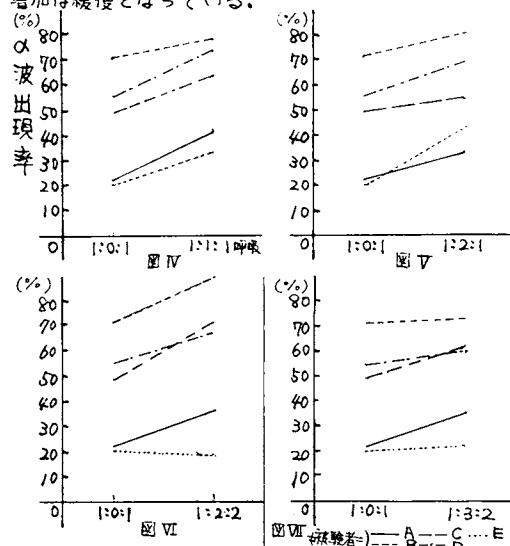
[目的]東洋古来の伝統的行法である、坐禅や、ヨークでは、その呼吸法が特色としてあげられる。保息はイキを胸中にためておくことで、クムバカと呼ばれ、ヨーク呼吸法の特長をなしている。呼吸は平生は、無意識に、連續して行なわれている。保息はその流れを中断する。呼吸を意識的に統御して、吸気と呼気とをはっきり分ける。かつ、その間に停止を置く。吸気と呼気と停止との3つの呼吸の相がはっきり区別される。(呼気、停止、吸気の長さの割合について、古來の伝承として、1:1:1, 1:2:2, 1:3:2等があげられている。この割合でその相の長さを次第に長くしていくのである。保息の方法は種々あるが本実験では、吸気、停止、呼気の順序で行い、この保息による心理生理的变化を明らかにすることを目的とする。

[方法](1) 実験期日、1978年7月。(2) 被験者、本学大学院生2名、本学、専門生3名の男子、計5名(いずれも坐禅の経験のある者を選んだ)。(3)手順、被験者にガスマスクを装着し、これをエレクトロメタボラーメ接続する。分時換気量、呼吸数、O₂消費量、CO₂排出量、呼吸商の五項目を測定する。尚、同時に、脳波を、表面電極により、単極誘導で脳波計に增幅記録し、アナライザーを用いて周波分析を行った。実験に先立ち、あらかじめ被験者各々の平常時の分時呼吸数を測定し、それをもとにいて、被験者1人1人について(吸気:保息:呼気)、1:0:1, 1:1:1, 1:2:1, 1:2:2, 1:3:2の指示、録音データを作成。各条件ごとに、5分づつ録音データに合わせた指示により、呼吸を行なわせ、測定をした。各条件の前には安静平常呼吸(指示なし)を行ない、実験は、安静平常呼吸、条件呼吸、安静平常呼吸、をもって1単位とし、各単位終了ごとに5分の休憩をはさんで、連続して行った。

[結果]δ波出現率(図Ⅳ～Ⅶ)をみてみると、ほぼすべての例において、保息を行うことによってδ波の出現率が増加することを示している。換気量は、図Ⅰに示したように、保息を行うことによって減少する傾向にある。1例をのぞいて、1:2:1で最も少なくなり、1:3:2でまた増加傾向を示す。CO₂排出量は



2例が保息なしで最も少なく、3例が、1:2:2の呼吸で最少値を示す(図Ⅱ)が、共通していることは、1:2:2の呼吸まで、1例をのぞき、減少ないしは横ばいの傾向にあったものが、1:3:2の呼吸でCO₂が増加に転じていている。O₂消費量は、1:2:1の呼吸で3例が最低値を示すが、1:2:2, 1:3:2の呼吸にしたがって、1例をのぞいて増加傾向を示す。このことをδ波出現率と比較してみると、CO₂排出量が減少しているとき、δ波出現率は急激に増加し、CO₂排出量が増加に転じるとき、δ波出現率(図Ⅳ)の増加は緩慢となっている。



[まとめ]坐禅時での波の出現が顕著になることはよく知られているが、保息を行うことによって特に呼吸条件1:1:1, 1:2:2のδ波出現率が増加することが示され、保息が、単に生理的変化にとどまらずCO₂排出量、O₂消費量と密接な関係をもって、脳内状況に変化を及ぼすことが明らかになった。

レンマ・セラピー（レンマ・カウンセリング）の原理 —禪心理学的研究(241)—

秋重 義治 (駒沢大学文学部)

今世纪の初め、フロイド、エング等によって創められた心理療法は、ボベット、クラーゲス、ヴィンスワング、フランクル等スイス、オーストリーの精神医学者、心理学者によって大きく変革された。

これらの変革が主に実存哲学の基盤の上になされたことは周知のことである。これらの実存哲学は、キルケゴーを引くまでもなく有神論的の思想の上に立つものである。これらの有神論的の思想の潮流と対照的なのが東洋における無神論的の思想の潮流である。現代の心理学者、医学者の中には、東洋思想を自分の専門領域の中に取り入れて新しい展開を図ろうとする傾向が顕著に見られる。以下D.H.シャビロによって編集された「Meditation and Psychotherapeutic Effects」は、こうした内容の研究を蒐集したものであるが、既に発表された文献数のみでも百を超えている。おそらくその数は、今後年々に増大していくであろう。

こうした研究の中には、禪仏教と関連したもののが少なくない。これらの研究を見て一様に感じられることは禪仏教に関する理解が深いことである。とりわけ体系的理解が欠如している。その原因の一半は禪仏教の側にあるであろう。

仏教は他力門と自力門とに分かれているが、前者がわが日本の親鸞によって究極のところまで展開されたことはよく知られている。これに反し、後者が同じく日本の道元によって究極まで高められていくことは余りよく知られていない。他力淨土門を基礎としたカウンセリングに関しては、既に『眞宗カウンセリング』等の著書があるが、自力聖道門を基礎としたものに関しては未だ絶た著者が出ていない。このことは禪仏教の体系的研究の遅れによるものであろう。

筆者は長年に亘る研究の結果、道元禪は脱落の論理によって一貫された体系を有するものであることを明らかにした。脱落の論理は大乗仏教の創始者竜樹の四諦(cattuh-kotica)に連るものである。竜樹は紀元2世紀頃排中律を逆転してこれを容認するテトラ・レンマの論理を始めて確立した。このレンマの論理は大乘仏教と共に中国に渡り、中国仏教の大成者天台智顕

(538~597)の諸著作において重要な原理となつてゐる。共同研究者: 松岡、黄はこの事実を明らかにした。智顕が重病の床に横わる実兄陳將軍に書き送ったとも伝えられる『天台小止観』の中には「治病患や九」の章があり、小止観の前本である『般若波羅密次第法門』十巻の中にはさらに詳細な治病の記述が現出されるが、それらの根本には非理非事のレンマの思想が据えられている。その後、禪宗が成立し、洞山良介(807~869)によつて徳正五位説が生まれた。ここでテトラ・レンマはペント・レンマに発展する。脱落の論理はこのペント・レンマに連るものである。

脱落の論理は五つの公理からなる公理系をなし、交換群および対稱群の性質を有し、その群の不変性に該当する公理(P七Q)は、肯定否定と共に否定することによって絶対肯定に転換し、ここに排中律を超えた而非即兩是が実現するのである。

筆者の研究によれば、道元の主著『永平広録』の五百回余の上堂の30%は大悟観に属するものであるがこれは主著『正法眼藏』における大悟観の比率12%の倍以上を占めるものであり、さらに大悟観の約50%は「迷悟不二」「善悪不二」説にかかるものである。ここには常識を越えた善悪觀が展開されている。この世界觀の転換ないし人格の転換は坐禪によつて初めて実現する。このように実践と論理とが連続融合して一体となつてゐることが脱落の論理を本質とする道元禪の特質である。

坐禪の三契機である調身調見調心のうち、調身はジャコブソンの漸進的弛緩療法その他に、調息はインド・中国に普及している呼吸療法に、調心は世界的に有名な森田療法等に連なるものであることは周知のことである。筆者はこのような調身調見調心の実践とレンマ・セラピーとを総合したものを持て禪療法と呼んでいる。

禪が參師聞法と坐禪とを鳥の両翼、車の両輪とするように、禪療法も參師聞法に対応するレンマ・セラピーと坐禪とを不可分離の二要素とするものである。両者のうちの何れを欠いても禪療法は成立しないのである。レンマ・セラピーは、フランクルのロゴセラピーに対応するものであるが、飽くまでも空を本質とする而非即兩是の脱落の論理を基本とするものである。道元禪の坐禪は從来知られている坐禪と異なり、脱落の論理を基本とするものであるが故に、禪療法は理論と実践も、換言すればレンマ・セラピーも坐禪も一貫して而非即兩是を本質とする脱落の論理によって貫かれた整然とした体系を有するものである。

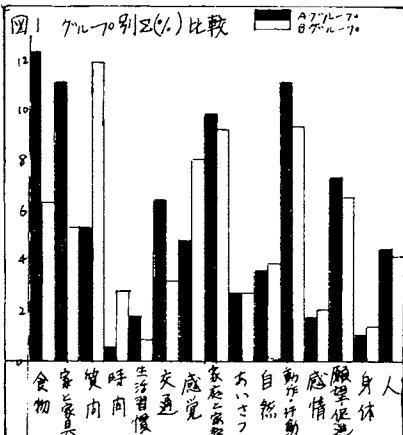
Ⅹ 遅滞児の言語指導の試み

○田村京子 岐阜県 関根静江 飯島登子
神原くみ子 亀田紀子 (情報発達研究所)

I 研究の目的 東京、渋谷にある本院の研究所には、35名の保育児の中に数名の遅滞児があり、その遅滞児に対して言語指導を試みている。言語指導するにあたって(1)遅滞児はひれだけの語りをもつてゐるが、(2)そのうちわけ、即ち語りの種類は何か。(3)それらの語りは、いかなる場面で習得されたかをみるとために語りの数と同時にその関係場面を検討したいと考えた。(4)又同時に同年令の正常児の同一語りをとりあげ比較してみたいと考えた。

II 研究の方法 対象児童は2~5才の遅滞児6名で、殆んど知能検査が不可能で言葉も不明瞭な単語がしゃべれるが命令形的な語文又は二語文がしゃべれる程度である。子供がしゃべった言葉は親が家庭で10日間録音したものと、言語指導の記録による。観察期間は52年12月~53年7月とし記録は新しい語りを示すものではなく、子供がしゃべった語数(%)である。

III 項目別考察 図1の言語数についてみると、遅滞児

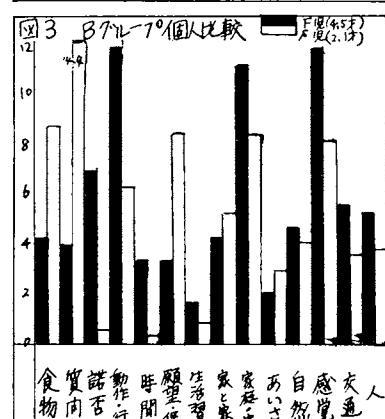
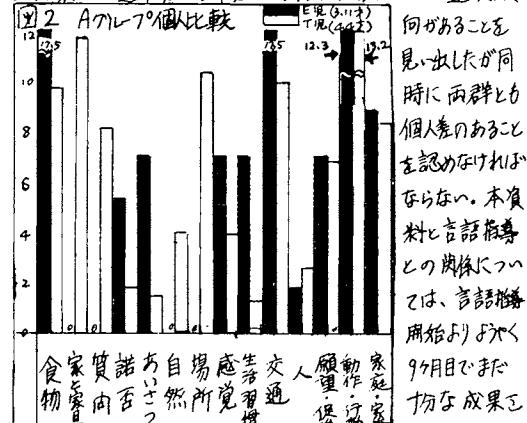


遅滞児の言語出現率をみると、それは彼らの生活の必要性の程度を反映しているようである。これに対して正常児の場合、1位質問語(約遅滞児の倍)、即ち質問的要素が多く2位動作・行動、3位家庭と家族、4位感覚、5位願望・促進(自分の希望を促進させるために使う語)。これら人間にいつの語、表は両グループとも殆んど同様。家庭と家族、感情、あいさつ、願望・促進、自然も同様である。時間と場所は、子供のリエンテーションの把握上示す言葉として、重要な意味をもつてゐるものと考えられる。この2項目は、遅滞児にも出現しているが、正常児と比べて両者とも出現率が低い。ことに時間の方が遅く時間的構造は、正常児にも空間的構造よりもむしろ遅滞児においては一層低い。これによると遅滞児の言葉が場面の必要性に所産であるのに対し、正常児の言葉は、現状に対しても

積極的な探索的行動を反映しているようでこの言語表現の差が正常児と遅滞児の発達を示すものではないかと思う。

IV 個人別考察 図2によると、両群とも出現率についてはかなりの個人差があるようである。即ち遅滞群において特に目立つのはE児(3歳11ヶ月)は質問的言語において著しく多く発言している。対して下見(4才半)は場所・家具・質問語についての出現率が多い。この下見は他の児童と比べて正常群の出現率をみるとが如來、生活面からの成長も認められる。又正常群では、食物・質問・動作・行動・諾否・願望・促進などにつれてかなりの個人差が見られる。

V 結果 遅滞児と正常児には言語表現数において遅れた傾向があることを見出しが同時に両群とも個人差のあることを認めなければならぬ。本資料に言語指導との関係については、言語指導開始よりおよそ9ヶ月でまだ十分な成果をあげているわけではないが



遅滞児の語り習得が専ら自分の具体的な環境的関係であること。(3)そして、その環境的関係は、子供の必要に密着していること。これは正常児の語りが環境との密着度が遅滞児に比べて少ないこと。即ち発達的に密着度が減少していることが明らかになつた。本院はこれをよりこうとして改善を示している。もし子供の感情的安定を保ち、興味を誘発する心の必要があるが、問題は子供一人一人にとって最も关心が必要のある場面を設定することである。これはかなりむずかしい問題である。いずれ今後さらに報告を試みたい。

X保育中における行動の変容について

○関根静江 呂玉省 飯島澄子 田村京子
神原くみ子 龍田紀子 (○清創発達研究所)

I. 研究の目的

本研究所では開設以来幼児が保育中ににおいて示す行動を全員毎日記録しており、今年保育学会に於いてその結果について発表したが、本発表はその第二報である。幼児の行動は社会性感情運動能力・言語活動など多岐に亘っているが、本発表はその中で特に社会性と感情をとりあげる。保育児童は35名、開設以来2年間在園する者、今年4月入園した2才児及び中間的なものなど各10名を抽出して検討を加えた。

II. 社会性と情緒の角度

保育で観察した行動を表のように分類した。社会性を自律性以下15項目。自律性は自発性自己主張等を包含し、協調性は求められて協調あるのと、自分から進んで協力するのを包含し、服従はいいつけられたものへの服従。友情は特定の子供に対する好意的表現と行動。拒否は求められたものへの拒否。わがままは拒否を含まない。社交性は協調的意味も、指導的、または依存的意味のない単に社交的なもの。乱暴は必ずしもけんかと同じではない。忍耐は対人的なものだけとする。情緒は愛情以下5項目。愛情は特にそれらしい表現と行動とした。項目は他のにも立てて見たが結局現在のところ、この辺りで適当な様に思われた。

III. 観察された社会性と情緒

— 各年令グループの示した社会性と情緒 —

	2才児		3才児		4才児	
	1~3月	5~7月	1~3月	5~7月	1~3月	5~7月
社会性	5.75	4.75	3.0	4.67	2.33	1.5
	1.25	1.5	3.33	4.33	3.33	4.5
	0.75	2.5	4.67	5.33	5.33	3.0
	1.0	1.0	2.0	4.33	3.67	1.5
	6.75	9.5	10.33	7.67	14.33	12.0
	1.25	1.5	0.67	1.0	1.33	2.5
		2.25	3.33	7.67	7.0	4.0
	4.0	4.0	4.33	2.0	2.33	3.0
	1.5	1.75	1.33	2.67	3.33	2.0
	2.75	2.75	2.33	2.33	4.0	4.5
情 緒	1.75	2.75	1.34	3.0	2.0	2.0
	0.5	2.5		1.67	4.33	
	1.25	2.5	4.67	7.0	6.33	1.0
	2.50	2.0	1.0	2.67		
	0.75	0.25	0.33	0.33	1.33	
	1.25	1.5	1.0	5.0	2.0	
	0.75	1.75	1.0	0.67	1.67	
	6.75	7.0	11.33	9.33	5.0	3.5
	1.25	1.25	1.0	1.33	2.0	
	6.25	4.5	9.0	5.0	2.33	2.0

表は2才・3才・4才児各10名の観察された行動である。

観察という制約はあるが、一応この数字に従って問題点を指摘して考察を加える。各グループとも年令の差はあるが何れも入園1ヶ月～3ヶ月・5ヶ月～7ヶ月の資料を整理したものである。

(一) 第一の課題は高年令グループの者は入園後の期間が同一の場合には低年令グループの者と比較して社会性において高度の発達を示すかどうか。(1)協調性についてはこの点が推定せられるが拒否やわがまま等も増大しているのが目につく。もしこの通りなら、拒否やわがままの増大は社会性の発達における自我の発達の現われとして、運命的な展開かも知れない。誇示についても同様である。(2)模倣性は年令的に減少する。(3)指導性は増大する。但し、3才グループと4才グループの間では差がない。

(4)依存甘えについては年令的特徴はない。(5)ふざけるいじわるは不明であるが4才児になって増えろようである。(6)けんかは3才グループから急増する。(7)対人的忍耐は不明。(8)自律性については資料のとり方に問題があり、その動きの傾向を把握することができなかった。

(二) 情緒についての数字はどれだけの規則性を示すかどうか。情緒は果して一定の発達的規則性があるかどうか。多少大きい子供の場合においては、このことがあるかも知れないが、低年令においてはどうであるかを主な課題として検討した。

(1)愛情は成長とともに増大するようにも見えるが必ずしもはっきりしない。(2)怒りについても同様である。(3)恐れは増大あるかも知れない。(4)逆に喜びば2・3才児が最大で4才児では減少している。

(5)泣く・かなしみは2・3才児が極めて多く、4才児では減っている。

IV. 考察

本研究は次演者の報告の研究とともに私たちの研究所で2才負から5才頃までの幼児の社会性の発達・情緒の発達を追求して、この発達と規則性が見られるかどうか、あるとすればいかなるものであろうかを検討して幼児の性格検査作製を企図しているものである。

次演者が述べるであろうが先ず行動の枠組を提供しておいて、それに記入を求める方法と、現場的に行動観察による調査との間にかかるなりのズレがある。どちらも正しいと思うが同時にどちらにも欠点がある。現場的観察法の欠点は行動を現場で見ているが故に、その言葉を決定しにくいくことであるがこれお局時に行動の背景を充分に取り入れている点がプラスである。また枠組式評価には現実性のない項目が登場していることが明らかである。

X 幼児の社会性の発達の研究(1)

○飯島澄子 児玉省 関根静江 田村京子
神原くみ子 鎌田紀子 (情動発達研究所)

I. 研究の目的

研究者の1人児玉は先年保育学会の共同研究の1つとして幼児の社会性の発達を取り上げてその研究結果を発表したが、今次の研究は更に低年令の幼児期の子供の社会性の発達を追求しようとしたものである。子供にとって社会性の1つの面は友達の獲得又は嫌いな友達を嫌いにするような行動を包含すると考えるべきで、こういう角度から見ると前幼児期における社会性の表現は次のような形をとると考えられるし、又少くともそういう表現を通して把握できると思われる。それは

(1)他の大人又は子供との接觸の種類や頻度を求めるという方法をとることである。

(2)この方法による接觸は、特に、対大人又は友人間で表現する場合においては、特定の形をとる。例えばそれらの大人及び子供との間に、感情的又は利用的関係が展開する。

(3)子供対大人又は子供対子供の間に、特別の称呼又は言語的表現が用いられる。これらの特徴は、子供の友人の社会性を把握する上での目標である。

私達は2歳以上の幼児を取り上げ、その社会性の発達を追求したいと考え、この研究のためにハーバード大学の人間発達研究所で使用した調査票を参考した。勿論、この案が本陣の計画を充分に満足させるかどうかは未定であるが、従来なかった角度を網羅しているという事は言える。従来の社会性の発達の研究の角度は、大人の目を見たり笑ったりなどのような乳児期的な社会性を検討しようとしているほかは、Catherine BridgesやSusan Isaacsなどのように3キ児以上のところは考えられているが、乳児期と3~4キ児以上との社会性の連続が充分に取り上げられていない。即ち表面上は2キ児用も考えられているが、実際の項目を見ると2~3キ児あたりの項目が不充分である。そこで私達は、2キ児あたりからスタートして、児玉がかつて別に行った社会性の研究である3~4~5キ又は4~5キの幼児とのつながりを試みて、幼児期の社会性について、全面的な発達を検討するつもりである。

II. 調査項目の内容

私達が取り上げた調査項目は大きく2つの角度から成っている。1つは対大人もう1つは友達同志の関係である。先ず、対大人の社会性の角度には、次のように

なものがある。即ち、幼児の大人との接觸に関する項目が11種類32項目あり、その内容は

(1)大人の注意をひく 7項目—大人のそばに立つ、声をかける、何かを見せる等の積極的なもの、ほざく、振舞う、いたずらをする等の消極的なもの。

(2)大人を利用する 6項目—大人に説明や情報を求める、子供同志の喧嘩で大人のさばきを求める、衣服の着脱道具の使い方、食事等で大人に手伝ってもらう、及び感情的依存として大人に慰めてもらう等

(3)大人を支配する 2項目—一緒に来て！等積極的なもの、だめ！あっちへ行って！等消極的なもの。

(4)大人に対して従順 1項目

(5)大人に抵抗する 3項目—言語的、身体的及び反対はしないが守らないといった無視

(6)大人に愛情を示す 2項目—言語的、身体的

(7)大人に敵意を示す 2項目—言語的、身体的

(8)大人を模倣する 2項目—大人の言動の模倣

(9)自分の自慢をする 2項目—作品、行動の自慢

(10)大人の役割をまねる 3項目—着物の着方、役割の模倣、及び大きくなりたいという希望の表現等

(11)子供らしさを示す 2項目

となっている。

一方、子供同志の関係を規定するに当たっては、大体、大人の場合と似たようなものが、9種類28項目あり、それは、次の通りである。

(1)友達の注意をひく 6項目—友達に近づく、呼びかける、接觸をはじめる等

(2)友達を利用する 4項目—友達に情報を求める、喧嘩で友達にさばきを求める、着物や道具道具のこと、友達に手伝ってもらう等

(3)友達の活動を指導する 3項目—積極的な指導及び牛耳ろうとする、模倣のお手本になる等

(4)友達の指導に従う 2項目

(5)友達に抵抗する 1項目

(6)友達の模倣をする 1項目

(7)友達に愛情を示す 4項目—笑う、親しい口をきく等、言語的なもの、身体的なもの、手伝いを申し出る又は一緒にする等

(8)友達に敵意を示す 5項目—言語的、及び身体的、そのうち身体的なものの中には、ぶつつかむ、つばを吐く、友達の活動を邪魔する、物と一緒に使ったり、何かと一緒にすることを拒否する、身体的愛情の拒否等

(9)友達同志で競争する 2項目—大人の注意をひくことでの競争、持ちものや場所での競争等

となっている。

—次頁につづく—

Ⅺ 幼児の社会性の発達の研究(2)

○神原くみ子 児玉省 関根静江 飯島登子
田村京子 亀田紀子 (情動発達研究所)

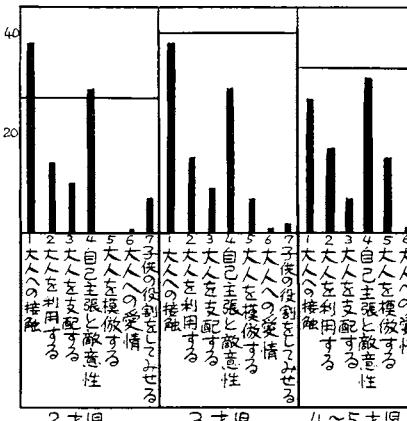
Ⅲ 研究の経過

研究の目的については前演者が述べたとおりであつて、本研究のねらいを御理解頂いたと思うが、私は研究の第一年度の結果について報告する。

対象は、私達の所属するメゾン・ド・クールの園児。本園には約35名の園児があり、2才児(多くは2才半)3才児4才児5才児と在園するが、この園児に対して前演者の説明した社会性の角度をアンケートとして全部の母親に記入してもらい、また保育者の手で観察したところから記入を行つた。対象児は、2年以上在園する者、1年間園児並びに今年4月入園した者の中から、よく観察のできた者2才児6名、3才児10名、4～5才児5名を選んで検討した。

資料の分析は、表に示されているようにアンケート項目対大人11種類32項目、対子供9種類28項目を、さらに対大人7項目、対子供5項目に新分類した。また保育中の記録と母親記入とを別々に整理した。整理の方法については、新分類に従つて対大人7項目、対子供5項目にまとめたものを年令群ごとに社会性の出現率をとつたのと、個人別考察を加える方法をとつたのがあるが、本発表ではまず出現率をとつた表に基いて考察する。(1)大人への接觸というのは、表に示されているように単に接觸を目的としたものだけを取り上げたものであるが、こういう極めて簡単な接觸だけを目的としたものは、対大人の場合も対子供の場合も2才3才間に殆んど差がなくつて、4～5才になつて減少する。(2)大人の利用度は逆に4～5才で増す。友達の

大人との接觸の項目



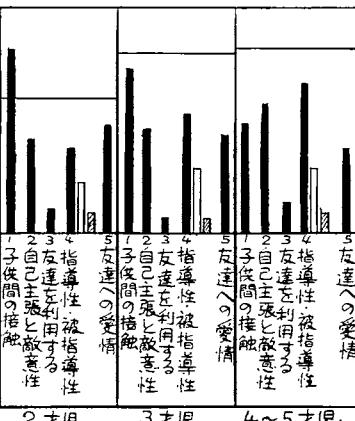
利用度については、今次の資料では年令的な差が見られない。(3)自己主張と敵意性を一緒にしたのは、傾向的に一致するところがあるからである。(4)内容的には必ずしもどうぞはないが、これは対大人の方が子供同志の間より大きである。そして対子供の場合には年令的に増大する。(4)大人への模倣度は年令的に増大する。子供間の模倣についてはこの資料からではよく分からぬ。また被指導性と模倣性の間にある共通性があるので、この両者をひとつにして計算したものは表中※印のついたものであるが2才から3～5才へと増大する。(5)子供の愛情の表現は大人に対するよりも子供間の方が大きい。

Ⅳ 考察

本研究が前幼児期と幼児中後期を結ぶ橋渡し的な役目を果たす社会性の把握と、子供の行動を抽象的に考えないで具体的な場面に結びつけて把握することを目的のひとつとしていることは前述のとおりである。前演者の取り上げた社会性の表現と比較してみると、興味が多い。(1)自己主張と敵意性は、攻撃性、拒否などを含んでいるわけであるが、ハーヴィード式の調査によるヒ保育現場での観察ではそれほど多いものではない。現場的にはそれほどの比重ではない。(2)「大人を利用する」は年令的に増大し「依存・甘え」に相当するが、これは現場的には塗料とは一致しない。現場的には年令とともに増えとはしない。(3)友達への指導性は年令的に増大するが、これは現場的には2才児に比べて3～4才と増大するとの一致する。(4)友情は、本調査ではかなり多いが、現場的にはそれほどではない。

かようにしてみると、ハーヴィード式の調査では項目的にはよく整っているが、その出現を捉える上に於て、現場的は観察と一致しにくいようである。もしハーヴィード式を用いるならば、出題の頻度を厳重にチェックする

子供間の接觸の項目



ことと、現場的な角度を参考する必要があると思う。例えば

ハーヴィード式で接觸というの
は社交性とはちがう。
しかし社交性はかな
り表現されるよう
である。ただハーヴィード大
人の接觸などが細
かく行つている点..
従来の社会性把握に
はなかつたものであ
る。

—以上

保育者養成に関する研究(1)
保育者の理想像に関する実態調査を中心として
○森山 広樹 大村 政男
(大宮保育専門学校) (日本大学)
鎌形 みや子 大野 誠 手島 広樹
(日本経営協会) (大宮保育専門学校)

1 目的

幼児の教育に保育者のはたす役割は大きい。保育環境の充実整備は、もとより大切であるが、保育者の質の良し悪しによって、幼児教育の内容は左右される。したがって、良質の保育者をどのようにしたら養成できるか、が大きな問題となっている。その養成の方法論は、もとより多様であり得るだろう。

左とえば、現行カリキュラムの再検討、養成年限の問題、保育者としての資質の探求、あるいは、基礎的な教養や取得すべき保育技術、というように、細かく数えあげればきりがない。

しかし、なかでもどういう方向にむけて学生を教育するのか、という問題は、とりわけ大きな比重を占めると言えるだろう。その方向の行き先には、理想的な保育者像とどもいべきものが設定されている筈であるが、ではそういうあるべき保育者像とは、いったいどのようなものなのか。その像をわざわざながら立て定立させてみたい、というのがわれわれの目的である。

そのための一歩として、本稿では、まず保育者をめざす学生たち自身が、どういう理想的な保育者像を思い描いていのか、そしてそれは、その学生の性格特徴とどう関連しているのか、という問題を実態調査をもとにして明らかにしてみたい。

2 方法

- (1)調査期日 昭和53年7月。
- (2)被験者 大宮保育専門学校在学の1,2年生361名。
- (3)Y-G性格検査を使用した。

(4)保育態度の測定として、自分がもし現在保育者であるとしたら、どういう態度で幼児に接するかをリーガーシップの理論にヒントを得て、質問項目を作成し実施した。態度の尺度として、以下二つを用いた。

X=教育指向：幼児のしつけや道徳観の教育、学習法、善悪の判断など。(目的達成機能)

Y=維持指向：幼児とのつながり維持、対人関係や情緒的安定のコントロール等(集団維持機能)

3 結果

- (1)学生の理想とする保育者像は、XY型が第一位である。(42.9%)
- (2)最も理想から遠いのは、Y型である。(13.8%)
- (3)A.B.D.EタイプはXY型を理想とするが、Cタイプのエイジ型を選んでいる。
- (4)最も理想から遠い型は、A.C.のタイプはY型、B.EタイプはXY型と考えている。
- (5)XY型指向が最もも多いのは、Dタイプである。X型指向が最も多いのは、Eタイプである。エイジ型指向が最も多いのは、Aタイプである。エタ型指向が最も多いのは、Cタイプである。

4 考察及び結論

- (1)XY型は幼児に対する働きかけが強く、積極的行動的であると同時に、一方的に指導するだけではなく、幼児との心のつながりを重視し、幼児の気持ちもくみ取っていく、というタイプである。したがって、教育指向と維持指向のバランスのとれた保育者を理想像として考えると、この傾向がみられる。
- (2)Y型は、目的達成のために強い指導力によって幼児を引張っていくタイプであるが、この型が理想像から最も遠いと考えられた。幼児集団に対する教育者の態度としては、過度の教育指向は望ましくない、と考える学生が多い。
- (3)性格特徴との関連では
- (4)XY型は両機能とも高く、名性粘着ともXY型指向が最も高いが、なかでもD.B両タイプの学生が顕著である。
- (5)XY型は情緒的つながりよりも目的達成を重視している型で、Eタイプの学生が多い。
- (6)XY型は集団維持に重点を置く型で、情緒的に安定しているA.C両タイプの学生が多い。
- (7)Y型は両機能とも低くかなり消極的である。内向的なCタイプの学生に顕著で中庸なAタイプがこれに次いでいる。

以上

	XY	X-Y	Z-Y	Z-X	計
A	35(38.4)	8(8.8)	19(20.8)	29(31.8)	91人(100%)
B	63(46.3)	22(16.1)	18(13.2)	33(24.2)	136人(100%)
C	6(30.0)	2(10.0)	4(20.0)	8(40.0)	20人(100%)
D	32(47.7)	9(13.4)	11(16.4)	15(22.3)	67人(100%)
E	19(40.4)	9(19.1)	8(17.0)	11(23.4)	47人(100%)
計	155(42.9)	50(13.8)	60(16.6)	96(26.5)	361人(100%)

保育者養成に関する研究(2)
 保育者の理想像に関する実態調査を中心として
 ○鎌形みや子 大村政男
 (日本経営協会) (日本大学)
 大野誠 森山茂樹 手島茂樹
 (大宮保育専門学校)

〈目的〉 本研究は、保育者の理想像の一部として、どのような性格が理想と思われているのか、現在の自分の性格とどのような関係があるか、という点について、保育者になろうとするまだ現場を知らない学生の理想をどうえようとするものである。

〈方法〉 対象：保育専門学校女学生 372名

性格検査：Y-G 性格検査

検査日：昭和53年7月

手続：現在の自分の性格の測定にあたり、検査者が質問を読みあげ、従来の回答法に従って三件法で答えさせた。次に「理想的だと思う人はどのような性格ですか」という質問型式で Y-G の質問を再び読みあげ、「非常に望ましい・やや望ましい・どちらでもない・やや望ましくない・非常に望ましくない」という5段階評定で記入させた。

〈結果・考察〉 現在の性格分類は以下の通りである。

A類	B類	C類
A A' A''	B B' AB	C C' AC
15 25 54	46 65 29	4 6 11
D類	E類	合計
D D' AD	E E' AE	16 28 25 17 22 9 372

理想の性格について「非常に・やや望ましい」を従来のYESとして、「非常に・やや望ましくない」をNOとして採点判定した結果を現在の性格類型別に集計したものを下に示す。97%がD類(D型:228名 D型:129名 AD型:4名)

現在	理想	人数
A-D	92	
B-D	136	
C-D	20	
D-D	66	
E-D	47	
その他	11	
計	372	

である。この結果は一般に言われている情緒的安定・社会適応大・指導性大・社交性大積極的という特徴を示持する結果であり、望ましい〇〇像に共通な結果、タメ工的な結果と思われる。しかし、ここで「やや望ましい・やや望ましくない」という回答の意味を考えてみたい。理想的性格について、「非常に」と言いきれない何か、理想という点からみて、さほど重要ではないと思う何かがあることから、「やや」という回答が出てくるのではないかろうか。そこで「やや」回答を「どちらでもない」の範囲に含めて採点集計したものを理想②に示す。傾向をつかむため、現在の性格の純型のみを集計したものである。尺度の性質上、中心化傾向はやむをえないが、現在持つ性格のちがいによって、理想と思われる程度が、それぞれ異なっていることがわかる。現D型は最も理想①の型に近く、現B型は最も右寄り等、どの現性格群も、持っている性格に近い方向に傾いていることがわかる。このことから、自分の性格を認め、より自分に近い性格を理想と考えているということがいえるのではないか。

以上。

尺度	理想① X SD	理想② A型	B型	C型	D型	E型	全体	
D	2.44 2.20	5.87 2.30	7.09 →	3.92	6.25 1.48	5.63 ←	2.70 7.00 → 2.43	6.61 3.28
C	2.72 2.88	5.67 2.81	6.74 2.36	5.75 0.43	5.75 2.88	6.76 2.09	6.38 2.48	
I	1.63 2.35	5.47 2.75	5.87 2.97	5.00 ←	5.74 2.73	6.71 → 2.31	5.83 2.93	
N	2.68 2.77	6.27 2.26	6.35 2.71	7.25 → 1.09	5.75 2.61	6.82 2.34	6.92 2.54	
O	5.54 2.79	7.53 1.83	7.93 2.41	7.75 1.79	7.44 1.99	8.23 1.92	7.84 2.15	
Co	4.20 2.80	6.27 2.10	7.59 → 1.67	5.75 ← 1.09	7.19 1.66	7.76 → 1.91	7.28 1.85	
Ag	9.84 2.81	9.53 1.12	10.63 1.58	9.75 1.48	9.31 0.87	10.06 1.47	10.11 1.51	
G	18.42 3.12	16.07 2.05	16.80 2.27	17.50 → 1.12	16.94 1.54	15.00 ← 1.61	16.43 2.24	
R	9.58 2.96	9.27 1.86	10.13 1.61	9.50 1.80	10.19 1.27	9.00 1.50	9.79 1.64	
T	9.66 2.80	9.80 1.42	9.33 1.85	11.00 → 1.41	10.50 1.54	9.71 1.50	9.72 1.77	
A	19.94 2.38	14.93 2.32	15.15 2.41	13.75 3.27	15.31 1.85	15.18 2.33	15.09 2.37	
S	18.62 1.79	15.53 2.82	16.39 2.34	15.00 1.87	16.63 1.92	15.06 2.50	16.01 2.45	
N	361人	15	46	4	16	17	98人	

保育者養成に関する研究(3)

養成校の環境ならびに

入学動機の実態調査を中心として

- 手島 茂樹 大村 政男
(大宮保育専門学校) (日本大学)
大野 誠 森山 茂樹 鈴形 みや子
(大宮保育専門学校) (日本経営協会)

〈目的〉 本研究は、保育者養成に関する研究の一環として、養成校の環境ならびに入学動機を取り上げる。その特徴を明らかにするため、他の学校(栄養士・調理師専門学校)との比較を行なう。

〈方法〉 対象: 保育専門学校女学生 283名
栄養士・調理師専門学校女学生 72名

入学動機調査: 平井信義(1976)らによる母性愛の研究を基に試作。22項目よりなる。

環境調査: G.G.Stern(1970)を基に試作。
a.教師のアドバイスとしてのアレス面, b.学校の規則・風土・行事等としてのアレス面, c.周りにいる生徒特性としてのアレス面、の三領域よりなる39項目。回答は5点法による。

調査日: 昭和53年7月

〈結果・考察〉 入学動機 保育と他の学校との比較で、項目間に差のあるもの(で検定)は、以下の通りである。△△△は5%の有意差を、※※は1%のそれを示す。また%は全体の占める割合であり、最初のが保育を表わし 後ののが他の学校の結果である。

○子供への関心に觸するもの	○自分のハーソナリティに觸するもの
・子供といふと楽しいのが 樂しい 66.3% 35.2%	・心が暖かい 暖かい 67.2 60.8
・子供好きか とても好き 66.6% 55.2%	
・子供への関心は かなり 61.3 42.2	○自分の育てられた方に どう育てられたか 保育 幸運的 30.4 他 廉辱的 44.9
○持論像に觸するもの	・おとうとう思ひう 思ひうとう思ひうといつありめた 他 おもひだ 40.3
・子供を扱う仕事か Yes 74.7 2.8	○最終的に保育者になろう決めて 時期 高二 30.5
・結婚後子供が欲しいが 早く欲しい 49.5 38.0	決めた理由 一生を仕事でつぶさうで 41.7 子供が好きで 44
○母親への意識に觸するもの	
・母が理想像か 理想像のところと違うない ところある 66.5 55.3	

これにより保育に進む者は、他の人達よりも自分を中心の暖かい人と思えており、子供好きという傾向がみられた。このことは、結婚後すぐの子供が欲しいという気持ちともつながっていることがわかった。しかし母親に対してはまじめの見方をしており、お母さんをそのまま自分の理想像とはせず、受け入れたいところとそうでないところがあるとしている。これは

彼らが 保育科という道を選んだ意図の高さから、母親に対して要求水準が高いためではないかと推定される。また興味深いのは、家庭における彼らの育てられ方である。他の学校では子のに対し 保育は千歩ずき並びに甘やかして半数以上を占める。これはいかな子ことを意味するのであろうか。しかもこの育て方にかなりの抵抗をもつている。

次に差のない項目をみてみると、意外なのは過去における子供とのふれあいに関するところである。我々の仮説ではこれが保育への道の大きな要因となることを考えていたが、本調査によればそれはみられなかつた。また経験についてや もあることの意義についても差がみられなかつたが、これらは女性であれはたれても同じ意識といふからである。

環境 下表は、保育と他の学校との項目間の差(大検定)を求めた結果である。△△△は5%の※※は1%の有意差を示す。〈の印は 保育が項目内容のどちらに多くあるかを示している。a・b・cは〈方法〉に対する。

項目 内 容	a	b	c
1 届屈的態度 → 自主的態度	<△△△		
2 アナ-ゲーメント	>*	<*	
3 個性的態度 → 分析的態度	<△△△		
4 度好的態度	>*		△△△
5 理解的態度 → 非難回避的態度	<△△△	<△△△	
6 变動 → 恒常性		<△△△	
7 結合的態度 → 分離的態度	<△△△	<△△△	
8 反作用的態度			
9 快適的態度 → 不快的態度			<△△△
10 主觀的態度 → 客觀的態度	<*	<△△△	<△△△
11 エゴ・アナ-ゲント			
12 情緒性 → 平静	>△△△	>△△△	
13 挑戦性 → 慎重性	>△△△		
14 開拓的態度 → 気氛・くれ	>*		<△△△
15 希望的アケートメント			
16 個室回避的態度 → 高度的態度		<*	
17 人文社会心理学		>△△△	
18 術的的態度 → 漢字的態度	>△△△	>△△△	
19 ナリシス-ム			
20 理想的態度	>△△△	>△△△	
21 愛親的態度 → 投影的態度	>△△△		<*
22 楽序的態度 → 黒秩序	>△△△	<△△△	
23 フォレイ → ワーク	<△△△		
24 実用主義 → 藩室用主義	>△△△	>△△△	
25 思慮深さ	<△△△		<△△△
26 知識		<△△△	<△△△
27 官能的態度 → 結合的態度		<△△△	
28 やさしさ → 濃厚的態度		>△△△	
29 喜劇的態度 → 自主的態度	<△△△		>*
30 知的態度		<△△△	
31 芸術・芸能	>△△△	>△△△	
32 体育・スポーツ	>△△△	>*	<△△△

環境を三つの角度からとらえたが、ここより教師アレスは、保育で必要な精神面と、ハーソナリティ形成に関するものを、また、学校の規則・行事については、情緒性・主体性・活動性をはせざるように、さらに周りにいる学生は 気の合うどうしてアフレーフをつくり和をもつていようが、特徴としてとらえられた。

以上

統合保育に関する研究

—集団間関係・選定領域形成の諸技法—

中山和子
(お茶の水女子大学)

I. はじめに

私たちの生活においては、さまざまな集団活動が展開している。それらの多くは集団粹が、たとえば年齢、身体の特色(「障害」と呼ばれたりする)などによって固定的に設定され、集団成員が規定されている。このような状況では、ある集団から他集団への境界(領域)はどちらの集団においても明確に成立して集団間の移動が困難であり、共通接在領域の成立が阻まれ、他が他を累積なものと捉え、しばしば差別や偏見が成立する。人間発達の基盤が形成される時期には、どのような子どもの集団が用意されることが望ましいだろうか。教育の形態を類型化し、望ましい教育集団のあり方を考える。ここでは関係学の立場から特に人間の集いの形態に焦点を当て、集団活動展開の可能性を拡大し、個人的、社会的偏見、人種・性別などに関する差別をなくしていくとするものである。

II. 9つの類型

- 1) 対応法
- 2) 交流法
- 3) 障壁除去法
- 4) 集団間関係形成法
- 5) 選定領域形成法
- 6) 共通活動領域軌道化法
- 7) 包括領域形成法
- 8) 繼続・連繋法
- 9) 重心移動・転開法

III. 4) 集団間関係成立による統合

人間が複数で存在する場合、個の興味、関係領域の範囲、友人関係などによって自然発生的な小集団ができる。それぞれの集団を尊重しながら小集団活動を育て、そこに成立する集団の規定性を超えて他の集団との交差、共通領域を成立させ集団間の関係を新たに形成し、人間の集団として関心・偏見を超えた活動を創り出そうとする。この統合構造化領域の成立過程は接在共存状況顕在化の過程である。実践例としては児童集団研究会における保育があげられる。自己一人一物

のかかわりのなかで子どもは自己の関心領域で遊び始め、いくつかの小集団活動が展開する。保育者はそれらの小集団活動が互いに交流し、接在共存領域が形成されるよう、たとえば役割付与、物の投入、新しい状況の設定などしてそれぞれの小集団の遊びがより発展するかたちでの交叉状況の成立を図る。

5) 選定領域形成法による統合

いくつかの集団活動があるとき、もうひとつ別の活動を用意し、どの集団からも参加可能な活動を展開する。集団の境界は残されたままで、母集団から見れば分節化した小集団活動が展開し、この選定された領域で双方の成員が出会う。これは集団の境界線を迂回し、その中間領域に新しい別の活動領域を設定し、双方の集団からあらゆる人たちが参加し、そこでの共通活動体験をもちかえることで、既存モードに成立していた選別・差別・偏見が打破されて母集団も再構造化される。ここで留意すべき点は、選定領域への参加が選別にならないようすることである。参加資格が能力重点になると選別になる可能性がある。個人の関心が生かされての参加であることが時に幼児の場合には必要である。技法としては、境界領域迂回、新領域設定による統合である。この統合領域としての機能が積極的にはたらかねばならないならば、international school、市民講座、各種学校、教室なども人種・文化・年齢・性・能力などを超えた統合活動の展開が期待される。私が見聞した例では、アメリカ合衆国ジョージア州における統一教会の運動もこの観点からとらえられる。白人だけの教会、黒人だけの教会といった隔離のある中で、混合の統一教会をつくる運動は居住区も分かれているような状況において、果たすだろ役割は大きい。

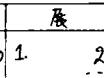
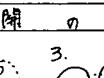
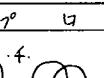
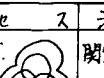
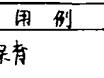
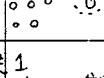
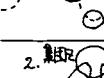
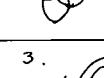
IV.

関係学の立場からいと、初めから統合保育・総合教育であって、保育は接在共存状況の成立する保育でなければならぬ。

*お茶の水女子大学児童臨床研究室で展開されている。

参考文献：日本保育学会第31回研究論文集 抽稿

「統合保育に関する研究・9つの類型による考察」

統合法	中間領域	技法	展開のプロセス	活用例
4) 集団間関係形成法	中間領域における関係の成立(障壁としての境界は存在しない)	集団間関係形成	1.  2.  3.  4.  5. 	関係保育
5) 選定領域形成法	中間領域に分節活動設定 →母集団の再構造化	選定領域の設定 ピックアップによる参加	1.  2.  3. 	international school 各種学校・教室 統一教会(米国)

発達への道

原 善平

(1)初めに心理学そのものが変化することについてみる。最近の心理学の発達を歴史的に考える場合いわゆる意識を研究する学問であった心理学が行動を研究する学問となつたのはアメリカにおいてであつたが、それは行動という眼に見えるもの重視して人間を研究する方がより客観的結果が得られると考えたからである。で行動を研究するということは心との関係をもつて行動を研究するということである。ところで教育の中心をなしている学習の定義は「学習とは経験による行動の進歩的変化のことである」となつてゐる。学習はこれによって発達を意味することになる。この場合子供の生活環境における良い習慣友達や教師との望ましい対話、学校での教科内容の理解教科書以外の良書を読むことなどは子供の発達のための良い経験を与えてくれる。

(2)子供の発達の面を子供の自我に即して考へると、身体的な面情緒的な面知的な面社会的な面の四つが考へられる。ところで“このように発達を分けて考へる時は全体と部分との関係を次のように考へるのがよい。つまり全般的個人という概念を立てて全体があつて部分があるとするのである。この場合身体の健康が第一の基礎となり情緒の安定が第二の基礎となって知的面と社会的面の望ましい発達が期待されるので、全般的個人は人格の未発達からその発達をめざして進む全體としての発達的個人となる。ここで後の二面に話を移す。

子供の生後から大人に至るまでの知的発達を便宜上言葉の発達において考へることにする。子供は言葉をもつて生れてくるのではなく生後の学習によって言葉を獲得する。そして人間の心はこの言葉によつて出来上ると考へることができる。というのも言葉をもつてすることは人間の特徴であつて言葉は心の機関だといえるものだからである。心は出来上ると以後行動に対して密接な関係をもつ。そして人に対する影響は心をもつた言葉を通して起る。ヘルバートとフレーベルは共にペスタロッチと關係が深く教育史上重要な人物である。前者は子供の発達を考える場合外からの話しかけを重視したのに對して後者は内部からの自發的活動を重視した。ヘルバートは人間の品性や人格は知識の教授を通して発達するとして教育的教授を唱え、彼独特の教育論を打ち立てた。フレーベルは内部からの自發的活動つまり指導を受けた遊戯活動を通しておこなわ

れるがの内部からの自發的活動を基準として人間の発達を考えている。これは神の宇宙的統一の信仰によつて支えられた魅力ある教育説となつてゐる。この二人の説はペスタロッチの二面の中一方をヘルバートが受継ぎ他方をフレーベルが受継いで発展させた結果である。ヘルバートがペスタロッチから受継いだのは知的面でフレーベルがペスタロッチから受継いだのは情意的面であるが二人とも夫々の立場から道徳性を重視しているのは人格発達を目標にしてゐることを示してゐる。ヘルバートの考えは中等教育を幾分含んで、全初等教育に適用されフレーベルの思想は幼稚園で役立てられてゐる。二人の説は教育の歴史の大きな流れの中に位置を占めて夫々の価値を發揮するであろう。ペスタロッチが「愛が唯一のかがいのない」そして永久に続く発達の土台となり、その上での人間の自然性の訓練から人道性が生まれるといったことは重要なことである。

最近の心理学教育心理学の発達はめざましい。子供の社会的発達をそもそもその初めから考へる場合子供は生れた時はまだ自我をもっていない。それは子供の自我は子供が生れてきた社会における人々との相互作用から生れてくると考えるからである。そこで子供は必然に社会的構造をもつた存在となる。いな子供は社会的構造そのものである。社会的発達の基礎となるこの社会的構造は幼児期後において一層の発達を遂げる。つまり自己中心的の方向から社会中心的の方向へ変化発達する。この時望まれることは國という觀念を徐々にもたらすための集団的訓練である。国家は個人がよりよく生きるために必要不可欠のものである。個人が一貫した懸念によつて望ましい就職ができる、ついで国家に対して己を正しく關係づけて国家がそれによって保証された健全な発達をしたとすると、彼の努力は己と國家のために役立つたのである。これが国家と個人の調和であつて、今日の時代において大切なことである。

(3)児童期の満足から発達した青年が生れ青年期の子供から発達した壯年が生れてくる。教育は一人一人の小国民を発達した大国民へ仕上げねばならない。こういう大国民によつて国家が背負われるからである。発達した人格としての個人の状態がこの個人の最上の状態で彼はかくあるためにあつたと考えるととどく、これは彼としてまさにあらるべき状態であると考え得るものでありない。これは己の眞の要求と社會のそれとの一致である。発達した人格について次のことがいわれてゐる。「発達した人は必ず自身幸福なことであるのみならず、これは他の人々に対してもよい影響を与えるものである。」これは味わうべき言葉である。(終り)

児童英語教育の最近の実態

山崎芳津子（暁子名改め）
(大阪女子学院)

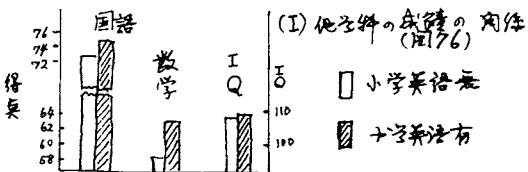
目的：児童が、英語を学んでいる様子は、各所でみられるが、これを、家庭や学校でいつどう学習したか明確ではないが、小学校と幼稚園の中で学んでいく場合、どの様な学習上の問題や制約上の問題があるのかを知るために、文献、実験、調査を行ない、今回は、調査の一部を報告したい。

方法：日本の私立学園のうち私立小学校と、英語授業時間と授業実施している状況と調べ、各校員がりつて3回の内調を取ったのに、全国幼稚園調査を1961年3~4月、1964年9~10月、1971年3~4月、1975年4~12月に幼稚園連合会に加盟する138(8)校と非加盟校16(4)校の合計154(12)校範囲前回と同じ調査用紙を配布した。(C)は休校)1976年1~3月に、返葉を宛てて再依頼し、回収を62(2)/154(12)でとめるにいたり、64校から返信を得た。(回収率38.5%)これまでの様に返信のない学校から面接や宿題、催促によつて回答を集めることなく、通常のあたものだけを対象に授業実績や見落を行ない、格好や教頭の面接などに力を入れたことが今回の特長である。

結果：調査の報告を簡明にすることは困難であるので、「全国私立小学校の英語教育に関する調査的研究」と題して、私学研究昭和50年度助成金による特講(横岡)研究の報告文として私学研究懇親会に原稿を一通送付し、これと同じものをプリントにして配布した。原文は、一通のオマケ刷文になつたことはないが、この研究のために考案した住所録は、日本私立小学校連合会編「全国私立小学校名簿(50年版)」があり、64校の小学校の協力により研究を遂行することができたのでお譲り申したい。

調査でまとめ得られた内容は次のとおりである。
① 小学校英語科目的設置状況
② 各小学校の英語の歴史
③ 英語授業の内容・テキスト
④ 英語授業の方法・用具等
⑤ 担当者・学年・時間数など
⑥ 中学校への連絡と一貫教育
⑦ 英語プログラムと発表会
⑧ ローマ字について
⑨ 常外英語教育について
⑩ 研究活動について(資料参照)

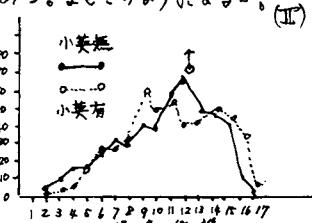
これらの調査から日本私立小学校の英語授業設置状況を知ると、1961年から15年間に①英語を置かずが15.3→20→14→17.8%へ変化し②英語を正課に



おいでいる学校は、65.3→74.1→83→83.0%、①英語は課外には、8.1→24→1→8.8% ②英語のクラスには、9.2→2.4→0.5→2.2%に変遷した。市立校数2035名中、男1114、女912名で英語成績の差異別に度数分布をみると、女子が男子より1%の有意差をもつて英語学力に優れており、女子の漫談傾向が高い。しかし、女子の場合、小学校英語を併設せずに中学校で英語を学ぶ開始した者で、英語成績、英語が未登場しており、小学校の英語教育の効果はないようになる。これに対して男子の英語を小学校で習う者は、英語成績が女子の者は、一般的に中高連携後、英成績を示しているので、能力、男の男子よりも英語の効果は認められた。小学校の効果と中学校のカリキュラムとの間に問題がある。以上はあくまで私立学園の中高生について、若学生別に、小学校で英語を習い始めたとは言えない群と習った群と分けてその成績の平均値をとり、これを15年にわたり通算した結果が、その差が一定した傾向は、男女差がやはりせず、小学校英語の効果が現れていないことである。また、教師の本音などと大學生で研究課題や生徒や先生のどちらよりよく当場が現れることはあって、研究部会などの研究会のときに、指導が欠けていた。各校ごとにさまざまなのがあり、いろいろ文部省監修の教科書として中高英語授業が実施しているが、長期にわたり同じ問題があり、改善されない。中高英語の問題をしくつけて指導していくのが、一生懸命と並んで一年均一の問題をいたのみであるのに、英語力満足感がない傾向している。逆に英語を習能力が高いことが明白である。なぜこのようなになるか。

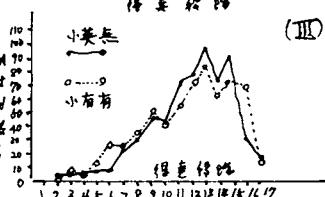
(II) 図A (図24)

中学生の英語成績・相対実数(男)



(III) 図B (図25)

中学生の英語成績・相対実数(女)



児童の心身機能

— 日内・週内推移 —

長野文英

(帝國女子大学家政学部)

〔目的〕

学習指導をおこなうに際しては、それに耐えうる心身の条件を考慮する必要がある。ある子供もは全く疲れを知らないように見えるし、又ある子供もは必ず心身の不調を訴える、といったふうにその状態は非常に個人差に富んでいる。今日、一週間のリズムのなかで、俗に「木曜病」と呼ばれる木曜前後のあちこみ状態がよく経験される。疲労は一日の終了後の睡眠によって解消されなければ、その蓄積が疾病、適応不良となって表われることとなる。一日の学校生活は学童の心身にどのような変化を起こさせているのか。

今回は小学校児童(5年生)の心身機能が、学校生活における始業前と終業後の二点でどのように推移するか、又心身の症状訴えの多さが、機能変化にどのようにかかわっているかについての調査を試みた。

〔方法〕

○調査1：小学校5年生児童一クラス35名を対象とし、自覚疲労症状調査表(全30項目)より身体症状項目を中心として10項目を選び(①あたまがおもい、②からだがだるい、③あしがだるい、④あくびびびる、⑤あたまがぼんやりする、⑥ねむい、⑦めがつかれる、⑧きがちる、⑨あたまがいたい、⑩きぶんかわるい)、月曜から土曜の6日間、始業前、終業後に自己の状態

表1. 疲労自覚症状平均訴え数(例)

測定前	月		火		水		木		金		土		平均	
	AM	PM												
多ケルーフ	23	25	28	33	35	35	35	27	43	22	28	32	34	29
少ケルーフ	13	02	03	02	02	02	03	0	02	05	0	02	04	02
測定期	月		火		水		木		金		土		平均	
	AM	PM												
多ケルーフ	22	15	10	07	10	07	05	08	07	12	10	07	11	09
少ケルーフ	0	0	02	0	03	03	02	02	02	02	03	0	02	01

表2. ケルーフ別タッピング数(終午30°)

	月		火		水		木		金		土		平均
	AM	PM											
多ケルーフ	129.5	133.8	126.3	135.3	132.0	129.3	130.0	121.7	129.3	126.0	130.8	134.8	
少ケルーフ	139.5	142.7	134.5	136.5	139.4	136.7	126.3	129.3	133.3	134.8	130.7	128.8	

をチェックさせた。その中から訴えの多かった児童(以下「多ケルーフ」と略)及び少ない児童(以下「少ケルーフ」と略)を男女各3名ずつ、計12名を選んだ。

○調査2：調査1で選ばれた二群を対象に、始業前終業後の二時点ごとに次のテスト左片瞼から土瞼の6日間実施した。

(1)自覚疲労症状調査(10項目)：前記と同じ。

(2)タッピングテスト：打叩度数計(T.K.K製)を用い、利き手ごとに60秒間に連続して押す回数を測定。

(3)近点距離検査：近点距離計により明視最短距離を測定、左右両眼の平均値をもって測定値とした。

〔結果〕

I. 自覚疲労症状調査

一人あたり平均訴え個数と、ケルーフ分離前及び実験場面の二事態を示したもの(表1)である。多ケルーフでは、実験事態に入つて訴え個数が明らかに減少している。児童の症状訴えは、心身相関的因素が大である点を考慮に入れることが必要であろう。

II. タッピングテスト

測定60中の後半30の成績を示したもの(表2)である。一日の生活による変化に規則性は見られないが、遅の半ばに遂行の低下が見られる。又多ケルーフの遅行率の低さは、テストの性質である意志努力の要求としかわるものと思われる。

III. 近点距離検査(表3、図1)

学校生活は視覺作業を中心とし、目頭部が断えず必要とされていることがこの調査からわかかる。特に遅の後半の低下が著明である。又せんか近点距離の長い点も注目される(表3)。

表3. 男女別近点距離(単位mm)

	月		火		水		木		金		土		平均	
	AM	PM												
多ケルーフ	69.9	69.3	67.7	71.3	74.0	/	75.2	82.7	81.0	83.8	86.0	82.5	70.5	78.3
少ケルーフ	79.5	85.5	82.5	80.5	85.5	99.8	84.5	92.0	81.2	89.7	89.2	88.2	83.7	90.3
多ケルーフ	70.5	68.3	72.0	70.3	74.1	87.0	74.8	80.3	82.0	79.8	82.5	75.5	76.0	78.7
少ケルーフ	84.8	73.7	73.7	76.3	74.4	81.5	81.0	80.3	84.3	87.3	88.7	84.9	77.6	82.7

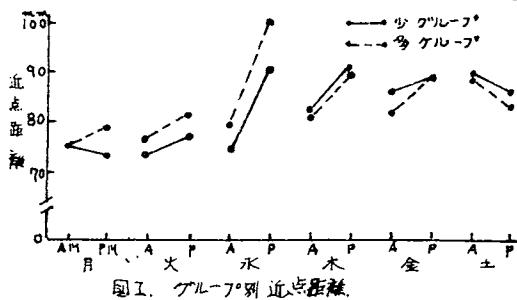


図1. ケルーフ別近点距離

肢体不自由児の研究(13)

障害児家庭における同胞—その2—

○ 森津 誠 長野 文典

(大阪市立身体障害者福祉センター) (帝國女子大学)

目的 障害児を同胞とする兄弟(以下兄弟)の心情や態度構造を理解することは、親子関係の分析などとあわせて、障害児の家族システムの解明と、障害児家庭の発達援助にとって重要な意義を持つ。文章完成法テスト(SCT)によれば(日心才42回、1978)、兄弟らは障害同胞(以下同胞)に対しても、父親や母親に対しても一般的には親和的で好意的な感情を中心とした態度を示しているが、その背景には両面的感情や特徴的な否定的(消極的)感情をともなった態度をとる場合も少なくないことが示されている。ここでは、同じ資料により、これらの否定的態度の分析を行ない、兄弟の同胞への態度と父親や母親への態度がどのように関連し、どのような差違の様相を示すかを検討する。

方法 対象事例 SCT調査結果(前掲)のうち、原傷病が脳性マヒで、知能水準が境界線級以上の障害児(肢体不自由児)の兄弟19名(表1参照)。その家族構成や同胞の現況もあわせて分析対象とした。**分析手続** SCT反応のうち、同胞への態度、父親への態度、母親への態度、障害に対する社会への態度を中心に各事例ごとに反応分析を行なった。その際、態度の否定的側面について検討するためには各々の反応語(内容)について、1)直接的な否定的態度を示すもの(直接的・現実的な不満・不安・心理的苦痛・心理的圧力を示すもの)と、2)間接的な否定的態度を示すもの(間接的・抽象的な不満・不安・疎外感・距離感・無理解を含む)とに分類整理した。

結果と考察 表1に対象事例ごとに否定的態度の有無について示した。家族への否定的態度を全く示さない

事例もあるが、全体の一般的傾向を見ると、同胞に対する態度では、男子も女子も年長によるに従って間接的な批判や距離感を示すようになる。しかし父親に対しては、女子では年令に応じた同胞への態度と同じような傾向を示すが、男子では年令に無関係に直接的な不満を示すので、父親との距離感は示していない。母親に対しては、男子では父親に示した態度と同じような不満に加えて年少者の疎外感が散在している。しかし女子の場合は母親に対して、年少者では直接的な不満を示し父親への態度と類似した姿勢を示すのがだが、年長女子では直接的な不満と同時に無理解への不満や様々な母親批判を示している。これらの傾向を各事例ごとに見ると、年長男子(A,B)は同胞に対し親和的だが適当に距離をおいて対応を示し、その対応パターンは父親や母親に対してもほとんど同様である。両者の生活目標などは大きく違っているが、いずれも将来への不安などは示していない。同年令の女子では(C,D,L)、心理的に受けとめている事態は、男子に較べてかなり現実的で、不満や批判を強く示している。特に母親に対する否定的態度からは、彼女らの家族内役割期待とその遂行への不満を感じとれる。平々児の場合には(H,R)、家族に対して素直な不満を示すと同時に、家族への否定感を示す事例、と同じく同胞について、その社会の障害認知への不満という形で障害を意識している。2人の双生児例(G,N)もこれと同じ様な傾向を示している。各事例を検討すると、障害児の兄弟の家庭内葛藤は、そのパターンとしては一般的な家庭における家族の差違に相応したものである。女子年長事例で母親への批判が集中することも、同一視の困難という観点からみて充分に了解可能であろう。しかし同時に複雑で屈折した心情が否定的態度となって、同胞あるいは家族の心理的安定を疎外することもある。障害児療育では、障害児のみならず兄弟あるいは両親においては家族全体の発達を考慮して援助が望まれる。

表1 兄弟のSCTにみられる否定的態度(+:あり、-:なし)

対象事例(A-I男子 J-S女子)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
対象事例の年令	22	18	17	17	17	15	11	9	9	21	20	17	14	14	13	10	10	9	9
同胞(YB弟 YS妹 EB兄 ES姉)	YB	YB	YS	YB	YS	YB	B	ES	ES	YS	YB	YB	S	YB	EB	EB	ES	EB	
同胞の年令	17	10	14	13	13	11	11	14	13	15	16	15	10	14	10	14	12	11	13
同胞の障害(L軽度 M中度 S重度)	M	M	M	L	M	M	M	S	M	L	M	S	M	L	M	L	L	L	
同胞への直接的な否定的態度	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	+	-	+	+	+	+	
同胞への間接的な否定的態度	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	+	-	-	
父親への直接的な否定的態度	-	+	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	+	+	
父親への間接的な否定的態度	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	
母親への直接的な否定的態度	-	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	-	-	+	-	+	+	
母親への間接的な否定的態度	+	-	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	+	-	
社会の障害認知への否定的態度	+	-	+	-	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+	-	+	+	+	

自閉傾向児とステークション・アボニー

石御園泰

新潟大学医療技術短期大学部

古く情緒障害と言われる幼少年、個別的には登校拒否、登校拒否、自閉傾向児などと、青年期の登校拒否や大学生のアボニーと言われている状態などを、周知のように、今日まではっきりとした心理的視覚から診断的体系と、処置体系も確立されていない。

問題：そこで本研究では、これまでわれわれが主として青年期の登校拒否やアボニーに関して「生活空間構造・機能」の局面からアプローチしてきた結果に加えて、さらにこれら問題を対象者たちが、自己以外のもの（人や物や状況）にかかわる際、かかわり方、かかわり媒体の利用の仕方（道具および道具化的利用）という視角からアプローチを加えることを試みた。といふのは、自閉傾向児も登校拒否も、アボニーも、いつも明るいかなう状態とてく状況処理の拒否者や、
<どうやつらよひかわからなひ>といった棒立ちのような適応が目立ち、かつ共通するからである。方法：今回報告に関しては、今まで相談処置の対象として取扱った数十例を内容的に検討することを中心にして。

考察：自閉傾向児自体の示す行動的な特徴は、奥様行動の欠如または欠如に近い状態、および道具使用の不得手さであろう。おとちやあり、用意あり、クレヨンあり、砂場ありとハラ状況ばかりで使用できない。使用をあばとようといひ。周囲に譲りかけない。周囲を利用しない。同時に教えるよとこでもあばえないとか拒否するなど行動に出る。これら児童、家庭内生活を観察すると、やがて行動や親とのかかわり親たちの生활内容、価値意識などはそれそれ異なりながらも、或は局面ではきわめて類似した構相を示す。すなわち、程度の差はある、生活が整えられ（子にとって）、言語的表現をしなければいけないまま子の一日一日が経過するような状況が存在するといふ点である。いいかえると、親の生活が、或はパターンで成り立っていて、日々それをパターンからはずすことがあり。生活構造的のみならず比較的構造分化しておるが、その生活領域は多様性に欠け、かつ流動性に欠け、一つ一つの生活領域の機能が単純化しているのである。しかも生活行動は单一行動の連続に終始しながら、同時に多目的的行動することがない。したがって、子の側は親の行動に側していくは

り、あまり困難や困った事態を体験しないでいる。わざ、子にとって生活はパターン化してしまっている。したがって、とてびりに子の担つてはボーテン（必ずしも社会ではない）に、子供らしく行動と自由に展開陔大せりゆうな素地を欠いており、そういう素地が不足してはならないと、言わざるを、必ずしも近い状態であっても家庭内生存生活は成立する。ここに処置における一つの手がかりがあるといはるべきだろう。

さて、登校拒否やステークション・アボニー陷入した青年期の生徒や学生に共通していける条件は何かといえれば、性格的傾向などをことながら、「それまでの生活を自分の手で切り開いてきた体験不足」である。親たちは本人たちを評して「素直で何一つ問題のない、どちらかといえば“おとなしい”といった」といふ。しかし、その評を本人や親と面接から得られた、「過去生活あり方」からうづけるならば、要するに今までこじやきめられたことの行動碎の外に出た経験がなく、生活空間は特定の歩道領域に固定され、そこで行動範囲が固定してきて、領域相互通動性がなく各領域の機能が単純化してしまることになる。畢竟領域には接近性や近似性が減少してしまつである。だからたとえば「ステークション・アボニー」とは完全離れた状態が一つの特徴のように見られていて、それはつまりかえり、日常生活がパターン化してしまつて、完全にはなく、それでもなんとか生きていけるが、とても見通ことでは、「すらはすらであり、できることはなうで」、彼等自身の要求の中にはいつも少しも「完全」というふうはないのである。「できれり、行かないことがどうしてかわらぬ」のがある。

さて、これら自閉傾向、登校拒否、ステークション・アボニーはいつも経験上、危険事態や危機的事態や身体的活動事態などを数多く体験し、体験を重ねてつれてこた状態から抜け出していく。言語行動を始めたカウンセリングでは処置をきわめて困難である。

すなわち、これらから普通に見かける一つの要件は、自分の生活行動を展開へする方法の欠如であり、かえりかえると、他人や物や、状況を生活行動展開、「道具」として利用し、使ってきて体験の不足であると言えるわけにはいかないだろうか。そしてかえりえば危機事態は他人のかかわり、他人を道具化し、自己もまた強くことによっていか切り扱はれない事態であり、それを通じて「道具化的利用」法を学習し、それによって自己確立を形成していくと言えるのではないかだろうか。

大学生二年次留年者の予測と単位の取得傾向

○代 喜一・鳴沢 実
(東京都立大学人文学部) (東京都立大学学生相談室)

この報告は、昭和52年から53年にかけて、東京都立大学学生相談室が行なった「学生生活の実態調査」の一部である。^{注)}

1. 判別関数法による留年者の予測

都立大学においては、二年次終了時点での取得単位のチェックを行なうが、二年次修了判定不通過(二年次留年)の予測を一年次終了時点での取得単位をもとにして行なった。留年者170名とランダムに抽出した非留年者148名の一年次の外國語、体育、総単位及び平均成績評価(5点満点)の4変数を用いて、線形判別関数により、各変数のウェイトを推定した。

$$(判別得点) = 0.68x_{\text{外國語単位数}} - 0.60x_{\text{体育実技}}$$

$$+ 0.19x_{\text{総単位数}} - 0.383x_{\text{成績評価}} \quad \text{相関比} 0.65$$

この式から計算される各個人の判別得点について、5点と10点とを境にして3つの群に別けることとする。すなわち、5未満(第I群)は一年次においてすでに極端な留年傾向をもつ者、5~10(第II群)は、やや不良、10以上(第III群)は普通以上の群である。このように別けられたグループから実際の留年への推移を示したのが、図1の上図である。下の図は、上記の判別関数によって、次の年度の一年次生の判別得点を計算し、実際の留年との関係を示したものである。両方とも同じような割合を示しており、判別関数が安定していることがわかる。

2. 単位の取得傾向のパターン

I群から留年する者が、二年次にどのような単位の取り方をしているのかを示したのが図2である。全体的に見ると外國語を取らない傾向が見られる。さらに、留年を避けようと多くの単位を取ろうとする者、留年はやむを得ないが地道に単位を取っている者、外國語の単位を全く取らずそれ以外の授業のみ取っている者

^{注)}より詳しくは、「学生相談室レポート」第6号に報告されている。

ほとんどの単位を取らない者、などの特徴的な傾向が見られる。同様にして、第III群から留年する者の傾向を示したのが図3である。上記の傾向のほかに、一科目分の単位が不足して留年する者が多く見られる。3つの群の留年者について、上記のような傾向の人数を示したのが表1である。右下に近づくにつれて、判定基準の通過が困難になるが、太枠内の者は、一年次、二年次の単位の取り方から見て、再留年の可能性が大きく、退学へと進む場合も考えられる。

これは留年のほぼ45%にあたり。このような傾向が見出されたのであるが、今後はその原因を明らかにしていくべきだと思う。

3. 判別関数の簡略化とまとめ

判別予測に用いた4変数のうち、体育実技及び成績評価値は寄与が小さく、除いても相関比は落ちない。また、実用的意味から、外國語単位数と総単位数の2変数によって、判別関数を推定した。

$$(判別得点) = 0.40x_{\text{外國語}} + 0.11x_{\text{総単位数}} \quad \text{相関比} 0.65$$

この式による判別得点の分布を示したのが図4であり、下の図は予測された得点の分布である。5点を境に2分した場合、約半数の留年者を予測することができます。さらに、2変数の判別関数による留年者の予測は、

$$4x_{\text{外國語単位}} + 0.50x_{\text{総単位数}}$$

という簡略化された計算によって、なされるであろう。

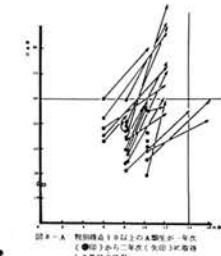
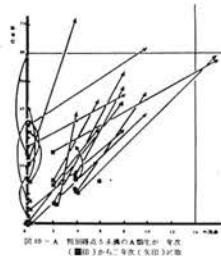
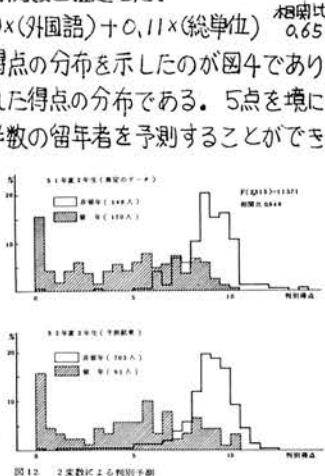
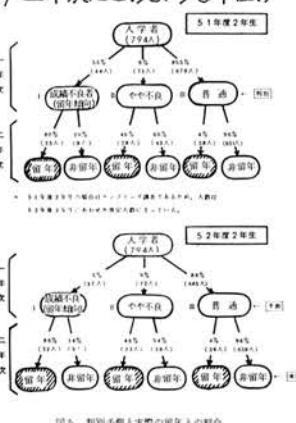


表1. 留年者の二年次の単位の取得傾向

	合計	一科目または二科目分の不足	単位を取っているがかなり不足	外國語単位のみ取らない	単位をほとんど取らない
III群	52	28	5	2	17
II群	52	11	14	7	20
I群	66	2	16	13	35
合計	170	41	35	22	72



青年期の自己形成に関する研究 (その5) 20答法による中学生の自己概念の発達的研究

日本大学文理学部

高橋秀和

1. 目的

本研究の目的は、青年期における自己を、20答法(略称TST)にあらわされたTST反応の分析により明らかにするものである。

2. 問題

筆者は、自己概念の構造を現象的に分析するための10個のカテゴリーと、それらをまとめる4個の大分類を設定した。

(A) 10個のカテゴリー

- I. テスト自体に対する反発(リジェクション)
- II. 客観的自己(社会的自己と身体的自己)
- III. 対人関係(例:親知、葛藤、攻撃、甘え)
- IV. 動物
- V. 植物(含:自然、四季)
- VI. 身近でない具体物(例:旅行、故郷)
- VII. 身近な具体物(例:勉強、テニス)
- VIII. 抽象物(例:イデオロギー、人生觀)
- IX. 自己評価
- X. 身体感覚(例:ねむい、つかれている)

(B) 4個の大分類

1. O(対象) 前述A2~8, S(主体) A9~10
2. R(現実), I(理想)
3. N(ネガティブ), P(ポジティブ), Nu(中性)
4. Pr(現在), Pg(過去), Fu(未来)

筆者はパイロットスタディとして、京浜・京葉地区の児童・青年390人に20答法を実施した。その結果、青年後期になるにつれて、S, I, N-Pが増加する。発達的に、ある年齢層での安定性が見られた。性や地域に関係なく、男子においては、中学3年と高校1年に、女子においては高校1年と高校2年に、自己概念の構造の臨界点が見られた。自己への関心が高まり、自分とは何か、何者になるべきかが真剣に問われだす時期といえよう。(応心44、相談11、教心20)

3. 方法

筆者のTSTは、一般に用いられている文章完成法と同じく「私は……」というフォームを20個並べた。その記入欄は17cmである。そして、「あなたのどんな側面でもかまいません。ふだん考え感じている自分について20通りの異なる記述をつくってください。」という教示を上段に記載した。

調査の対象は、某公立中学校2年生(男子18名、女子17名)である。そのTST反応の評価の仕方は筆者を含む2名の評定者の合議により、1つの記述のうちに1つのカテゴリーに属するものがあったら1点、2つあったら、それぞれに1点ずつ与えた。

4. 結果と考察

表1. Rの頻数		リジェクション(R)の頻数	
Ss	R	記述数	は、女子に比べ男子に多い。
男	80	284	(χ^2 検定で $\alpha .01$, 以下**
女	32	351	で示す)

表2. 4個の大分類によるTST反応分析表(%)

Ss	O	S	R	I	N	P	Nu
男	68.0	32.0	44.4	55.6	21.1	64.4	14.4
女	62.4	37.6	48.9	51.1	23.9	67.9	8.2

O-S, R-Iの分析で性差はない、N-P-Nuの分析とN+P(情緒性とする)-Nuの分析で、有意差が見られた。(χ^2 検定で $\alpha .05$, 以下***で示す)
さらに、IとRの内部で、O-Sの分析をすると、男子はORの側に、女子はSRの側に有意差が見られた。

表2(続)

Ss	OR	SR	OI	SI	Pr	Pa	Fu
男	75.4	24.6	62.0	38.0	90.5	1.1	8.5
女	59.6	40.4	65.0	35.0	89.3	2.2	8.5

10個のカテゴリーで、O(対象性)の内の出現頻数の多いものを見ると次のとおりである。Ⅰ. 身近な具体物(男子65.3%, 女子52.8%), Ⅱ. 対人関係(男子19.7%, 女子35.2%), Ⅲ. 身近でない具体物(男子10.4%, 女子6.0%), その他。男女を比較すると、男子は身近な具体物に、女子は対人関係に有意***に多く関心を向けている。

具体的には、男子では「自転車をみがくのが好き」、「ラジコンを操作するのが好き」、女子では「同じクラスにいつもいっしょにいられる友人がほしい」、「人に言った言葉が相手を傷つけてしまうのではないかと悩んでしまう」などの記述がみられた。

また男女ともに、「背が高くなりたい」「将来〇〇になりたい」という理想や、「何でもできるような気がするけどできない」などの自己認識を持つ。

「授業を面白くしてほしい」、「部活の活動をふやしてほしい」、「クラスをよくしたい」などの希望を持つ反面「積極的に行動できない」「自分の考えを持ちたい」などのわだかまりがあるようである。

20答法(TST)を教育現場と結びつけ、発達的に研究することが今後の課題であろう。

(1978年9月24日 日本国際心理学会第5回大会)

青春期女子の自己像と母親像との関係

高橋 泰子
(越谷保専)

青春期女子の自己像と母親像との関係を自記述法と自由記述法を用いて調査し、自己像と母親像とがよく似ている者と、異なる、といふ者との間にどのような違いがあるか、又、生育歴や母子関係のあり方等について調べてみたい。

方法

保専生85名を用いて、次の調査を行った。

1. 自己評定(形容詞反意語47項目についてク段階評定)を、a. 自分から見た自分、b. 自分から見た母親、c. 母親から見られていよいであろう自分、について行う。

2. 作文「私の生き立ち」について書く。

結果

自己像と母親像の差の多い者17%(14名)と、差の多い者17%(14名)について比較する。前者をA群、後者をB群とする。

表1

	A群	B群
自己像と母親像の差の平均(a-b)	6.4	15.6
自己像と母親像見られていよいとの差の平均(a-c)	9.1	11.9
自己像と母親像との差(a-b=0)	(a-b≥4)	
とか一一致する項目		
陽気な	短気な	
社交的な	不まじめな	
信じやすい	消極的な	
誠実な	不安定な	
積極的な	軽きな	
やさしい	感情的な	

表2. 生育歴

	A群	B群
主に育てた母	11	8
くれた人: 祖母	3	6
主に影響を受けた母	7	4
与えた人: 父	1	1
姉	2	2
祖母	1	0
先生	2	1
友人	1	6

表3. 母子関係

	A群	B群
母大好き	5	
好き	2	
ふつう	7	
嫌い	0	

表4. 母親に対する評価

	A群	B群
① 母が好き		③ 母は嫌い
仲良のようになれると思います。		自分の考え方をもみしつける。
やさしくてとても甘い。		弟ばかり可愛いくていい。
叱られても私のためになる		私の気持ちを解うる。
何でも相談になってくれる。		考え方で違うことをやめない。
とても楽しくて幸せ家庭		私にはだけ厳しかった。
なくともうるさい大切なん。		性格がうらうら(母は積極的)
母によく似ている。		
② 母があいつう		④ 母が好き
好きだけど母のようにになりたい。		厳しい人だから立派だと思う。
働いていたのが甘えられなくなつた		尊敬するが相談しない。
嬉しい時と甘い時がある。		嫁が所は諦めて良い所を見た
好きだと時と嫌いな時がある。		⑤ 母はあいつう
父の方が何よりも話しやすい。		母は母、私は私だと思う。
		余り可愛がられる記憶がない。
		一人の人向として理解する。

表5. 母子関係の発達

	A群	B群
幼児期(好む)→中高生(反抗)→現在(好む)	7	4
幼児期(好む)→中高生(嫌い)→現在(好む)	3	5
初めから変わらぬ(3つ)	4	0
どうでもよの存在	0	5

考察

1. A群(自己像と母親像の似ている人)について
 - a. 自己をより肯定的に評価している人が多い。
 - b. 母親を好きだと思う人が多い。
 - c. 自己像と母親から見られていよいであろう自分との差が少い。
 - d. 幼児期に母親に育てられた人が多い。
 - e. 母親の影響を多く受けたと思う人が多い。
 - f. 母親の好きな理由(共感的、受容的、親和的など母親との関係、性格の一一致等)
2. 母親との距離が近くで同一視しやすい者が多い。
3. B群(自己像と母親像の似ていない人)について。
 - a. 自己をより否定的に評価している人が多い。
 - b. 母親を嫌いだと思う人が多い。
 - c. 自己像と母親から見られていよいであろう自分との差が多い。
 - d. 幼児期に祖母に育てられた人が多い。
 - e. 友人の影響を多く受けたと思う人が多い。
 - f. 母親の嫌いな理由(権威的、偏愛、厳格など母親との実際、劣等感、性格の不一致等)
 - g. 母親との距離が遠くて同一視しにくい者が多い

日本の児童の感情の研究Ⅳ

児王 管 阿部明子 加古明子 口中田カヨ子
(細原女子短大)(東京家政大学)(星美学園短大)(東京成徳短大)

目的:私たちは、幼児・児童の恐怖、怒り、悲しみ、恥かしさ、喜びの感情について、数回にわたり発表してきたが、本研究は、2才から5才児までを対象にして、「恐怖及び不安」についておこなつたものである。本研究の動機は、児童の感情の研究は、ジャーシルド以後、あまり展開をみていないが、ジャーシルドの研究は、分析分類的すぎて、感情の実体を見失っているのではないかと考え、もつと子どもの感情の把握がしたいと考えた。

そのためには、本研究では、次の点を考慮して、研究をおこなっている。(1) 感情の発現と表現を環境に密着してみていく必要がある。(2) 感情を単一的に処理することに無理がある。なまのままの感情は漠然としていることが多い。かつ複合的なニュアンスがある。(3) 場面を離れて、感情を考えるところに不自然さがあるので、場面、表情ともに合せて考えるべきである。(4) 感情の表現、出現など、1才、2才など年令的に、同一であるかどうかもはつきりしない。この発達的な姿と変化を把握することが必要である。

方法:母親に、2才児～5才児の子どもたちの観察を、1週間してもらい、子どもの感情的発現のあるたびに、そのまま記録してもらった。

対象:2才児13名、3才児15名、4才児9名、5才児7名、計44名

結果及び考察:[1] 恐れの感情の出現する場面は、①特定の物、②特定の場所、③大きな音、④予期せぬことに出会い、⑤見知らぬ場所、⑥見知らぬ人に会うことである。幼児の恐れは、前述のようないくつかのものであらわれ、恐れの対象は、その場面そのものであつたり、その場面にいる人や物、その場でおきた事柄、見かけないことなどである。[2] 恐れの場面、表現、対象の具体例を表-1で示してある。表-1によると、各年令別に恐れの多くあらわれる場面としては、2才児、3才児、4才児、5才児とも「予期せぬことに遭遇する」という現象が最も多くなっている。これをみると、日常生活の中で、特に、幼児が母親と一緒にすごしている時は、幼児が恐れるものは、「予期せぬことに遭遇する」とことである。[3] 恐れの出現頻度は、幼児が母親と一緒にいるということもあるが、喜びや怒りなどの他の感情よりも少く、1週間の観察期間中、平均すると、2才児で

表-1. 幼児の「恐れ」の具体例

種	年令	場面	表現	対象
①	2・女	嫌いな掃除機をかけるということを開いた。	突然、大声で泣き出し 母親にしがみつく	掃除機
②	3・女	注射を行う時。	逃げまわって泣く	注射
③	3・男	暗いへやでベットに入つた時。	「おおあさまー」とおが 顔をこわばらせて、 庭の方をじっとみめる	暗いへや
④	2・女	朝食の時 外のガス工事の音をきいて	顔をこわばらせて、 庭の方をじっとみめる	道路のガス工事音
⑤	3・男	かみそりがなった時。	「わいとは一言いかず、 母親見にいって」とくつつく。	かみそりの音
⑥	2・男	虫が手についた時	「虫よ、虫よ」と母親のそばに走り泣く	虫
⑦	4・女	道で消防自動車をみる。	体をよせるようにして しがみつく	消防自動車
⑧	2・女	歯医者で	泣く	歯医者
⑨	2・男	散歩中に知らない人に詰しかられた時	「やー」といってソッポをむけ、母にしがみつく。	知らない人
⑩	3・女	近くの人が詰しかけ抱へようとした時。	大声で泣きだし 母にしがみつく	近づく人

は1.1、3才児は1.6、4才児0.7、5才児1.5回になつておる、3才児が一番多く、4才児が少くなつておる。[4] 表現の仕方では、「泣いたり」、「その対象や場面から逃げだす」、「母親にしがみつく」、「大声をあげる」などが多くみられ、年令的特徴がいはみられない。[5] 幼児の感情は、複合的であつたり、移行的であつたりするが、恐れの表現もしばしば重複してあらわれる。特に、恐れの場合は、不安と重複する場合が多い。不安は、対象がはつきりしていない場合や、配達などであるが、不安と思われる感情の出現場面は、「恐れ」の場合と同じような場面にみられる。また、「恐れ」と判別しにくいこともある。[6] 今回の観察での「恐れ」の結果と、以前 我々のおこなつた面接調査の結果を比較すると、面接で多かつた動物、架空などがほとんどみられなかつた。これは、観察の仕方が、母親と一緒に日常生活場面という限定があつたためと思われる。このように、面接、観察の結果が異なっていることは、面接では、どちらにくい面を觀察でどちら、觀察でどちらにくい面を面接でどちらできることができるということであり、感情の実体を把握していくには、特に、「恐れ」の感情の実体を把握していくには、両面から どちらをいくことが必要と思われる。今後は、より対象数をふやし、統計的処理も試みたいと考えている。

精神分裂病者に反覆実施したロールシャッハ・テストにおける反応内容の固執について(2)

○菊池哲彦

(茨城大学人文学部)

長沢嘉文、倉持泰三

(新田日赤院)

新田日赤院で昭和40年6月から52年9月までに報告者が実施したケースの検査録のうち、分裂疾女性患者33名の反覆実施例、場合の数としては56件について、オーラー報告にならって反応改善(Contents)の固執の状況につき報告する。

1. 方法

ここにとり上げるケースは研究意図にもとづいて行なわれたものではない。そこで、確定される発病年月を基準に時系列にしてがつて整理され反応の固執を問題とする。反応の固執は、ある検査録のなかで、次の検査に重ねられた反応、(この場合、反応のイメージの类似性を問題とする)のはじめの検査の総反応数R₁に対する百分比・残置率、オーラーの検査の総反応数R₂に対する百分比・再現率、残置と被う場合の反応の平均反応含有率、同じく再現反応について、および平均反応の残置率、再現率、残置、再現される反応の反応頻度変化率、決定因変化率を計算した。

これらの手続はオーラー報告(オーラー東北精神神経学会)と同じである。オーラー報告は男性患者について整理したものであり、性差の検討は若干試みるが、さしあたり記述に止める。

2. 結果

残置率の平均は51.6% (SD 28.5)、再現率の平均は57.0% (SD 29.4%)で有意ではないが、再現率の方がやや大きい。これは、初回に比し次回以降の尺が有意ではないけれども減少する傾向があることと関連している。男子の残置率平均は50.2% (SD 27.6)でほぼ同水準であるが、再現率の平均は62.8%で、有意ではないけれども、女子のそれにはやや大きい。これはオーラー回目の尺が男子でやや小さい傾向があることによ

るだろう。(オーラー回目のRの平均、男子12.3 SD 5.52 女子14.7 SD 6.32)が、残置率、再現率とも個人差が大きいことは注意しておく必要がある。

次に、固執される反応には平凡反応が多いと考えられるが、これは分裂疾者が平凡反応をあまり与えないということから、残置・再現における平凡反応含有率は、それほど高くない。残置の場合の平凡反応含有率は平均48.4%、SD 5.17、再現の場合の平凡反応含有率は41.2%、SD 3.67である。しかし、ある回で与えられた平凡反応が次回にもちこまれる場合(残置)は多い。再現もまた同様であり、平凡反応の残置率の分布は0~100%の場合が、被検者の44.6%で最も多く、60~79%の場合は61.33.9%、40~59%の場合は同じく12.5%、以下の場合は、10%に達せず、おおよそポアソン分布に近い形となる。このパターンは再現率が1回目と2回目で、直前の反応は平凡反応でないものが若干多いけれども、複数のテストを通のなかで、平凡反応が一度与えられると、それが固執されるのが普通であるといふところになる。

残置率、再現率の範囲は0%から100% (男子では0%という場合はない)におよび、その平均は女子の場合50%台である。これは男子より恒常にあり、今後の検討をまたなければならぬ。ところで、反応内容がほとんど一致する2回の検査においても、反応領域や決定因は多少なりとも変化する。特に決定因においてはそうである。割分率の変化も1回の変化としてみるとこととした結果では反応領域においては平均34.2%、SD 10.2、決定因においては57.1%、SD 11.5である。これらの場合においても、率の範囲は0%から100%に及ぶ。

3. 考察

本調査は、男子患者のなかにオーラーで固執傾向の強いケースがあつたことから始められたものである。男子の場合には、はじめの検査が発病後6ヶ月未満で行なわれたI群、6ヶ月以上20ヶ月未満で行なわれたII群、20ヶ月以上を過るI群はじめて新田日赤院にぶりて行なわれたII群について検査結果を統計した。この場合にはII群で固執が少々強くなる、発病後空過日数の増加とともに、II群で固執が増加する様子はみとれなかった。こうしたことにより一方で治療停留と発病II群で今後考察されるだろう。女子においてはII群が多く、II群は他の群に比し、特に衰った様子はない。(しかし、これは、全体としてみて場合であって、個人の差異は、典型的な発病を許すようみえる。また、解釈技法の問題といふも、被検者の性差も問題にしうる。

特定項目による

TPI の臨床的研究

- 岩田 彰 (大宮厚生病院)
- 高畠 隆 (都立心身障害者福祉センター)
- 長沢美智子 (帝京大学附属病院精神神経科)
- 高久信一 (日本大学農獣医学部)

〔目的〕

現在、心理臨床場面において、心理テストの利用はますます増加する傾向を示しているといえよう。個別式知能検査やロールシャッハ・テスト等はもちろんのこと、各種質問紙法による性格テストも、集団的な実施が可能なことにより、非常によく用いられている。中でも TPI はその性質上、精神科臨床や精神衛生管理の場において、様々な目的をもって利用されている。

我々は、TPI をより効果的に利用するために、従来のプロフィール・パターンによる解釈法に加えて、特定の項目への応答に注目するという方法を併用してきた。

〔特定項目の構成〕

我々は今までのところ、精神分裂病と神経症の識別を目的として特定項目を選定してきた。まず TPI 標準版 350 項目から、分裂病群と正常者群の出現率に有意な差のあるものを選び、精神科臨床の現場で患者の臨床症状との対応を求める手続きを経て、現在の 23 項目を設定した。

もともと質問紙の項目への応答傾向によって、患者の精神症状のうち「表出」を把握することは困難であるが、様々な「異常体験」との対応を想定し得る項目はいくつもあり、これに肯定回答を得られた場合にポイントとすることにした。一般的に正常者・神経症者においても、消極的・警戒的態度のもとでは否定回答が容易に増大する傾向がみられたためと、症状を明確にするために、否定回答は除外された。

〔特定項目リスト〕 No.-頁一行一項目-(尺度)

1. 1-13 私には、ふだんどこからともなく声が聞こえてくる (Rr, Pa, Hb)
2. 1-20 ふしぎな力で何かやらされているように感じたことが何度もあった (Rr, Hy)
3. 1-38 他の人の悪意かなければ私はもっと成功していたはずだ (Uf, Pa, Hb)
4. 1-40 ふしぎな宗教的体験をしてことがある

(Rr, Hy, Pa, As)

5. 2-14 ときどき急に笑ったり泣いたりして止められなくなる (Rr, Hy, Ma)
 6. 2-16 不吉な考えが頭に浮かんできて払いのけることができない (Hc, Hy, Hb)
 7. 2-30 人にあとをつけられているような気がする (Rr, Hb)
 8. 2-37 何かが私の心を動かそうとしている (Rr, Hb, Ma)
 9. 3-12 だれかが私をおとし入れようとしている (Rr, Pa, Ma)
 10. 3-26 おおぜいの人といっしょにいると好きなことを言われるので困る (Pa)
 11. 3-36 私はひじょうにふしぎな体験をしたことがある (Pa, Hb, As, Ma)
- (以下、No.-頁一行のみ記載)
12. 4-1 13. 4-12 14. 5-1 15. 5-32
 16. 5-37 17. 5-44 18. 6-12 19. 6-13
 20. 6-48 21. 7-5 22. 7-23 23. 7-47

〔分裂病群と神経症群の比較〕

今回は、実際の臨床場面で、得点上から何らかの逸脱を予想し得るプロフィールに限定して、分裂病群と神経症群の比較を試みた。(S = 30名, N = 30名)

その結果、ひとり当りの特定項目への反応数は、分裂病群と神経症群との間に有意な差がみられた。また各項目ごとの反応率も、23項目のほとんどに有意な差がみられた。23項目に対する S・N 両群の反応率と有意差検定の結果は以下の通りである。(※ 5% ** 1%)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
S	46.7	63.3	50.0	36.7	43.3	63.3	40.0	60.0	53.3	56.7	40.0
N	0	3.3	6.7	3.3	0	3.7	0	3.3	0	6.7	3.3
検定	**	**	**	**	**	*	*	**	**	**	**
	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
	23.3	40.0	40.0	36.7	26.7	46.7	36.7	43.3	33.3	26.7	23.3
											43.3
	0	10.0	3.3	0	0	20.0	0	6.7	0	16.7	0
	*	*	**	**	**	*	*	**	**	**	**

〔特定項目の利用〕

特定項目は、従来のプロフィール・パターンによる解釈法と併用することにより、分裂病と神経症との識別をするのに役立つのみならず、分裂病の臨床症状をより具体的に把握するのに利用できた。

現在のところ、外来初診時のスクリーニング・テストとして得られた情報を見診の参考にしたり、患者の状態像の推移を知る手がかりとして利用している。

アルコール中毒者のローリーシャッハ・テスト(I)

—アルコール中毒指標(数量的サイン)の再検討—

○小川俊樹
(茨城大学保健センター)

須藤留子
(石崎病院)

〈目的〉最近、アルコール消費量の増加とともに、アルコール中毒(以下A中毒)が問題となっている。A中毒の人格特徴を「alcoholic vulnerability」については様々な研究がなされきており、そこには矛盾や不一致も多く、そもそもA中毒者に典型的な人格特徴はないとの否定的な報告もある。AckermannはローテストのA中毒サインを検討した結果、統制群との間に有意の差を見出しえなかっただけでなく、予想とは逆方向に有意の差を得ている。本研究はA中毒への心理学的接近の一環として、ローテストのA中毒サインと呼ばれたもののうち、数量的サイン(14個)の出現率を調べたものである。

〈方法〉対象は、I、K、Sの三病院に入院歴をもつ18名のA中毒患者で、平均年齢37.2歳。全員男性。いずれも義務教育終了以上の教育歴をもつ。脳器質的障害を認めず。全反応数が10個以上のサイン

の人たちである。検討した数量的サインは、a. $(\bar{A} + \bar{B} + \bar{C}) / R < 30\%$, b. $(\bar{M} + \bar{N}) < (\bar{F} + \bar{C} + \bar{C}')$, c. $M: \Sigma C \leq 1$, d. $\bar{F} \leq 0$, e. $\bar{F} + \bar{K} + \bar{k} \geq 3$, f. 少々m (≤ 3), g. 少々M (≤ 1), h. Cの存在とCFの多さ [$C \geq 1$, $CF \geq 3$], i. $\bar{F} + \bar{K} + \bar{K} \leq 1$, j. 高いW%と低いD% [$W \% \geq 40$, $D \% \leq 50$], k. 低いW%と高いD% [$W \% \leq 40$, $D \% \geq 50$], l. $\bar{M} > \bar{M}$, m. $FC < CF + C$, n. 高いA% ($A + Ad \geq 60$)である。

〈結果〉図1に各サインの出現率を示した。50%以上の出現率を示すものは、サインc, d, f, g, i, j, l, mであり、特にサインf, j, lは出現率70%以上の高率である。サインe.とh.は全く認められなかった。

〈考察〉精神分裂病者や薬物中毒者を比較統制群として選ぶ、A中毒の人格特徴をみてみると研究もあるが、Ackermannも指摘するようにここで得られたサインはそのようないくつかの群との間にあり妥当であり、それゆえA中毒のサインと考えるのは早計である。本研究ではA中毒患者に各サインからの程度認められるかと調べたが、その出現率を

高値のみをもって、A中毒サインとみなすことも正しくない。一般成人との比較を察ねなければならない。サインf.は10%の出現率を示すが、一般成人では $m \leq 1$ or 2であり、これでもってA中毒サインとみることは無理である。このよう古考察をえた上で、なお高い出現率を示しているのは、サインg, j, lである。これらのサインは、内的統制の弱め、内的生産の不安定さ、環境世界への反応性など示唆し、適応上の問題を物語っている。しかし、A中毒のサインとして考える場合、この3つのサインがA中毒に特有とは考え難い、神経症や非行少年などにもこのような傾向は認められるのであって、何故A中毒という形の不適応(防衛)様式を選んだのかについては、個々の症例に即した理解が必要である。

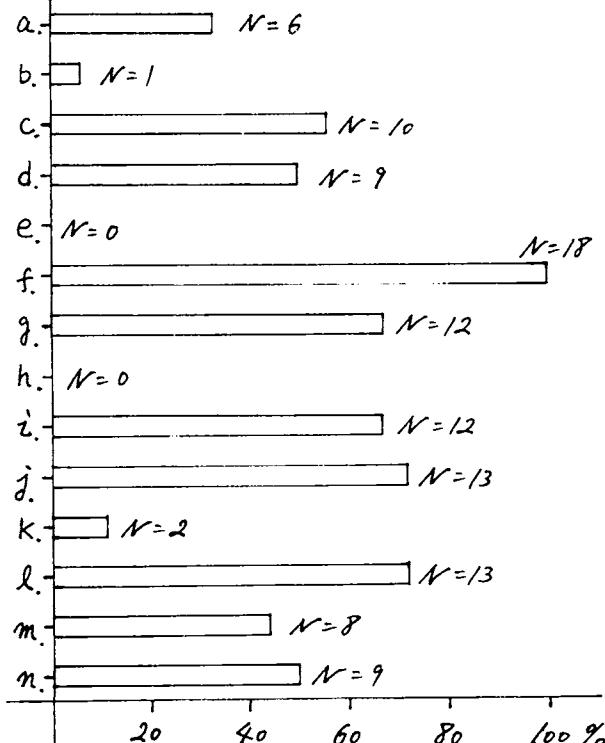


図1 アルコール中毒サインの出現率

アルコール中毒者のロールシャッハ・テスト(II)

—アルコール中毒指標(質的・分析的サイン)の再検討

○須藤 智子
(石崎病院)

小川 俊樹
(茨城大学保健センター)

〈目的〉 アルコール中毒者のロールシャッハ・テスト(I)(前頁)と同じであるが、ロ・テストのアルコール中毒サインとよばれるもののうち、質的・分析的なサイン(9個)の出現率を調べた。

〈方法〉 対象は(I)と同じである。検討したサインは、a. 受動的な人間運動反応、受動的な屈曲的な運動反応が顕著な場合を基準とした。

b. カードI及び(或は)IIにおけるショック。

c. カードIIにおける反応拒否、或は攻撃的反應。

d. 口唇的反応、身体部位のみならず、食物などの反応も含まれる。

e. 水に關係した反応、雪、霜、海岸なども含む。

f. 植物の反応。

g. 性同一性の混乱。

h. 解剖反応の多さ(A+ミ3)性反応も含む。

i. カード回転の多さ(Tur%≤13)。カードを回転して反応した割合(回転率・Tur%)を算出した。

である。質的サインでは、該当する反応数の多さを問わず、その反応が顕著であるか否かを採用基準とした。

〈結果〉 各サインの出現率を図1に示した。50%以上の出現率をみたのは、サインdのみであり、eは全く認められなかった。大部分は20~30%の低い出現率である。

〈考察〉 質的サインの多くは、主に精神分析学の理論に従っている。アルコール飲料による口唇の満足という概念から、口唇に關係した反応(サインd)や、水に關係した反応(e)が期待される訳であるが、このような反応の出現率は低率であった。しかしながら、A中毒者に口唇の強い満足欲求はしばしば、臨床経験上認められるものであり、むしろ、口唇に關係したもののがロ・テストの反応内容に直接出現するとみなす短絡化に問題があろう。口唇性は、反応内容のみならず、反応傾向や、次第因な

ども含めた。ロ・テスト全体からの考察が必要と用いられる。回転率の多さが、A中毒者の70%近くに認められるが、これは環境への受動的態度、自発性の欠如、依存性などを示唆しており、サインdやfにも通じるものである。Tur%の低下は西尾らの指摘するサインでもあるが、同じような解釈的意味をもちながらも、このように出現率に相違が認められる点、比較文化的な要因も考慮されるべきであろう。

文献

I. Ackerman, M. J. 1971
J. Personality Assessment,
3, 224-228

2. 西尾 明他 1962.
ロールシャッハ研究 V, 26-38

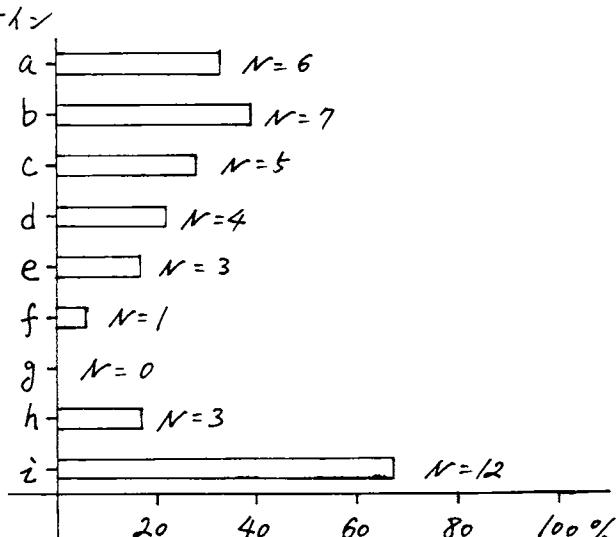


図1 アルコール中毒サインの出現率

子どもの人物画について
—描画順序を中心として—
花房香
(岡山県津山児童相談所)

《目的》

子どもの人物画は、グッドイナフやコピットなどによって、いくつかの分析法が考案されている。これらはいずれも、完成された絵を分析対象としている。

しかし本研究では、描画過程(描画順序)を探り上げて考案した。今回はその中で、一般的な描画順序はどんなものか、1レギュラーな書き方をする子どもは、他の生活面でも逸脱行動がみられるのか否か、について報告する。

《方法》

対象は、5才5ヶ月から9才9ヶ月までの、男72名、女57名、合計129名です。(保育所毎年長クラス=65名、小1=22名、小2=20名、小3=22名)

検査は個人別に実施し、ハサウエ用紙、鉛筆、消しゴムを渡して、「人の絵を書いてください」という教示を与え、描画を観察しながら、書かれてゆく順序を記録して、一般的な描画順序や、その学年別の特徴をみた。なお、一筆書きや、一度書いたところに再び戻って書くあとをどり書きは、別に記録した。

並行して、これらの子どもの中で、幼児・児童性格検査(高木俊一郎他著)の、社会性の面で逸脱行動が多いとされた37名(以下、D群とする)の、描画順序との関連をみた。

《結果と考察》

描画順序の一覧表(表1)
では、一般的な描画順序をみるとために、20%以上の子どもが書いた場所を、マリで囲んである。

①一般的順序は、頭部の輪郭、髪や顔(2~3番)、くび(4番)、胴(4~5番)、腕(5~6番)、脚(6~7番)となる。

一筆書きや、書かなかつた子どもを除くと、70%以上のものがこの順序で書いており、上記の順序が、一般的な描画順序であるといえる。

②なお、一筆書きは、ほとんどがくびから下の部分で、平均20名、約15%のものに現われている。

次に、学年別の描画順序をあらわしたもののが、表2~表5である。マリは、20%以上の子どもが書いている場所を示している。

これらの表から、各学年ともほぼ同じような描画順

序で書かれていることが分る。

	髪	頭	くび	胴	腕	脚	計	%
髪	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記
頭	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
髪	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
頭	3 3 2 2 2 2 2	筆記	3 3 2 2 2 2 2	筆記	3 3 2 2 2 2 2	筆記	3 3 2 2 2 2 2	筆記
くび	2 5 2 2 2 2 2	筆記	2 5 2 2 2 2 2	筆記	2 5 2 2 2 2 2	筆記	2 5 2 2 2 2 2	筆記
胴	5 6 6 5 5 5 5	筆記	5 6 6 5 5 5 5	筆記	5 6 6 5 5 5 5	筆記	5 6 6 5 5 5 5	筆記
腕	2 1 4 4 2 2 2	筆記	2 1 4 4 2 2 2	筆記	2 1 4 4 2 2 2	筆記	2 1 4 4 2 2 2	筆記
脚	2 2 1 1 1 1 1	筆記	2 2 1 1 1 1 1	筆記	2 2 1 1 1 1 1	筆記	2 2 1 1 1 1 1	筆記

—表2(保育園)—

	髪	頭	くび	胴	腕	脚	計	%
髪	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記
頭	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
髪	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
頭	3 (2)	筆記						
くび	1 (4)	筆記						
胴	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記
腕	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記
脚	3 (6) 1	筆記						

—表3(小1)—

	髪	頭	くび	胴	腕	脚	計	%
髪	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記
頭	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
髪	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
頭	3 (6)	筆記						
くび	1 (4)	筆記						
胴	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記
腕	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記
脚	3 (6) 1	筆記						

—表4(小2)—

	髪	頭	くび	胴	腕	脚	計	%
髪	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記
頭	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
髪	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
頭	3 (6)	筆記						
くび	1 (4)	筆記						
胴	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記
腕	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記
脚	3 (6) 1	筆記						

—表5(小3)—

	髪	頭	くび	胴	腕	脚	計	%
髪	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記
頭	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
髪	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
頭	3 (6)	筆記						
くび	1 (4)	筆記						
胴	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記
腕	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記
脚	3 (6) 1	筆記						

—表6(D群児と描画順序)—

	髪	頭	くび	胴	腕	脚	計	%
髪	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記	1 2 3 4 5 6 7	筆記
頭	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
髪	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記	2 2 2 2 2 2 2	筆記
頭	3 (6)	筆記						
くび	1 (4)	筆記						
胴	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記	3 6 6 5 5 5 5	筆記
腕	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記	1 8 6 5 5 5 5	筆記
脚	3 (6) 1	筆記						

—表7(あともどり書き)—

一般的ではない描画順序の子どもと、D群との関連をみると、表6のようになる。各部分の、分母は描画した人数、分子はそのうちのD群児数である。

④この表では、描画の中間である4番目に顔や髪を書く子どもは、70%以上がD群に属している。

⑤また、反対に、顔や髪を最後の方の6~7番目に書いたものは、10%しかいない。

表7は、あともどり書き児の一覧表で、()はD群児数を、最後の行の%欄はD群児の割合を示している。

⑥この表から、あともどり書きは、3番目と6~7番目、顔や髪、腕に多くみられるといえる。

⑦くびをあともどり書きしたものは、わざから3人ほどはあるが、3人ともD群児であることが特徴的である。

この3例についての詳細な検討は、次の機会にまぎりたい。

本研究では、以上、①から⑦までのことが、明らかになりました。

肥満児の身体像に関する研究

○板井修一 秋山俊夫 美穂安子
(久留米大学) (福岡教育大学) (赤間小学校)

目的: 肥満児は、自己の身体に劣等感を持つと一般的に考えられる。しかし、研究者によると肥満児は、肥満傾向の気持ちを持っているという。そのため我々が、常識的に考える感情や認知の仕方は、たまのと、肥満児は持っているだろうと考えられる。そこで我々は、そうした肥満児の身体像のあり方を、意識的レベルと無意識的レベルから検討しようと考えた。

方法

1)対象: 対象は、中学生1年生、2年生の中から選ばれた。肥満度20%以上のものを肥満児(以下肥満群)とし、-19%~19%のものを正常児(以下正常群)とした。肥満群と正常群の肥満度の平均は、それぞれ33.4%、-14%だった。人数は、肥満群14名(男子8名、女子6名)、正常群15名(男子8名、女子7名)である。

2)調査方法: 2種類の調査をおこなった。1つは、被験者自身が自覚し意識でしている身体像を調べるために身体像インベントリーである。これは12項目、5段階尺度で構成されている。回答は次の3つの観点からの評価を始めた。(i)現実評価(自分自身どう思うか)、(ii)対人評価(他人はどう思っているか)、(iii)対人理想評価(他人からどう思われるか)。2つめは、無意識的身体像をうと、ロールシャッハ・テストを実施した。被験者の反応内容から、Barrier%、Penetration%を求め、身体像境界の明暗度をえた。

結果

1)身体像インベントリー: 現実評価では、図1に見

られるように、肥満群は正常群よりも、自分は「体格がいい」と「スタイルが悪い」と思っている。そのため肥満群は正常群よりも、「身体のことで悩むことが多い」。しかし肥満群は正常群よりも、自分は「動作が引きこまっている」と思っている。ところが「身体を動かるのは嫌い」という反対した面が見られた。

対人評価は、現実評価とほぼ同様の傾向が両群間に見られた。ただ肥満群の方が、「動作が引きこまっている」と人から思われていると考えている点が特徴的である。またこの傾向は肥満群男子に強く認められた。

対人理想評価では、どの項目についても両群間に有意差が認められなかった。

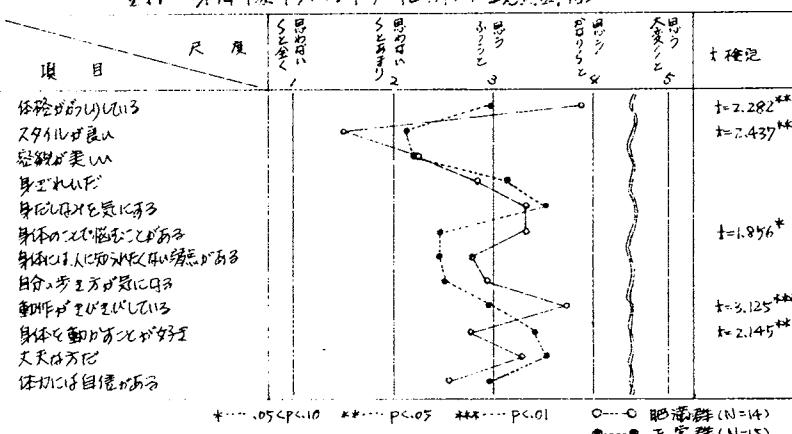
現実評価と対人評価の差をみたが、何ら有意な傾向も見出されなかつた。しかし現実評価と対人理想評価の差をみると、両群とも今の自分よりも、スタイルをよく見てもらいたい気持ちの強いものが多くた。また正常群では、今よりももっと容貌が美しいと思われるという気持ちの強いものが多く、それは男子より女子にその傾向が強がつた。ところが肥満群女子では、むしろ容貌が美しいと思われたくないと思っているものが、6名中3名いた。

2)身体像境界の明暗度: Barrier%は、肥満群の方が正常群よりも有意に強く、この傾向は男子の方が強かつた。Penetration%では、両群間に有意差はないが、た。

考察: 我々の得た結果からも、肥満児は意識的レベルでは、自己の身体に対しぬかず、ではなく感情を持ち、そのことで悩んでいることが知られた。しかし身体像境界の明暗度を調べた結果からは、Barrier%が強く、身体表面に対する関心が乏しいことが明らかになり、

表面ではスタイルが悪いとはおもいと言つても、実際はそれほど気にしていないのではないかと考えられる。この身体表面への無関心が、肥満児の肥満治療への意欲の低さの原因の一つとはしていると考えられるので、肥満治療への動機づけとして、身体像の自己受容への働きかけが求めらるるだろう。

図1 身体像インベントリーにおける現実評価



body imageに関する研究……VI

丸井澄子 ○宮地幸雄
(岐阜大学教育学部)
森川士朗
(岐阜精神病院)
安立富昭
(岐阜赤十字病院)
橋田勝美
(不破ノ関病院)

本研究は、44回本学会の報告、27回東海心理学会の報告に連なるもので、body image measure の準備的研究として位置づけるものである。

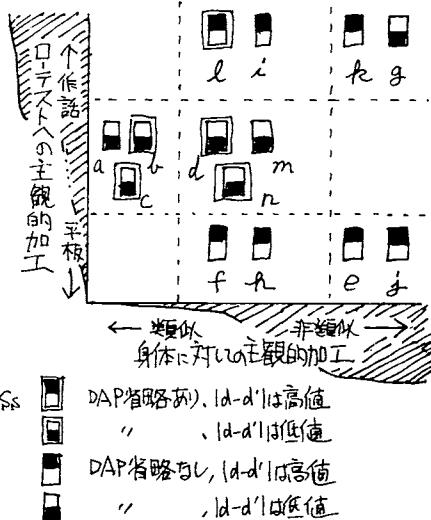
目的 身体に関する閑わりを、評定という自己報告と描画との異なる水準から見え、Rorschach Test(ローテスト)への閑わりとの関係を観る。

方法 (44回本学会発表論文集を参考にされたい)。資料は、その手続きから得た。今回ば次のように整理した。身体に関する主観的加工の度合を、鏡像とイメージの類似(非類似)の5段階評定の総計(d点)を用いて、自己報告の水準での身体への主観的加工の度合とした。描画の水準における身体への主観的加工の度合として、イメージ画、鏡像画の類似(非類似)に関して研究者を行なった評定(d点)を基に $|d-d'|$ の値を用いた。DAP での顔の目鼻立ちの省略にも注目した。ローテストへの閑わりを、植元氏の「反応産出への構え」を参考にし、各の反応に、「差縮反応」、「直観印像反応」、「平板反応」、「限定反応」、「作詰反応」、「恣意反応」の6分類をし、「平板反応」、「限定反応」、「作詰反応」、「恣意反応」の頻度を示した。

結果

(類似) 非類似 Ssの順位	ローテストへの閑わり			DAP の省略 $ d-d' $
	平板	限定	作詰	
a (1)	7	8		0
b (2)	6	8		0 1
c (3)	5	5		0 3
i	4	18	12	16
f	9	1		17
m	9	8	1	4
k	24	8		18
l	9	15	3	0 20
d	6	5		0 4
n	7	7	1	0 4
e	4	23	8	13
g	3	12	7	12
r	2	2	7	1 24
s	1	9	11	4 6

結果を図化してみた。



身体に関する主観的加工の度合(d点)と、インワードロットへの主観的加工の度合とは、必ずしも一定の対応をなさなかったが、身体に関する主観的閑わりを示す者は、ローテストでは、中間領域に位置せず、極端に主観的に閑れる者、或いは極端に主観的加工を示さないというよう2分させられた。他方、身体に関する主観的加工をしない者は、ローテストでは中間領域に位置した。イメージ画と鏡像画に、d点としての主観的加工の度合を示されたSs、つまり $|d-d'|$ が低値の者は、ローテストでは中間領域に位置した。その反面 $|d-d'|$ が高値のSs、描画にd点としての加工の度合を示さない者は、ローテストでは、主観的加工を大なる者と、小なる者に2分させられた。

考察 身体に対し主観的加工の高い者は、描画においてはその度合が低いものであった。評定という自己報告と描画との雨水準のギャップが大なる者は、ローテストでは、極端に平板として、つまりその内面のギャップ故に、平板という防衛的閑わりを、或いは逆にそのギャップを埋めるものとして、極端に作詰的いやゆる主観的閑わりを示したよう考えられる。一方身体に関する主観的閑わりを示さない者は、描画においても加工は少なく、その雨水準のギャップの少なさは、ローテストでも、極端に平板、或いは極端に作詰的となる事なく、いかゆる健康的な反応を示していたと考えられる。しかし多くの多くはDAPに於て上圍に示されるように目鼻立ちの省略を示している。今後は、その問題を考えつつ、被験者数を増し、より深く検討を重ね下さい。

大脑誘発反応に関する生理心理学的研究(1) 一視覚誘発反応と心理学的特徴との関係について一

○小串 武 烏飼 雪子 秋山 優夫
(国立福岡東病院)(城南小学校)(福岡教育大学)

I 目的

末梢の感覚受容器に適当な種類の感覚刺激を加えると、その外來刺激に対して大脑皮質の感覚野に一定の電位変動が生じる。これを感覚性誘発電位又は単に誘発反応と称している。最近の大脑誘発電位の臨床応用面について現状をみてみると、(1) 従来の臨床脳波の役割を補足して、より確実な生体情報を提供する(2) 聴覚・視覚・体知覚障害等の客観的な知覚機能テストとしての可能性(3) さらに従来の脳では得られなかつた領域、例えば内因性又は、心因性精神疾患の診断や心理テストの language-free technique としての期待等に大別して考えることが出来るであろう。

前二者については、すでに多くの着実な業績があげられてゐるが、後者については、多くの意欲的な研究がなされているにもかかわらず、まだ定期的な報告は認められず、暗中模索の段階にあるといえよう。

そこで今回心理テストからみた心理的特徴と大脑誘発電位、その中でも視覚誘発反応 (visual or photic evoked response) との関係を明らかにする事を目的とした。特に今回の実験に於ては、アイゼンクのパーソナリティー理論の中で述べられている神経症的傾向及び外向性・内向性との関係の有無についての基礎資料を得る事を目的とした。

II 方法

i) 脳波の記録方法：三栄測器製 8Ch 脳波計を使用した。電極は皿電極を用いた。導出方法は頭頂部(C₃-A₁) 後頭部 (Inion-A₂) の単極誘導にて実施した。

ii) 視覚誘発反応の測定：三栄測器製医療用デジタルコンピューターを用いた。刺激は、1秒1回の割りでストロボスコープによる光刺激を50回与えた。分析時間は、250 msecとした。尚、出力電圧は便宜上キルビメーターを使用した。iii) 心理検査：神経症的傾向・外向性・内向性を測定するために MPI。

iv) 対象：大学生8名（男子学生3名、女子学生5名）

III 結果と考察：図1は、後頭部より導出したVERの結果である。上段よりMPIのE尺度にもとづき、より内向的傾向を示すものから順に並べたものである。振幅は、キルビメーターで測定したものを図の右端に示している。

図にみられるように内向的な傾向を示す人はほど振幅が大きく、より外向的な傾向を示す人はほど振幅が小さかった。

こういった傾向は、アイゼンクの言う興奮・抑制の理論により、より内向的な人はほど大脑皮質は興奮過程にあり、より外向的な人はほど大脑皮質は抑制されているのではないかと言う彼の説を支持しているのかかもしれない。

図1
視覚誘発反応（後頭部）

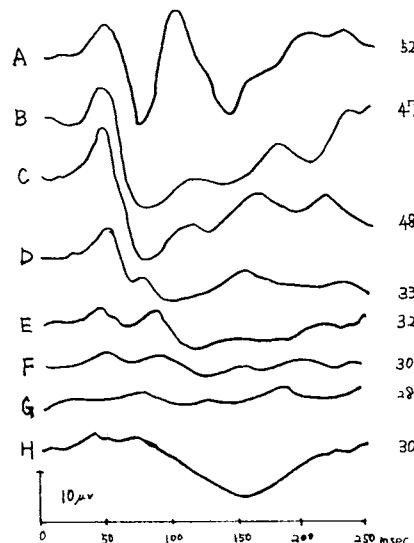


表1
MPI 結果

MPI	A	B	C	D	E	F	G	H
E	9	12	15	27	32	41	43	44
N	40	43	38	11	24	3	1	8
L	2	0	1	10	4	10	18	16

神経症的傾向の強い人はほど高い振幅を示した。これは、神経症的傾向の強い人はほど様々な刺激に対して、非常に強い情緒反応を示すことからみて、自律神経系が不安定で交感神経優位型であり、興奮しやすいといわれている。

それが、高振幅といった形でVERに反映しているのかもしれない。

カウンセリングにおける 沉默の特質(III)

飯塚金次・岸田博・清水幹夫
(東京農業大学)(一)(一)

目的]発言分析の研究の一環として、カウンセリング過程にみられる沉默の特質を明らかにしたい。

方法]来談者中心療法の成功事例にみられる沉默を分析し考察する。本研究では5事例
41面接の分析資料を用いた。

結果] 1) 沉黙の長さによる発現状況

- ①全体的の傾向として5"~9"のことが多い。
沉默の発言が非常に多い。次いで10"~29"短い(10"~29")短い。
の短い沉默、30"以上の長い沉默の順位
発現の傾向が認められた(Table 1)。
- ②カウンセリング過程における沉默の長さ
の変化は事例ごとに特色があり、一定の傾向は
認められなかった。
- ③60"を超える長い沉默はカウンセリング
過程の前半に認められた。さらにどう
事例でも最終面接には認められなかっ
た。
- ④沉默の長さによる発現状況と
カウンセラーカクセラルの関係は明かにじ
きなかった。

2) 沉黙の頻度の変化

各事例ごとに沉默発現頻度に特色
があり、一定の傾向が認められなかっ

3) 沉黙発現型の変化

- ①全体的にはC-C型、CL-CL型、C-C
型、CL-C型の順位に発現頻度が移りた。
(Table 2)
- ②カウンセリング過程における
変化は事例ごとに特色があり、一定の傾向
は認められなかっ

4) 沉黙直前の発言者

- ①全体的の傾向として沉默直前の発言者は
カウンセラーによるものが多い。(Table 3)

この場合、カウンセラーの発言とはエイ、ラン、ハイ、
などの簡単な返答から約80%に達した。その
他はクライエントの述べた感情への發言的発
言であった。

5) 沉黙直後の発言者

- ①全体的の傾向として沉默直後の発言は

クライエントによるものが多い。(Table 4)。この
傾向はどの事例にも面接進行とともに
やや強くなるようである。

考察] 沉黙を面接時間差し、面接側微
々細い、沉默回数が多いため視して心理
をすむなら、ある程度の全体的傾向を知り
得る。アーバンモデルにて沉默の理由
方は人を認めるところ一定の傾向は認め
られており、またも質的分析が必要。

Table 1 沈黙の長さ (1979)

ケース 沈黙の長さ	SI (%)	YI (%)	NO (%)	AI (%)	NK (%)
間(5"~9")	186(65.3)	68(61.8)	37(59.7)	40(34.2)	186(75.6)
短(10"~29")	53(18.6)	28(25.5)	15(24.2)	56(47.9)	48(19.5)
長(30"~)	46(16.1)	14(12.7)	10(16.1)	21(17.9)	12(4.9)
計	285(100.0)	110(100.0)	52(100.0)	117(100.0)	246(100.0)

Table 2 沈黙の型

ケース 沈黙の型	SI (%)	YI (%)	NO (%)	AI (%)	NK (%)
CL-CL	29(10.2)	25(22.7)	22(35.5)	32(27.4)	75(30.5)
CL-C	22(7.7)	2(1.8)	7(11.3)	15(12.8)	19(7.7)
C-CL	129(45.3)	50(45.5)	30(48.4)	47(40.1)	111(45.1)
C-C	105(36.8)	33(30.0)	3(4.8)	23(19.7)	41(16.7)
計	285(100.0)	110(100.0)	62(100.0)	117(100.0)	246(100.0)

Table 3 沈黙直前の発言者

ケース 発言者	SI (%)	YI (%)	NO (%)	AI (%)	NK (%)
CL	51(17.9)	27(24.5)	29(26.8)	47(40.2)	94(38.2)
C	234(82.1)	83(75.5)	33(53.2)	70(59.8)	152(61.8)
計	285(100.0)	110(100.0)	62(100.0)	117(100.0)	246(100.0)

Table 4 沈黙直後の発言者

ケース 発言者	SI (%)	YI (%)	NO (%)	AI (%)	NK (%)
CL	158(55.8)	75(63.2)	52(83.4)	79(67.5)	186(75.6)
C	127(44.7)	35(31.8)	10(16.1)	38(32.5)	60(24.4)
計	285(100.0)	110(100.0)	62(100.0)	117(100.0)	246(100.0)

カウンセリングにおける沈黙の研究(七)

東京農業大学：飯塚銀次，○岸田博，清水幹夫，佐藤淑子；港区教育センター：広井法子；関東中学校，岸間地ひとみ

[目的] 本研究は、複数事例を複数評価者によって評価し、結果を相互に照合しあい、各型ごとの評価結果の動きと、それがカウンセリングの方針に及ぼしていかる効果を探ろうとする。

[手続き] 受講者中心

療法でなされ、完全な形で記録のある3事例を選んだ。

また、沈黙の研究に秀でている実践家を4名選んだ。

面接記録の全文を各評価者に郵送し、返送によって、評価結果を得た。

[結果] 3事例の面接回数と沈黙数をT1に記した。3事例とも正確度には聞きがない。沈黙を発生機序別

T1 3事例の沈黙

事例	面接回数	総沈黙数	平均沈黙数
C	6	100	17
N	13	181	14
K	16	355	22

らを、体験過程を促進させた(P)，調整した(A)，搖らぎを立て直した(R)，分離して(D)，当面の体験過程とは異質のものになった(N)に分け、評価した。N事例について示したのがT2である。この事例を評価した結果の相関値がT3右側にある。評価者

T2 類型別沈黙発現率一覧

事例	CI-C型	CI-CI型	CI-CI型	C-C型	合計%
C	24.7	4.2	19.1	51.8	100.0
N	22.0	53.7	20.1	4.2	100.0
K	19.5	50.7	27.8	1.2	100.0

様であった。C事例は0.98、N事例は0.91であった。3事例を五等分部変換により比較可能とした。K事例の様がT4にあらわされている。各型ごとに事例間の相似度の相関を測った。平均してCI-CI型が0.81、CI-C型が0.61であった。後は0.50以下であった。

各型ごとにP、A、R、D、Nの評価が為されていく。推移の類似性を見た。N、K事例で最も多く認められたCI-CI型、P、Aの評価の双方をみると、これらはCI-CI型には認められなかつた。CI-CI型の沈黙は、K事例の例でT4に示した。最も多いこと、1分部よりV分部が多いことが分かる。僅かに認められたC事例のCI-CI型も他と同様に処理をして、推移を見た。もとよりT2にある毎く全体の4.2%であるが、画

T3 N事例にみる評価傾向とその相関値

	1	2	3	4	5	0	7	8	9	10	11	12	13	Σ	%
P	3	7	7	2	10	9	8	11	21	8	16	21	11	134	74.0
A	1		2	1	5	1		4	9	2	3	4	2	34	18.8
R					2			3	2					7	3.8
D															
N	2													4	6.33
Σ	6	7	9	3	17	10	8	18	32	10	19	25	17	181	99.9

EVI			
EVI	.99		
EVI		EVII	
EVI	.96	.95	
EVI			EVIII
EVI	.99	.99	.96

(N事例)

T4 類型別五等分部変換表 (K事例)

部	I	II	III	IV	V	元
CI-C	26.6	25.5	11.9	15.9	17.6	12.5
CI-CI	37.6	30.7	59.7	60.6	65.3	50.7
CI-CI	34.6	43.8	23.8	20.6	16.0	27.8
C-C	18		46	28	11	21

白いニビには、

矢張り他の事例と同じ方向で変化をしていた。これはCI-CI型の特徴を如実に物語っているものといえる。N事例が過程尺度によると、成功例と判定されておりK事例は失敗例と酷似の変化を示しているので、同様に成功例と判定しうる。Cの事例においては、T2にT5.CI-CI型Pの事例別の推移

部	I	II	III	IV	V
C	2.5	10.0	11.3	17.5	15.0
N	42.8	50.9	53.4	44.9	55.0
K	45.2	54.0	54.7	56.0	68.9

もありよう
い、C-C型
が最も多か
つた。C事
例のC-C型

の評価結果を示したのがT6である。これをみると、P、Aは非常に少なく、Rは回を追って数値が下っていきながら、Nをみると、むしろ上昇している。Dも似てT6.C-C型に於けるC事例の評価

部	I	II	III	IV	V
P					0.5
A				0.9	0.2
R	5.4	3.5	3.7	2.3	1.0
D	2.2	9.6	2.0	2.3	3.6
N	22.4	17.0	24.4	24.6	24.8

の特性が
らみて、
この數値
の変化に
事例には
いる。型

大きな問題が存在しているといえよう。

連絡先：川口市南平2丁目40の15 岸田 博

カウンセリングの過程

府中市立府中第二小学校
(高橋哲也)

目的、心身になんらかの障害を持つ児童の親のカウンセリング過程について明確するものである。

方法、親の面接で、主訴として出てきた障害と診断の結果は異なっている。親は、主たる障を知っていないから別の主訴で相談を申し出ている。

カウンセリングの性格は、技術的にみて、どのような特性があるか。

治療過程、アライエンの内容範囲。

1. 繼続的面接におけるクライエント反応の変化の傾向はどうか。

2. 事例によって治療過程に有意な差がみられるか。

分析の条件、155 ケース面接記録から分析した。

事例中90ケース、終結で、成功したケースとみられた。

継続的面接におけるクライエント反応の変化の傾向

ここで治療の過程を通じて、アライエントの使用範囲の頻度は一貫して推移を示すか、という点について検討した。

アライエントの内容範囲の反応頻度をカウンセリングの過程に応じて表わしたものである。

各段階の範囲の頻度は、パーセンテージで示した。過程の7段階はカウンセラー範囲の場合と同様に区別された。

I - I - A - I	5	3 %
I - I - B - II	10	6 %
I - II - C - III	15	10 %
II - A - IV	15	10 %
II - B - V	10	6 %
II - C - VI	10	6 %
II - D - VII	90	58 %

I ~ III、子ども中心から、親中心に変化していく。

IV ~ VII、親中心であり、終結となる。

1. 親として、子どもの状態をすべて自分の責任として、捉え勝であった。

2. 子どもに対する関心は、絶対的、本能的なもので、子どもへの愛撫、保護、世話を同時に過大な期待・夢を抱くこととすることが多い。

3. 日常の世話、保護、経済的な負担より本質的に現在の子どもの姿と将来への期待に不安を感じている

4. 心理的にショックは極めて大きかった。

I			II			
I	II	C	A	B	C	D
I	II	III	IV	V	VI	VII

5. 子どもに対して、不敏のあまり、過保護としてしまった。

最初は病気だと考え、医療関係に行ったが治らないので、ショックを受けた。

まとめ、①子どもを拒否したり、社会から逃避したり、問題の解決を回避しようとする態度を減少させることができた。自己の内部にある不安、あせり、恥ずかしさ、暗い気分などの否定的な感情を直視し、自分の現実の姿をより受容するようになった。子どもの現実に沿って障害の実体を把握し、子どもの理解が深まっていくなどの変化が現われた。しかし、親の心情として、子どもを普通児に戻したい気持ちや隣人、友人には真の苦しみは理解してもらえない、孤感が残ると述べる。

②親の子どもに対する感情や親との意識が、カウンセリングによって、どのように変化するかをみた結果、現実受容的態度と建設的な方向への努力は、自己理想の一致が高いことは関係していること、及び、カウンセリングが防御を取り去り現実受容と建設的努力へと向かわしめる作用と同時に親の中に、防御を取り去ったのみでは、そのまま失望、落胆の方向へ崩れていく危険性をもった親がいることを知った。

結論、来談当初時、ほとんどの親は、なんらかの相談機関や治療機関を数多くおとづれている。

そのためか、それぞれの諸機関に対する不信感をもっており、信用していなかった。

親の面接回数が多くなるにつれて、親自身が自分勝手であったことに気づき、態度の変容がみられた。

自分の子どもへの障害の程度が理解できるようになり、子どもへの愛情を持つようになってきた。

TST(20答法)の内側からのアプローチによる臨床的人間理解の試み

上野 直
(大阪教育大学)

問題: Kuhn M.H.ら(1954)によって創始されたTSTは、自己態度や自己観を抱える尺度としての意味だけを背負わされ、専ら形式的、数量的、一般的かつ客観的な研究に偏りすぎたように思われる。Kuhnの弟子であるDengin N.K.の提起(1970)にその支持を見い出し、論者はTSTを内側の現象学的視座から取らえ直す著書の試みをこれまで重ねてきた(日本心理学会: 1976, 1977, 1979予定)。

ここでは、被調査者のTST記述を通して、その内的体験の現実に出来る限り近づく限り、「わかること即援助」とする了解・解説により、而らりと臨床的な人間理解の実際を示し、そこにおいてTSTがもつ臨床的意味について少しき検討を加えてみたい。

手続き: 1,2の工夫をこらしたTST調査票を作成し、これをいわゆる健常人と自他ともに認められ成人男子224名について実施した。これの実施後、TST記述の了解・解説の確しかめと被調査者へのフィードバックのための個別面接をあわせて実施した。

結果: ①TSTに臨んで、「私は誰だろ?」との問いに、驚きやとまじいに暴露されるあり難烈な衝撃を受けたとの表明をした者が、224名中205名にみられた(91.5% CR=12.52 P<0.01)。

このことは、この問い合わせが被調査者の存在全体を搖るがむ問い合わせであること、まさに問い合わせる存在としての人間(Strauss E.W.: 1960)の最も基本的な問い合わせることを示唆しているといふであらう。

②被調査者は自分をいはずれも自他とも健康であると認めてはいるが、しかし、TSTのフィードバック面接を含む了解・解説の結果、人間的に健康なあり方(上野直: 東北心理学会 1977)という意味から、論者が気がなり、いえば“健康のなかに病もあり”をあらわすともいえる者が224名中211名にみられた(94.2% CR=13.33 P<0.01)。その詳細は以下の如くである。

すなむち、それを要約すると、人間が本末関係存在であるとき、被調査者のあり方がこの関係性に生きられないということでもある。

みるか(主体的自我)
志向性 ————— 能動性
本末の関係性に生きる

愛身性

被調査者は関係性に生きている
と思っていたり、そのことをあまり意識していないが、本末の
関係性に生きていない。

A. 関係性に全くない(奴、自虐等) 0%

B. 一方的な関係性にある

自意識過剰があり

15%

C. 対象化する関係性にある

孤立しためり方

1%

自己破壊に向うあり

1%

外見的着物にとらわれたり

43%

ベキ編にとらわれたり

33%

専ら過去・未来に向うあり

7%

これらあり方は、結局、自分、人為的な自分にとらわれ、本末の自分に向いかつ出しがないため、ある意味で子産無事かもしれないが、その愛身性や逆žeに象徴される灰色があり方であるといえようと思われる。

③TSTの記述中、またフィードバック面接を含むTSTの了解・解説によって、自分のあり方に気づいた被調査者は211名のうち、6名と17名であった。

人數的ケク数ではあるが、だが、このことはTSTの臨床的意義を昭らして注目したいことであるといえよう。

検討: ①TSTの方法論的取らえ直したよ、結果②に示される如く、他者・他諸事物・事象にも共通する被調査者の自分の基本的なかかわり方、つまり規定と生きる人に密着した援助・理解に追うることが示唆される。TSTのこうした活用は人に理解即援助を明らかに臨床的道筋を提供することになろう。

②結果①および③に示唆される如く、TSTは人間存在の深所にふれるると同時に“気づき”という援助性を内包していることが示唆される。しかも、被調査者は言ふに及ばず論者に“健康のなかに病もあり”を提起したことは、日常の我々の健康的なあり方に最も富む問いを投げかけているようと思われる。

③それについても、TSTのこうした展開が論者の基本的なあり方に深くかかわる、あり、そこから逆に、論者自身のあり方が裏に向かれたり思へがすらのである。

なお、本研究の実施にあたり、大阪・人事問題研究所所長清水端三氏初めスタッフの方があすが、大きかったことを附記しておきたい。

アルコール中毒者の集団精神療法

○甲府・住吉病院 佐藤哲男
 山梨日下部病院 中里 弘
 山梨県立北病院 遠藤定雄
 県精神衛生センター 長沼勝利

I 目的及び方法 アルコール中毒者の性格傾向については多くの研究があるが、それらに共通していることは、アルコール中毒者は性格の偏倚が甚だしく、内省化は不得手で自己認識は勿論のこと、自己のおかれている現実状況を認識することができない人達であるということと、患者も経験上そう考えるものである。

しかしアルコール中毒者といわれる人の一部には、知的にも高く内省化が可能と思われる人が時折みかけられる。その様なアルコール中毒者に集団精神療法を行うと、初め自己的ことはともかく周囲に対する不平不満をのべたりして抵抗を示すが、治療者の指摘・支持及び集団内相互作用により、次第に内省化が可能となり、自己がアルコール中毒者であること、つまり弱さをもつた自己を認識できる様になってくる。

その際治療者は患者に対して、医学的にも、社会・経済的にも、精神的にも、客観的にはアルコール中毒者といわれる状態にあることを認識させ、ついでその様な状態に至った患者自身の精神的な弱さを認識させていくという方法を用いている。今回集団精神療法内でのアルコール中毒者の自己認識過程について提示し、皆様のご教諭を伺いたくここに発表するものである。

II 結果(症例Y) 45歳の男性、父は教員で、兄弟も教員や一流会社員であり、Yは大卒でありながら飲食店の支配人であることに劣等感をもっている。酒のために晩婚となっており、勤務中の飲酒や家の隠れ飲みがあり、振戦せん妄の出現と妻の勧めにより入院となった。集団精神療法内でのYの言動の変化を軸に、次のⅢ期に分けて考える。

第Ⅰ期 不平不満を述べた時期 この時期のYは、自ら入院したものの、それなりにプライドを持つ自己がアルコール中毒者であることを認めるへの抵抗と、精神病院へ入院したことへの不満により、治療者や治療内容に対する不平不満に終始していた。ある日一気に爆発したYの不満に誘發されて他の患者達が不満を述べると、Yは治療者の役割を取った。一方治療者がなぜ入院したのか尋ねると、Yは入院するだけのことはしてきたかも知れないが、騙されて入院したということを述べていた。またこの頃には、内省化が可能となってきた他の患者より指摘など集団内相互作

用が活発であった。

第Ⅱ期 自己の言動の不一致を認めた時期 この時期には、前期に引き続いた治疗者の指摘と、集団内相互作用により、Yの言動の不一致が明らかになってきたが、Y自身もそのことを認められる様になってしまった。するとYは入院以前の自己がいかに勝手であったかを認識できる様になってしまった。

第Ⅲ期 自己認識が可能となった時期 この時期のYは、治療者の脇へ坐ったり、治療者の役割を取ることが目立つ様になつた。またYは、発言は慎重になり、入院時の自分の不満について内省的に語る様になり、自己のおかれている現実状況を認め、自分がアルコール中毒者であることを認める様になつた。

Ⅲ 考察及び結論 性格の偏倚が甚だしく、自己認識ができないといわれるアルコール中毒者の内、知的にも高く内省化が可能と思われるアルコール中毒者たる集団精神療法を行った結果、次の様な変化がみられた。

初めYは、周囲に対する不満を表明することにより、自己がアルコール中毒者であること、つまり弱さを多くもつた自己を認識することへの抵抗を示していた。

しかし治療者の指摘と集団内相互作用により、Y自身の言動の不一致が明らかになるのに従い、Y自身も自己の言動の不一致を認めざるを得なくなつた。それと共にそれまでは周囲のみ向いていたYの関心は、自己の精神内界へと向かってきており、入院以前には飲酒により避けってきた、Y自身の弱さを認識することがYにはできる様になつた。自己の弱さを認識できる様になつたYは、それを補うが如く治療者に同一視(identification)して、治療者の脇へ坐ったり、治療者の役割(therapist role)をとつたりする様になつた。このことは他のアルコール中毒者への侮蔑といえ、Yは自己の弱さを認めながらも、一方では他のアルコール中毒者とは違うのだという自尊心をもつていると考へられ、このことが、Y自から酒を止めていくうとする動機づけの一つになったともいえるのである。

この様に、個人精神療法では治療者への攻撃や不満に終始しかちなアルコール中毒者でも、集団精神療法においては、治療者の指摘・支持だけでなく、集団内での共感、示唆、介入、支持などの集団内相互作用により、患者のもつ問題点が、集団反応として可視的になり、対象化されることができる様になるのである。

この発表をおわるに当つて、明治学院大学前教授元吉功博士、同大学教授大島寅夫博士、住吉病院長有泉信博士、同副院長松野正弘博士、同医局長中西数子医師に感謝致します。

対人恐怖の対人関係の距離のもち方

—『no』という対人関係の断わり方の教育—

- 長沼勝利 中里弘
 (山梨県立精神衛生センター) (山梨日下部病院)
 遠藤定雄 佐藤哲男
 (山梨県立北病院) (住吉病院)

I はじめに 漢者は対人恐怖の為に人との距離のもち方がうまくいかない困っている患者に対して、治療者が新しい対象としての対人関係のあり方を示し、指示することを治療の一つの技法と考えた。

具体的には、患者は他人に断ることで他人に嫌われてしまう自分を認められないものであった。それは、自分の中に bad なものが存在し得ない=Aggressive なものを認められない=心性であった。そこで漢者は、このような状況にある患者に対して、他人に嫌われることがあるても、それが本人にとって快感につながることを体験させた。そしてこのことの方が、患者の中にある negative な感情を減少させるものと考えた。そして漢者は、他人に対して断ることを具体的指示的に教えた。今回は、この症例を報告し考察をする。

II 結果(症例:A) 初回来所時20歳の女性で同姓は男3人、女3人の6人であり、末子である。Aは山梨県内のある大学生で下宿生活を送っている。Aは中学3年生のころから自分自身性格が変化したと感じ、大学3年の秋、初めて当センターに来所した。以下、大学3年の秋から卒業するまで(1年4ヶ月間 約50回)、週一回の精神療法過程を報告する。

精神療法の初期においてAは、下宿での生活や家族のことを語り、現在の状況と将来への不安を語っていた。これに対して、漢者はまだ聞くだけという態度を取り続けた。すると、Aは面接場面について、「現在、他のどの場でも経験できないことを経験できる場と思っている」と肯定的感情を表現するようになってきた。

その後、「感情のこもった暖かく父母の笑顔を見たことがない。怒られたこともなく、「戴きます、只今」などの生活習慣もなかった」と幼児期を想起して、両親への不満を語っていた。そして、「今は自分が独占して頼れる人が欲しい。人を信頼できるように再教育して欲しい。例えば、親が子どもを怒ってもそこには、子どもを基本的に信頼している前提があると思う。そのような対人関係を経験したい。しかし、一週間に一度では……」と漢者に依存感情と不満を向けるようになってきた。その後、「就業として接してくれるNさんは、信頼できない記憶だけれど……も

の足りなさを感じる」と不満を向けるようになってしまった。このようにAは、両親に対する不満と患者に対する不満を同レベルで語れるようになってきた。

終了まで約2ヶ月と迫った時、「下宿の人からある宗教団体に誘われて何回か集会に出席したが、どうしても断わりきれない。断れない自分にいや気がさしている。断ると相手にいやな思いをさせるのである」と悩み、断る方法を教えて欲しいと訴えてきた。このことについて、漢者は断る一つの方法を具体的に教えた。すると、この問題について切り抜くことができた。

III 考察 精神療法の初期においてAは、現実生活での対人関係における困難さや予期不安などについて語っていた。Aはこのようなことを語るうちに、面接場面が日常経験する対人関係とは違ったものを感じ始めた。それは親子関係でみられる基本的信頼とでも言うものに似ていると語り、依存感情を表現するようになってきた。このことと並行して、両親に対する不満と患者に対する不満を同レベルで語るようになってしまった。

このように治療関係が安定した後、「下宿の人からある宗教団体に誘われて何回か集会に出席したが、どうしても断りきれない。云々」と悩み、断る方法を教えて欲しいと訴えてきた。このことは、断る(自分の中にある bad なものを相手に向ける)ことで他人に嫌われてしまう不安であった。Aは断りたい気持ちが強いにもかかわらず、断わらざるにいること断わってしまうことで悪くなるかのどちらかを選ぶか葛藤に陥っていたと考えられる。

このように考えれば、Aは他人に嫌われてしまう自分を認められないものであり、自分の中にある bad なものが存在し得ない心性であると言える。Aにとって、自分の中にある bad なものを認め一時的に「いや」と言って断ることの方が、次々「はい」と言ってしまうことより、自己に対する negative な感情が少なく同時に相手に対する Aggressive なものが軽減し快感を得られやすい状況であったと考えられる。そこで漢者は、新しい対象として一時的・部分的に自我の代理をすることで、A自身快感を選びやすい方を具体的指示的に教えた。

このように指示的側面をもったのは、思春期の精神療法でみられる、治療者が新しい対象として一時的・部分的に自我の代理をすることと同様の意味を有したと考えられる。

一境界例の示した need-fear ジレンマを述べて

○山梨県立北病院 遠藤定雄
 山梨日下部病院 中里 弘
 精神衛生センター 長沼勝利
 甲府住吉病院 佐藤哲男

目的及び方法

精神療法を継けてゆくと、治療者と患者との距離感の持方が問題となり、この距離感の操作が、治療に強い影響を与える事がしばしばある。とりわけ、境界例の場合には、need-fear ジレンマが強いため、距離の問題は大きな間に事と見える。今回、演者は、患者の距離感の問題について、患者の患者自身の衝動との距離の持方が、治療者を中心とした周囲の人々との距離の持方と、ほぼ同一であるという視点に立って、胃部異常感を主訴とする症例について分析、検討する。

結果（症例）

症例 A は、昭和28年生まれの男子で、同胞は妹2人。父母は農業と酒類販売業に従事。演者の印象では、父は頑固、權威的、母は、情緒不安定な感じをうけた。妹2人に亘って、A の報告では、責任感のうすり、レジヤー型の女の子であると言う。A は、高校卒業後某銀行に勤めたりしたが、勤務後2年半位した頃から、胃部に異常感、不快感を生じ、銀行を退職した。後、自宅にて生活しながら、内科医を転々としたが、内科的にはすべて異常なしとの診断をうけた。昭和52年7月より、当院に通院し、昭和53年1月より、精神療法を開始した。以下現在までの面接過程について、距離関係に焦点を当て、四期に分けて検討する。

Ⅰ期 Xモ帳を使用した時期

治療者との距離は、Xモを通じての関係であり、又患者自身の衝動との距離も、Xモを使つて衝動の活性化を強く防衛した時期である。

Ⅱ期 Xモ帳を使用しなくなった時期

会話の内容は、Ⅰ期とかなり重複しているが、Xモを使用しなくなり、その分だけ、治療者との距離と、患者の患者自身の衝動との距離は接近し、強い防衛をしなくなる、交流ができる状態となる、た時期である。

Ⅲ期 依存葛籠が表面化した時期

治療者との間では、治療者の前で、依存葛籠を出さざようになり、又患者自身の衝動との間では、意識化はできなくなってしまう。本人自身の中にある依存葛籠を表現できるようになる、た時期である。

Ⅳ期 攻撃することを安定化しようとした時期

治療者との関係では、攻撃的、競争的という形で、

依存葛籠をコントロールしながら、治療者にのみ込まれようを不安を防衛し、患者自身の衝動との関係では、他者（治療者）の存在を無にするような、激しい攻撃的傾向を表現するようになつた時期である。

Ⅴ期 攻撃する自分を語れるようになった時期

治療者との関係、患者自身との関係にありて、内省化がすすみ、自己の抱いた攻撃感情を、言語化する事で、客觀化するようになつた時期である。

Ⅵ期 自分の感情を客觀化するようになった時期

治療者との距離は、言語化、内省化により、安定化し、又衝動との関係では、内的感情を客觀視するようになつた時期である。

Ⅶ期 脳親との対決が生まれるようになった時期

治療者との距離は安定し、又衝動も客觀化、言語化するようになつた事で、現実的に、脳親と対決しながる内省化をすすめられるようになつた時期である。

Ⅷ期 症状について内省化がはじまる、た時期

治療者との距離、衝動との距離は安定し、これまで語られなかつた症状について、内省化がはじまる、た時期である。

考察及び結論

初め、A は、自己の衝動の活性化を防ぐために、Xモを使用して面接に臨んだが、面接がすすむにつれ、次第に A 自身の内包する問題が表面化していった。衝動が表面化するのと比例して、治療者との距離も接近していったが、殊に、Xモを使わなくなつた頃から、依存葛籠や攻撃傾向が目立ち始め、衝動の顕在化と共に、治療者に対する、このような物が向かうれていた。

この時期に治療者は、A のこのような治療者に向けた物は、治療者に投影された A の基本的衝動傾向であると考え、A のじりじりするような感情表現に対して、寛容の態度を取り続けた。そうする事により、A は、次第に自己を内省化、客觀化するようになり、衝動との距離を持つようになると共に、治療者に対する態度も安定化してきた。この事は、自己の衝動を客觀化し、それによつて距離を持つようになつた事であり、分離といふ新しい防衛機制を確立するのであると考えられる。このようを過程をへて、A は、治療者に投影した感情は、脳親に向けたやうな物であると気づき、又自分自身の思想になつて胃部異常感につながり、内科的疾患ではなく、心理的なものに起因していふことを洞察し始めた。こうして、現在はこのようを自己について、更に内省化をすすめている。

本論文の終りにあたり、山梨県立北病院医長木泉隆徳先生に感謝致します。

うつ・離人感を主訴とする境界例の精神療法

同一視の問題

山梨県立精神病院 片桐 弘 精神衛生センター 長沼勝利
県立北病院 遠藤雄一 甲府住吉病院 佐藤哲男

1 はじめに 境界例はきわめて今日的な問題である。境界例の多くがうつ気分・離人感・無力感とともに発症する。患者は、これらの体験は対象像の喪失（すなわち自己像の喪失）によるものと考えている。そのため境界例の治療の目標を症状の消失におかず、自己像（対象像）の再建とそれ以後の自己同一性の確立においている。

この自己像の再建にはいかなる治療法が最適であるか論議が起こると思われる。患者は患者の多くが青年期の人であることを、境界例の人や精神分裂病者とはほんじ心性であることをから、その対象関係の持ち方に特有がある。この特有の中に対象との合体を求め、その中で肯定しようという傾向がある。二つ点を主に考え、患者と治療者の関係を鏡に映す。実像と虚像のように対となり、対応の中で、患者が「治療者」となってしまうことを計り、その「治療者」の中から、患者自身の像を獲得、再建できるようにしていくことを考えている。

この患者が「治療者」にならということは、別な表現をすれば、患者を台紙にして、そこに治療者を印刷することとも言える。

本報告の患者は、強度の無力感、疲労感、自己喪失感、焦躁感、うつ気分を体験していて、日常生活で何もできず、ゴロゴロしていたが、治療によて現在は家業を手伝っている。

2 症例 実業高時代剣道選手として活躍、そのため某大学に進学。しかし、本人の体験としては、高2の頃から、うつ気分・離人感・無力感に悩んでいた。大学の寮生活に耐えられず、周囲と隔絶していると感じた1年の夏には退部。その後何度も上京し、大学生生活だけは続ければ努力したが失敗、その間にあちこちの病院で治療を受けたが持続せず、ついに退学をし帰郷。

家に帰っても症状は変化せず、家業の手伝いもできず、ほとんどアラブアレーハーして、対人希求的な面はあって、友人を求めて街をゴラゴラすることはできず。

当院受診をするようになってからも3年間は薬物療法を外来で受けているだけである。対人希求的な点や、境界例と考えられたので精神療法による変化が期待できることで、昭和50年春から精神療法が開始され

た。

精神療法の初期は、境界例の心性のためか、なかなか会話にならず、精神療法を休むこともあった。この頃の患者の諸々内容は気がわからない、気が沈む、充実感がない、男としてだめだといふことである。

昭和50年4月に当院才1回目入院となる。入院これからも主觀的体験はうつが続いていたが、精神療法も毎回休まず、てくろようになつたことや、一種つかわいらしさを示すよつを退行と見せるようになつた。

これは、初期の精神療法でなかなかはかばかしくない、たゞか8月頃から患者が患者とキャラクターをすることと、精神療法室以外の交流を始めたことが大きく影響したようである。

9月頃には、やわらかさ態度で、沈んでいた様子が消えるようになつたが、10月になると急に自殺企図を何度もするようになった。ついに11月になり、首を切ってしまった外科病院に収容され、そのまま当院退院。

その後、当院には来れないとい、家で強度のうつに陥りつづけていたが、昭和51年になつて上京し、某大学病院に入院（診断名 うつ病様の精神病質）

8月突然に大学病院に居られなくなつたからと主張し、主治医の紹介状を持って、当院に来院。どうしても入院させてくれと家族とともに懇願した。大学病院にいらっしゃなくなつたのはまだ病院職員（異性）のことと相手も病院にいらっしゃなくなつた。もう死ぬしかないとい、全身痙攣細々として幽靈のようであつた。

この時の再会は劇的なものであつた。この時の患者は、前、入院せまいと自己像の再現、芽吹きそうになつて、いなみに、対象を失う状況となつたため、何もかも失つた死靈となつてしまい、対象を求めてかけていた、患者に再会することでエネルギーを注入され、めきめきと元気になつた。この元気にならには、患者が対象の前で現実の存在として、患者本来あると推定される像を作り出すことで、患者が自己像として受け取りやすい方法を取つた。この患者によつて作られた像は患者が自己像として、自己の中に印刷することが続けられた。（スカーツが主）その結果は、かなりの程度で改善されてきつていける患者の体験でわかる。

この「治療者」の患者の部分と、患者自身が本来持っていた患者らしさや芽吹え、活動するようにならじと、この両者間の葛藤がひきおこされる可能性がある。うまく統合するには、この二者はエデン、バス様の葛藤を体験するといふ考え方もあり、この解決こそがやまと患者の同一性確立となりうると考へられる。すなわち、合体様の同一視に対し、治療者が具体的に存在する。

人名索引

あ

- 青柳 肇……… 26, 27
 秋重義治……… 108
 秋山俊夫……… 70, 131, 133
 浅野恭子……… 59
 安島智子……… 57
 我妻則明……… 65
 安立富昭……… 132
 阿部明子……… 125
 天川烈……… 36, 37

い

- 飯島澄子……… 109, 110,
 111, 112
 飯塚銀次……… 134, 135
 伊賀憲子……… 24, 96, 97
 池田直博……… 72
 石郷岡泰……… 4, 121
 石津元……… 90
 泉山中三……… 15, 16
 板井修一……… 131
 板倉善高……… 99
 市原茂……… 80, 81
 伊藤格夫……… 82, 83
 今井省吾……… 73
 今井保次……… 18
 今橋寿代……… 100
 岩田彰……… 127

う

- 上野巖……… 137
 瓜生多嘉子……… 36, 37

え

- 遠藤定雄……… 138, 139,
 140, 141
 遠藤徹……… 49, 50

お

- 及川卓……… 101
 大倉元宏……… 8
 大下文輔……… 45
 大野誠……… 113, 114, 115
 大道安廣……… 68
 大村政男……… 113, 114, 115
 小川俊樹……… 128, 129
 奥澤良雄……… 46
 小串武……… 133
 長内嘉文……… 126
 小野公一……… 86
 小山一郎……… 61

か

- 香川眞……… 30
 垣本由起子……… 14
 角山剛……… 19
 加古明子……… 125
 柏木恵子……… 3
 片野卓……… 61
 金田富美……… 51
 嘉部和夫……… 21
 鎌形みや子……… 113, 114, 115
 鎌田勇……… 77
 亀田紀子……… 42, 43, 109,
 110, 111, 112
 簡仁育……… 103
 神作博……… 79

神原くみ子……… 109, 110,
 111, 112

神戸文朗……… 26
 き

菊地哲彦……… 126
 岸田博……… 134, 135
 岸本英男……… 52
 北瀬扶美代……… 98
 北原歌子……… 64
 木村俊夫……… 78
 金城充……… 104

く

久米稔……… 25
 倉持泰三……… 126
 栗林仁……… 74
 吳礼子……… 42, 43
 黒岩誠……… 28, 96, 97
 黒田正典……… 7
 桑原衛……… 82, 83

こ

黄銀鈴……… 105
 小泉英二……… 2
 小嶋正敏……… 53
 小閑賢……… 25, 96, 97
 児玉省……… 42, 43, 109,
 110, 111,
 112, 125

後藤嘉余子……… 47
 小林純一……… 5
 小林一史……… 29

さ

坂口洋……… 69

坂 田 一	20	竹 原 一 雄	72	長 沼 勝 利	138, 139, 140, 141
佐々木 初 夫	66	田 嶋 善 郎	92, 93	長 野 文 典	39, 119, 120
佐 藤 啓 子	55	田 之 内 厚 三	21	長 橋 千 佳 子	67
佐 藤 隆	17	田 村 京 子	109, 110, 111, 112	中 原 弘 之	48
佐 藤 哲 男	138, 139, 140, 141	丹 治 和 典	87	長 町 三 生	11, 12
佐 藤 方 戄	32, 33, 34, 35	つ		永 松 純	31
佐 藤 淑 子	135	土 屋 明 美	40, 56	中 山 和 子	116
座 間 味 宗 和	100	常 木 暎 生	80, 81	長 山 泰 久	11, 12, 13
し					
志 津 野 知 文	15, 16	常 間 地 ひとみ	135	鳴 沢 實	122
清 水 幹 夫	134, 135	鶴 光 代	68	に	
城 仁 士	44	鶴 田 正 一	9	西 岡 昭	8
白 井 俊 子	92, 93	て		丹 羽 稔	98
す					
杉 本 佳 隆	39	手 島 茂 樹	113, 114, 115	ね	
鈴 木 順 一	106	と		根 本 伊 左 夫	107
鈴 木 辰 雄	11, 12	戸 田 勝 也	89	は	
鈴 木 百 合 子	40	豊 原 恒 夫	15, 16	橋 田 勝 美	132
須 藤 智 子	128, 129	鳥 飼 雪 子	133	長 谷 川 孫 一 郎	67
せ					
関 根 静 江	109, 110, 111, 112	な		花 房 香	130
た					
代 喜 一	122	内 藤 恭 子	42, 43	林 誠 治	88
高 久 信 一	21, 27	内 藤 忠 昭	53	林 忠 弘	98
高 野 隆 一	23, 24, 27	内 藤 哲 雄	18, 49, 50, 53	原 善 平	117
高 橋 哲 也	136	中 川 大 倫	91	坂 内 功	66
高 橋 宜 昭	69	長 崎 拓 士	38	ひ	
高 橋 秀 和	123	中 里 弘	138, 139, 140, 141	樋 口 義 治	32, 33, 34, 35
高 橋 泰 子	124	長 沢 美 智 子	127	広 井 法 子	135
高 畑 隆	36, 37, 127	永 沢 幸 七	54	ふ	
高 安 成 誌	69	中 静 研 二	36, 37	福 井 嗣 孝	9
高 山 靖 子	68	中 塚 綾 子	41	藤 井 耐	84

ほ	三 島 正 英 25 宮 地 幸 雄 132 宮 本 昇 85 宮 本 直 美 71	山 崎 矛津子 118 山 下 素 邦 76 山 田 喜美子 48 山 田 麻有美 95
星 一 郎 36, 37		も
星 野 美智子 23, 24		ゆ
細 川 直 子 58		湯 沢 雍 彦 1
穂 積 登 6		
本 間 道 子 22		よ
ま		吉 川 晴 美 40
前 田 豊 70		吉 光 清 26, 27
増 山 英太郎 80, 81		
増 田 直 衡 15, 16		わ
松 浦 光 和 102		渡瀬 安 子 131
松 村 康 平 55, 56		渡辺 朝 美 98
丸 井 澄 子 98, 132		渡辺 準 一 13
み		渡辺 忠 62
三 浦 利 章 13		
三 島 二 郎 38		
	や	
	八 木 昭 宏 75 矢 沢 圭 介 23 谷 中 孝 子 60	
	蔽 原 晃 94 山 口 耕 一 32, 33, 34, 35	

日本応用心理学会第45回大会贊助者芳名

(A B C順, 敬称略)

大東印刷工業株式会社
合資会社 福屋商店
有限会社 更科

本大会の開催にあたり、上記の諸団体より多大のご支援をいただきました。ここにその芳名を記して感謝の意を表します。

昭和53年11月

日本応用心理学会第45回大会準備委員会

委員長 森重敏



大東印刷工業株式会社

東京都墨田区向島3丁目33番5号
電話(625)7481~3(代)
〒131



心のかよう広告づくり

企業と消費者の究極の利益は、正しい情報の伝達と、思いやりのある心のかよい合いから生まれます。

博報堂の願いも、正しい情報を伝え、心のかよい合う広告をつくることです。

マーケティング・コミュニケーションの専門会社

博報堂

東京・大阪・名古屋・福岡・札幌・仙台・新潟・静岡
広島・高松・那覇・金沢・盛岡・横浜・千葉・青森・福島
ニューヨーク・デュッセルドルフ・ブラック・シンガポール・ジャカルタ

中央大学教授
稻葉信龍 著

心 理 学 史 近 世 篇

■ A5判／並製144頁／価一六〇〇円
本書は、現代の心理学が西欧の哲学者や科学者の思索と実験の積み重ねから生まれたものであることを示し、それらの人々約30人の生涯と業績を列伝的に解説するものです。

日本大学
佐花大安
藤澤村藤
成政公
誠一男
共著

心理検査の理論と実際

■ A5判／上製324頁／価一二〇〇円
本書ははじめて心理学を学ぶ人のための「心理検査理論」や「検査実習」、「臨床心理学」のテキストとして編まれたものですが、心理学と人間生活との結びつきを中心にして叙述をすすめた心理学の入門書です。

日本大学
安藤公平
妻倉昌太郎
大村政男
他共著

人間生活と心理学

日本大学
安藤公平
山岡政男
大村淳
共著

■ A5判／上製368頁／価一四〇〇円
本書は心理学を修める学生のテキストとして編まれたもので、心の科学的な研究における中心的な面をとりあげ、心理学がどのように活用されているかを概観しました。

こころの科学

東京都千代田区神田
駿河台3丁目7番地

駿河台出版社

電話(291)1676(代)
振替東京9-56666番

●高校・短大・大学の副読本として採用多数!!

A・ゲゼル著 生月雅子訳

狼にそだてられた子

B6判一五〇頁 價八〇〇円

インドの片田舎で生まれたカマラが、狼と共に七年間をホラ穴の中で過ごした後、人間世界に引きもどされて十七歳で死ぬまでを、シンク牧師が観察して記録した生の日記を資料に、アメリカの著名な心理学者が科学的メスをふるつてまとめたものである。異常な環境の中に育ったカマラを分析することによって、人間性の真髓と人間の成長の可能性を改めて見直すことができるであろう。心理学・教育学・育児学などの副読本として多くの学校より一括ご注文をいただきております。最近、他社より同名の書が出版されましたので、ご注文の際はゲゼルの本をご指定ください。

ゲゼル心理学シリーズ全四巻

岡 宏子訳 乳幼児の発達と指導	価三五〇〇円
山下俊郎訳 乳幼児の心理学(出生より五歳まで)	価四〇〇〇円
周郷 博訳 学童の心理学(五歳から十歳まで)	価四〇〇〇円
平井信義訳 青年心理学(十歳から古歳まで)	価四〇〇〇円
ピ ア ジ エ 入 門	価七〇〇円

112 東京都文京区目白台3-21-4

電話 東京03(945)6265

教育心理学

山下俊郎・澤田慶輔編著
A5判・定価1500円

青年心理学

依田 新編著
A5判・定価1300円

青年期における性、感情、人生觀の形成等を心理学的な觀点から追究。教職課程のテキストとして、また青年の指導者、教師の方々ばかりでなく、青年自身の自己理解のためにも好適の書。

心理学的社會心理学

中村陽吉著
A5判・定価1200円

本書は一般的な入門書として、社會心理学と呼ばれる領域で從来あつかわれたことをできるだけ広範囲にとらえ、それらがい分かる手法で研究されているか、その研究の状況を概観。

心理学的家族関係学

岡堂哲雄著
A5判・定価1300円

本書の前半では、家族関係の諸理論をできるだけ整理して、その全体像を明らかにし、また後半では、夫婦関係、親子関係および老年期に関する現代的問題に対する心理学的な取り組み方を提示して、家族関係学の入門テキストとした。

保育学事典 言語発達の臨床 1・2

山下俊郎監修定価4000円

田口恒夫編 各定価1500円

『お茶の水女子大学家政学講座』

①改訂児童臨床学	A平井信義・浅見千鶴子著 A5判・定価1800円
②児童保健と精神衛生	平井信義・田口恒夫他著 A5判・定価1800円
③改訂児童保健と精神衛生	平井信義・松村康平著 A5判・定価1800円
④児童発達教育学	A平井信義・田口恒夫他著 A5判・定価1800円
⑤改訂児童発達教育学	A平井信義・田口恒夫他著 A5判・定価1800円

★図書目録呈★東京都文京区大塚2-1-17

光生館

☎(03)943-3335(代)／振替東京4-130621

ご好評をいただいている三検査をご案内いたします。いずれも実施及び判定が簡単で、特別な技術がなくても診断できるように構成されています。大変役立つものばかりです。資料請求されご審査の上、ぜひご活用されますようお願い申し上げます。
(三検査ともカタログ資料を無料で差し上げます。)



千葉テストセンター

スイスのユング研究所のD・カルフ女史によって研究開発され、登校拒否など情緒障害の診断と治療が同時にでき、簡単で大変役立つものです。

心理診断法として有効なロールシャッハテストの集団式。学校等で多人数の適応状態や精神健康の診断に最適で特別の診断技術がなくとも実施・判定ができます。

研究開発
日本総合教育研究会
カタログ資料請求はハガキで
職名記入の上ご請求ください

TEL 03(399)0194

〒167 東京都杉並区下井草4-26-4

サンドプレイテクニック
箱庭療法用具

集団式ロールシャッハテスト
L.S.R.T.

物語主題分析法
L.S.T.A.T.

用具一式 75,000円
解説書 3,000円
用紙(50人) 2,000円

スライド 20,000円
解説書 2,000円
用紙(25人) 2,500円

54年春
臨床研究者用試版完成
発売予定です。

祝 日本応用心理学会第45回大会

- 平素、会員の皆様には、多大なご協力をいただき深く感謝いたしております。
- 日本応用心理学会のご発展と本大会のご成功を祈念いたします。

社団法人 輿論科学協会

理事長 牧田 稔
理事総務局長 高月東一
理事研究事業局長 加留部清

■ 業務内容

世論調査、市場調査、従業員意見調査
社会心理学的研究調査、監督者研修

株式会社 マーケティングセンター

代表取締役 牧田 稔
常務取締役 斎藤 定良
常務取締役 岡本淑人

■ 業務内容

市場調査（需要予測、広告効果測定
購買動機調査、各種パネル調査）

痛みの心理学

ヒルガード夫妻著 斎藤稔正訳
生理学的な要因の他に、心理的、社会的要因などが複雑に絡み合つて
の痛みを、著者独自の「新分離理論」をもとに、癌、産科、手術、歯科等の
症例を通して具体的に検討し、ユニークな鎮痛法を展開する。

不

平

等

A 5・¥400
A 5・¥400
A 5・¥400

C・ジエンクス他著 橋爪貞雄・高木正太郎訳
学業成績を左右するものは何か／生徒の成績は、学校の施設・カリキュラム・教師等の特質にほとんど左右されない——コールマン調査の再分析・
調査を通じ、社会的な機会の均等化にはたず学校教育の無力化を実証。

A 5・¥320
A 5・¥320
A 5・¥320

乳児保育の理論と実際

森昭著作集第三巻
道徳教育の反省／道徳教育の目標を、人格の内面的自覚

石垣 恵美子著
自ら豊かな育児経験をもつ著者による独自の理論と実践
とを直結させた画期的な育児指導書。

I・Qの科学と政治

L・J・カミン著 岩井勇児訳
イジエンセン・バート、ヘアン・スタイルンらのI・Q遺伝論を
イデオロギーの産物として痛烈に反証したI・Q環境論。

教育の実践性と内面性

I・D・サティ著 國分康孝他訳
フロイドの体系的批判を通して、人類における愛と憎し
みの発生・構造を明確にした名著の完訳。

胎生論心理学

浜畠 紀著
人間の心理的発達の全過程を統一的に把握・詳説する。

A 5・¥400
A 5・¥400
A 5・¥400

黎明書房 〒名古屋市中区丸の内3-4-10 大津橋ビル・東京都
新宿区山吹町184 トライポート101 振・名古屋59001

NEC特約店



日興通信株式会社

東京都港区芝3-4-16
TEL 03(45) 2191

より豊かな教育を狙う！

いかに指導していくば
よいか
集めたデータをどう処理
すれば有効に使えるか

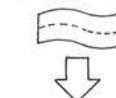


S-P表処理
パッケージ

テスト処理
パッケージ

統計処理
パッケージ

学習データ



SPEEDYシリーズ導入により
先生のオーバーワークを解決

S-P表

テスト処理
データ表
(偏差値表)

各種
統計処理
データ表
(平均・標準偏差
相関係数、その他)

TOKYU SHONPO BOOK STORE

都立書房

●東京都立大学隣り●

●都立書房書目 発行 《社会科学書総合目録》

東京都目黒区八雲1-2-5
(西152) TEL(03)717-2971

(東横線・都立大学駅下車3分)

九州大学教育学部内「教育と医学の会」編集 月刊 教育と医学

本誌は、教育、医学、心理学、社会学、生物学、その他広い角度から人間の成長・発達に関するさまざまな問題を追究してゆく、わが国では類のない、ユニークな雑誌です。したがって、各分野の専門家の方々にもよき資料ともなると存じます。御購読をおすすめいたします。

◆定価 450円、送料33円。

店頭に出ていませんので、書店でお取寄せ下さい。

発行所への直接申込もできます。1年分5,000円(前納)。

1部売りも扱います。◆各半年ごとの合本もあります。

定価1部2,500円 送料200円。

◆バックナンバーも或る程度揃っています。発行所へお問い合わせ下さい。

★内容見本を送呈します。ハガキか電話で下記発行所に御請求下さい。

★昭和53年の特集題目

1月・健康を考える／2月・嗜癖・中毒／3月・障害児全員就学／4月・人間看護の動向／5月・耐性を育てる教育／6月・教育と医学—この四半世紀(第300号記念)／7月・思考力を伸ばす／8月・痛みの生理と心理／9月・コミュニティと学区制／10月・食欲の生理と心理／11月・テストと能力／12月・精神薄弱者の教育

E・シュマールオア 子にとって母とは何か 1,900円
西谷謙堂監訳 160円
—サルと人との比較心理学—

前田重治著 心理面接の技術 精神分析的 2,000円
精神療法入門 200円

大野清志編 脳性まひ児の養護・訓練 動作訓練 1,400円
村田茂実 160円

森脇要編 集団心理療法の技術 1,600円
200円

発行所

慶應通信 〒108 東京都港区三田2-19-30
振替・東京9-155497 Tel.451-3584

図書目録
送 量

ヘアーの相談室 セビリア

貴男と技術者とで好みのヘアーを
相談しましょう。

都大通用門前
TEL 723-4347

軽度から重度に至る200ケース収録 障害児教育事例集

●監修 国立特殊教育総合研究所長 辻村泰男
養護学校義務制実施・特殊教育100周年 《記念出版》



B5判／上下2巻／1,500頁
定価9,800円

未知の分野への
“確かな指導者”

昭和54年度から実施される障
害児全員就学をひかえて、障害
を背負った子どもたちの教育・
指導には、さまざまな困難が予
想されます。

全国特殊教育推進連盟選定図書

東京法令出版株式会社
〒112 東京都文京区小石川5丁目17番3号 ☎(03)6866-06

● 利用案内

財団直営・宿泊施設



信州 山なみ山荘

—育てる会・八坂野外活動センター—

ご利用に特別便宜をはからせていただきます

《利用例》

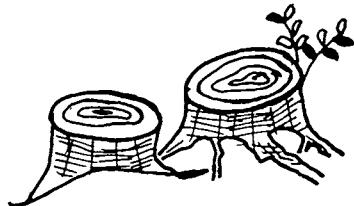
- 大学生の宿泊ゼミ
- 各種サークル合宿
- 宿泊研修会
- 青少年野外活動の研究
- 家族のリクリエーション
- その他

《施設の概要》

宿泊人員 大人150人 子ども200人

部屋数 小部屋8 大部屋4 活動室2

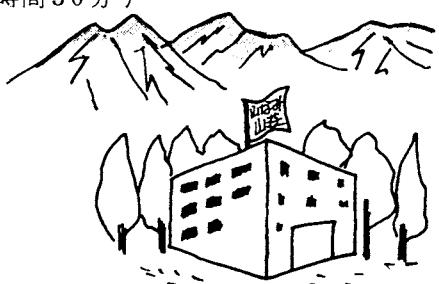
付属施設 大グランド、野外活動コース、野外活動用具、子どもスキー場



《場所》

長野県北安曇郡八坂村切久保 TEL 02612(2)7182

中央線信濃大町より車で15分（新宿より特急4時間30分）



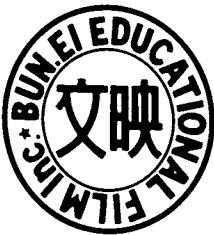
《利用申込先》

東京都新宿区神楽坂6-35-1

財団法人 育てる会 (267)2511

大学講座

16ミリ教材映画



企画 大学フィルムライブリー制作委員会
制作委員長 筑波大学教授 大内茂男
事務局 東京都文京区大塚3-29-1
(東京教育大学文学部大内研究室)
制作著作 株式会社 文映教育映画社

.....発売中.....

■発達心理学編・幼児期

〈全13集〉

監修 東京家政大学教授 山下 俊郎
静岡大学教授 岡野 恒也

■一般心理学編

〈全13集〉

監修 静岡大学教授 岡野 恒也

■一般心理学編・第2部

〈カラー・全13集〉

監修 東京大学教授 東 洋
筑波大学教授 金子 隆芳
東京教育大学助教授 原野広太郎

■生物学編

〈全5集〉

監修 東京教育大学教授 植田利喜造
筑波大学教授 関口 晃一

■産業心理学編

〈カラー・全13集〉

監修 慶應大学教授 金子 秀彬
関東学院大学教授 亀井 一綱

.....製作

中.....

■教育過程実習編

〈カラー全6集〉

■児童心理学編

〈カラー・全13集〉

監修 東京都立大学名誉教授 山下 俊郎
愛知学院大学教授 依田 新
筑波大学教授 高野 清純

■上記フィルムの取扱い■

株式会社 教育映画配給社

〒104

東京都中央区銀座6-6-7
(朝日ビル)

電話 東京 03 (571) 9351(代)

株式会社 文映教育映画社

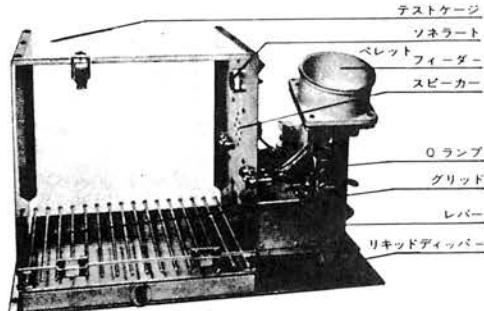
〒105

東京都港区新橋3-4-12
(第一高井ビル)

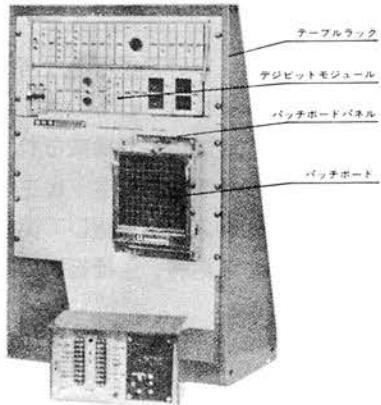
電話 東京 03 (591) 6896

BRS/LVE
テックサーヴ社の

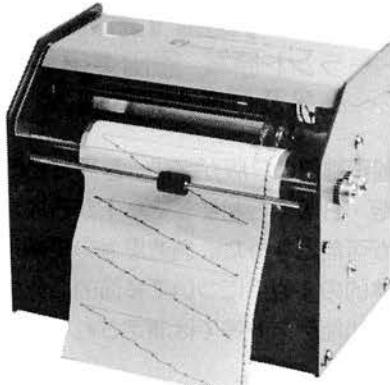
行動科学研究装置



ラット用スキナーボックス



デジピットコントロールシステム



ハーバード型累積レコーダー



© COPYRIGHT 1972 LEHIGH VALLEY ELECTRONICS INC.
テックサーヴ社の輸入代理店を新たに始めました。どうぞよろしくお願ひします。

《応用分野》 安全性研究・行動薬理学・心理学・生物学・衛生学・航空医学・公害関係等の幅広い分野で利用できます。

行動科学研究装置は大別して5つに分類されます。アニマルテストケージ、刺激装置、アクセサリー、プログラミング装置、レコーティング装置。これら各装置は各々コネクションケーブル等によって接続され、目的を果してあります。テックサーヴ社は世界一の総合行動科学機器メーカーとして豊富なアクセサリ一群を用意していますので御利用下さい。

日本総代理店



株式会社 東海医理科
TOKAI IRIKA CO., LTD.

本社：東京都千代田区内神田3-2-12クリハラビル
〒101 電話 (03)254-0052(代表)
大阪営業所：大阪市東淀川区南方町224-1-506
〒533 電話 (06)322-6792

密着の断絶とズレと、実態の分析に PCR親子診断検査

山下俊郎 監修・三浦 武・森 重敏ほか共著
小1～中3の子と親に適用

母親について子どもが答えるA型用紙、同じ事柄を母親自身に問うB型及び子どもの答を母親が予想して解答するC型。以上3種類の質問用紙で構成されている。過保護干渉的態度、許容寛容的態度、感情的態度、民主的態度の4領域についてそれぞれの認識とそのズレを分析して実態を把握する。カウンセリングをはじめ、生活指導、生徒指導の基礎資料に好適。

もう一つの測面、個性の発掘に

S-A創造性検査

J·Pギルホールド,E·Pトーラント原案 恩田 彰ほか共著
小1～高3及び成人に適用

トーラント原案の絵画課題のP版が完成。言語方式のギルホールド原案版（A版・B版）と相俟って小1から成人にいたる各層のテストが可能となった。創造思考の流暢性・柔軟性・独自性・具体的の4観点について多面的に分析採点する方式は共通で、知能テスト等では測定されない知的側面を浮彫りにする。

東大A-S知能検査

小1～高3適用

就学時新M-S知能検査

就学時 健診用

新S-S知能検査

幼児・小1適用

G T A標準学力検査

小学校各学年用

S-M社会生活能力検査

小1～中3適用

C B T 道徳検査

小4～中3適用

基本的欲求検査

小4～高3適用

APP事故傾向予測検査

小1～高3適用

C A S不安診断検査

中1～成人適用

H-G職業指向検査

中1～成人適用



東京心理

東京都文京区本郷3-24-6
〒113 ☎ 03(814) 8411



Haper Audio Visual

〒101 東京都千代田区神田神保町1-29

PSYCHOLOGY

MASKS: HOW WE HIDE OUR EMOTIONS

Two filmstrips, audiotape cassettes and Instructor's Guide. ¥30,250

In a vivid and graphic manner, the multi-faceted subject of psychological masks is examined. Masks are used to display different aspects of personality. There are dangers. They may fail to reflect true feelings and emotions. Part I—Performing Part II—Understanding Masks

PSYCHOLOGICAL DEFENSES Series A

Three filmstrips, audio-tape cassettes and Instructor's Guide. ¥43,450

There are many causes of everyday stress and tension. People often cope with the help of unconscious psychological defenses.

Part I—The Unconscious Mind: Repression

Part II—Avoidance, Denial, Undoing

Part III—Fantasy, Regression, Dreams

PSYCHOLOGICAL DEFENSES Series B

Three filmstrips, audio-tape cassettes and Instructor's Guide. ¥43,450

Defense mechanisms help us preserve self-esteem by avoiding memories, impulses, and actions that make us feel threatened. In this series those processes which help people cope with the frustrations of living in a complex society are examined.

Part I—Projection/Rationalization

Part II—Identification/Displacement

Part III—Reaction Formation/Sublimation

SUICIDE: CAUSES AND PREVENTION

Two filmstrips, audio-tape cassettes and Instructor's Guide. ¥30,250

Suicide. It's one of the leading causes of death among college students. True-to-life case histories are used to explore the problem and ways it can be prevented.

Part I—Causes Part II—Prevention

GRAMP: A MAN AGES AND DIES

One filmstrip, audio-tape cassette and Instructor's Guide. ¥16,500

In many families the dying are separated from the living. Gramp's family decided to care for him at home even though he was senile, had lost control of his bowels, and had decided to hasten death by not eating and drinking. Through camera eye and tape recorder, the last three weeks of his life are preserved. A moving and significant program.

PERSPECTIVES ON DEATH

Two filmstrips, audio-tape cassettes, and Instructor's Guide. ¥30,250

Death. What is its legal definition? What are the pros and cons of euthanasia? There are many different attitudes about death. People have used religious beliefs,

philosophy, science and art to deal with the realization of their own mortality.

Part I—Toward An Acceptance

Part II—The Right to Die

SOCIOLOGY

16MM COLOR SOUND FILMS

SOCIAL PSYCHOLOGY

Stanley Milgram, City University of New York Graduate Center, author of *Obedience to Authority* (Harper & Row, 1974). Films directed by Harry From.

INVITATION TO SOCIAL PSYCHOLOGY

AWARDED CHRIS BRONZE PLAQUE, CHICAGO INTERNATIONAL FILM FESTIVAL SILVER PLAQUE

Stanley Milgram

The student is introduced to the subject of social psychology by focusing on three important questions: What is the subject matter of social psychology? What are its methods of investigation? What are some of its discoveries? Included are classic experiments in affiliation; attribution theory; cognitive dissonance; conformity; aggression; behavior in a simulated prison and bystander intervention. (Running time 25:50. Price ¥198,000)

CONFORMITY AND INDEPENDENCE

AWARDED CHRIS BRONZE PLAQUE

Stanley Milgram

Using field and laboratory settings to reinforce the interplay between experience and experiment, this film looks at social psychology's main findings and principles in the areas of conformity and independence. Includes Sherif's experiments on norm formation; Asch's experiments on group pressure and Crutchfield's variation; Milgram's experiment on action conformity; Kelman's three processes of compliance; and Moscovici's recent theoretical views. (Running time 24:00. Price ¥192,500)

HUMAN AGGRESSION

Stanley Milgram

Vividly depicts the major scientific principles and findings on human aggression through field situations and laboratory studies. The activities of a youth gang demonstrate aggression in terms of dominance and territoriality, frustration and displacement. Focuses attention, as well, on how aggression is learned, both by lower and upper class children. A statement by the former attorney general, Ramsey Clark, on the need to eliminate inequalities in society concludes the film. (Running time 23:00. Price ¥198,000)

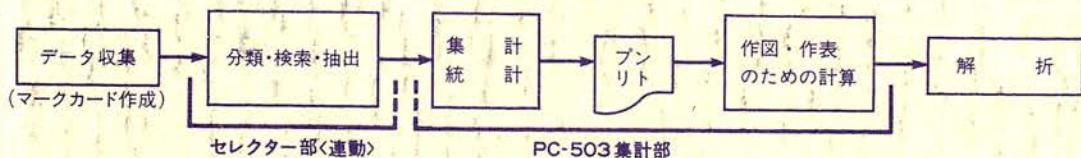
NONVERBAL COMMUNICATION

Stanley Milgram

A comprehensive, up-to-date report on the numerous scientific findings relating to how people communicate on a nonverbal level. Featuring five leading spokesmen in the field, three general questions are addressed: What behavior is encompassed in the concept of nonverbal communication? What are the functions of nonverbal communication? What is the origin of nonverbal communication? Includes laboratory experiments on proximity and facial expression as well as filmic evidence for Eibl-Eibesfeldt's assertion that blind children show many of the facial expressions of the sighted. (Running time 23:00. Price ¥198,000)

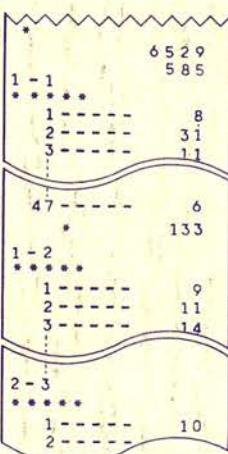
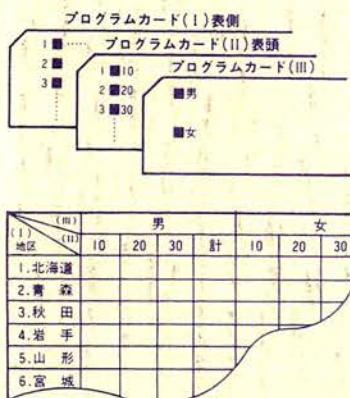
1次・2次・3次事項の組合せ自由……

クロス集計の最新銳機PC-503型



集計のとりかた例(3次クロス)

表頭、表側、既定条件の3枚のプログラムカードを作り記憶させて、データカードを読みます。各組合せ順にプリントアウトされます。



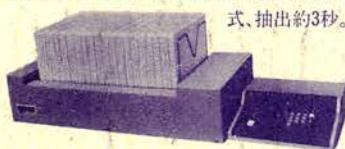
学術統計は お手元で手軽に!

- 心理学関係の統計は少量票数の集計作業が多いので、コンピュータより手軽なタナックのクロス集計機が便利です。
- ワンパスの作業で随意の1~3次事項の集計が瞬時に得られます。
- データは、最高80欄の項目が入るマークカードを使います。
- 1次、2次、3次のクロス集計が一度の操作で得られます。
- タナックセレクター部は、同時読み取り20欄から80欄型まで各タイプのうちから機種を決めて導入してください。

検索機姉妹シリーズ

資料の保管と抽出に

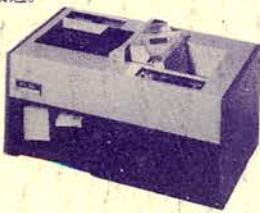
A4判の台帳、フォルダーが約800枚収納。交換トレイ式なので1台で数千件管理可能、抽出はテンキーワー式、抽出約3秒。



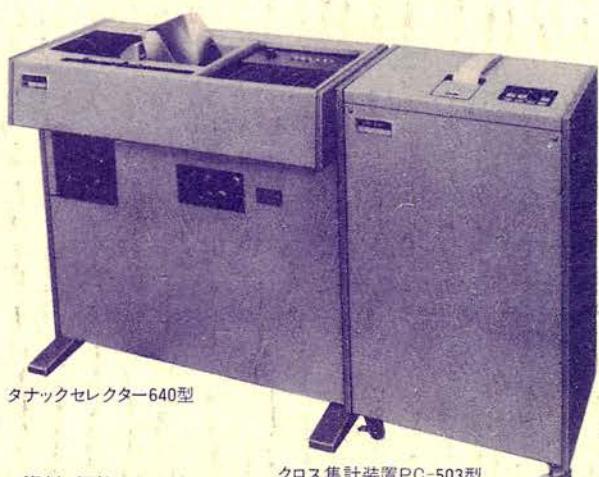
ランダム検索装置PA400型

卓上型の情報検索機

マークカード利用の手軽なセレクター。完全一致・包含・否定条件が簡単に設定できる文献整理や索引、検索に最適。



タナックセレクター620型



タナックセレクター640型

資料・価格のお問い合わせ

クロス集計装置PC-503型

発売元



タナック

株式会社

Tel 03-454-4141 営業部第1課 東京都港区芝2-15-3

■日本応用心理学会第45回大会で展示実演。

■実例資料を用意しております。上記へご請求ください。

■ご指示次第、貴地区的当社代理店からご説明に伺います。